

# 宮本武蔵

二天の巻

吉川英治

青空文庫



衆口しゅうこう

一

学問は朝飯前に。昼間は、藩の時務を見たり、時には江戸城へ詰めたり、その間に、武芸げいこの稽古は随時にやるとして——夜はおおかた若侍相手に、打ち寛くつろいでいる忠利ただとしであった。

「どうだな、何か近頃、おもしろい話は聞かぬか」

忠利がこういい出す時は特にあらためて、無礼講とゆるされなくても、家臣たちは、「されば、こういう事がございますが……」

と、いろいろな話題を持ち出すのをきつかけに、——礼儀こそ紊みださないが——家長を囲む一家族のように、睦むつみ合うのが例であった。

主従という段階があるので、忠利も、公務の場合は、峻しゅんげん 厳げんな容態をくずさないが、晩飯の後など帷衣かたびらひとえ一重ひとえになって、宿直とくのいの者たちの世間ばなしでも聞こうとする時は、自

分も寛くわぎたいし、人をも寛くわがせたいのであつた。

それに、忠利自身が、まだ多分に、一箇の若侍といったふうだから、彼らと膝を組んで、彼らのいいたいことを聞いているのが好きであつた。好きばかりでなく、世情せじやうを知ろうえには、むしろ、朝の経書けいしょよりも、活きた学問になつた。

「岡谷」

「はあ」

「そのの槍は、だいぶ上達あがつたそうだな」

「上がりました」

「自分で申すやつがあるか」

「人がみな申すのに、自分だけ謙遜けんそんしているのは、かえつて嘘をつくことになりませんか」

「ははは。しぶとい自慢よの。——どれほどな腕てなみになつたか、いずれみてやるぞ」

「——で、はやく、御合戦の日が来ればよいと、祈つておりますが、なかなか参りませぬ」

「参らずに、仕合せであろう」

「若殿にはまだ、近頃のはやり歌を、ご存じありませんか」

「なんという歌か」

「——やりし 鑓仕鑓仕は多けれど、岡谷五郎次は一の鑓」

「うそを申せ」

忠利が笑う。

一同も笑う。

「あれは——名古屋山三は一の鑓——という歌であろうが」

「ヤ。ご存じで」

「それくらい」

と、忠利は、もつと、下情の通つうをいってみせようとしたが、慎んだ。そして、

「——ここでは、平常の稽古に、槍を致しておる者と、太刀を致しておる者と、いずれが多くなるな？」

と訊ねた。

ちようど、七名いたが、

「拙者は槍」

と、答えた者が、五人で、

「太刀」

といった者は、七名のうち、二人しかなかった。  
で、忠利は重ねて、

「なぜ、槍を習うか」

と、その者たちへ訊ねたところ、

「戦場において、太刀よりも利がござれば——」

と、一致した答えだった。

「では、太刀の者は？」

と、訊くと、

「戦場においても、平時においても、利がござれば」

と、太刀を稽古しているという二人が答えた。

二

槍が利か、太刀が利か。

これは、いつも、議論になることだったが、槍の者にいわせると、

「戦場では、平常の小技こわざの稽古などは、役には立たぬ。——武器は、体に扱える程度に、長いほど利である。殊に、槍には、突く手、撲る手なぐ、引く手の、三益がある。槍はまた鬪いに損じても、太刀の代りがあるが、太刀は、折れたり曲がったりしたら、それ限りではないか」

太刀の利を説く者は、

「いや、われわれは戦場だけを武士の働き場所と考えていない。常住坐臥、武士は太刀をたましいとして持つているので、太刀を習練するのは、常に魂を研といでることになるゆえ、戦場で多少の不利はあつても、太刀を本位として武芸は研みがくべきだと心得る。——その武道の奥義おうぎに達しさえすれば、太刀に依つて得た練磨も、槍を把とれば槍に通じ、鉄砲を持てば鉄砲に通じ——決して未熟な不覚はあるまいかと存じます。——一芸万法に通ずるか申しますれば」

これは、果てしない問題になりそうである。忠利は、どっちへも加担せずに聞いていたが、太刀に利があると、力説していた松下舞之允まゐのすけという若侍へ、

「——舞之允。今のは、どうもそち自身の口吻こうぶんでない所があるぞ。誰の請売りうけうだ」

と、いった。

舞之允は、むきになって、

「いえ、てまえの持論で」

と、いったが、

「だめじゃ。わかる」

と、忠利に観破されて、

「実は——いつぞや、岩間角兵衛どのの、伊皿子のお住居へ招かれた節、同じ議論がわき、居合せた佐々木小次郎と申す、その家の懸かかり人ゆうどから聞いたことばでございます。——しかし、てまえの平常の主張と一致しておりますので、てまえの考えとして、申し上げた次第で、他を偽るつもりはございません」

と、白状した。

「それみい」

忠利は、苦笑しつつ、胸のうちで、ふと、藩務の一ツを思い出していた。

それは、かねて、岩間角兵衛から推挙している——佐々木小次郎という人間——を召抱えるか、否か、聞きおいてあるまま、いまだに宿題として、決めかねていたことである。



推薦者の角兵衛は、

(まだ若年ゆえ、二百石を下し置かれれば)

といっているが、問題は禄高ろくたかではない。

一人の侍を養うことが、いかに重大か。殊に新参を入れる場合においては、なおさらであることは、呉々も、父の細川三斎からも、彼は教えられていた。

第一が、人物である。第二が、和である。いくら欲しい人間でも、細川家  
の今日を築き上げた譜代ふだいがいる。

一藩を、石垣に喩たとえていうならば、いくら巨大な石でも、良質な石でも、すでに垣となつて畳まれている石と石との間に、組み込める石でなければ使えないのである。均等のない物は、いかに、それ一箇が、得難い質でも、藩屏はんぺいの一石とするわけにはゆかない。天下には、可惜あたら、そういう角かどが取れないために、折角の偉材名石でありながら、野に埋うもれている石が限りなくある。

殊に——関ヶ原の乱後には、たくさんある筈であった。けれど、手頃でどの垣へでも嵌はまるような石は、抱える大名がその多いのを持て余し、これほど思う石には、圭角けいかくがあり過ぎたり、妥協たきようがなくて、自己の垣へはすぐ持つて来られないのが多かった。

そういう点で、小次郎が、若年者であつてしかも優すぐれているということは——細川家へ仕官するには無難な資格であつた。

まだ、石とまではならない、若い未成品だからである。

## 三

佐々木小次郎という者を思い出すと、細川忠利は、同時に、宮本武蔵なる者をも、自然胸の中で思いくらべた。

その武蔵のことは、初め、老臣長岡佐渡から聞いたのである。

かつて佐渡が、今夜のような夜伽よじぎの——君臣団まじい欒の折に、ふと、

(近頃、変つた侍をひとり、見出してござるが——)

と、例の法典ヶ原開墾のことを話したのである。そして、その法典ヶ原から立ち帰つて来た次の折には、

(惜しいことに、その後、行方も相分りませぬ由で)

と、嘆息と共に復命した。

だが、忠利は断念しきれず、ぜひ見たいものだといつて、（心がけておるうちに、居所も知れよう。佐渡、なおも心がけよ）と、命じておいた。

——で。忠利の胸には、岩間角兵衛から推薦の佐々木小次郎と、武蔵とが、いつのまにか、較べられていた。

佐渡の話聞けば、武蔵のほうは武に優すぐれているばかりでなく、たとえ山野の部落にでも、開墾を教え、自治を覚さとらせるなど、経策もあり、人物の幅もある。

また、岩間角兵衛にいわせれば、佐々木小次郎は、名門の子で、深く剣に参じ、軍法に通じ、まだ年ばえも若いのに、すでに巖がんり流りゅうという一派をすら自称しているとあるし、これも、ざらにある豪傑とは思われない。殊に、角兵衛以外の者からも、近頃、江戸における小次郎の剣名はしきりと聞くとところであった。

隅田河原で小幡門下を、四人も斬つて平然と、帰つて行つたということ。

神田川の堤でも。——また、北条新蔵までも、返り討ちにしたというようなことが、よくうわさに上るのだった。

それにひきかえて、武蔵という名はとんと聞かない。

数年前に、京都の一乗寺で、その武蔵が、吉岡一門の何十名を相手にして打ち勝った——というようなことは一時喧伝けんでんされたが、すぐその反対説が出て、

（あの噂は、眉まゆつば物だそうじゃ）

とか、

（武蔵というのは、売名家で、派手にはやったが、いざとなった場合は、逸いちはやく、叡えいぎ山へ逃げこんだというのが真相らしいて）

とか。——その他ほか、よい時にはすぐ一方から出る反動説が、間もなく、彼の剣名を揉もみ消けしてしまった。

いずれにしろ、武蔵の名が出るところには、何かすぐ悪評がまどっていた。——さもなければ、黙殺されて、彼という剣人などは、剣人の仲間なかまに、いるかないか、存在の程度ていどすらない程だった。

それに、美作みまさかのくに国くにの山奥やまおくで生れ、名もない郷土せがれの倅せがれでは、誰も顧かまみる者はなかった。

尾張おわりの中村から秀吉が出て、まだまだ世の中は階級かいきゅうを重おもんじ、血統けつとうを銜てらう風習ふうしゅうから少しも脱ぬけていなかった。

「……そうだ」

忠利は、思い出した手を、膝に打って、若侍たちを見廻しながら、武蔵について、居合す者たちに訊いてみた。

「誰か——そち達の中に、宮本武蔵という者を、存じておる者はないか。——何か、うわさでも訊いたことはないかな？」

すると直ぐ、

「武蔵？」

と、顔を見合せて、

「つい近頃、その武蔵の名は、街の辻々に出ておりますので、誰でも名だけは存じておりますが」

と、若侍のほとんどが、皆それを知っているような口吻くちぶりだった。

#### 四

「ほ。——武蔵の名が、辻々に出ておるとは、どうした理わけか」

忠利は、目を見はった。

「立て札に書かれてあるのでござる」

若侍のひとりがいうと、森某なにかしが、

「その立て札の文言を、他人ひとが写してゆくので、拙者も、おもしろいことと思うて、懐紙に写して参りました。——若殿、読みあげてみましょうか」

「ウム、読んでみい」

「これで——」

と、森某は、反故ほごを拈ひげて、

いっぞや、おら衆に、うしろを見せて、突ン逃げた、

宮本武蔵へ、物いうべい。

皆クスクス笑った。

忠利は、真面目だった。

「それきりか」

「いや」

と、森某は、

——本位田のお婆かたきも、讐かたきと尋ねてあるぞ。おら衆にも、兄弟ぶんの意趣があるぞ。

出て来ずば、侍とはいわれまいが。

と、読みつづけた。そして、

「これは、半瓦はんが弥次兵衛わらやしべえという者の、乾児こぶんどもが書いて、各所に立てたものだそうぞ。――いかにも文言が、無法者らしいと、街の者は、欣うれしがっております」

と説明した。

忠利は、ほろ苦い顔をした。自分が胸に持っていた武蔵とは、それでは余りに違うからである。その唾つばは、武蔵が浴びているばかりでなく、自分の暗愚あざけも嘲あざけられている気持がしたのであろう。

「ふム……武蔵とはそんな人物か」

忠利が、なお一抹まつの諦あきらめかねたものをもって、そういうと、ほとんどが、異口同音いくどうおんに、

「どうも、つまらぬ男のようでございます」

といったり、

「いや、何よりも、よほどな卑怯者とみえます。素町人などに、こうまで、恥かしめられても、いッこう姿を見せんそうですから」

と、一同がいった。

やがて、自鳴鐘が鳴ると、若侍たちは皆、退座した。忠利は、眠つてからも、考えていた。

けれども彼の考えは、あながち衆と一致していなかった。むしろ、

「おもしろいやつ」

と、思った。武蔵の立場になつて、複雑に考えてみることに、興があつた。

あくる朝、いつもの経書けいしょの間で、受講をうけて、縁へ出ると、庭に、長岡佐渡の姿が見えた。

「佐渡、佐渡」

と、呼びかけると、老人は振り向いて、朝の礼儀を、庭先から慇懃いんぎんにした。

「その後も、心がけておるか」

忠利のいい方が、佐渡には、唐突に聞えたときみえて、ただ眼をみはっていると、

「武蔵のことじゃよ」

と、忠利がつけ加えた。

「——はっ」

と、佐渡が頭を下げると、



「とにかく、見つけたら、いちど屋敷へ召連れい。人間が見たい」

——同じ日。

いつもの弓場<sup>ゆば</sup>へ、忠利が、午<sup>ひる</sup>すこし過ぎ、姿をあらわすと、的場<sup>まとば</sup>の控え所に、彼のすがたを待つていた岩間角兵衛が、それとなく、小次郎の推拳をまた、繰返した。

忠利は、弓を把<sup>と</sup>りながら、うなずいて、

「忘れておつた。——ウム、いつでもよい、いちどその佐々木小次郎とやらを、この弓場まで召連れて来い。——抱えるか、抱えぬかは、見たうえのことじやが」

と、いった。

## 虫しぐれ

### 一

ここは伊皿子坂の中腹、岩間角兵衛が私宅の赤門の中。

小次郎の住居<sup>すまい</sup>は、その地内で、独立した手狭な一棟であつた。

「おいでか」

と、訪おとなう者があつた。

小次郎は、奥おくに坐つて、静かに、劍けんを看みていた。

愛劍あいけんの物干竿ものほしざお——

これはこここゝの主あるじの角兵衛かくべゑに依頼して、細川家ほそがわに出入りの厨子ずし野耕介のこうけいへ研とぎにやつておいたものである。

ところが、あの事件。

その後、耕介の家とは、いよいよ経緯いきさつがまづくなつたので、岩間角兵衛いわまかくべゑから催促せいきしてもらうと、今朝、耕介こうけいから送り届けて来たのである。

無論、研とげてはいまい。

そう思つて、小次郎は、座敷ざしきの真まん中に坐つて、鞆たもとを払はつてみたところが、研とげていな  
いどころではない——晁こうこう々と百年ひゃくねんの沓くつえを革あらためて、淵ふちの水みづかとも、深くふかく蒼黒そうくろい鉄肌かねはだ  
から——燦さんとして白しろい光ひかりが芻はね返かへしたのである。

痣あざのようごとにあつた、うすい錆さびの斑はん紋もんも消きえているし、血ちあぶらにかくれていた銚にえも、  
朧おぼろ夜よの空そらのようごとに、ぼうつと美うつくしく現あらわれていた。

「……まるで、見直してしまったな」

小次郎は、飽かず看入<sup>みい</sup>っていた。

この座敷は、月の岬<sup>みさき</sup>の高台にあるので、芝の浜から品川の海は元より、上総沖<sup>かずさおき</sup>から湧きあがる雲の峰とも坐<sup>い</sup>ながらに對<sup>むか</sup>い合っていた。——その雲の峰の影も、品川の海の色も、劍の中に溶けていた。

「お留守かの。——小次郎どのはお在<sup>い</sup>ででないか」

間<sup>ま</sup>を措<sup>お</sup>いていた戸外<sup>そと</sup>の声が、ふとまた、柴折戸からそう訪<sup>ま</sup>れていた。

「誰<sup>どなた</sup>方か」

刀を鞘におさめて、

「小次郎はおりますが、用事なら柴折から縁へ廻<sup>ま</sup>ってください」

いうとすぐ、

「やれ、いるそうな」

と、いう話し声<sup>こゝろ</sup>がして、お杉<sup>の</sup>ばばと、一名の無法者が、縁先へ姿をあらわした。

「誰かと思うたら、ばば殿であつたか。暑い日中を、よう見えたの」

「ご挨拶は後。——洗<sup>すすぎ</sup>足水をいただいたて、足を浄<sup>きよ</sup>めたいが」

「そこに石井戸があるが、ここは高台なので、怖ろしく深いぞ。——漢おとこ。ばば殿が、墜おとしちると事だ。介添かいぞえしてやれ」

漢おとこ——とよばれたのは、彼女の道案内に、半瓦はんがわらの部屋から付いて来た下つ端である。井戸で、汗をふいたり、足を洗つて、やがてお杉ばばは、座敷へあがり、挨拶をすますと、吹き通す風に眼をほそめて、

「涼しい家じやが、こんな家に閑居してござつたら、よい怠け者になりはせぬか」と、いった。

小次郎は、笑つて、

「お息子の又八とは違う」

ばばは、ちよつと、淋しげな眼をしばたいたっていたが、

「そうじや、何の土産もないが、これはわしが写経したもの、一部進ぜましよう程に、閑ひまな時、誦よんでくだされ」

と父母恩重経ぶもおんじゆうぎょうの一部をさし出した。

小次郎は、かねてばばの悲願を聞いていたので、それか——とよい程に眺めたのみで、「そうそう。その漢おとし」

と、後ろにいる無法者へ向つて訊ねた。

「いつぞや、わしが書いて遣つかわした高札の文面。——あれを、方々へ建てておいたか」

## 二

漢おとしこは、膝をのりだして、

「——武蔵出て来い。出て来ずば侍とはいわれまいが……っていう、あの高札でござんしよう」

大きく頷うなずいて、小次郎は、

「そうだ。辻々へ手分けして、建てておいたか」

「二日がかりで、目抜きな場所へは、たいがい建てておきましたが、先生はごらんになりませんので」

「わしは、見る要もない」

「ばばも、その話に、側から割りこんで——」

「きょうもの、ここまで来る途中、その立札を見かけたが、札の建っている所には、街の

衆がとり巻いて、くさぐさの噂ばなし。——よそ耳に聞いていても、胸がすいて、おもしろうござったわ」

「あの立札を見ても、名乗って出ぬとすれば、武蔵の侍はもう廃れたも同じこと。天下の笑いぐさじや。ばば殿も、それでもう恨みは済んだとしてもよかろう」

「なんの。いくら人が嗤おうと、恥を知らぬ面の皮には、痛くも痒くもあるまいに。——あのくらいなことでは、このばばの胸も晴れねば、一分も立ちませぬわえ」

「ふふム……」

と、小次郎は、彼女の一念を見やって、笑つぽに入りながら、

「さすがは、ばば殿、幾歳になつても、初志は曲げぬの。いや見上げたもの」

と、煽動した。そして、

「時に、きようござつたのは、何用かな」

と、訊ねた。

ばばは、改まって告げた。——他でもないが、半瓦の家へ身を寄せてからもう二年余にもなる。いつまで、世話になつてゐるのも本意でないし、あらくれ男どもの世話にも飽きた。折からちようど、鎧の渡しの附近に、手頃な借家があいたので、そこへ移つて、一軒

構えるという程でもないが——一人住居すまいがしてみたい。

「どうである？」

と、相談顔に、

「武蔵も、まだ当分は、出て来る様子もないしの、せがれの又八も、この江戸にはいるにちがいないが、居所が知れぬし……で、国許くにもとから金をよび、しばらく、そうしておりた  
いと思うが」

と、小次郎へ計はかるのだった。

小次郎に、元より異議はない。そうするもよからうという程度だった。

実をいえば、小次郎も、一時は興味もあり利用もしたが、この頃は、無法者達とのつきあひも、少々うるさくなつて来た。主取しゅどりをした後のことなども、計算に入れると、深入りは禁物だと思つた。——で、近頃は、そこへの稽古にも、足を絶つているところだった。岩間家の仲間ちゆうげんをよんで、裏の畑から西瓜すいかを採らせ、ばばと漢おとこに馳走して、

「武蔵から、何か申して来た節は、すぐ当方へ使いをよこせ。——わしも近頃ちと体が忙しいから、当分は無沙汰じゃと思つてくれ」

そういつて、二人を、陽の暮れぬうちと、追ひ立てるように歸した。

ばばが帰ると、小次郎は、ざつと室内を掃いて、庭面へ井戸の水を撒いた。  
山芋の蔓や、夕顔の蔓が、垣から手洗い鉢の脚にまでからみついている。その白い花の一つ一つが、夕風にうごき出した。

「きょうも、角兵衛どのは、宿直なのか？」

母屋に煙る蚊遣りを眺めながら、小次郎は部屋の中に寝そべった。

灯火はいらなかった。燈してもすぐ風に消えるであろうし、やがて宵月が、海を離れて、彼の顔まで映して来た。

……その頃である。

坂下の墓地から、垣を破つて、この伊皿子坂の崖へ、一人の若い侍が、紛れ込んで行ったのは。

### 三

いつも、藩邸へは騎馬で通っているので、岩間角兵衛は、坂の下まで来ると、そこで馬を捨てる。



彼の姿を見ると、寺門前の花屋が出て来て、馬を預かってくれるのだ。

ところが、きよらの夕方は、花屋の軒をのぞいても、老爺おやじが見えないので、自身で裏の樹つなへ繋いでいると、

「おう、旦那様で」

老爺は、寺の裏山から駈けて来て、いつものように、彼の手から馬を受取りながら、

「——たった今、墓地の垣を破つて、道もない崖へ上って行くおかしなお武家があるので、そこは抜け道ではござらぬ、と教えてやると、怖い顔して、こちらを振向いたまま何処ともなく行つてしまいました……」

と、問わず語りをして、

「あんなのが、近頃やたらに大名屋敷へ忍び込むといううわさの盗賊ではございますまいかの」

と、まだ気に懸けて、黒々と暮れた青葉の奥を見上げていた。

角兵衛は、気にもとめない容子ようすだった。大名屋敷へ、怪盗がはいるといううわさはあるが、細川家など見舞われたこともないし、当家に盗賊がはいったと、自らの恥を自らいう大名のあつた例ためしもないので、

「はははは。あれは、単なる噂にすぎない。寺の裏山などへもぐる盗賊なら、多寡の知れた小盗人か辻斬かせぎの牢人者であろう」

「——でも、ここらは、東海道の街道口に当りますので、他国へ逃げ出す奴が、よく行きがけの駄賃という荒仕事をやりますので、夕方など、風態のわるい人間を見ると、その晩は、嫌な気もちがいたしまして」

「変事があつたら、すぐ駈けて来て、門をたたけ。うちの懸り人どのは、そういう折を待たせてござるが、出会わないので、毎日、髀肉の嘆をもらしているくらいだ」

「あ。佐々木様でございますか。あんな優姿でも、お腕はたいそうなものだと、この界限の衆も、評判でござりまする」

小次郎のいい噂を聞くと、岩間角兵衛は、鼻が高い気がした。

彼は、若い者が好きだった。とりわけ現今の気風として、有為な青年を家に養うということは、侍として、高尚な美風とされていた。

一朝、事のある場合に、ひとりでもよけいに、家の子輩をひき連れて、君侯の馬前へ出ることは平常のたしなみ好き事になるし——また、その中でも、抜群な男ぶりの者は、主家へ推挙しても一つの奉公ともなるし、自己の勢力扶植にもなる。

自己を、考えるような奉公人では、侍奉公の者として、頼母たのもしくない家臣ではあるが、自己をまったく捨て切っている奉公人などというものは、細川家のような大藩にも、そう幾人いくたりもいるものではない。

さればといって、岩間角兵衛が、不忠者かといえは、決して一かどの武士以下の者ではない。ただ当り前以上に出ない譜代ふだいの侍だった。平常の時務には、かえって、こういう人間が、人一倍、便利でよく働くものだった。

「戻ったぞ」

伊皿子坂は、ひどく急なので、わが屋敷の門へかかって、彼がこういう時には、いつも少し息を喘きっている。

妻子は、国許くにもとへおいてあるので、元よりここは、男手と雇い女がいるばかり。——でも、宿直とのいでない夕方には、彼の帰邸をおそしと待つて、赤い門から玄関までの笹むらには、打水うちみずの露が光っていた。

「お帰りなさいまし」

出迎える召使たちへ、

「うむ」

と、こた応えて、

「佐々木どのは、きようは家におけるか、それとも外出か」  
角兵衛はすぐ訊ねた。

#### 四

——今日は終日、家にいた様子だし、今も、寝転んで涼んでおります、と召使から聞いて、

「そうか。では、酒の支度をしての。支度ができたら、佐々木どのを、こちらへお呼びして参れ」

——その間に、風呂に入つてと、角兵衛はすぐ汗になった衣服を脱ぎ、風呂場で浴衣ゆかたになつた。

書院へ出て来ると、

「お帰りか」

小次郎は、団扇うちわ片手に、先へ来て坐っていた。

酒が出る。

「まず、一盞さん」

と、角兵衛は酌しやくいで、

「きようは、吉よい事があるので、それをお聞かせしたいと存じてな」

「ほ。……吉よい事とは」

「かねて、其その許もとの身を、御推挙しておいたところ、だんだん殿にも其許の噂を耳にされ、近日、連れてこいということになったのじゃ。——いやもう、ここまで運ぶには、容易ではない。何しろ、家中の誰や彼から、推挙しておる人間もずいぶん多いからの」

さだめし小次郎が欣よろこんでくれるに違いない。角兵衛は正直に期待していた。

「……………」

小次郎は、無言のまま、杯の端を唇くちへつけて、聞いていたが、

「ご返杯」

そういったのみで、欣うれしそうな顔もしないのである。

だが角兵衛は、それを不服と思わないのみか、むしろ尊敬さえ抱いて、

「これで、お頼みをうけたそれがしも、世話せわ効ががあつたというもの。こよいは、祝杯で

「いざ、お過ごしなさい」

と、さらに、酌いでゆく。

小次郎は初めて、

「お心添え、かたじけない」

と、少し頭を下げた。

「いや何、其許そのもとのような器量人をお家に薦すすめるのも、御奉公の一ツじや」

「そう過大にお買いくだされては困る。元より、禄ろくは望まず、ただ細川家は、幽齋ゆうさい公、

三齋公、そして御当主忠利ただとし公と、三代もつづく名主のお家。そうした藩に奉公してこそ、

武士の働き場所と思うてお願いしてみたことでもあれば」

「いやいや、身共は少しも、其許の吹聴ふいちようはしないつもりだが、誰いうとなく、佐々木

小次郎という名は、もう江戸表では隠れのないものになっておる」

「こうして、毎日、懶惰らんだにぶらぶらしている身が、どうして、そう有名になったものか」

小次郎は自嘲するように、若々しい齒ならびを見せて、

「べつに拙者が、出色しているわけではない。世間に似而非者えせものが多いのでしよう」

「忠利公には、いつでも召し連れいと仰せられたが……して、何日いつ、藩邸までお出向き下

さるの」

「此方も、何日など」

「では、明日でも」

「よろしかろう」

と、当り前な顔つきである。

角兵衛は、それを見て、なおさら彼の人物の大きさに傾倒したが、ふと、忠利から念を押しされた一言を思い出して、

「しかし、君侯には、とにかく一度、人間を見た上でという仰せでござった。——とは申せ、それは形式で御仕官の儀は、もう九分九厘まで、きまつたも同じようなものではあるが——」

と、小次郎へも、一応はと考えて、断つておいた。

すると、小次郎は、杯を下へおいて、角兵衛の顔をじつと正視した。そして、

「やめた。角兵衛どの、折角だが、細川家へ奉公は、見合せる」

昂然こうぜんといった。

酔うと鮮紅せんこうになって、血のはち切れそうな彼の耳みみたぶ朶であつた。

## 五

「……ほ。なぜ？」

と角兵衛は、さも当惑そうに、彼を見まもった。

小次郎は一言、

「気にそまぬゆえ」

と、にべなくいったのみで、理由は口に出さないのである。

だが、小次郎が急に、不機嫌になったのは、角兵衛が今、君侯のお断りとして、

(召抱えるか否かは、当人を見た上で)

といった——その条件が気に障さわったものらしかった。

(何も、細川家に抱えて貰さわわなければ、困る体ではない。何処へ持さわって行っても、三百石や五百石は——)

と、平常それとなく示している小次郎の誇りに、角兵衛のありのままな伝え方が、ぐいと当りが悪く触さわったものに相違ない。



小次郎は、他人の気持にかま関つていないたち質だったから、角兵衛が当惑して困った顔をして  
 しようが、自分をわがまま勝手な人間と思おうが、いっこう心にかけるふうもなく、食事  
 を終ると、さつさとわが住む棟へ歸つてしまった。

燈ともしび灯のない畳には、月明りが白く映さしこんでいた。小次郎はそこへあがるとすぐ、酔  
 った体を仰向けに横たえて、手枕をかつた。

「ふ、ふ、ふ……」

何を思い出したか、独りでこう笑いだしながら、

「とにかく、正直者だな、あの角兵衛は」

と、つぶやいた。

ああいつたら、角兵衛が主君に対して困ることも——また、どう振舞つても、角兵衛が  
 自分に対して怒らないことも——何もかもよく知りぬいている彼だった。

(禄に望みはない)

と、かねて自分からいってはあるが、彼の満身は、野望に満ちていた。その彼に禄の望  
 みがないわけもなく、自分の力で能う限りの名声も、また立身も望んでいた。

さもなくて、何で、苦しい修行などやる必要がある。立身のためだ、名を揚げるため

だ、故郷ふるさとへ錦を飾るためだ、そのほか人間と生れた効かいをあらゆる点で満足させるためだ。そのためには、今の時代では何といつても兵法に優れることが出世の捷徑はやみちである。幸いにも、この時代に自分は剣にかけては天稟てんぴんの質をもつて生れて来た——と、こう彼は考えている。自尊心を持つている。また聡明なる処世の歩みとして歩んでいる。

だから、彼の一進一退は、すべてこの目的と駈引かけひきから、割り出されていた。そうした彼の眼から見ると、ここあるじの主の岩間角兵衛などは年こそ自分よりはずっと上だが、

(甘いものだ)

と、思わざるを得ないのであった。

——いつか小次郎は、そうした夢を抱いて、寝てしまった。月は畳の目を一尺もうごいたが、まだ醒めなかった。窓の女竹めだけに絶えまなく涼風が戦そよいで、昼の暑さから解かれた肉体は、打たれても醒さめる気色はなかった。

——すると、その頃まで、蚊の多い崖の陰にかくれていた一つの人影は、

(よし！)

と、頃を見定めたように、燈ひのない家の軒端まで、蟄がまの這うように忍び寄って来た。

## 六

凛々しく見拵みじらえした武士であつた。——夕刻、坂下の花屋の老爺おやじが挙動を怪しんで、寺の裏山へ見送つたという——あの若い武士がこの男であつたのではあるまいか。

——這い寄つて、

「……………」

その人影は、縁先から、ややしばらくのあいだ、じつと、屋内を窺うかがつている。

月明りを避けて屈かがんでいるので物音を立てない限り、そこに人間がいるとはちよつと分らないくらいだつた。

「……………」

小次郎の鼾いびき声が微かに聞える。——一時、ハタと竭やんだ虫の音もふたたび何事もないように、そこらの草の露からすだき始めた。

やがて。

人影は、ぬつくと立つた。

そして刀の鞘さやを払うや否、ほんと縁先へ跳ね上がつて、小次郎の寝すがたへ向い、

「くわツ」

と、齒を喰いしぼって、斬りつけたと思うと、小次郎の左の手から、黒い棒が発矢と唸つて、その小手を強く打った。

振り下ろした刃は、よほどな勢いであつたとみえて、小手を打たれながらも、畳まで斬りさげた。

だが、その下に在った小次郎の姿は、水面を打たれた魚が摺り抜けて悠々と他を泳いでいるように、さつと、壁際へ身をよけて、此方を向いて立っていた。

手には、愛劍の物干竿を、二ツにして持っていた。——つまり左の手には鞘を。右の手にはその抜刀を。

「誰だ」

こういつた彼の呼吸でも分ることは、小次郎がこの刺客の襲撃を、疾くから予感していたという点である。露のこぼれにも、虫の音にも、油断のない彼の姿というものが、壁を背にして、その時少しも紊れず見えた。

「わ、わしだツ」

それにひきかえて、襲った者の声は割れていた。

「わしでは分らん。名をいえ。——寝こみを襲うなどとは、武士らしくもない卑怯者め」

「小幡景憲かげのりの一子、余五郎景政じや」

「余五郎！」

「おお……よ、ようも」

「ようも？ 如何いたしたと申すのか」

「父が病床にあるのを、よい事にして、世間に小幡の悪口をいいふらし」

「待て。いいふらしたのは、わしではない。世間が世間へいいふらしたのだ」

「門人どもへ、果し合いの誘いをかけ、返り討ちにしておったのは」

「それは小次郎に違いない。——腕の差だ、実力の差だ。兵法の上では、こればかりは致し方ない」

「いう、いうなつ。半はん瓦がわらとか申す無法者に手伝わせ……」

「それは二度目のこと」

「何であろうと」

「ええ、面倒めんどうな！」

小次郎は癩癬かんべきを投げて、一步踏み出しながら、

「恨むなら、いくらでも恨め、兵法の勝負に、意趣をふくむは、卑怯の上の卑怯者と、よ  
けい、もの笑いを重ねるのみか——またしてもそちの一命まで、申しうけるが、それでも  
覚悟か」

「……………」

「覚悟で来たかつ」

さらに一歩ふみ出すと、それと共に伸びた物干竿の切先一尺ほどに、軒の月が白く映し  
た。チカツと、余五郎の眼も眩むばかり、白い光芒こうぼうがそれから跳ねた。

きよう研とぎ上がって来たばかりの刀である。小次郎は、渴かわいた胃が響膳きようぜんへ向つたよ  
うに、相手の影を獲物として、じつと見すえた。

驚わし

一

ひとに仕官の斡旋を頼んでおきながら、主君とする人のことばが気に喰わないなどと、

間際になつて、わがままをこねる。

岩間角兵衛は、弱つて、

(もう関かまうまい)

と、思つた。そして、

(後進を愛すのはよいが、後進の間違つた考えまで、甘やかしてはいかん)

と、自省した。

けれど角兵衛は元々、小次郎という人間が好きだった。凡物ほんぶつでないと打ち込んでいた。

従つて、彼と君侯のあいだに挟まつて、困つた当座は、腹も立つたが、数日経つと、

(いや、あれが彼の、偉いところかも知れぬ)

と、考え直して来た。

(凡なみの人物なら、お目見得といえ、欣よろこんで行くだろうに)

と善意に酌くんで、むしろそれくらいな気概は、若い人間にあるほうが頼母たのもしいし、また、

彼にはその資格があると、よけい小次郎が大きく見えて来た。

で、四日ほど後。

それまで、彼は宿直とのいがあつたり、気色も癒なほらなかつたので、小次郎とも顔を合せなかつ

だが、その朝、彼の棟をぶらりと訪れて、

「小次郎どの。——きのうも御館おやかたから退さがろうとすると、忠利公がまだかと、其許そこもとのご催促じゃ。どうじゃな、お弓場ゆばで会おうと仰せられるのじゃから、御家中の弓でもごらんになるつもりで、気軽に出かけては」

と、気をひいてみた。

小次郎がにやにや笑って答えないので、彼はまた、

「仕官をするなれば、一応お目見得をすることは、どこにでもある例じゃから、何も、其許そこもとの恥辱にはなるまいが」

「だが、御主人」

「ふム」

「もし、気に入らぬ、断るといわれたら、この小次郎は、もう古物ふるものになるではないか。小次郎はまだ、自分を商品のように売り歩くほど落ちぶれてはおり申さん」

「わしのいい方が悪かったのだ。殿の仰せは、そういう意味あいではなかったが」

「然らば、忠利公へ、どうお答えなされたの」

「——いやまだ、べつにどうとお答えはしておらぬ。それで、殿には殿で、心待ちにして



おられるらしい」

「はははは。恩人のあなたを、そう困らせては相済まぬな」

「ごよいも、宿直とのいの日じや。また、殿から何か訊かれるかも知れぬ。そうわしを困らせずに、ともあれ一度、藩邸へお顔を出してもらいたいが」

「よろしい」

小次郎は、恩にでも着せるように、領うなずいて、

「行つて上げましょう」

といった。

角兵衛は欣んで、

「では、今日にも？」

「左様、今日参ろうか」

「そうして欲しい」

「時刻は」

「いつでもという仰せでござつたが、午ひるすこし過ぎならお弓場ゆばへ出ておられるから、窮屈きうくつでもなし、気も軽く、拝謁はいてつできるが」

「承知した」

「相違なく」

と、角兵衛は、念を押して、先に藩邸へ出かけて行つた。

その後で、小次郎は悠々身支度をした。身装などは関わない豪傑ふうなことを常にいつているが、彼は実はなかなか洒落者で、非常に見得をかざる質だつた。

羅衣うすものの袴かみしも、船載織はくさいおりの袴はかま、草履も笠も新しいのを出させ、岩間家の仲間ちゆうげんに、

「馬はないか」

と、訊ねた。

坂下の花屋の小屋に、主人の乗換馬の白が預けてあるからと聞いて——小次郎はその花屋の軒に立つたが、きょうも老爺おやじはいなかつた。

そこで、彼方かなたの境内を見ると、寺の横に、その花屋の老爺だの僧侶だの、近所の人々が大勢して何か首を集めて騒いでいた。

何があるのか——と小次郎もそこへ行って見た、見ると、菰こもをかけた一箇の死体が地上にある。それを、取り囲んでいる人々は、埋葬の相談をしているのだった。

死者の身許は分らない。

年頃は若い。

そして侍だという。

肩先から、思いきつて深く斬られているのである。血しおは黒く乾いていた。持物は何もないらしい。

「わしは、この侍を、見かけたことがある。四日ほど前の夕方じゃった」

花屋の老翁おやしがいった。

「……ほ？」

と、僧侶や近所の人々は、彼の顔を見まもった。

老翁は、なおも、何か喋しゃべりかけたが、その時自分の肩を叩く者があるので、振り顧かえると小次郎が、

「おぬしの小屋に、岩間殿の白馬しろが預けてあるそうだが、出してくれい」

「お、これは」

あわてて辞儀をして、

「お出ましで」

と、老爺は、小次郎と共に急いで家の方へ戻った。

小屋から、曳き出して来た月毛を撫でて、

「良い馬じやな」

「はい。よいお馬でございます」

「行つて来るぞ」

老爺は、鞍の上へ移った小次郎のすがたを見上げて、

「お似あいなさいます」

小次郎は、巾着の中から、若なにがし干かの金をつまみ出して馬上から、

「おやじ、これで、線香と花でも供あげておいてくれ」

「……へ？ 誰どなた方へ」

「今の死人へ」

小次郎は、そういつて、坂下の寺門前から、高たかなわ輪街道へ出て行つた。

ベツと、彼は馬上から唾つばを捨てた。いやな物を見た後の不快な生なまつば唾がまだ残っていた。

——四日前の月の夜、研とぎ上がったばかりの物干竿に、斬かけた人間が、さっきの菰はを刎はて、馬の後から尾ついて来るような気がする。

「怨まれる筋はない」

彼は、心のうちで、自分の行為に、弁明していた。

炎天を打たせて、彼の白馬は、往來を払って行つた。町家の者も、旅人も、歩いている侍も、彼の馬前を避けて、そして皆、振顧つた。

實際、彼の馬上姿は、江戸の街へはいつでも目につくほど立派だった。——どこのお武家だろうと、人々は見るのであつた。

細川家の藩邸についたのは、約束どおり暑い真昼中だった。駒をあずけて、邸内へかかると、岩間角兵衛はすぐ飛んで来て、

「ようお出で下された」

と、まるで自分のことのように犒ねぎらいながら、

「すこし、汗でも拭いて、お控えでおやすみ下さい。唯今、殿へお取次ぎをする間」と、麦湯、冷水、煙草盆と、下へも措おかない。

「では、お弓場へ」

と、間もなくべつの侍が案内をしに来る。勿論、彼が自慢の物干竿は家臣の手にあずけ、小刀のみで、従ついてゆく。

細川忠利ただとしは、きょうもそこで、弓を射ていた。夏中、百射をつづけるといので、きょうもその幾日目かであった。

大勢の近侍が、忠利を取り巻いて、矢を抜きに駈けたり介添かいぞえしたり、また、固唾かたすをのんで、弓鳴りを見まもっていた。

「手拭、手拭」

忠利は、弓を立てた。

汗が眼に流れこむほど、射疲れていた。

角兵衛は、その機しよに、

「殿」

と、側へひざまずいた。

「なんじゃ」

「あれに、佐々木小次郎が参つて御拝謁を待っております。おことばを戴きとうぞんじまする」

「佐々木？ ああそうか」

忠利は眼もくれないで、もう次の矢を弦つるに懸け、足をふみ開いて、弓手ゆんでを眉の上に翳かざしていた。

三

忠利ばかりでなく、家臣たちも誰ひとり、控えている小次郎に、眼をくれる者はなかった。

やがて百射が終ると、

「水、水」

忠利は、大息でいった。

家臣たちは、井戸水を揚げて、大きな盥たらひに水を漲はった。

忠利は、諸肌をぬぎ、汗を拭いたり、足を洗った。側そばから家来が、袂たもとを持ったり、新しい水を汲んだり、介添えは怠りないが、それにしても、いわゆるお大名の仕草ともみえぬ野人ぶりであった。

くにもと  
国許にいたる大殿とよばれる三齋公は茶人である。先代の幽齋は、それにもまして風雅な歌人であった。さだめし三代目の忠利公も、みやびたる公卿風くげふうの人か、御殿育ちの若殿だろうと考えていた小次郎は、ちよつと、その体に、意外な眼をみはっていた。よく拭きもしない足をすぐ草履にのせて、ずかずかと忠利は、弓場ゆばへ戻つて来た。そして、さつきからまごついている岩間角兵衛の顔を見ると、思い出したように、

「角兵衛、会おうか」

と、幕とぼりの日陰へ床しょうぎ几を置かせ、九曜の紋を後ろにして腰かけた。

角兵衛に塵さしまねかれて、小次郎は彼の前にひざまずいた。人材を愛し、士を遇することに厚かったこの時代では、一応、謁見をうける者からそういう礼は執とるが、すぐ忠利の方でも、  
「床しょうぎ几を遣つかわせ」

と、いった。

床几を受ければ客である。小次郎は膝を上げて、

「おゆるしを」

会釈しながら、それへ腰をおろして、忠利と対むかいあった。

「仔細、角兵衛から聞いておるが、生国は岩国と申すか」



「御意にござります」

「岩国の吉川きつかわ広家公は英邁えいまいの聞えが高い。そちの父祖も、吉川家に随身の者か」

「遠くは近江おうみの佐々木が一族と聞いておりますなれど、室町殿滅亡後、母方の里へひそみ  
ました由で、吉川家の禄ろくは喰はんでおりませぬ」

などと家系や、縁類などの質問があつて後、

「侍奉公は、初めてか」

「まだ主取しゅとりは存じませぬ」

「当家に望みがあるやに、角兵衛から聞いておるが、当家のどこがようて、望んだか」

「死に場所として、死に心地の好きそうなお家と存じまして」

「む、む」

忠利は、唸うめいた。

気に入つたらしく見える。

「武道は」

「巖流がんりゅうと称します」

「巖流？」

「自身発明の兵法にござりまする」

「でも、淵源えんげんがあるうが」

「富田五郎右衛門の富田流を習いました。また、郷里岩国の隠士で片山伯耆守ほうきのかみ久安なる老人から、片山の居合を授けられ、かたがた、岩国川の畔ほとりに出ては、燕を斬つて、自得するところがございました」

「ははあ、巖流とは——岩国川のその由縁ゆかりから名づけたか」

「御賢察のとおりです」

「一見したいな」

忠利は、床几から、家臣の顔を見まわして、

「誰か、佐々木を相手に、起つ者はおらぬか」

と、いった。

#### 四

この男が、佐々木か。近頃、よくうわさに上る、あの著名な人間なのか。

(それにしては、思いのほか、若いものだな)

と感心して、先刻さつきから、忠利と彼との応接を見まもっていた家臣たちは、忠利が唐突に、(誰か、佐々木を相手に、起つ者はないか)

といった言葉にまた、顔を見あわせた。

自然、その眼はすぐ、小次郎の方へ移つたが、彼には、迷惑そうな気色もなく、むしろ、(望むところ)

と、いわんばかりな紅潮が面おもてに見えた。

だがなお、さし出がましく、我がと名乗つて、起つ者もないうちに、

「岡谷おかや」

と、忠利が、名指した。

「はっ」

「いつぞや、槍が太刀に勝る論議の出た折に、誰よりも、槍の説を取つて退ひかなかつたのは、そちであつたな」

「は」

「よい折だ、かかつてみい」

岡谷五郎次は、お受けすると、次に、小次郎の方へ向い直つて、  
「不肖ふしょう、お相手に立ちまするが、おさしつかえございませぬか」  
と、訊ねた。

小次郎は、大きく、言葉を胸で肯きくように、頷うなずいた。

「お願いいたしましょう」

慇懃いんぎんな礼儀のあいだであるが、何かしらさつと肌じまるような凄気せいきがながれた。

幕の裡で、的場まじばの砂を掃いていた者や、弓の整理をしていた人々も、それを聞いて、忠利のうしろへ皆、集まった。

朝夕、武芸を口にし、太刀や弓を箒はしの如く持ち馴れている者にでも、稽古以外のほんとの試合などに立つ体験は、一生を通じて、そう何度もあることではなかった。

仮に――

(戦場へ出て戦うのと、平常の場合、試合に立つのと、どっちが怖いか)

ということを、ここにいる大勢の侍に、正直に告白させたら、十人が十人まで、

(それは試合だ)

というに違いないのである。

戦争は集団の行動だが、試合は箇と箇の対立である。必ず勝たなければ、必ず死ぬか片輪になるのだ。足の拇指おやゆび一つから髪の毛一筋までを味方として、自己の生命力を尽して戦い切らなければならぬ。——他人が戦っている間、ほっと一息を入れるというような余裕なども、試合にはない。

——しゆく肅として、彼の友だちは皆、彼の挙止を見まもった。だが、五郎次が落着いているのを見ると、やや安心して、

(彼なら負けまい)  
と、思った。

細川藩には、従来、槍術の専門家という者はいなかった。幽斎公三斎公以来、数々の戦場で人と為なつた者ばかりが君側なのである。足軽の中にさえ、槍の上手は沢山いた。槍を上手につかうなどということは、必ずしも奉公人の特別な技能ではなかった。だから特に師範役というような者はいらなかったといえるのである。

けれど、その中でも、岡谷五郎次などは、藩での鑑やりし仕といわれていた。実戦を踏んでい  
るし、平常の稽古や工夫も積んでいる老練家であった。

「しばし、ご猶予を」

と、五郎次は、主君と相手の者へ、そう会釈をして、静かに、彼方へ退がって行つた。もちろん身支度のためである。

朝あしたに笑顔で出て、夕方には死体で帰るかもしれない侍奉公の嗜たしなみとして、きょうも、下帯から肌着まで、垢あかのつかない衣ものを着ていたということが、支度に退がる彼の心を、その時ふと、涼やかにさせていた。

## 五

身を開け放した姿で、小次郎は、突つ立っていた。

借り上げた三尺の木太刀を提さげ、袴はかまの襷ひだもたらりと——絡からげもせず、試合の場所を選んで、先に待っていた。

逞たくましかった。誰が見ても、憎んで見てさえも、それは凛りり々しい男振りであつた。

殊ことに、驚わしのごとく勇猛で、しかも美しい横顔には、平常と何の異ことなるところも見えなかつた。

(どうしたか?)

相手に立つ岡谷五郎次へは、家中の者の友情がわいた。小次郎の異彩を見るにつけ、彼の腕のほどが案じられ、彼が支度にかくれた幕の方へおのずと不安な眼がうごいた。

だが、五郎次は、落着きすまして身支度を終えていた。それになお、手間どっているわけは、槍の先に濡れ晒布ぎざらしを、ていねいに巻きつけているためだった。

小次郎は、見やつて、

「五郎次どの。それは何のお支度だな。てまえに対する万一のお気づかいなら無用なご配慮だが」

と、いった。

ことばは尋常に聞えるが、意味は傲慢ごうまんな放言に等しい。——今、五郎次が濡れ晒布ぎざらしを巻いている槍は、彼が戦場で得意につかう短刀形の菊池槍きくちやりである。柄えの長さ九尺余、手元から先は青貝塗りの磨出しとぎだ、菖蒲造りの刃先だけでも七、八寸はあろうという業物わざものなのだ。

「——真槍でいい」

それを見ながら、小次郎は、彼の徒労をすでに嘲わらうかにいったのである。

「無用ですか」

キツと、五郎次が、彼を見ていうと、君侯の忠利も、君側にいる彼の友も、皆、

(ああいうのだ)

(かまわん)

(突き殺してしまえ)

と、いわんばかりに、眼でぎらぎらと、使曠しそくした。

小次郎は、早くと、促うながすように、語気をこめて、

「そうだ！」

と、眼をすえた。

「然らば」

巻きかけた濡れ晒布ぬれさらしを解きほぐし、五郎次は長槍の中段をつかむと、ずかずかと進んで

来て、

「お望みにまかせる。しかし、それがしが真槍を把とる以上、貴方あなたも真剣を持っていただき

たい」

「いや、これでいい」

「いや、ならぬ」



「いや」

と、小次郎は、彼の呼吸を圧しかぶせて、

「藩外の間人が、いやしくも他家の君前で、真剣を把るなどという無遠慮は、慎まねばなりませんまいが」

「でも」

五郎次がなお、心外らしく、唇をかむと、忠利は、彼の態度を、もどかしく思ったように、

「岡谷。卑怯ではない。相手のことばに任せ。逸くいたせ」

明らかに、忠利の声の中にも、小次郎に対する感情がうごいていた。

「——では」

二人は、目札を交わした。するどい血相が双方の顔に映り合った。とたんに、ぱつと五郎次から跳び退いた。

だが、小次郎の体は、モチ竿モチざおに着いた小鳥のように、槍柄やりえの下に添って、五郎次のふところへそのまま、つけ入って行つた。

五郎次は槍を繰り出す暇がなく、ふいに身を向き転かえると石突きの方で、小次郎の襟えりが

みの辺りを撲り下ろした。

——ぱっん、と石突き先が、こくだま 笏して宙へ跳ね返された。小次郎の木剣は、とっさ 咄嗟にまた、槍の勢いで上げられた五郎次の肋骨へ向つて、低く、噛みつくように唸つて来た。

「ち。ち。ち！」

五郎次は、踏み退いた。

さらに横へ跳んだ。

息もつかず、また、避けた。また跳び交わした。

——だがもう、わし 驚に追いつめられたはやぶさ 隼だった。つきまとう木剣の下に、かつぜん 戛然と、槍が折れた。せつな、五郎次の魂がその肉体から、無理にも 挽ぎ離されたような呻きがして、一瞬の勝負は、ついでしまった。

## 六

伊皿子の「月の岬」の家へ帰つてから、小次郎は、あるじ 主の岩間角兵衛にたずねた。

「ちと、やり過ぎましたかな？ ——今日の御前では」

「いや上乗じょうじょうでござったよ」

「忠利公には、わしの帰った後で、何と申しておられたかな」

「べつに」

「何か、いわれたらうが」

「何とも、仰せられずに、黙つて、お座の間へお出いでられた」

「ふむ……」

小次郎は、彼の答えに、不満足な顔を見せた。

「いずれ、そのうち、お沙汰があるでござらう」

角兵衛が、いい足すと、

「抱かかえるとも、抱えぬとも、いずれでもいい。……だが、噂たがに違ちがわず、忠利公は、名君と見た。同じ仕えるなら——とは思おもうが、これも縁ゆかりものだからな」

角兵衛の眼にも、小次郎の鋒ほう鉞げんが次第に見えてきて、きのうから、少し気味わるくなつた面持おももちである。愛すべき若鳥と抱かかっていたのが、覗のぞいてみたら、いつの間にか懐ふところ中で驚おどろかして感じたのである。

きのう、忠利の面前では、少なくとも四、五名は相手にしてみせるつもりだったが、最初

の岡谷五郎次との試合が、余りに残忍であつたせいか、

(見えた。もうよい)

と、忠利の声で、終つてしまつたのである。

五郎次は、後で蘇生したというが、怖らく跛行になつてしまつたらう。左の太股か腰部の骨は砕けた筈である。あれだけ見せておけば、このまま、細川家に縁はなくてもまず遺憾はないかと、小次郎はひそかに思う。

だが、未練はまだ、十分にある。将来、身を託す所として、伊達、黒田、島津、毛利に次いで、細川あたりは慥な藩である。大坂城という未解決な存在がまだ風雲を孕んでいるので、身を寄せる藩に依つては、再び素牢人に転落したり、落人の憂き目にあう惧れは多分にある。奉公口を求めるにも、よほど将来を見通してかからないと、半年の禄のために、一生を棒にふるかも知れない。

小次郎には、その見通しがついていた。三斎公という者がまだ国元に光っているうちは、細川家は泰山の安きにあるものと見ていた。将来性も十分にあるし、同じ乗るなら、こういう親船に乗つて新時代の潮へ、生涯の舵を向けてゆくことこそ賢明だと考えていた。

(だが、いい家柄ほど、易々と、抱えもせぬし)

小次郎は、やや焦々いらいらする。

何を思いついたのか、それから数日後のこと、小次郎は急に、

「岡谷五郎次どのを見舞つて来る」

と、いつて出かけた。

その日は徒歩かちで。

五郎次の家は、常盤橋ときわばしの近くだった。彼は突然、小次郎の慇懃いんぎんな見舞をうけて、まだ病床から起き上がれない身であったが、

「いや、試合の勝負は、腕の相異、わが未熟は恨むとも、なんで其許そこもとを……」

と、微笑をみせ、

「おやさしい、お労いたわりをうけ、かたじけない」

と、眼に露を見せた。

そして小次郎が帰ると、枕辺に来ていた友へ、

「ゆかしい侍だ。傲慢者ごうまんものと思うたが、案外、情誼じょうぎもあり、礼儀も正しい」

と、洩らした。

小次郎は、彼が、そういうであろうことを、弁わきまえていた。

ちようど、来ていた見舞客の一名は、もう彼の思うつぼに、彼の敵たる病人の口から、小次郎の讚美を聞かされていた。

## 青い柿

### 一

二日おき、三日おきに、前後四たび程、小次郎は岡谷の家を見舞った。

或る日、魚市場から、生きた魚など、慰めにと、届けさせた。

夏は、土用に入った。

空地の草は、家を蔽いおほ隠し、乾いた往来には、のそのそ蟹かにが這っている江戸だった。

——武蔵出てこい。出て来ずば、侍とはいわれまいが。

と、半はんがわら瓦の者が立てた辻々の立札も、夏草の背にかくされ、或は雨で仆れたり、薪まきに盗まれたりなどして、もう眼にふれる折もなかった。

「どこぞで、飯を」

と、小次郎は、空腹を思い出して、彼方あちこち此方、見まわした。

京とちがつて、奈良茶というような家もまだない。ただ、空地の草ほこりに、葎よしず箆しずを立てて、

どんじき

と書いた旗が見える。

屯食とんじき——とは遠い時代、握り飯のことを称なづつた名と聞いている。屯食たむろぐいという意味か

ら生れた言葉であろう。だが、ここの「どんじき」とは一体何か。

葎よしず箆しずの陰から這つてゆく煙は草にからみついて、いつまでも消えない。近づいてゆくと、煮物のおいがる。まさか、握り飯を売るわけでもあるまいが、とにかく、喰くべ物屋には違ちがいない。

「茶をいっばいくれい」

日陰へはいると、その腰かけに、ひとりは酒の茶碗、ひとりは飯茶碗を持って、がつがつ喰くつている二人づれがある。

対むかいあつた腰かけの端へ小次郎は倚よつた。

「おやじ、何ができるのか」

「めし屋でござります。酒もございまするが」

「どんじき——と看板に書いてあるが、あれは何の意味だな」

「皆さまがお訊きになりまするが、てまえにも分らないので」

「おぬしが書いたのではないのか」

「はい、ここでお休みなされた旅の御隠居らしいお人が、書いてやるといって、書いて下さいましたので」

「そういえば、なるほど、達筆だな」

「諸国を、御信心に歩いているお方だそうで、木曾でも、よほど豪家な金持の御主人とみえましてな、平河天神ひらかわだの、氷川神社ひかわ、また神田明神などへも、それぞれ莫大な御寄進をして、それが、無二の楽しみだと仰つしやっている御奇特人でござりまする」

「ふム、何という者か、その人の名は」

「奈良井の大蔵と仰つしやいます」

「聞いたようだな」

「どんじき、などと、お書きくださって、なんの意味か、通じはしませぬが、そういう有徳とくなお方の看板でも出しておいたら、少しは貧乏神の魔除まよけになるかと思ひましてな」



おやじは、笑った。

小次郎は、そこに並んでいる瀬戸物鉢をのぞき、肴さかなと飯を取って、箸はしで蠅を追いつつながら、湯漬にして喰べ始めた。

前に腰かけていた二人の侍のうち——一人はいつの間にか立って、葎よしずの破れ目から草原を覗いていたが、

「来たぞ」

連れを振りふ願かえって、

「浜田、あの西瓜すいか売りじゃないか」

といった。

あわてて、箸をおいて、もうひとりの男も立ち上がった。そして葎よしずへ顔を並べながら、

「む、あれだ」  
と、何か物々しく顔うなずいた。

草いきれの炎天を、西瓜売りは天秤てんびんを肩に歩いてゆく。

それを追つて「どんじき」の葭簀の陰から出て行つた牢人は、いきなり刀を抜いて、天秤てんびんの荷繩になわを払つた。

——もんどり打つように西瓜と西瓜売りが前へ転んだ。

「やいつ」

先刻さつき、どんじきの中で、浜田とか呼ばれていたもう一名の牢人が、すぐ駈けて、横から西瓜売りの首を掴つまみ上げた。

「お濠ばたの石置場で、このあいだまで、茶汲ちやくみ女おんなをしていた娘を、おのれは、何処へ連れて行つた。——いいや、空惚そらとぼ呆けてもだめだ。なんじが隠したに相違ない」

一人が責めると、一人が刀を鼻先へ突きつけて、

「いえ。吐ぬかせ」

「そちの住居すまいはどこだ」

と、脅おどかし、

「こんな面つらして、女を誘拐かどわかすなどとは、もつてのほかな奴だ」

と、刀の平で、西瓜売りの頬をたたいた。

西瓜売りは、土気色になつた顔を、ただ、横に振るだけだったが、隙を見ると、憤然一方の牢人を突きとばし、天秤てんびんを拾つて、もう一名の方へ、打つてかかった。

「やるかつ」

と、牢人は呶鳴つて、

「こいつ、満ざら、ただの西瓜売りでもないぞ。浜田、油断するな」

「何、多寡たかの知れた——」

と、浜田某なにがしは、打つて来る相手の天秤を引つ奪たくり、それへ叩き伏せてしまうと、西瓜売りの背中へ天秤を背負わせ、有合う縄で、棒縛りに、ぎりぎり巻きつけた。

——すると彼の背後うしろの方で、猫の蹴られたような声と共に、どきつという地響きがしたので、何気なく振り顧ると、その顔へ、夏草の風がぱつと赤い細かい霧を持って来て、吹きつけた。

「——やつ！」

馬乗りになつていた西瓜売りの体の上から跳とび退いた浜田某なる牢人は、あり得ないことを見たように、疑いの眼をみはつて、愕がくぜん然とさげんだ。

「何者だツ……な、なに者だつ汝おのれは……」

だが。

蝮まむしのように、するすると、そういう彼の胸へ真つ直ぐに迫つて来る刀の先は——冷然と、  
答えもしない。

佐々木小次郎なのである。

刀は、いうまでもなく、いつもの長刀物干竿ものほしざお。厨子野耕介ずしのが研桶とわけに古い錆垢さびあかを落して  
光芒こうぼうを改めて以来、近頃しきりと、血に濁かわいて、血をむさぼりたがっている刀である。

「……………」

笑わら而不答つてこたえず——小次郎は、後ずさる浜田某をぐいぐい追いつめて夏草なぐさを繞めぐっていたが、  
ふと、棒縛りの目に遭つていた西瓜売りが、その姿を見るなり、さもさもびつくりしたよ  
うに、

「あつ……佐々木……佐々木……佐々木小次郎どの。助けてくれっ」

と、大地から呶鳴った。

小次郎は、見向きもしない。

ただ、抜き合せたまま、後へ後へ、果てなく退さがってばかりいる浜田某の呼吸いきを数えな  
がら、死の淵まで押してゆくように、彼が一退すれば、彼も一進し、彼が横へ旋めぐれば、彼

もさつと、横へ旋つて、刀の先から外さず押しつづけているのみだった。

もう青白くなつて来た浜田某は、その耳に、佐々木小次郎の名を聞くと、

「えつ、佐々木？」

遽に、戸惑いし出し、くるくる旋つたかと思うと、ぱつと、逃げ出した。

物干竿は、宙を刎ね、

「何処へッ」

と、いうや否、浜田某の片耳を削いで肩先から深く斬りさげてしまった。

### 三

彼がすぐ、縄目を切つてやつても、西瓜売りは、草むらから顔を起さなかった。坐り直しはしたが——いつまでも面は上げないのである。

小次郎は、物干竿の血をぬぐい、鞘に納めると、何かおかしくなったように、

「大将」

と、西瓜売りの背を叩いた。

「何もそう面目なからなくてもいいじゃないか。——おいつ、又八」

「はあ」

「はあ、じゃあない、顔を上げろ。さてもその後は久しぶりだな」

「あなたも、ご無事でしたか」

「あたり前だ。——しかし、貴様は妙な商売をしておるじゃないか」

「お恥かしゆうございます」

「とにかく、西瓜を拾い集め——そうだ、あの、どんじき屋へでも、預けたらどうだ」

小次郎は原の中から、

「おおウい、おやし」

と、さまね磨いた。

そこへ、荷や西瓜をあずけ、矢立を取出して、どんじきの掛障子のわきへ、

空地の死体ふたつ

右、斬捨て候ものは

伊皿子坂月の岬住人みさき

佐々木小次郎

後日の為のこす

こう書いて、

「おやじ、ああしておいたから、其方に迷惑はかかるまい」

「ありがとう存じまする」

「あまり、有難くもないだろうが、死者の由縁ゆかりの者が来たら、言伝ことづけてくれ。——逃げ隠れはせぬ、いつでも、御挨拶はうけるとな」

そして、葭簣よしすの外よにいる西瓜売りの又八へ、

「参ろう」

と、促うながして、歩き出した。

本位田又八は、俯向うつむいてばかりいた。近頃彼は、西瓜の荷を担になつて、江戸城の此処こゝ彼処かしこにたくさん働いている石置場の人足や、大工小屋の工こう匠しやうや、外そと廓ぐるわの足場あしどにいる左官ひだりなどへ、西瓜を売つてあるいていた。

彼も、江戸へ来た当初は、お通に対してだけでも、男らしく、一修行ひとするか、一事業ひとやるか、壮志のあるところを見せていたが、何へかかっても、すぐに意志のへこたれてしまふことと、生活力の弱いことは、この人間の持ち前で、職を換えることも、三度や四度の

数ではない。

殊に、お通に逃げられてからの彼は、よけい、薄志弱行の一途を辿るばかりで、わずかに、各所の無法者のゴロ部屋に寝泊りしたり、博奕の立番をして一飯を得たり、また、江戸の祭や遊山の年中行事に、その折々の物売りをしたり——とにかくまだ一ツの定めた職業すらつかんでいないのであった。

だが、それが不思議とも思わないほど、小次郎も、彼の性情は前から知っている。

ただ、どんじき屋へ、ああ書いておいた以上、やがて何とかいつて来るものと心得ていなければならぬ心構えのために、

「いったい、あの牢人どもから、どんな恨みをうけたのか」

と、理由を糺すと、

「実は、女のことです……」

と、いい難そうに、又八はいう。

又八が生活を持つ所、何か必ず女の事故が起っている。彼と女とは、よくよく前世から業のふかい悪縁でもあるのだろうと——小次郎すらも苦笑をおぼえ、

「ふム、相変らず貴様は色事師だの。して、その女とは、どこの女で、そしてどうしたと



「いう理か」

いい渋る口を割らせるのは骨だったが、伊皿子へ帰っても、かくべつ用を持たない彼には、女と聞くだけでも、無聊ぶりようをなぐさめられて、又八と会ったのも、拾い物のような気がしていた。

#### 四

ようやく、又八が、打明けていう事情というのを聞くと、こうであった。

濠端ほりばたの石置場には、お城の作事場に働いている者や往來の頻繁を当てこんで、何十軒といつていいほど、休み茶屋が、葭簀よしすを張っている。

そのの一軒に、人目をひく茶汲女ちやくみおんながあった。飲みたくもない茶をのみにはいたり、喰べたくもない心こころてん太すすを啜すすつたりしにゆく連中のなかに、先刻さつきの浜田某という侍の顔もよく見えていた。

ところが、自分も時折、西瓜を売上げた帰りになど、休みに寄るうち、或る時、娘がそつと囁くささやことには、

(わたしは、あのお侍が嫌いではないのに、茶屋の持主は、あのお侍と遊びにゆけど、此店ここが閉まるとすすめるのです。あなたの家へ隠してくれませんか。女ですから水仕事や綻ほころびを縫うぐらいなことならしますよ)

と、いうので、否いなむ筋すじ合あいもないから、謀しめし合せて、自分の家へ、早速、娘かくまを匿かくつてや  
つているので——ただそれだけの理由なので——と、又八は頻りとそこを繰返して  
言い訳する。

「おかしいじゃないか」

小次郎は、領うなずかない。

「なぜですか」

と、又八は、自分の話のどこがおかしいのかと、すこし反抗を見せて、突っこんでゆく。  
小次郎は、彼の、惚のろけ気とも言い訳ともつかない長文句を、炎天に聞かされて苦笑いも作  
れず、

「まあいいわ。ともかく貴様の住居へ行つて、ゆるゆる聞こう」

すると、又八は足を止めてしまった。ありありと、迷惑そうにその顔つきが断っている  
のである。

「いけないのか」

「……何しろ、ご案内申すような、家ではないので」

「なあに、かまわぬ」

「でも……」

又八は、謝って、

「この次にして下さい」

「なぜじゃ」

「すこし今日は、その」

よくよくな顔していうので、強<sup>た</sup>つてもいわれず小次郎は急にあつさりど、

「ああそうか。然らば、折を見て、そちの方からわしの住居へ訪ねて来い。伊皿子坂の途中、岩間角兵衛どのの門内におる」

「伺います。ぜひ近日」

「あ……それはよいが、先頃、各所の辻に立ててあつた高札を見たか。武蔵へ告げる<sup>はんが</sup>半

瓦<sup>わら</sup>の者どもが打つた立札を」

「見ました」

「本位田のおばばも尋ねておるぞと、書いてあつたらうが」

「は。ありました」

「なぜすぐに、老母をたずねて参らぬのじゃ」

「この姿では」

「ばかな。自分の母親に何の見得みえがある。何日いつ、武蔵と出会わんとも限らぬではないか。その時、一子として、居合せなかつたら、一生の不覚だぞ。生涯の悔いをのこすことになるぞ」

彼の意見じみた言葉を、又八は素直に聞けなかつた。母子おやこのあいだの感情は、他人の見た眼のようなのではない。——そう腹の膨ふくれるように思ったが、たった今、救われた恩義のてまえ、

「はい。そのうちに」

と、渋った返辞をのこして、芝の辻でわかれた。

——小次郎は人が悪い。別れると見せて、実はすぐまた、引つ返していた。又八の曲がつた狭い裏町を、見え隠れに尾つけて行つた。

## 五

幾棟かの長屋がある。藪やぶや雑木を伐りき拓ひらいて、どしどし人間が先へ住み出したといったような、この附近の開け方であった。

道などは、後のことで、人が歩けば、それからつくし、下水なども、戸ごことから、行水の水や台所の汚水で、流るるままに出来たものが、自然小川へ落ちて行く——でいいとしている。

何しろ、急激に殖ふえてゆく江戸の人口は、それほど無神経でなければ納まりがつかなかった。その中で多いのは、やはり労働者であった。わけて河川改修と、城普請しろふしんの仕事に就く者たちである。

「又八さん、帰ったのか」

隣の井戸掘りの親方がいった。親方は、盥たらいの中にあぐらをくみ、横にした雨戸の上から首を伸ばしていったのである。

「やあ、行水ですか」

今、家へ戻つて来た又八がいうと、盥たらいの中の親方は、

「どうだい、わしはもう上がるところだが、一浴びやっては」

「有難うございますが、宅でもきょうは、朱実あけみが沸かしたそうですから」

「仲がいい」

「そんなでもございません」

「兄きょうだい妹か、夫婦か、長屋の者もまだよく知らないが、一体どっちなんだね」

「へへへへ」

そこへ、彼女が来たので、又八も親方もだまってしまった。

朱実は、提げてきた大きな盥を、柿の木の下におき、やがて、手桶の湯をあけた。

「又八さん、加減を見てよ」

「すこし、熱いな」

車井戸の音がきりきりする。又八は裸で駈けてゆき、手桶の水を取って来て、自分でうめて、すぐ入浴はいりこむ。

「ああいい湯だ」

親方はもう浴衣ゆかたになって、糸瓜棚へちまの下に竹床たけしょうぎ几を持ち出し、

「きょうは、西瓜は売れたかい」

と、訊く。

「知れたもんですよ」

又八は、指の股に、血が乾いていたのを見出して、気味わるそうに、手拭で落していた。  
「そうだろうな、西瓜なんぞ売るよりはまだ、井戸掘り人足になって日傭稼ひやといかせぎしたほうが、楽だと思うが」

「いつも、親方が、おすすめてくれますが、井戸掘りになると、お城のなかへはいるんですから、滅多に、家へ帰れないでしょう」

「そうさ。御作事方のお許しが出なくつちや、帰るわけにゆかねえな」

「それじゃあ、朱実がいうには、淋しいから、やめてくれといいますんでね」

「おい、のろけかい」

「決して、あたし達は、そんな仲じやございません」

「そうめんでも奢おごりなよ」

「——ア痛っ」

「どうしたい」

「頭の上から、青い柿が落ちて来やがったんで」

「ははは。のろけるからよ」

親方はしぶうちわ洪団扇で、膝をたたいて笑った。伊豆の伊東の生れで、うんべい運平さんという名でかいわい界隈の尊敬をうけていた。年はもう六十すぎ、麻のようにもじやもじやした髪の毛をしているが、日蓮信者で朝夕は題目をとな称え、若い者達を、子ども扱いにするだけの体力をもっている。

この長屋の入口に、

お城御用あなほり土方くちい口入れ

いどほりうん平宅

と立札にあるのは、この親方の家のことである。城じょうかく郭の井戸の開鑿かいさくには、特別な技術があるので、ただの井戸ほりではできない。そこで伊豆の金山かなやまほりの経験のある自分分が、工事の相談と人足の口入れに招かれて来たのである——とは、運平親方が、晩酌にやるしょうちゅう焼酎のごきげんで、よく自慢する糸瓜棚へちまの下のはなしだった。

## 六



許可がなければ、家には帰さないし、仕事中也監視はつくし、留守宅の家族は、人質  
 同様、町名主や親方の束縛もうけるが、その代り、御城内仕事は、外の仕事より、体も楽  
 だし、賃銀はざつと倍額にもなる。

工事が終るまで、寝泊りも、御城内の小屋でするから、小費こづかいもつかいようがない。

——だからそうして一ツ、辛抱してから、それを資本もとでに、西瓜など売らずに、何か商売  
 でもする工夫をしてはどうか。

隣家となりの運平親方は、前から又八へ、よくそういつてくれていたが、朱実あけみは首を振って、

「もし、又八さんが、お城仕事へ行くなら、わたしはすぐ、逃げちまうからいい」  
 と、脅おどすようにいった。

「行くもんか、お前ひとり置いて——」

又八も、そんな仕事はしたくないのである。彼がさがしているのは、体が楽で、もっと、  
 体裁のいい仕事だった。

行水から彼が上がると、次には朱実が、囲いの戸板を殖ふやして、湯を浴あみ、ふたりとも  
 浴衣になってから今も、その話が出たが、

「少しぐらい金になるからつて、囚めしゆうど人ひとみたいに、体を縛られる働きに出るなど、いや

なこつた。おれだって、いつまでも西瓜売りじやいねえつもりだ。なあ朱実、当分貧乏暮しでも、辛抱しようぜ」

冷し豆腐に、青紫蘇あおじそのにおう膳をかこみながら、又八がいえば朱実も、

「そうともさ」

と、湯漬を喰べながらいった。

「一生に一遍でもいいから、意気地のあるところを見せてやりなさいよ。——世間の人に」朱実が、ここへ来てから、長屋では、夫婦者と見ているらしかつたが、彼女は、こんな齒がゆい男を、自分の良人おっとに持とうとは思っていない——

彼女の、男を見る眼は、進んでいた。江戸へ来てから——殊に堺さかい町ちやうの遊びの世界に身を置いているあいだに——多くの種々いろいろな型の男を見ていた。

その朱実が、又八の家へ逃げて来たのは、一時の方便にすぎなかつた。又八を踏み台にして、再び、立ってゆく空をさがしている小鳥だつた。

——だが、いま又八に、お城仕事など行つてしまわれるのは、都合が悪かつた。とうよりも、身の危険であつた。茶汲女ちやくみおんなをしていた頃の男——浜田某なにがしという牢人に、見つけ出される懼おそれがあるからである。

「そうそう」

飯が終ると、又八は、そのことについて、話し出した。

浜田につかまって、ひどい目に遭<sup>あ</sup>つていたところを、佐々木小次郎に助けられ、その小次郎が、此家<sup>ここ</sup>へ案内しろといつてきかないので、閉口したが、とうとう体<sup>てい</sup>よくいつて、別れて来た——ということを審<sup>つぶさ</sup>に、彼女の氣を迎えるように、語り出したのである。

「えつ、小次郎に、出会つたんですつて」

朱実は、もう顔いろを失いながら、息をついて、

「そして私が、ここにいるなどということをつたんだですか。まさか、いいはしないでしようね」

と念を押した。

又八は、彼女の手を、自分の膝へ取つて、

「誰が、あんな奴に、おまえのいることなどというものか。いったが最後、あの執念ぶかい小次郎がまた……」

——あつと、そこで、又八はふいに呶鳴つて、自分の横顔を抑えた。

誰<sup>ほ</sup>が抛つたのか。

裏の方から飛んで来た青い柿の実が一つ、ぐしやつと、彼の顔に当たったのである。まだ固い青柿だったが、白い肉が砕けて、朱実の顔へもかかった。もう夕月の藪やぶの中を、小次郎に似た影が、涼しい顔して、町の方へ立ち去った。

## 露しとど

### 一

「——先生」

と、伊織は追う。

その伊織の背丈せたけより、秋近い武蔵野の草は高かった。

「はやく来い」

武蔵は、振向いて、草の中を泳いで来る雛鳥ひなどりの跽音を時々待つ。

「道があるんだけれど、分らなくなっちゃまう」

「さすがに、十郡にわたるといふ武蔵野の原は広いな」

「どこまで行くんです」

「どこか、住み心地のよさそうな所まで」

「住むんですか、ここへ」

「いいだろう」

「……………」

伊織は、いいとも、悪いともいわない。野の広さと等しい空を見あげて、

「さあ？ どうだか」

「秋になってみる、これだけの空が澄み、これだけの野に露を持つ。……思うだに気が澄むではないか」

「先生は、やつぱり、町の中はきれいなんだな」

「いや、人中もおもしろいが、あのように、悪口の高札を辻々に立てられては、なんぼ武蔵が厚かましゆうても、町には居づらいではないか」

「……だから、逃げて来たの」

「ウむ」

「くやしいな」

「何をいうか、あれしきのこと」

「だって、どこへ行つても、先生のことを誰もよくいわないんだもの。おいらは、くやし  
いや」

「仕方がない」

「仕方がなくないよ。悪口をいうやつを、みんな打ち懲こらして、こっちから、文句のある  
やつ出て来いと、札ふだを立ててやりたいや」

「いや、そんな、敵かなわぬ喧嘩はするものじゃない」

「だって、先生なら、無法者が出て来たつて、どんな奴むかが対つて来たつて、負けやしない  
よ」

「負けるな」

「どうして」

「衆には負ける。十人の相手を打ち負かせば、百人の敵が殖ふえ、百人の敵を追ううちには、  
千人の敵がかかってくる。どうして、敵かなうものか」

「じゃあ、一生、人に唾わらわれているんですか」

「わしにも、名には、潔癖がある。御先祖にもすまない。どうかして、唾わらわれる人間には

なりとうない。……だから、武蔵野の露にそれを捜しに来たのだ。どうしたら、もつと喰われぬ人間になれるかと」

「いくら歩いてても、こんな所に、家はないでしょう。あれば、お百姓が住んでるし……また、お寺へでも行つて、泊めてもらわなければ」

「それもいいが、樹のある所へ行つて、樹を伐り、竹を畳み、茅を葺いて、住むのもよいぞ」

「また、法典ヶ原にいた時のように？」

「いや、こんどは、百姓はせぬ。毎日、坐禅でもするかな。——伊織、おまえは書を読め、そしてみつしり太刀の稽古をつけてやろう」

甲州口の立場、柏木村から野へはいったのである。十二所権現の丘から、十貫坂とよぶ藪坂を下りてからは、ほとんど、歩いて歩いても歩いても、同じような野であつた。夏草の波のなかに、消え消えになる細い道であつた。

行くほどにやがて、笠を伏せたような、松の丘があつた。武蔵はその地相を見て、

「伊織、ここに住もう」

と、いった。

行く所に天地があり、行く所に生活が始まる。鳥が巢を作るのから較べれば、二人の住む一庵を建てるのは、もつと簡素だった。近くの農家へ行つて、伊織は一人の日雇いと、斧おのこぎり、鋸などの道具をやがて借りて来た。

## 二

草庵とまではゆかない、ただの小屋でもない、妙な家が、とにかく数日の間に、そこに建つた。

「神代かみよの家は、こんな物でもあつたらうか」

武蔵は、外から、わが家をながめて、独り興に入っている。

木の皮と竹と茅かやと板とで出来ている。そして柱は附近の丸木である。

その家の中の壁とか、小障子とかに、ほんのわずかばかり使用されている反古紙ほごが、ひどく貴重に見え、また、文化的な光と匂いをたたえ、やはり神代ではあり得ない住居を証拠しんだてている。

しかも、朗々と、藪いのすだれの陰からは、伊織の読書の声がながれている。秋となつて



も、蟬の声はまだ旺さかんだったが、到底、その伊織の声には敵かなわない。

「伊織」

「はいっ」

はいっ——と返辞した時は、伊織はもう彼の足もとに来てひざまずいていた。

近頃、厳しく慣らした躰しつけである。

以前の童弟子わらべでし、城太郎には、彼はこうしなかつた。彼の振舞いたいように振舞わせ、

それが、育つきかりの者には、よいことであり、人間を自然に伸ばすことだと考えていた。武蔵自身がそう育てられて来たからである。——だが、年と共に、彼の考え方も変化して来た。

人間の本来の性質の中には、伸ばしてもいい自然もある。だが、伸ばしてはならない自然もある。

放ほつておくと、得て、伸ばしてはならない本質は伸び、伸ばしてもいい本質は伸びないものだった。

この草庵を建てるので、草や木を刈ってみても、伸びて欲しい植物は伸びず、醜しこぐさ草や邪魔な灌木かんぼくは、刈っても刈っても、蟠はびこって仕方がない。

応仁の乱この方、世の中の相は、文字どおり乱麻であつた。信長がそれを刈り、秀吉が束ね、家康が地ならしと建築にかかりかけているが、まだ、まだ、危ないことは、附火木の火一ツで、天下を火となさんず気ぶりも蒸蒸日上と、西には満ちている。

だが、この永い乱麻の世相は、もう一転する秋だろう。野性の人間が、野性を大きく買われる時代は過ぎた。武蔵があるいた足跡の範囲だけを見ても、将来、天下が徳川になるうが豊臣の掌に帰ろうが、人心の一致している方向はすでにきまつている。

それは、乱麻から整理へ。また、破壊から建設へ。――要するに、求めても求めなくても、次期の文化が、人心の上へひたひたと潮を上げているのである。

武蔵は、独り思うことがある。

(生れたのが、遅かつた)

――と。

(せめて、二十年も早く生れていたら、いや十年でも、間に合つたかも知れない)

――と。

自分が生れた時がすでに、天正十年の小牧の合戦のあつた年である。十七歳には、あの関ヶ原であつた。もう、野性の人間が用をなす時代はその頃から過ぎてしまつたのだ。――

—今思えば、田舎いなかから槍一本持つて出て、一国一城を夢みるなどということは、おかしいほど、時代錯誤じだいさくごな田舎者の世間知らずであった。

迅はやい。時勢は急流のように早い。太閤たいこう秀吉の出世が、津々浦々の青年の血へ響いて来た時には、もう太閤秀吉の踏襲とうしゅうではいけないのである。

武蔵は、伊織へ訓おしえるのに、そう考えずにいられなかった。そのために、城太郎とはちがつて、殊しに、躰しつけを厳しくした。次の時代の侍を作り上げねばならぬと思った。

「先生。なにか御用でございますか」

「野末に大きな陽ひが落ちかけた。いつものように、木剣を把とれ、稽古をつけてつかわそう」

「はいっ」

伊織は、二本の木剣を持つて来て、武蔵の前におき、

「おねがい致します」

ていねいに頭を下げた。

武蔵の木剣は長い。

伊織の木剣は短い。

長い木剣は、青眼せいがんに、短い木剣も青眼せいがんに。いわゆる相青眼あいにあつて、師弟むかは対むかい合あつて  
いる。

「……………」

「……………」

草いより出いでて草へ沈むという武蔵野の陽は地平線ほのに仄ほのかな余映を残していた。草庵くさあんの後ろの杉林はもう暗ひぐらしかった。蝸ひぐらしの声を仰ぐと細い月がその梢こずえに忍しのび寄よっている。

「……………」

「……………」

稽古である。勿論、伊織は武蔵の構えを真似て、自分も構えているのであつた。打つてもいい、といわれているので、伊織は打つて行こうとするが、思うように体が動かさないのである。

「……………」

「眼を」と、武蔵がいう。

伊織は、眼を大きくした。武蔵がまたいう。

「眼を見ろ。……わしの眼をくわつと見るのだ」

「……………」

伊織は、懸命に、武蔵の眼をにらもうとする。

だが、武蔵の眼を見ると、自分のにらみは匆<sup>は</sup>ね退けられて、武蔵のにらみを、受けてしまふのである。

それでもなお、じつと泳<sup>こら</sup>えて、見つめていようとすると、頭が、自分の頭だか、ひとの頭だか分らなくなってしまう。頭ばかりでなく、手も脚も、五体すべて、うつつになってしまう。するとまた、

「眼を！」

と、注意される。

いつのまにか眼は、武蔵の眼の光から逃げるように、そわそわ動いているのだ。

はつと、それに心をあつめると、手に持っている木剣まで、伊織は忘れてしまふのだ。そして、短い木剣が、百貫の鉄の棒でもささえているように、だんだん重くなってくる。

「……………」

「眼。眼」

いいながら、武蔵が少しずつ前へすすんで見せる。

この時、伊織が、どうしても後へ退がりたがるので、それを幾十度も、きょうまで叱られて来た。——で、伊織は、武蔵に倣つて、前へ出ようと努めるのだったが、武蔵の眼を見ていては、到底、足の拇指も、にじり出せないのである。

退がれば、叱られる。進もうとするが、進めない。伊織の体が、くわつと熱くなる。人間の手につかまれた蟬の体みたいにくわつと熱くなる。

この時、

(何を！)

と、伊織の幼い精神の中にも、鏘然と、火花が発するのだった。

武蔵は、それを感じると、すぐ、彼の気を誘つて、

「来いっ」

いいながら、魚が交わすように、さつと、肩を落しながら身を退いてやるのだった。

伊織は、あつといいながら、飛びかかる。——武蔵の姿はもうそこにはいない。——一

転して振り向くと、自分のいたところに武蔵はいる。

そして、最初の時と同じ姿勢にまた、回るのであった。

「……………」

「……………」

いつかそこらは、しとどに夜露が綴っている。眉に似た月は、杉林の陰を離れ、そこから風の落ちてくるたびに、虫の音はみな息をひく。昼はさほどとも見えない秋草の花々も、顔を粧よそおつてみな霓裳羽衣げいしようういを舞うかのように戦そよぎ立つ。

「……………」

「よし、これまで」

武蔵が、木剣を下ろして、それを伊織の手へ渡した時、伊織の耳に初めて、裏の杉林のあたりに、人声が聞えた。

#### 四

「誰か来たな」

「また、泊めてくれと、旅の人が迷って来たんでしょ」

「行ってみろ」

「はい」

伊織は、裏へ廻って行った。

武蔵は竹縁に腰かけて、そこから見える武蔵野の夜をながめていた。もう穂芒ほすずきが穂をそろえ、草の波には秋の光がある。

「先生」

「旅人か」

「違いました。お客様です」

「……客？」

「北条新蔵様が」

「お。北条どのか」

「野道から来ればよいのに、杉林の中に迷いこんで、やっと分ったんですつて。馬を向うに繋つないで、裏に待っておりますが」

「この家には、裏も表もないが——此方こちらがよかろう、お連れ申してこい」



「はい」

家の横へ駈け廻つて、

「北条さん、先生はこちらにいます、こつちへお出でなさいまし」

伊織が呶鳴る。

「おう」

武蔵は、立つて迎え、すっかり、壮健になつた新蔵の姿にまず、よろこ欣びの眼をみはつた。

「ご無沙汰いたしました。怖らく人を避けてのお住居すまいとは察しながら、押しして突然、お邪さまたげ申しました。おゆるしのほどを」

新蔵のあいさつに、会釈しながら武蔵は、縁へ誘つて、

「ま。お掛け下さい」

「いただきます」

「よく分りましたな」

「ここのお住居で」

「されば。誰にも告げてないはずだが」

「ずしの厨子野耕介から聞いて承知いたしました。過日、耕介とお約束の観音様がお出来とかで、

伊織どのが、届けられたそうで……」

「ははあ、ではその折、伊織がここの住所ところを喋舌しゃべつたとみえる。……いやべつに、武蔵もまだ、人を避けて閑居するなどという年齢としではありませぬが、七十五日も身を潜めひそていたら、うるさい噂も冷めようし、従つてまた、耕介などに禍わざわいのかかる惧おそれもなくなろうかと思つたまでのこととござる」

「お詫び申さねばなりません」

と、新蔵は、頭を下げて――

「みな、てまえのことからご迷惑を」

「いや、お身みのことは、枝葉えだはに過ぎない。原因はもつと遠いところにあるのです。小次郎とこの武蔵との間に」

「その佐々木小次郎のために、またしても、小幡老先生の御子息、余五郎どのが、殺害ころされました」

「えつ、あの子息が」

「返り討ちです。わたくしが仆れたと聞かれたので、一途に、彼奴きやつを狙つて、かえつて落命らくめいなされたのでした」

「……止めたのに」

武蔵は、いつか小幡家の玄関に立った若い余五郎の姿を思いうかべ、可惜——と心のうちで、つぶやいた。

「しかし——御子息のお気もちも分るのです。門下はみな去り、かくいうてまえも仆れ、老先生も先頃病死なされました。——今は、というお気もちを抱いて、小次郎の家へ襲つてゆかれたものと察しられます」

「うむ。……まだわしの止め方が足らなかつた。……いや止めたのが、かえって、余五郎どのの壮気をあべこべに駆りたてたかも知れぬ。かえすがえすも惜しいことを」

「——で、実はわたくしが、小幡家の跡を継がねばならぬことになりました。余五郎どのほかに老先生のお血筋もないので、すでに絶家となるところ、父安房守あわのかみから柳生宗矩むねのり様へ実情を申しあげ、お骨折りで、師の家名だけは、養子の手続きを取って、残ることに相成りました。——しかし、未熟者のわたくしでは、かえって甲州流軍学の名家の名を、汚すようなものではないかと、そのみを懼おそれておりまする」

## 五

北条新蔵がことばの中に、父安房守といったのを、武蔵はふと、聞き咎めて、

「北条安房守どのと申せば、甲州流の小幡家と並んで、北条流の軍学の宗家ではありませぬか」

「そうです、祖先は遠州に興りました。祖父は小田原の北条氏綱、氏康の二代に仕え、父は、大御所家康公に見出され、ちようど三代、軍学をもつて、続いて来ております」

「その、軍学の家に生れた其許がどうして、小幡家の内弟子などになられていたのか」

「父の安房守にも、門人はあり、將軍家へも、軍学を御進講しておりますが、子には、何も教えませぬ。他家へ行つて、師事してこい、世間から苦勞を先に習んで来い——と申すような風の父でありますゆえ」

新蔵の物ごしや、そういう人がらのどこかに、そう聞けば、卑しくないところが見える。彼の父は、北条流のながれを汲む三代目安房守氏勝であろう。そうすると、その母は、小田原の北条氏康の女である。人品のどこかに、下賤でないものが、仄見えるのは、道理であつた。

「ついで、余談に紛れましたが——」

と、新蔵はそこで辞儀をし直し、

「こよい、急に、お訪ねいたしたのも、実は、父安房守のいいつけで、本来、父の方からお礼に伺うところであるが、折からちようど珍しいお客様も来あわせて、屋敷にお待ちいたしておるので、お迎えいたして来いと、いいつけられて参ったのでござりますが」

と、武蔵の顔いろを窺<sup>うかが</sup>っていた。

「はて？」

武蔵は、まだ彼のことばが、よく酌<sup>く</sup>めないらしく、

「珍しいお客が、其<sup>そのもと</sup>許のおやしきで拙者を待ちうけているから来い——という仰せかな？」

「そうです。恐縮ながら、てまえがご案内いたしますほどに」

「これから直ぐに？」

「はい」

「いったい、その客とは、誰<sup>どなた</sup>方でござるか。武蔵にはほとんど江戸には知己がないはずでござるが」

「御幼少からよくご存知のお方でござります」

「何、幼少から？」

愈、げ解せない。

(誰だろう?)

幼少からといえば懐かしい。本位田又八か、或は、竹山城の侍か、父の旧知か。

ひよつとしたら、お通ではあるまいか? ——などと思いつながらまた、その客とは一体

誰かと訊くと、新蔵は窮した容ようす子で、

「お連れして参るまで、名は明かさずにおれ。会って意外と欣び合ったほうが興があるから——と申されるのです。……お越しくださいましょうか」

と、いうのである。

武蔵は、頻りと、その分らぬ客に会ってみたくなつた。お通ではなからう。そう思いながら、また、心のすみで、

(お通かも知れないし)

と、思われたりする。

「参ろう」

武蔵は立って、

「伊織。先に寝め」

と、いった。

新蔵は、使いの面目が立ったと欣んで、早速、裏の杉林に繋いでおいた駒を縁先まで曳いて来た。

駒の鞍もあぶみも、秋草の露に、しとどに濡れていた。

## 六

「どうぞお召しを」

と、北条新蔵は、馬の口輪をつかんで、武蔵へすすめた。

武蔵は、敢て辞退せず、鞍あんじょう上じょうの人になつて、

「伊織、先に寝め、わしの戻りは、明日あすになるかも知れぬ」

伊織も、外まで出て、

「行つていらつしやいまし」

と、見送つた。

萩、芒すすぎの中を、馬上の武蔵と、口輪を持つ新蔵の影とが——やがて、いちめんな露の彼方へ沈んで行つた。

伊織は、ぽかんと、独りぼツちになつて、竹縁に腰かけていた。この草庵に、独り留守をすることも、珍しくはない。また、法典ヶ原の一ツ家にいた頃のことを思えば、淋しくもない。

(眼。……眼)

伊織は、稽古のたび、武蔵からいわれることが、頭にこびりついて、今もすぐ、銀河の空を仰ぎながら、ぽかんと、それを考えていた。

(どうしてだろ?)

なぜ、武蔵の眼に睨まれると、あの眼を見ていられなくなってしまうのか、伊織には分らなかつた。そして、少年の純な口惜しさが大人以上の一途となつて、それを幼い思念で解こうとしていた。

そのうちに、彼は、草庵の前の一本の樹に絡からんでいる野葡萄のぶどうの葉蔭から、キラと、自分のほうを睨んでいる二ツの眼に出会つた。

「……おや?」



生き物の眼である。それは師の武蔵が、木剣を持って自分を見る眼にも劣らない光を帯びている眼だった。

「……颯だな」

伊織は、野葡萄の実へよく来るむささびの顔を覚えている。あの琥珀色の眼が、草庵から映す燈のせいか、妖怪のそれのように、怖ろしくきらきら光っているのだった。

「……畜生め。おいらが意気地がないと思つて、むささびまでひとを睨んでやがるな。負けるか、おまえなどに」

伊織もまた負けない気になつて、むささびの眼を、きつく睨み返した。

彼が、竹縁から、両腕を張つて、息もせずに、そうしていると、何と、感じたものだろうか、依怙地で、猜疑ぶかくて、執念づよい小動物は逃げもせず、かえつて鋭い光をその眼に加え、じいっと、いつまでも、伊織の顔を見ているのである。

——負けるか！ 汝ごときに。

と、伊織も、見つめる。

長い間を、まったく呼吸もせず、そうしていたのであつたが、やがて、伊織の眼の力が、彼を、圧伏してしまつたものか、野葡萄の葉が、カサと揺れたせつなに、むささびの

影はどこへやら消えてしまった。

「ざまをみる」

伊織は、誇った。

彼はびつしより汗をかいていたが、何だか胸がせいせいして、こんど師の武蔵と立合う時には、今みたいに睨み返せばいいんだと思った。

彼は、藪すだれを下ろし、草庵の中で眠りについた。灯を消しても、藪すだれの隙間から、露明りが、青白く映さしている。

——彼自身では、横になると同時に、すぐ眠りにはいった気がしていたが、頭の中には、何か光る珠のような物が、ぎらぎらしていて、それがだんだん、むささびの顔のように、夢うつつの境に見えて来るのだった。

「……ウウム。……ううむ」

何度も彼は呻うめいた。

そのうちに、どうしても、その眼が夜具の裾すそのほうにいる気がしてならないので、むくり起き直つてみると、果たして、薄明むしろるい蓆むしろの上に、一匹の小動物が、くわつと自分を睨みつけているのだった。

「アツ、畜生つ」

枕元の刀を把とつて斬るつもりの伊織は、もんどり打つて、刀と共にまろ転び、さつと動いた。藪いすだれに、むささびの影が黒く止まっていた。

「畜生」

その藪すだれもズタズタに斬り、外の野葡萄も、乱離と斬つて、なお、野を見廻していた伊織は、二ツの眼の行方を、天の一角に見つけた。

それは、青い大きな星だった。

## 四賢一燈

一

どこかで、神楽かぐら笛ふえの音が、遠く聞えるようでもある。夜祭でもあるのか、篝かがりの火花が、森のこずえに、うす赤く映さしている。

馬でこそ、一刻とぎだったが、口輪を把とつて付いて来た北条新蔵には、この牛込まで、かな

りの道であつたに違いない。

「ここです」

あかぎざか  
赤城坂の下。

一方は赤城神社のひろい境内であり、坂の道を隔てて、それに劣らぬ広い土塀をめぐるした宅地がある。

土豪の門のような、その構えを見て、武蔵は鞍くらを下り、

「御大儀」

と、新蔵へ手綱を返す。

門は開いていた。

彼が曳き込む駒のひづめが夏かつかつ々と邸内へひびくと、待ちもうけていたらしく、紙燭ししよくを手にした侍たちが、

「お帰り」

と、出迎えて、彼の手からまた駒を受けとり、そして客の武蔵の先に立つて、

「ご案内いたしまする」

と、新蔵と共に樹々の間を縫つて、大玄関の前まで来る。

すでに、その式台には、左右に明るい燭台を備え、用人らしい者以下、安房守の召使がずらりと頭を下げていた。

「お待ちうけでござります。どうぞそのまま」

「——御免」

武蔵は、箱段を上って、家人の導くままに歩いた。

ここの家造りは変っていた。階段から階段へ、上へばかり登って行くのである。赤城坂の崖へ依って、櫓組みに幾部屋も、積み上げられてあるのであろう。

「しばらく、御休息を」

一室へ通して侍たちは退がってゆく。武蔵はそこへ坐るとすぐこの部屋の高い位置に気づいた。庭の崖先から真下に、江戸城の北の濠が見え、城壁をつつむ丘陵の森と対して、昼間はさぞと、ここからの展望も惚ばれるのであった。

「……………」

音もなく、火燈口のふすまが開く。

美しい小間使が、楚々と、彼の前に、菓子、茶、煙草などのもてなしを供え、無言のまま退がって行った。

その艶あでな帯や裾が、壁から出て壁へ吸われてゆくようにかかれると、後には、ほのかな香においだけが漂ただよって、ふと武蔵に、「女」なるものを、忘れていた胸から思い起させた。

しばらくすると、小姓を従つれた主あるじがそこへ現れた。新蔵の実父安房守氏うじかつ勝である。武蔵のすがたを見ると、非常に馴なれ々なれしく——いや自分の息子たちと同年輩なので、やはり子どものように見えるのであろうか、

「や。ようお越し」

と、厳いかめしい辞儀などを略して、小姓の設しつらえた敷物へ、武將らしくあぐらをくみ、

「——聞きけば伴せがれの新蔵が、いかい御恩になつたそうな。お越しを願うて、礼をいうなどは、逆礼じゃが、ゆるされい」

と、扇の先に、手を重ねて、高い頭ずをちよつと下げた。

「恐れ入る」

と、武蔵も、かろい会釈をして、安房守の年輩を見ると、もう前歯は三本も抜けているが、皮膚の艶つやは、老人ぎらいな負けん気をあらわし、少し白いのも交じつてはいるが、太い口髯くちひげを、左右へ生やして、その髯がまた、歯のない唇のまわりの梅干皺じわを巧くかくしているのであつた。

(子沢山な老人らしい。そのせいか、若い者にすぐ親しまれそうな人である)

武蔵はそう感じながら、彼もまた気軽にすぐ訊ねた。

「御息から伺えば、私を存じおるお客が御当家に來合せておられる由。いったい誰方どなたでござりますか？」

二

「今、お会わせする」

安房守は落着いて――

「よう其許そこもとを知っている人だ。――偶然にも、二人が二人とも、よく知っておる」

「では、客どのは、お二人とみえますな」

「どちらも、わしとは親しい友達、実はきよう御城内で出会ったのじゃ、そしてここへ立寄られて、よも山の話のうちに、新蔵が挨拶に出たことから、其許そこもとのうわさが始まった。――すると、客のひとりの方が、遽にわかに、久し振りで会いたいという。また一方も、会わせて欲しいという」

そんなことばかり述べたていて、安房守もなかなか客が何人であるか明かさないのであった。

だが、武蔵は、うすうす解けて来た心地がした。にっと、微笑みながら試みに、

「わかりました。宗彭しゅうほうたくあん沢庵たくあんのではございませぬか」

と、いつてみると、

「やあ、あてたわ」

果たして、安房守は、小膝を打って、

「よう、お察しじや。いかにも、きよう御城内で出会ったのは、その沢庵坊。おなつかしかろう」

「その後は、実に久しく、お目にかかりませぬ」

一人の客が、沢庵であることはこれで分った。だが、もう一名は誰か、思い当りもない。安房守は、案内に立って、

「ござれ」

と、部屋の外へ導いた。

そして外へ出ると、また、短い階段を上り、鉤かぎの手に曲っている廊下を、奥深くはいっ



て行つた。

その辺で、ふと、先にいた安房守の姿が見えなくなった。廻廊も階段もひどく暗いので、勝手を知らぬ武蔵の足が、遅れがちであつたせいもあるうが——それにしても、気の短い老人ではある。

「……?」

武蔵が足を止めて佇たたずんでいると、燈あかりの映さしている彼方あなたの座敷らしい内から、

「此方こなたじや」

と安房守がいう。

「お」

眼は答えたが、武蔵の足は、一步もそこから出ていない。

燈あかりの流れている縁側と、彼の立つている廊下との間を、約九尺ほどの闇が中断して、その暗い壁の露地に、武蔵はなにか好ましからぬ物の気配を感じたのである。

「なぜござらぬ? ——武蔵どの、此方こちらじやよ、早う渡られい」

安房守は、また呼んだ。

「……はい」

武蔵は、そう答えずにいられない所に立っている。だが、彼はやはり前へ歩まなかった。静かに、足を回めぐらして、十歩ばかり戻ると、庭先へ出る手洗ちようずぐち口がある。その沓脱くつぬぎ石にある木履ぼくりを穿はいて、庭づたいに廻めぐつて、安房守が呼んでいる座敷の前へ出て行つた。

「……あ。そこから」

と安房守は、何か、出し抜かれたような顔して、座敷の端から振り顧かえつた。武蔵は意にもかけず、

「……おう」

と、座敷の内へ呼びかけて、床の正面に坐っている沢庵へ、心の底から笑顔を向けた。

「おう」

と、同じように、沢庵も眼をみはり、席を立てて迎えながら、

「武蔵か」

と、これも懐かしそうに、待つていた、待つていた、と何度も繰返していうのだった。

さて、久しい邂逅かいこうである。二人とも、しばらくは、見飽くことなく、お互いの姿をただ眺め合うばかりであった。

しかも、場所も場所。

武蔵にとつては、なんだか、この世の対面とも思われぬ心地がするのだった。

「——まず、その後の事ども、わしから話そうか」

と沢庵はいう。

そういう沢庵は、昔ながらの、粗そまつな僧衣で、決して金きん襪ちんも、珠も、飾ってはいないが、どこか以前の彼とは、風貌もちがっているし、ことばの角かどもまろくなっている。

武蔵が、かつての野育ちから洗われて、昔ながらの一野人でも、どこかに温厚を加えて来たように、沢庵もようやく、その人間に、風格というようなものや、禪家の深みを備えて来たものであろう。

もつとも、武蔵とは、年齢としも十一も違う。やがて沢庵は、四十に近いのである。

「この前、お別れしたのは、京都であったのう。——京都以来か。あの折、わしは母の危篤たじまで、但馬へ帰った」

こう語り出して、

「母の喪に服すこと一年、まもなく旅へ出て、泉州の南宗寺へ身を寄せ、後には大徳寺へも参じ、また、光広卿などと共に、世の流転るてんをよそに、歌行脚よし、茶三昧まいよし、思わず数年を暮して来たが近頃、岸和田の城主、小出右京進こいでうきよのしんが下向に同道して、ぶらと、江戸の開けようを、ありのままいえば、見物に来たのじゃが……」

「ほ、では、近頃のお下向でござりましたか」

「右大臣家（秀忠）とは、大徳寺でも、二度ほど会っているし、大御所には、しばしば謁えつしておるが、つい江戸には、こん度が初めて。——して、お許もとには」

「私もつい、この夏の初め頃から——」

「だが、だいぶもう、関東でも、おぬしの名は、有名なものじゃの」

武蔵はぞつと、背すじに恥を覚えながら、

「悪名ばかり……」

と、俯うつむ向いた。

沢庵は、その体をしげしげ眺め入って、彼の「たけぞう」時代の姿を思い出しているらしかった。

「いや何、おぬしぐらいな年頃に、早くも、美名の高いのは、むしろどうか？ ……。」

悪名でも関かまうまい。不忠、不義、逆徒——そんな悪名でない限りは」  
と沢庵はいつて、

「さて、次には、そちらの修行——また、今の境遇など、訊きたいが」と、問い出した。

武蔵は、この数年のあらましを語つて、

「今もつて、未熟、不覚、いつまで、真の悟ごにゆう入ができたとも思われませぬ。——歩めば歩むほど、道は遠く深く、何やら、果てなき山を歩いている心地でございまする」

と、述懐した。

「む。そうなくては」

と、むしろ沢庵は、彼の嘆息を正直な声として、欣よろこびながら、

「まだ三十にならぬ身が、道のみのも字でも、分つたなどと高言するようじゃつたら、もうその人間の穂ほは止まりよ。十年先に生れながら、野僧なども、まだまだ、禅などと話しかけられると、背すじが寒い。——だがふしぎと、世間がこの煩惱ぼんのうじ児をつかまえて、法を聴聞したいの、教えを乞いたいのという。お許もとなど、買いかぶられていないだけに、わしよりは、素裸じゃな。法門に住んで怖いのは、人を、ややともすると、生仏かのように、

崇<sup>あが</sup>めこむことじやよ」

ふたりが、話に熱しているまに、いつか、膳や銚<sup>ちようし</sup>子<sup>こ</sup>などが、運ばれて来ていた。

「……おう、そうそう。安房どの、亭主役じや。もう一<sup>ひと</sup>方<sup>かた</sup>の客をお呼びして、武蔵どのへ、紹<sup>ひきあわ</sup>介<sup>かい</sup>せてもらいたいの」

と、沢庵が気づいていう。

膳は、四客分くばられてある。そしてここにいるのは、沢庵、安房守、武蔵と三名だけである。

姿の見えぬもう一名の客とは誰か？

武蔵には、もう分っていた。しかし彼は黙って控えていた。

#### 四

沢庵にそう催促されると、安房守は、少しあわてた顔いろで、

「お呼びするかの？」

と、ためらった。

そして、武蔵の方を見て、

「ちと、こちらの画策が、其許そこもとに見事、観みやぶられた形でな——。いささか、発案者のわしが、面目のうて」

と、意味ありげに、言い訳を先にする。

沢庵は、笑つて、

「敗れたからには、潔いさぎよう、兜かぶとをぬいで、打ち明けてしまつたがよろしかろう。——ほんの、座興たくらの企み、北条流の宗家じゃとて、そう権式を張つておるにも当るまいて」

と、いった。

「元より、わしの負けだ」

安房守は、そう呟つぶやいたが、まだ不審ないろをその顔に残して、自分の企みを割つて話すと共に、武蔵へ向つて、次のような質問をした。

「——実は、俵せがれの新蔵からも、沢庵どのからも、お身様の人間は、よう承つて、その上、お迎え申したことじゃが、失礼ながら、今の御修行がどれほどなものか、それは知るよしもなし、またお目にかかつて、言葉の上で何うよりも、まず先に、無言のうちに拝見いたそうかと——ちようど居合わせた仁じんも然るべきお方ゆえ、如何いかが？ と計つたところ、畏かしこま

つたと、すぐ呑みこまれて——真まことは、あれなる暗い廊下の壁露地かべろじに、そのお方が、刀の鯉口を切つて、お待ちしていたものでござる」

安房守は、今さら、人を試すようなことをした所為しよいを、自ら恥じているように、そこで、謝罪の意を示して——

「……それゆえに、実はわざと、てまえが此方こちらから、渡られい、渡られい、と幾度も、畏わなへ誘いざなうつもりで、お呼びしたのじやが。——それをあの時、お許には、どうして、後へ戻つて、庭さきから、此室ここの縁側へと、お廻りになられたのか？ ……それが伺いたいものじやて」

と、武蔵の顔を見入つていうのだった。

「……………」

武蔵は、ただ唇くちの辺に、にやにやと笑いを湛たえるのみで、どうとも、その解説を与えなかつた。

そこで、沢庵がいうには、

「いや、安房どの。そこが軍学者のお許と、剣の武蔵どのとの差じやな」

「はて、その差とは」



「いわば、智を基礎とする兵理ひょうりの学問と、心を神髓しんずいとする剣法の道との、勘の相違でござりましょう。——理からいえば、こう誘う者は、こう来なくてはならぬはずという軍学——。それを、肉眼にも、肌にも触れぬうちに、察知して、未然に、危地から身を避けよる剣の心機——」

「心機とは」

「禅機」

「……では、沢庵どのでも、そうしたことがおわかりになるかの」

「さあ、どうだか」

「何にしても、恐れ入りました。わけて、世の常の者ならば、何か、殺気を感じたにしても、度を失うか、または、覚えのある腕のほどを、そこで見しようという気になろうに——後へもどって、庭口から木履をはいてこれへお見えになった時は、実はこの安房あわも、胸がどきつと致しました」

「……………」

武蔵自身は、当然なことと、彼の感服にあまり興もない顔つきだった。むしろ、自分あるじもくろが主の目企みの裏を搔いたために、いつまでも、この座敷にはいり難にくくて、壁の外に佇たたずんで

いる者が気の毒になったので、

「どうぞ、たじまのかみ但馬守様に、お席へお着きくださるよう、これへ、お迎えを願います」と、いった。

「ええ」

これには、安房守ばかりか、沢庵もちよつと驚いて、

「どうして、但馬どのと、お許に分つておるのか」

と、訊ねた。

武蔵は、但馬守に、上座を譲るべく、席を退さがりながら、

「暗うはござりましたが、あの壁の陰にひそと澄んでいた剣気、またここのお顔ぶれとい、但馬様を措おいて、余人であろうとは思われませぬ」

と、答えた。

## 五

「むむ、御明察」

と、安房守が感嘆して、頷うなずいて見せると、沢庵も、

「その通り、但馬守どのに相違おざらぬ。あいや、物陰のお人、もう知れておる。これへござあつてはどうか」

室外へ向つていうと、そこで笑い声がひびいた。やがてはいつて来た柳生宗矩むねのりと武蔵とは、いうまでもなく、初対面であつた。

その前に、武蔵はすでに、末席に身を退ひいていた。但馬守のためには、床の間の席が開あけてあつたが、彼はそこへ坐らずに、武蔵の前へ来て、対等の挨拶をした。

「身が、又右衛門宗矩でござる、お見知りおき下さい」

武蔵もまた、

「初めて御意を得ます。作州の牢人、宮本武蔵と申す者、何分、この後は御指導を」

「先頃、家臣木村助九郎から、お言伝ことづても承つたが、折わるく、国許くにもとの父が大患での」

「石舟斎様には、その後の御容態、いかがにございまするか」

「年齢としが年齢でござれば、いつとも……」

と、語尾を消して、

「いや、あなたのことは、その父の手紙にも、また沢庵どのからも、よく聞いておりまし

た。——わけて、唯今のご要意には感じ入る。不作法には似たれども、かねがねこの身へ御所望の試合も、これで果したと申すもの。お気に障さわられな」

温厚な風が、武蔵の貧しい姿を和やわらかにつつむのであった。うわさに違わず、但馬守は聡明な達人であると、武蔵もすぐ感じた。

「おことば、痛み入りまする」

武蔵は自然、彼の挨拶以上に、身を低くして、そういわざるを得ない。

但馬守は、たとえ一万石でも、諸侯の列あに在る人である。その家格からいっても、遠く天てんぎょう慶年代から柳生ノ庄の豪族として知られ、しかも將軍家の師ではあり、一介の野人にすぎない武蔵とは、比較にならない権門の出である。

同席して、こう語りあうことすらが、すでに当時の人の觀念では破格であった。だが、ここには旗本学者の安房守もいるし、また、野僧の沢庵も、極めて、そういう隔てにはこだわらずにいるので、武蔵も救われた心地で坐っていた。

やがて、杯を持つ。

銚子を酌くみ交わす。

談笑がわく。

そこには、階級の差もない、年齢としのへだてもない。

武蔵は、思うに、これは自分への待遇ではなく、「道」の徳であり、「道」の交わりまじなるがために、許されているのである。

「そうだ」

沢庵は、何を思い出したか、杯を下におきながら、武蔵へ、

「お通つうはどうしておるの？ ……近頃」

と、ふいに訊ねだした。

その唐突な問いに、武蔵は、ちよつと顔を紅らめ、

「どうしておりますやら、その後はとんと……」

「とんと、知らんのか」

「はい」

「それは不憫ふびん。あれも、いつまで知らぬままにはしておけまい。其許そのもととしても」

宗矩がふと、

「お通とは、柳生谷の父の許にもいたことのあるあの女子おなごのことか」

と、いう。

「そうじゃ」

沢庵が代つて答えると——それならば今、甥の兵庫と共に、くにもと国許へ行つて、石舟齋のみどり看護をしてきている筈——と宗矩が話し、

「武蔵どのとは、そんな以前からの、お知り合いかと、眼をみはる。」

沢庵は、笑つた。

「お知り合いどころではおざらぬよ。はははは」

## 六

兵学家はいるが、兵学の話はしない。禅僧はいるが、禅のぜの字もいわない。劍の但馬守、劍の武蔵もいながら先刻さつきから、劍道のことなどは、おくびにも話題には上らないのである。

「武蔵どのには、ちと面映おもはゆかろうが」

と、沢庵が、かろく戯たわむれながら断つて、一頻り今、話の種にしていたのは、お通のこと

で、彼女の生い立ちやら、武蔵との間がらを打ち明けて、

「この男女ふたりは、いずれどうにかせねばならぬが、野僧の役には向かぬ。ひとつ御両所のお力添えを借りるのじやな」

と、それを基礎に、暗に武蔵の身の落着きを、但馬守と安房守へ計るような、沢庵の口うらであった。

ほかの雑談のうちにも、

「もう、武蔵どのも御年輩。一家を構えられてもよかろう」

と、但馬守もいい、安房守も共に、

「御修行も、これまで積めばもう十分——」

と、口を協あわせて、それとなく武蔵に、長く江戸へ留とどまることを最前からすすめているのであった。

但馬守の考えでは、今すぐではなくても、お通を柳生谷から呼び戻し、武蔵に娶めあわせて、江戸に一家を持たせたら、柳生、小野の二家に加えて、三派の劍宗が鼎てい立りつし、目ざましいこの道の隆盛期を、この新都府に興すであろうと思うのであった。

沢庵の気もちも、安房守の好意も、ほぼそうした考えに近かった。

殊に、安房守としては、子息の新蔵が受けた恩義に酬<sup>むく</sup>いるためにも、

(ぜひ、武蔵どのを将軍家御師範の列に御推挙したい)

と、いう考えを抱いていて、それは新蔵を使いによつて、武蔵をここへ呼び迎える前に、話し合っていたことなのである。

(一応、彼の人間を見て)

というので、話は決まっていなかったが、武蔵を試した但馬守には、もうそれも分つて  
いる筈だし、素姓、性格、修行の履歴などは、沢庵が保証するところであるから、これに  
も、誰も異議はない。

ただ、将軍家の師範に推挙する場合は、当然、旗本に列しなければならぬ。これには、  
三河以来の譜代者がたくさんいて、徳川家が、今日を為<sup>な</sup>してから新規に抱える者に対して  
は、とかく白眼視する傾きもあり、近頃、うるさい問題も起つているので——難といえ  
ばただそこに難関はある。

だが、これも沢庵が口添えしたり、両人の推挙があれば、通らないこともなかろう。

もう一つの困難と想像されるのは家柄のことである。武蔵は勿論、系図書などは持つて  
おるまい。



遠祖は赤松一族で、平田将監しょうげんの末裔まつえいとはあつても、確証はなし、徳川家との縁故もない。——あるのはむしろ反対に、無名の一戦士としてではあつたが、関ヶ原の折、槍一筋でも持つて、徳川の敵に立つたという不利な経歴ぐらいなものである。

だが、関ヶ原以後、たとえ敵方であつた牢人でも、ずいぶん召抱えられている例はある。また、家格のことも、小野治郎右衛門のごときは、伊勢松坂にかくれていた北畠家の一牢人であつたのが、拔擢ぼつてきされて、今では將軍家師範となつている前例もあるので、これとて案じるほどの障害にはならないかもしれない。

「——とにかく、推挙してみようが、ところが、かんじんな、其許そこもとの肚は、どうおぎるな」

沢庵が、こう話の結びへ持つて来て、武蔵に糺ただすと、

「身に過ぎたお心添えにござります。——なれどまだ、この身一つの埒らちすらあかぬ未熟者」  
いいかけると、

「いやいや。それゆえ、もう埒らちをつけてもよかろうと薦すすめるのじゃ。一家を構える気はないのか。お通もあのままにしておくつもりか」

沢庵は率直に問いつめた。

## 七

お通をどうするか。それを問われると、武蔵は、責められる心地がする。

(不運となるとも、わたしはわたしの心で)

とは、彼女が、沢庵へもいったことだし、武蔵にも常にいつていることばであつたが、ひとは許さない。

ひとは、男の責任とする。

女が、女自身の心でうごいて来ても、その結果のいいわるいは、男のせいにあると観<sup>み</sup>る。

——自分のせいではない。などとは武蔵も決して思ひはしなかつた。いや思いたくない心のほうが強い。やはり彼女は恋にひかれて来たと思う。そして、恋の罪は、ふたりが負うべきものと知っていた。

けれど、さて、

(彼女の身をどうするか)

と、なると、武蔵には、胸のうちだけでも、的確な答が出て来ない。

その根本には、

(まだ、一家など構えるのは、自分としては早過ぎる)

と、いう考えが、ひそ潜んでいるからであつた。入れば入るほど、深い、遠い、劍の道へのひたむきな欲求が、そのために少しも、まぎ紛れようともしないからであつた。

もつと、打割つていえば。

武蔵の胸には、法典ヶ原の開墾からこつち、劍に対するそれまでの考えが一変して、まったく従来の劍術者とは観点のちがつた方へ、彼の探求は向つて来ている。

將軍家の手をとつて、劍を教えるよりは土民百姓の手をとつて、治国の道を切り拓いてみたい。

征服の劍、殺人の劍は、かつての人々がふる揮つて、その行くところまで行きついている。

武蔵は、開墾地の土に親しんでから、その上へ行く劍を、道を——どんなにつきつめて考えてみたことか。

修める、護る、磨く——この生命と共に、人間がいまわ臨終の際まで、抱きしめていられるよ  
うな劍の道が立つとしたら——その道をもつて、世を治めることはできないか、民を安ん  
ぜしめることは不可能か。

それからは——彼は敢て、単なる劍技を好まなくなつた。

いつか伊織に手紙をもたせて、但馬守の門を窺うかがわせたのも、かつて、柳生の大宗を仆すべしとなして、石舟斎に挑んだような、浅い覇氣では決してなかつた。

で——武蔵の今の希望としては、將軍家の師範となるよりは、小藩でもよい、政機に参与してみたい。劍の持ち方を説くよりも、正しい政治を布しいてみたい。

嗤わらうだろう。

おそらく今までの劍術者が、彼の抱負を聞いたら、

(大それた！)

と、どうか、

(若いやつだ)

と、一笑するか、さもなければ、政治に触れたら人間は墮落する、殊に純潔を尊ぶ劍は曇つてしまう——と、彼を知る者なら、彼のために、惜しむであろう。

ここにいる三名の人々も、自分の真底をいえば皆、前のうちのどれか一つの言を為なすにちがいないと、武蔵にもそれは分つている。

で——武蔵は、ただ未熟を理由として、何度も、断つたが、

「まあ、よい」

沢庵は、簡単にいうし、安房守もまた、

「とにかく、悪いようにはいたさぬ。われわれに任しておかれい」

と、のみ込んでしまう。

更ふけてくる――

酒は尽きないが、燭しよくは時々、灯かきの暈かきをかぶった。そのたびに、北条新蔵は、灯かきを剪きりに来て、この話を耳に挟み、

「まことに、よいお話で。皆様の御推拳せきが通り、それが実現すれば、柳營武道のためにも、武蔵どののためにも、もう一夕、宴せきを張つて、お杯を挙げてもよろしゅうございますな」と、父へもいい、客たちへもいった。

えんじゆ  
槐えんじゆの門

——今朝、起きてみると、姿が見えないのである。

「朱実<sup>あけみ</sup>」

又八は、台所から首を出して、呼んでみた。

「……いねえぞ？」

小首を傾げる。

前から、予感がないでもなかったもので、押入を開けてみると、ここへ来てから作った、彼女の新しい衣裳もない。

又八は、顔いろを変え、すぐ土間の草履を穿<sup>は</sup>いて、外へ出た。

隣家の、井戸掘り親方の運平のうちも覗<sup>のぞ</sup>いてみたが、見えなかった。

又八は、いよいよあわて気味に、

「うちの朱実を知りませんかね……」

長屋から、往來の角まで、訊<sup>き</sup>き歩いて出て行った。

「見たよ、今朝<sup>けさ</sup>」

と、いう者がある。

「ア。炭屋のおかみさんですか、どこで見かけましたか」

「いつもと違つて、美麗きれいにおめかししているので、何処へといつたら、品川の親類までと  
いつていたが」

「え。品川へ」

「あつちに、身寄りがあるのかえ」

この界限かいがいでは、彼を亭主とおもひ、彼も亭主顔しているので、

「へい。……じゃあ、品川へ行つたのかもしれない」

追いかけて——というほど強い執着ではない。なんとなく、ほろ苦にがいのだ。舌打ちをし  
たいような忌々いまいましさがやたらに着きまとう。

「……勝手にしやがれ……」

唾つよをして、又八はつぶやいた。

そのくせ、ぶらんと放心した顔つきで、浜のほうへ歩いて行つた。浜は、芝浦街道を横  
ぎると、ついそこだつた。

漁師りようしの家がまばらにある。朝、朱実が飯を炊たいているまに、浜へ来て、網からこぼれ  
る五、六尾びきを葭よしに通し、提ひっさげて帰ると、ちようどお膳ぜんができていたものである。

その魚が、砂の上に、今朝もこぼれていた。まだ生きているのもある。だが、又八は拾

う気も出なかつた。

「どうなすつたえ、又さん」

背を打たれて、おや誰か、と振向いてみると、五十四、五の肥ふとり肉じしな町人が、豊かな福相めじわに、眼皺めじわをたたえて笑っていた。

「あ。表の質屋の旦那でしたか」

「朝すがすがはいいね、清すがすが々しくて」

「ええ」

「毎日、朝めし前には、こうして海辺をお徒歩ひろいかね。養生にはいちばんいいからな」

「どういたしまして、旦那のような御身分なら、歩くのも養生かもしれませんが……」

「顔いろがよくないな」

「へえ」

「どうかしたのかい」

「……………」

又八は、一握りの砂を拾って、風の中へ撒まいていた。

急場の算段をしに行くたびに、又八も朱実も、いつもこの質屋の旦那とは、店で顔を突



きあわせていた。

「そうだ。いつか折があつたらと思ひ思ひ、いい機しおもなく過ぎていたが、又さん、おまえ今日は、商あきないに行くのかい」

「なんですか。行つたつて行かなくなつて、西瓜や梨を売つていたんじや、どうせ埒らちはあきやしません」

「鱧きすを釣りに行かないか」

「旦那——」

と、又八は、悪いことでも詫わづびるように、頭を搔かいて、

「あつしやあ、釣はきらいですが」

「何さ、嫌いなら、釣らなくてもいい。——そこにあるのは家の持舟うちだが、ただ沖まで出てみるだけでも、気が晴はれるぜ。棹さおぐらひは突けるだろう」

「へい」

「まあおいだよ。おまえに、小千両も儲けさせてやろうという相談だ——。嫌かい」

芝浦の浜から五町も沖へ出たが、そこらもまだ、棹さおの立つほど浅かった。

「旦那、あつしに、金を儲けさせてやるつてえのは、一体どんなお話ですか」

「まあ、悠ゆるりと……」

と、質屋の旦那という男は、巨おおきな体を、ずしりと小舟の胴どうの間に坐まらせて、

「又さん、その釣竿ふなべりを舷へらから出しておくといいな」

「どう出しておくんで？」

「釣をしていると見えるようにさ。——海の上だつて、あの通り人目があらあな。用もない舟で、二人が首を突き合せていたら、疑うたがわれるだらうじゃないか」

「こうですか」

「む、む、それでいい……」

と、陶器すえものづく作りの煙管きせるに、上等なたばこをつめて、くゆらしながら、

「わしの肚はらをはなす前に、又八さんに訊きくが、おまえの住んでいる長屋の衆しゆうなどは、この奈良井屋ならいやをどう噂うわさしているね？」

「お宅のことですか」

「そう」

「質屋といえ、因業いんごうときまつているが、奈良井屋さんは、よく貸してくれる。旦那の大蔵様は、苦勞人でいらつしやると……」

「いや、そんな質屋稼業のことではなく、この奈良井屋の大蔵を」

「よいお人だ、お慈悲ぶかい旦那だと、まったく、お世辞ではなく皆申しておりますが」  
「わしが、信心家だということは誰もいわないか」

「さ、それだから、貧乏人を庇かばつて下さるのだろうと、そのことは、ご奇特なことだと、  
いわない人はございませぬ」

「奉行所の町方まちかたなどが、なにかわしについて、聞き歩いたようなこともないかね」

「そんなことは……どういたしまして、あるわけがない」

「はははは、つまらないことを訊くと思うだろうな。だが、実をいえば、この大蔵は、質  
業じゃない」

「へ……？」

「又八」

「へえ」

「金も小千両と纏まとまった大金となると、おまえの生涯にも、二度と、そんな運にぶつかるかどうかしれないぜ」

「……多分、それやあ、そうでございましょうね」

「つかまないか、ひとつ」

「何をで？」

「その大金の蔓つるを——だ」

「ど、どうするんです」

「おれに約束すればよい」

「へ……へい」

「するか」

「します」

「途中でことばを違たがえると首がないぞ。金は欲しかろうが、よく考えて返辞をしたがよい」

「何を——いったい——やるんですか？」

「井戸掘りだ。仕事は、造作もないこった」

「じゃあ、江戸城の中の」

大蔵は海を見まわした。

材木や伊豆石や、城しろふしん普請の用材をつんだ船が、誇張していえば、舳艫じくろくをつらねてといえるほど、江戸湾に、それぞれの藩旗を並べていた。

藤堂、有馬、加藤、伊達だて——中には細川家の船旗も見える。

「……勘がいいなあ、又八」

大蔵は、煙草たばこをつめ直して、

「その通り——ちようどおめえの隣家となりには、井戸掘り親方の運平が住んでいるし、その運平から、いつも井戸掘り人足になれとすすめられてもいるだろう。渡りに舟というものじやねえか」

「それだけでですか。……井戸掘りに行きさえすれば、何かあつしに、大金おおがねの授かることがあるんでしょうか」

「ま。……あわてるな、相談というなあ、それからだよ」

——晩に忍んで来い。前まえがね金として黄金三十枚、耳をそろえて渡してやろう。そう約して別れた。

又八の頭には、大蔵のいったその言葉しか、残っていない。

その代償として、

(やるか)

と大蔵から持ち出された条件に対しては、その内容を漠ばくぜん然と呑みこんで、

(やる！)

と、いったことだけしか後に覚えていないのである。しかし、そう答えた時、怪しく顫ふるえた唇には、まだ微かすかな痺しびれが残っている気はしているが——

何としても、又八にとつては、金が魅力であった。しかも途方もない額である。

年来の不運はその金だけで埋め合せがつく。そして生涯の生活を保証される。

いや彼の心には、そうした欲望そのものよりも、きょうまで、自分を小馬鹿にした世間の、ありとあらゆる奴らに、

(どうだ)

と、見返した顔をしてやりたい——とする、その魅惑のほうが強かったに違いない。

舟から陸へもどつて、長屋の家に帰つて、ごろんと、仰向けに寝ころんだ後も——頭の中を占めていたのは、金の魔夢であつた。

「そうだ、運平さんに、頼んでおかなくつちやあ……」

思いついて、隣家をのぞいたが、運平親方は出かけていない。

「じゃあ、晩にまた」

と、家へ歸つて来たが、熱病に憑かれたように、落着かなかつた。

それからやつと、彼は、海の上で質屋の大蔵に命じられたことを思い出して、ぶるぶると人もいない裏藪や表の露地を見まわした。

「いつたい、何だろ？ あの人……」

今になって、それを考えてみるのだった。それと共に、舟の上で大蔵から命じられたことを思い出してみた。

井戸掘り人足は、江戸城の中の、西の丸御新城とよぶ作事場へはいる。——と、そんなことまで大蔵は知つていて、

(機を窺つて、新將軍の秀忠を鉄砲で撃止める)

と、いうのであつた。

また。

それに使う短銃は、こちらの手で城内へ埋け込んでおく。

その場所は、紅葉山下の西の丸裏御門の内にある、樹齡數百年という巨きな槐の木の下とし、そこに、鉄砲も火縄も、併せて隠しておくから、掘り起して、密かに狙え——ともいった。

もちろん、作事場の監視は厳密にちがいない。奉行、目附などの警戒も元よりであろうが、秀忠將軍は若くて闊達だ。よく侍側を従えて普請場へも現れるという。そんな折、飛び道具なら瞬間で目的を果すことができよう。

咄嗟の騒ぎに乗じてすぐ火を放ち、西の丸の外濠へ飛びこめば、そこにはわれわれの仲間が救いの手を伸ばしているから、屹度助け出してやる——

ぼかん、と天井を見ながら又八は、大蔵から囁かれた声を、頭の中で繰返していた。肌がそそけ立ってくる。

あわてて、跳ね起きて、

「そうだ、とんでもないこった。今のうちに断つて来よう！」  
と、気がついたが——また、あの時、大蔵から、



(——こう話したからには、もしお前さんが、嫌だといえ、気の毒だが、おれの仲間が三日のうちに、きつと寝首をもらいにゆくぜ)

と、いわれたのが、その時の凄<sup>ひ</sup>い眼つきと共に、そこらに見えて来る気がした。

#### 四

西久保の辻を、高輪街道の方へ曲<sup>ま</sup>って、もう夜半<sup>よなか</sup>の海が、横丁の突き当りに見えている四つ角<sup>かど</sup>。

いつも見る質屋倉の壁を、横に仰いで、又八は露地の裏木戸をそつと叩いた。

「開<sup>あ</sup>いているよ」

中ですぐ誰かがいう。

「お……旦那で」

「又八さんか。よく来てくんすつた。倉へ行こう」

と、雨戸をはいって、廊下づたいに、すぐ土蔵の中へ導かれた。

「さ、坐るがいい」

あるじ  
主の大蔵は、蝟燭立を、長持の上において、肱をかけた。

「隣の運平親方のところへ行つてみたかね」

「へい」

「で——どうしたい？」

「承知してくれました」

「いつ、お城へ入れてくれるというのか」

「あさつて、新規の人足が、十人ばかりまたはいるそうで、その時に、連れて行つてやろうといつてくれました」

「じゃあ、その方は、きまつたんだな」

「町名主と、町内の五人組の衆が、請判を捺してくれさえすればいいことになっております」

「そうか。はははは。おれもこの春から、町名主のすすめで、強つてといわれて、その五人組のひとりになつてゐるんだ。……そのほうは心配なし通るぜ」

「へ。旦那も」

「何を驚いた顔しているんだ」

「べつに、驚いたわけじやございませんか」

「はははは、そうか、おれみたいな物騒な人間が町名主の下役をする、五人組衆にはいつているので呆れた<sup>あき</sup>というわけか。——金さえあれば、世間はおれみたいな人間でも、やれ奇特人の、慈悲ぶかいのと、こつちで嫌だといつても、そんな役付まで持ちこんで来るんだよ。——又さん、おめえも、金をつかむこつたぜ」

「へ、へい」

又八は、何かしら、急に胴ぶるいをしながら、早口を吃<sup>ども</sup>らせていった。

「や、やります！　だ、だから手付の金をおくんなさい」

「お待ち」

手燭と一緒に立つて、大蔵は倉の奥へ首を入れ、棚の手文庫から三十枚の黄金<sup>こがね</sup>を驚<sup>わし</sup>づかみに持って来た。

「入<sup>いれもの</sup>物を持っていくか」

「ございません」

「これにでも巻いて、胴巻へしつかり抱いてゆくがいい」  
そこらにあつた更紗<sup>せうさ</sup>の檻<sup>ぼろ</sup>を投げてやる。

——と、又八は数えもせず巻き込んで、

「何か、受取でも、書いて参りましょうか」

「受取？」

思わず笑つて、

「可愛らしい正直者だのう、おめえは。受取はいい。間違つたら、そこに持っている首を  
かた 抵当にもらいに行くばかりだ」

「じゃあ、旦那、これでお暇を……」

「待て待て。手付金てつけだけ受取つたからいいやで、忘れるなよ、きのう海の上で、いいつけ  
たことを」

「覚えております」

「御城内の西の丸裏御門の内——そこにあるおお巨えんきなしゆ槐の樹の下だぞ」

「鉄砲のことぞ？」

「そうだ。近いうちに、埋いけにやるからな」

「え。誰が埋くけにゆくんで」

又八は、解げせない顔して、眼をみはつた。

## 五

口入れ親方の運平の手から、町名主や五人組の請判付うけはんきで、身ひとつで御城内にはいるのさえ並たいていな厳しさではないのに、どうして外部から鉄砲や弾たまぐすり薬などを持ちこむことができるのか。

そして、約束どおり半月後に、西の丸裏御門の内の槐えんじゆの下へ、詭あつらえたように、埋いけておくなどということは、神業かみわざでもなければ、なしうる筈のものではない。

又八が、そう疑つて、まじまじと大蔵の面おもてを見つめていると、

「ま、その方のことは、おめえが氣もを揉もまなくてもいいから、おめえは、自分の役割だけをしっかりとやってくれ」

と、大蔵は深くいわず、

「まだ、ひき受けたものの、おめえも恟おどおど々おどしているだろうが、御城内へはいつてから、半月も働いているまには、自然、肚はらもすわつてくる」

「自分も、それを頼りに思っていますか」

「その肚が、ぐつと出来てから、うまく機会をつかむのだな」

「へい」

「それと、抜かりはあるめえが、今渡した金だ。仕遂げてしまふ後までは、どこか人目にかからぬ所へ隠しておいて、手をつけちやあならねえぞ。……とかく未然に事の破れるのはいつも金だからからの」

「それも考えておりますから、ご心配には及びません。……ですが旦那、首尾よく仕遂げた後で、後金はやれねえなんて苦情は出やしますまいね」

「ふ、ふ。……又さん、口幅つたいようだが、この奈良井屋の蔵には、金なんざ、千両箱であの通り重ねてある。眼の楽しみに眺めてゆくがいい」

手燭を揚げて、大蔵は埃だらけな蔵の隅を一巡した。

膳箱だの、鎧びつだの、何の箱か知れないものが雑然とみえた。又八は、よく見もしないで、

「お疑いしたわけじゃございませんが」

と、言い訳して、なお、半刻ばかりそこに密談していたが、やがて、やや元気になって、元の裏口からそつと帰って行った。

彼が、出て行くとすぐ、

「おい、朱実あけみ」

大蔵は、灯りのついている障子の内へ、顔を入れて、

「あの足ですぐ、金を埋いけに行つたろうよ。試しに尾つけて行つてみな」

湯殿口から、誰か出てゆく蹠音がした。見ると今朝、又八の家から姿を消したばかりの朱実ではないか。

近所の者に出会つて、

(品川の親類へゆく)

などといったのは、勿論、彼女のでたらめであつた。

質とりこぐさを抱えて、何度か、此処ここへ通ううちに、主あるじの大蔵の眼は、いつのまにか、朱実を擒とりこにして、朱実の今の境遇や心もちまで、聞いてしまった。

もつとも、彼と彼女とは、近頃初めて会つたわけではない。彼女が、中山道を江戸下りの女郎衆と共に、八王子の宿まで来た時、そこで泊り合せた旅籠はたごで、彼女は、城太郎の連れだという大蔵を見かけていたし、大蔵は二階から、陽気な一座の中に、朱実の姿を見て、薄ら覚えに記憶はしていたのである。

(女手がなくて、困っているところだが)

と、大蔵が謎をかけると、朱実は一も二もなくここへ逃げて来てしまった。

大蔵にとれば、その日から、朱実も役に立ち、又八も役に立つのであった。又八の始末はすると前からいつていたが、思い合すと、それが今日のこしらひかつた。

……何も知らない又八の影は、朱実の先を歩いて行つた。いちどわが家<sup>や</sup>へ戻つて鍬<sup>くわ</sup>を持ち出し、夜もすがら裏<sup>うら</sup>敷<sup>やぶ</sup>のあたりを歩いていたが、やがて、西久保の山へ上つて、その金を埋<sup>い</sup>けていた。

朱実が、それを見届けて来て、大蔵に告げると、大蔵はすぐ出て行つた。——そして彼が帰つて来たのは明け方だったが、掘出して来た金を、土蔵の中で調べてみると、三十枚渡した黄金が、どう数えても二枚不足しているので、損失でもしたように、頻りと小首をかき上げていた。

## さいかち坂



悲心の闇、ひも 悲母の迷い、風流を解すおばばではないが、秋の虫、萩すすき、前にはゆるい大川のながれ。——こうした中に身を置いては、彼女も、もののあわれに誘われぬ人間ではあり得ない。

「いるのか」

「誰じゃ」

「はんがわら 半瓦の部屋のもんだよ。葛飾かつしかから野菜物がたくさん届いたから、ばば殿のところへも頒わけてやれと親方が仰おほつしやるんで、一背ひとしよ負おい持もつて来た」

「いつも、お心深いこととう、弥次兵衛どのによるしゅういつて下されよ」

「どこへ置こうか」

「水口の流し元へ置いといて下され。後で仕舞うほどもに」

小机の側に灯を掲かかげて、彼女はこよいも筆を執とっている。

千部写経の悲願をたてた、例の父母ふもおんじゆうぎよう恩重ぎよう経ぎようの行を積たんでいるのであった。

この浜町の原の一軒家をかりうけて、昼間は、病人に灸きゆうてん点てんをして困くちすらぬながら糊くちす口の生なりわい業ぎもし、夜は静かに写経などして、ひとり暮しの気易さに馴なれてからは、持病

も久しく起らないし、この秋は、体もめつきり若返ったふうである。

「あ。ばば殿」

「なんじゃ」

「夕方、若い男が、訪ねて来なかつたかい」

「灸点のお客か」

「うんにや、それでもねえ様子だつたぜ、なんだか用ありげに、大工町の部屋へ来て、おばばの引越し先を教えてくださいといつて来たが」

「幾歳いくつぐらいな男かの」

「そうさ、二十七、八かな」

「面おもざしは」

「どつちかといえは丸っこい——そう背は高くなかつたな」

「ふム……」

「来なかつたかい、そんな人は」

「来ぬがの……」

「ばば殿のことばと、訛なまりもよく似ていたから、国くにもの者じゃねえかと思つたが。……じゃあ、

お寝み」

使いの男は、帰って行つた。

その躰音が去るとまた、やんでいた虫の音が、雨のようにこの家をつつんだ。

ばばは、筆を擱いて、灯の暈を見つめていた。

ふと、彼女が思ひだしたのは、燈火の占いであつた。

明けても暮れても戦ばかり多かつた彼女の娘時分には、戦に出ている夫とか、子とか、

兄弟とかの便りを知る術もないし、また、自分たちの明日も知れぬ運命に顛いて、よくそ

の頃の人々は「燈火占」というものを口にしていた。

宵ごとに点す灯を見て、灯の暈が華やかに映しているから吉事があるとか、灯の色に紫

色の陰があるから誰か死んだ知らせに違いないとか、灯が松葉のようにはぜたから待ち人

が来るとか……。

そうして、憂いたり、喜んだりした。

遠い娘時代の流行り事であるから、彼女ももうその占い方さえ忘れていた。けれど、こ

よいの灯は、なんとなく、彼女に吉い事があるように、そよめき立っている気がする。そ

う思うせい、ほつと、虹いろの暈まで映して美しい。

「もしや、又八じやないか」

そう思うともう、筆も持つていられない。彼女は恍惚と、愚かなる子の面影をえがいて、半刻ほんときや一刻は、身も世もわすれてそのみを考えていた。

がさつ——と裏口で何やら物音がして、ばばの、うつつを醒さました。また悪戯いたずらな鼬いたちでもはいつて、台所を荒しているのであろうと、ばばは、灯あかりを持って立つて行つた。

さつき、男が置いて行つた野菜物の上に、何か、手紙のような物が見える。何気なく披ひらいてみると二枚の黄金こがねがつつんであつて、その包み紙に、

まだ会う顔も候わず、もう半年ばかりの不孝、平におゆるしをと、そつと窓よりお別れを告げて、立ち去り申し候

又八

と書いてあつた。

二

草を蹴つて駈けて来た一人の殺伐さつぱつな風を帯びた侍が、

「浜田、違つたのか」

と、寄つて来るなり喘いでいった。

大川端に立つて、河原を見まわしていた方の侍は二人で、浜田とよばれたのは、まだ部屋住みらしい若者で、

「むむ……違つた」

と、呻きながら、なお、何者かを探すように、きらきらと眼をくばっていた。

「たしかに、彼奴とみえたが」

「いや船頭だった」

「船頭か」

「追いかけて来たところ、あの船へはいつてしもうた」

「でも、何ともしれぬぞ」

「いや調べてみた。まったく別人なのだ」

「はてな？」

と、こんどは三人して、河べりから浜町の原を振り向いて、

「夕方、大工町でちらと見かけて、確かに、この辺までは追いこんだものを。——逃足の

早い奴」

「どこへ失<sup>う</sup>せたか」

川波の音が、耳につく。

三名はなお佇<sup>たたず</sup>んだまま、各、闇の中へ耳目を放っていた。

——すると。

又八……。又八……。

少し間<sup>ま</sup>を措<sup>お</sup>いて再び、原の何処かを、同じ声がながれて行った。

「又よう……。又八っ……」

初めは、耳のせいと疑っていたのであろう。三名とも黙っていたが、急に、眼を見あわせて、

「や。又八と呼んでおるぞ」

「老<sup>としより</sup>婆の声だが」

「又八といえ、彼<sup>あいつ</sup>奴のことではないか」

「そうだ」

浜田という部屋住みの若者がまっ先に駈け出し、後の二人もつづいて駈けた。

声を目あてに、追いついたのは造作もなかった。先は、老婆の足である。それに、彼らの登音を聞くと、かえって、お杉ばばは、自分の方から駈け寄って、

「その中に、又八は居やらぬか」

と、呼びかけた。

三名は、ばばの両手、襟えりがみを、三方からつかんで、

「その又八を、われわれも追いついておるのだが、一体、そちは、何者だ」  
返辞の前に、

「何しやるツ」

と、ばばは、怒った魚のように、棘とげを立てて、彼らの手を振り握もぎ、

「おぬしらこそ、何者じや」

「われわれか、われわれは小野家の門人。これにおるのは、浜田寅之助とらのすけだ」

「小野とは何じや」

「將軍秀忠公の御師範、小野派一刀流の小野治郎右衛門様をしらぬのか」

「しらぬ」

「いっつ」

「待て待て、それよりは、このばばと、又八の縁故を先に聞け」

「わしは、又八の母じやが、それがどうぞしたか」

「では、おのれは、西瓜売りの又八の母か」

「何をほぎく。他国者と侮あなどつて、西瓜売りとはようもいやつたの。美作国吉野郷竹山

城のあるじ新免宗貫しんめんむねつらに仕えて郷地百貫ごうちひゃくくわん、歴乎れつきとした本位田家の子、わしはその母じやぞ」

耳もかさず、一人が、

「おい、面倒だ」

「どうする？」

「引かつつ昇かげ」

「人質ひとじちか」

「おふくろとあれば、取りに来ずにはいられまい」

それを聞くと、ばばは、骨ばった体を反そらして、蝦蛄しやこのように暴れた。



おもしろくないこと夥おびただしい。佐々木小次郎は、不平に腹ふくが膨ふくれていた。

寝ぐせがついて、近頃は寝てばかりいる。月の岬みさきの例の家だった。寝るといっても、寝るべき時刻に寝るようにして寝ているではなかった。

「物干竿ものほしざおも泣くだらう」

それを抱いて、仰向けに、畳へじかに転がりながら鬱うつぼつ勃ぼつたる独り言なのである。

「この名刀、この腕の持主が、五百石に足らぬ扶持ふちを取りかね、いつまでも懸かり人ゆうどで朽ちているとは」

そういつて、戛かつぜん然と、抱いていた物干竿の柄つかを鳴らし、

「盲め！」

と、寝なりに宙を薙なぎ払った。そして、大きな半円を描いた光はすぐ、鞘の内へ、生き物のように潜ひそみ込んでいた。

「あざやかでございますな」

と、縁先から、岩間家の仲間ちゆうげんが――

「居合のお稽古でございますか」

「ばかをいえ」

小次郎は、腹はらば這いに寝返つて、畳の上に落ちてゐる虫の体を、爪の先で、ぽんと縁先へ弾はじき飛ばした。

「こいつが、灯あかりへ飛びついて来てうるさいから、手討にしたのだ」

「ア、虫を」

仲ちゆうげん間は、それへ顔を近づけて、眼をまろくした。

蛾がに似た虫である。柔らかい羽も腹もきれいに斬れて半分になっていた。

「寝床とこを敷きに來たのか」

「いえ……つい申しおくれました。左様ではございません」

「なんだ」

「大工町の使いの者が、手紙をおいて歸つて行きました」

「手紙……どれ」

半はん瓦がわら 弥次兵衛からであつた。

この頃、そこにも余り関心がない。少しうるさくなつたのである。寝そべつたまま、彼はそれを披ひらいた。

ちよつと、彼の顔色がうごいて来た。——昨夜からお杉ばばの行方が知れなくなつたとある。そのためきようは一日中、部屋の者総出で探し、やつと、所在は知れたが、自分の手に及ばない所へ運ばれているので、ご相談申しあげる次第ともある。

それが分つたのは例の、どんじき屋の懸障子に、小次郎がいつぞや書いておいた文句を、誰か捺摺り消して、こう新しい墨で書かれてあつたからだという。

佐々木どのへ申す

又八の母預り置く者、

小野家内、浜田寅之助なり

——弥次兵衛の手紙にはそんなことまで細々書いてあつた。小次郎は読み終ると、

「……来たな」

眸を天井へ上げながら、口の裡でいつた。

きようまで、その小野家の内から、沙汰のないのが物足らない所であつた。二名のそれらしい侍を、どんじき屋の側の空地へ斬り捨てて来た時、公明正大にあそこの懸障子へ、自分の姓名を後日のため、書いて来たものを——と心待ちに思っていたところである。

——来たな。

と、つぶや呟いたのは、その反響がやつと出て来たほくそ笑みから思わず洩れた声なのだ。彼は、縁先へ立つて、夜空を見まわした。——雲はあるが、降りそうもない。それから間もなく。

高輪街道から駄賃馬に乗って行く小次郎の姿が見かけられる。駄賃馬はおそ晩く、大工町の半瓦の家に着いた。彼は弥次兵衛から委細を聞きとり、翌る日の肚をきめて、その夜はそのまま部屋へ泊つたらしかつた。

#### 四

以前は、みこがみてんぜん神子上典膳と称いっていたが、関ヶ原の戦後、秀忠將軍の陣旅で、劍法講話をしたのが機縁で、幕士に加えられ、江戸の神田山に宅地をもらつて、柳生家とならんで師範に列し、姓も、小野治郎じろうえもん右衛門忠明ただあきとかえたのである。

それが神田山の小野家だつた。神田山からは、富士がよく見えるし、近年、駿河衆が移住して来て、邸宅の地割がこの辺に当てられたので、この山一体を、近頃は駿河台するがだいとも呼び始めている。

「……はて。皂莢坂さいかちざかと聞いて来たが」

小次郎は、そこを登りきつて、佇たたずんだ。

きようは富士が見えない。

崖ぶちから深い谷を覗く。樹々の透すき間を涼そうそう々とゆく谷川が望まれる。お茶の水の流れだった。

「先生、ちよつと、探してきますから、ここにお待ちなすつて」

と、道案内について来た半瓦の若い者は、ひとりで何処かへ駈けて行った。しばらくすると戻つて来て、

「分りました」

と告げる。

「何処だ」

「やつぱり、今、登つて来た坂の途中ですぜ」

「そんな屋敷があつたかな」

「將軍家の御指南と聞いていたんで、あつしやあ、柳生様のような屋敷かとばかり思つていたら、さつき右側に見えた汚い古屋敷の土塀がそうなんです。——あそこは以前、何と

かいう馬奉行うまぶぎようがいた屋敷だと思つてたが」

「そうだろう。柳生は一万一千五百石。小野家はただの三百石だからの」

「そんなに違うんで」

「腕はちがわないが、家柄がちがう。——柳生などはその点では、先祖が七分ぶ禄を取つて  
いるようなものだ」

「ここです……」

と、足を止めて指さすのを眺め、

「なるほど、ここか」

と、小次郎も立ち止まって、まずその家構えをしばらくながめていた。

馬奉行時代の古い土塀が、坂の途中から裏山の敷やぶへかけて繞めぐらしてある。地内はかなり  
広いらしく扉とのない門から奥をのぞくと、母屋の裏に道場らしい、木の色の新しい建て増  
しの棟もみえる。

「帰つていい」道案内の男へいつて——

「晩までに、お杉ばばの身を受取つて帰らなかつたら、小次郎も骨になつたと思え——と、  
弥次兵衛へ伝えておけ」

「へい」

男は、振り顧りながら、皂莢坂の下へ、駈け降りて行った。

柳生へは、近づいて行つても無駄である。彼を負かして、彼の名声を、自分の名声へ転じようと計つても、柳生は、お止流である。將軍家流である、という口実があるから、  
 牢人剣士のそんな手に乗るようなことはしない。

それに反して、小野家の方は、無禄者でも、強豪の聞え高い者でも、随分、相手にとつて試合にも応じると聞いている。どう転んでも三百石だ。柳生の大<sup>だい</sup>名<sup>みやう</sup>剣法とちがって、  
 殺伐なる実戦的鍛錬を、ここでは目標としているからでもある。

——しかし、小野家へ行つて、小野派一刀流を蹂躪<sup>じゆうりん</sup>して来たという者があつたという例も聞かない。

世上では、柳生家を、尊敬している。けれど、強いのは、小野だと誰もいう。

小次郎は、江戸へ出て来て、それらの事情を知つた時から、この皂莢坂の門を、

(何日かは)

と、密かに眼をつけていたのである。

——その門は今、彼の眼の前にあつた。

ただあき はつきょう しまつ  
忠明 癡 狂 始末

一

浜田寅之助とらのすけは、三河出身の——いわゆる御譜代衆ごふだいしゅうで、小祿でも今の江戸では、それだけで、随分大きな顔をしていられる幕士のひとりだった。

今——

何気なく、道場わきの支度部屋と呼んでいる部屋の窓から、外を眺めていた同門の沼田かじゅうろう荷十郎というのが、あつと、その寅之助の姿を眼でさがし求め、

「来たぞ、来たぞ」

小声で——ひどく早口に告げながら、道場の真ん中にいた彼のそばへ、飛んで来て、

「浜田。参つたらしいぞ。——参つたらしいぞ」

と、もう一度、告げた。

浜田は答えない。



ちようど木剣をかまえて、ひとりの後輩へ稽古をつけていた折であるから——それを背中で聞いたまま、

「いいか！」

と、正面へ向って、こう攻撃の予告を与え、木剣を真っ直に伸ばして、だ、だ、だ——と床を鳴らして押して行つた。

そして道場の北の隅まで、その勢いのまま行つたと思うと、どたつと、後輩はもんどり打って、木剣は刎ね飛ばされていた。

寅之助は、初めて振向いて、

「沼田。来たとは、佐々木小次郎がか？」

「そうだ。今、門をはいって来た……。すぐ見えるぞここへ」

「思いのほか、早くやつて来たな。やはり、人質が利いたとみえる」

「だが、どうする」

「何が」

「誰が出て、どう挨拶してやるかだ。充分、備えておらぬと、一人でここへやつて来るほど剛胆な奴——不意に何をやり出すかもしれぬ」

「道場の真ん中へ通して坐らせるがいい。挨拶はおれがする。各は周りにいて黙って控えておれ」

「ウム。これだけいれば……」

と、荷十郎は居合わす人々を見まわした。

亀井兵助、根来八九郎、伊藤孫兵衛、などの顔は、彼を気強くさせるものだった。

そのほか、すべてで二十人足らずの同輩がここにはいる。

その同輩たちは皆、先頃からの経緯もよく知っていた。どんじき屋の空地で斬り捨てにされた二人の侍のうち的一名は、ここにいる浜田寅之助の兄に当る者だった。

寅之助の兄というのは、ろくでもない人間らしく、この道場でも評判のよくない男だった。それにしても、佐々木小次郎に対する怒りは、小野派の者として、

(捨て措けない)

程度に昂まつていた。

殊に浜田寅之助は、小野治郎右衛門が手塩にかけた門下中でも、前記の亀井、根来、伊藤などと共に、皐菟坂の驍将といわれている一人でもあるし、——小次郎がどんじき屋の障子に不遜な文句を書いて、公衆へ曝してあるというのに——なおも、寅之助があ

れを放ほつておくようでは、小野派一刀流の名誉にも関かわると共に、陰ながら力りんでいた場合でもあった。

そこへ、昨夜ゆうべのこと。

寅之助や荷十郎などが、何処からか、ひとりの老婆を担かぎこんで来て、実は云々しかじかという話に、彼の同輩や後輩たちは、手を打つて、

(それは、よい人質ひとじちを取つて来られた。小次郎の方からやつて来るように仕向けられたのは、さすがに兵法の御巧者ごこうしやというもの。——参つたらさんざんに叩きのめしたあげく、鼻を削そいで、神田川の樹に曝さらし者にしてやるのだな)

と、いい合つた。そして、だが来るか、来まいか、などといふ今朝も、賭事かけごとのように噂うわしていたものだった。

## 二

大部分の者が、来まい、と予想していた佐々木小次郎が今、荷十郎の言によれば、  
——門をはいつて来た。

と、あるので、

「何。来たと？」

居合せた人々の顔は、白木の板みたいこわに硬こわばった。

浜田寅之助以下、広い道場の床を、しんと開けて、固かたず唾つよをのんでいた。

今に、道場の玄関へ、声がかかるか、今に小次郎の訪れがあるかと、待ち構えていたのである。

「……おい、荷十郎」

「うむ？」

「門をはいつて来るところを確かに見たのか」

「見た」

「じゃあもう、これへ見えそうなものじゃないか」

「来んなあ」

「……遅すぎる」

「はて」

「人違いじゃなかったのか」

「そんなことはない」

厳いかめしく床を占めて、坐っていた面々も、ふと、間拍子が抜けて、自分の緊張に、自分で力負けを覚えかけて来た頃、ぱたぱたと、草履の音が、控ひかえ部屋べやの窓の外に止まって、

「御一同」

と、外から、同輩の顔が一つ、背伸びして、中を覗きこんだ。

「おう、何だ」

「待つていても、佐々木小次郎は、こっちへは見えぬぞ」

「おかしいな。でも、荷十郎がたつた今、門内へ通つて来たのを見たといっておるに」

「ところが、彼は、お住居すまいの方へ行つてしまつて、どう奥へ刺しを通じたものか、お座敷で、大先生と話しこんでいるのだ」

「えつ。大先生と」

これには先ず浜田寅之助が、どぎもを抜かれた顔つきであつた。

兄が斬り捨てにされたことも、原因を洗うと、ろくでもない兄の不行跡が必然に出て来るにきまつている。——で、師の小野治郎右衛門などには、体ていよく告げてあつたし、ゆうべ、浜町の原から、老婆を人質に取つて来たなどということも、勿論、告げていないので

ある。

「おい、ほんとか」

「誰が、嘘をいう。——嘘だと思つたら、裏山の方へ廻つて、庭ごしに、大先生のお書斎の次の客間をのぞいてみたまえ」

「弱つたなあ」

しかし他の者は、彼の嘆息をむしろ齒がゆく思つた。小次郎が直接、師の治郎右衛門の住居の方へ行つたにしろ——また、どんな詭弁を弄して自分たちの師を籠絡しようと考えているにしろ——堂々と対決して、彼の非を挙げ、こつちへ引き摺つて来てしまえばいいではないか。

「何を、弱ることがある。おれたちが行つて、様子を見て来てやる」

道場の入口から、亀井兵助と根来八九郎のふたりが、草履を穿いて出ようとした時であつた。

住居の方から、何事か起つたように、顔いろを変えてこつちへ駈けて来る娘がある。——アアお光どの、と呟いてふたりは足を止め、道場の内にいた人々も、どやどやとそこへ出て、彼女のけたたましい声を、騒ぐ胸へ、受け取つた。

「皆さん、来てください。伯父様がお客様と、刃やいばを抜き合せて、外へ出ました。——庭先で、斬り合いを始めています」

## 三

お光は治郎右衛門忠明ただあきの姪めいである。彼が一刀流の伝をうけた師の弥五郎一刀齋めかけの妾めかけの子をひき取って育てたのだ——と陰という者もある。或は、そうかも知れないし、嘘かも知れなかった。

それはとにかく、色白で愛くるしい娘だった。

おどろくと、そのお光が、

「伯父様が、お客様と、なにか大きな声をし合っていたかと思うと、庭で斬り合っているんです。——伯父様のことから、万一のことはないでしょうが」

告げるのを、皆まで聞かず、亀井、浜田、根来、伊藤などの主立おもった者が、

「やっ?」

と、いったのみで、何を問うまもなく、駈けて行つた。

道場と住居とは離れていて、住居の庭へ行くには垣と竹編戸たけあみどの中門がある。一つ塀の中でありながら、こういう風に、棟が離れていたり、垣が結ゆつてあるのは、城郭生活の慣ならわしで、少し大きな侍の家となれば、これになお、手飼の者の長屋だの何だのが、加わっているのである。

「ヤ、閉まっている」

「何、開かない？」

ひしめいた門人達の力は、門の竹編戸を押し破ってしまった。そして、裏山を抱いだいている約四百坪ほどの山芝の平庭ひらにわを見ると、師の小野治郎右衛門忠明は、日頃、持ち馴なれている行平ゆきひらの刀を抜いて、青眼せいがん——というよりはやや高目にひたと構え、かなり距離を措おいてその向うには、紛まじう方かたなき佐々木小次郎が、物干竿の大剣を、傲然ごうぜん、頭上に振上げたまま眼まなこきよを炬きのようにしているのだった。

——はっと、その有様に誰も一瞬、眼が眩くらんだ。そして四百坪からある芝庭の広さと、張りつめた空気は、線でも引いたように、他の人間を近づけしめなかつた。

「……………」

慌あわてて来てはみたものの、門人たちは、遠く見守みまって、毛穴をそそけ立てているしかな



かった。

立ち合っている双者の間には、断じて、横あいから、手出しを許さないほど、森厳なものがある。無知蒙昧もつまいな者ならそれへ、石でも唾つばでも投げられるかもしれないが、武士ものぶの家に生れて、童学からその教養に躰しづけられて来た者には――

「ああ」

と、真剣の莊嚴に打たれ、そのせつなには愛憎も忘れて、ただ、見まもる気になるのだ。つた。

けれど、それは一瞬の、忘失的作用にすぎない。すぐ感情は全身さをくわつと醒さまして、

「うぬ」

「お助太刀」

とばかり二、三の者が小次郎の後ろへ駈け追ろうとした。

すると忠明が、

「寄るなっ！」

と、叱咤した。

声も常とはちがう。霜のような気を帯びていた。

「……あ」

と、乗り出した身を退きながら彼らはふたたび、徒らに、手出しのならない刀の鯉口を握りしめているしかなかった。

——けれども、少しでも、忠明の方に、敗色が兆したら、耳をふさいで、四方から小次郎をつつみ、一氣にずたずたに斬ってしまうつもりでいるらしい——めいめいのその眼ざしであった。

#### 四

治郎右衛門忠明は、まだ壮健だった。五十四、五歳であろう。髪は黒く、見たところはなお四十代にしか見えない。

小づくりであるが、腰の据りがよく、四肢は伸び伸びして、全体の姿態に、少しの硬化もなく、また、小柄にも見えなかった。

小次郎は、それに対して、まだ一太刀も下していない。いや、下し得ないというべきであらう。

だが、忠明は、彼を劍の先に立たせて見たせつなに、

(これは——)

と、悔り難いものを感じ、密かに、身をひき緊めながら、

(善鬼の再来か！)

とさえ思った。

善鬼——そうだ善鬼以来、こんな当るべからざる覇氣を持った劍には久しく遇つたことがない。

その善鬼というのは、彼がまだ青年の頃、名も神子上典膳みこがみてんぜんといつて、伊藤弥五郎一刀齋に從ついて修行に歩あいていた当時——同じ師に付ついていた恐こわい兄弟子あにでしだった。

善鬼は、桑名くわなの船頭の子で、さしたる教養もなかったが、強いことは天性だった。後には、一刀齋でさえ、善鬼の劍を、如何いかんともすることができなかつた。

師が老いてゆくと、善鬼はその師を見下みくだして、一刀流は自己の獨創であるように誇稱した。一刀齋は、善鬼の劍が、磨かれて行くほど、社会に害があつて、益のない成行きをながめ、

(われ生涯の誤りは、善鬼にあり)

と嘆いた程だった。また、

（善鬼を見ると、おのれの内にある悪いものを、みな持つて、躍っている化け物にみえる。——だから善鬼を見ると、自分という人間までが忌わしくなる）

と、述懐したこともある。

しかし、典膳にとつては、その善鬼があつたため、よい鑑かがみにもなり、励みにもなつて、遂に、下総しもうさの小金ヶ原で、彼と試合して、彼を斬つた。そして、一刀齋から、一刀流の印可伝巻を授けられたのであつた。

——今。

佐々木小次郎を見て、彼はその善鬼を思い出したのである。善鬼には、強さはあつても、教養はなかつたが、小次郎には、それへ加うるに、当世的な鋭智があり、侍の教養も身につけていて、それは彼の剣に、渾然こんぜんと一つのものになつている。

それを、じつと見て、

（自分の敵するところではない）

と忠明はすぐ潔いさぎよく心のうちで、思い捨てた。

柳生に対してだつて、彼は決して卑下ひげは抱いていない。今でも但馬守宗矩たじまのかみむねのりの実力な

どは、そう高く買っていない彼ではあるが——今日という今日——佐々木小次郎という一介の若者に対して、彼は正直に、

（おれも、そろそろ時代に取り残されて来たかな？）

と、劍の老いを覚えたのである。

誰かのいった言葉に、

先人ヲ追イ越スハ易クヤス

後人ニ超サレザルハ難シカタ

と、あるが、その語を、今ほど痛切に覚えたことはない。柳生とならび称されて、一流の全盛を見、老来やや人生に安んじているまに、社会の後からはもう、こんな麒麟きりんじ児が生れつつあったのか——と、大きな驚きをもって、小次郎を見たものであった。

## 五

双方とも、固着したまま、姿勢の上にはいつまでも、なんの変化も見えなかった。だが、小次郎も忠明も、肉体の内には、怖ろしい生命力を消耗していた。

その生理的変化は、鬢をつたう汗となり、鼻腔の喘ぎとなり、青白な顔色となつて、今にも、寄るかと思えながら、劍と劍は、依然、最初の姿勢を持続していた。

「——降つたつ」

忠明が叫んだのである。——叫びながら、刀と身を、そのまま、ぱつと後ろへ退いたのであつた。

けれど、その言葉が、待てつ、といったように響いたのかも知れなかつた。小次郎の体は、とたんに、動物的な跳躍を空にえがいていた。それと共に、揮り伸ばした物干竿は、忠明の姿を真二つに斬り下げたかのような旋風を起し、忠明の鬚のもとどりは、それを交わすに急なため、逆立つて、ぷつりと、元結の根が切れた。

——しかし、忠明が、肩を落しながら匆ね上げた行平の切先もまた、小次郎の袂を、五寸ほど切り飛ばしていた。

「理不尽！」

憤りは、門人たちの顔に、燃えあがつた。

忠明が今、

(降つた)

と、いったことばで、双方の立合が、喧嘩ではなく、試合であつたことは明白である。だのに、小次郎は、むしろその隙を得たりとなして、無下に斬つて行つた。彼が、そういう不徳を敢てして出た以上、もう、手を拱こまねいている必要はない。——咄嗟とつさに、その気持が一致して、行動へ移つて行つたのである。

「うっ——」

「うごくな」

小次郎へ向つて、すべてが、どつと駈なだけ雪崩れた。小次郎は、鶉うが飛ぶように、身の位置をかえていた。巨おおきな棗なつめの樹が平庭ひらにわの一方にあつた。その幹の陰から姿をなかば見せて、おそろしくよく動く眼をぎらぎらさせながら呶鳴うなつた。

「勝負。見たか」

——俺が勝つたぞという名乗りをあげたつもりであろう。忠明は彼方で、

「見えた」

と、答えた。そして門人達へ向い、

「ひかえろ」

と、叱つた。

刀を鞘さやにおさめて、書齋の縁へもどると、彼は腰かけて、

「お光」

と、姪めいを呼び、

「もどりを結あげてくれい」

と、ぱらぱらになった髪の毛を撫で上げていた。

お光に髪を上げさせているうちに、初めてほんとの喘あえぎが出て来たらしく、忠明の胸は、汗に光っていた。

「ざつとでよい」

そして、お光を、肩越しに見て、

「あちらにいるお若い客へ、おすすぎを上げて、元の座敷へ、お上げ申しておけ」

「はい」

忠明はしかし——その客間へは通らなかつた。草履はを穿はいて、門人たちの面おもてを見まわし、

「道場の方へ集まれ」  
と、命じて、自身が先に彼方へ歩いて行った。



## 六

どうした理わけなのか？

門人らには、分らないのである。第一、かりそめにも、師の治郎右衛門忠明が、小次郎に対して降まいつたとさげんだのが、心外であった。

（あの一声は、きようまでの無敵小野派一刀流の誇りを、一敗地にお汚けがしなすってしまったものだ）

と、青白おもてな面のうちに、怒りに似た涙をのんで、忠明の顔を、睨ねめつけている門人もあった。

道場へあつまれ——と呼ばれてそこに坐つた者は、約二十名ばかり、三列になって、板の間に、ぎしつと固くなって、坐っていた。

治郎右衛門は、上座の——一段高い席に、寂じやくと坐くって、それらの顔をしばらく眺めていた。

「さてさて、わしも年とし齡とを老とつたものである。つかの間に、時代も遷うつってゆくな」

これが、やがて忠明の唇くちから流れた——最初のことばだった。

「過去、自分の来た道を顧みてみると、師の弥五郎一刀齋様に仕えて、善鬼を仆した頃が、自分の剣が最高の冴えを示した時であり、この江戸表に、門戸をもって、將軍家の御師範の端に列し、世間から無敵一刀流とか、皂莢坂の小野衆とか、いわれ始めた頃はすでに、わし自身の剣としては、降りへ来ている頃だった」

「……………」

門人達は、師が、何をいおうとしているのか、まだその意が酌めなかつた。

で、肅とはしているが、その面には、不平だの、疑惑だの、思い思いな感情がまだ動いていた。

「思うに」

忠明は、そこから遽に声を張つて、今までの伏し目な眼を、大きく見ひらいた。

「——これは誰にもある人間の通有性だ。安息に伴うてくる初老の兆しだ。この間に、時代は移つてゆく。後輩は先輩を乗りこえてゆく。若い、次の者が新しい道を拓き開いてゆく。——それでいいのだ。世の中は転変の間に進んでいるから。——だが、剣法では、それを許さぬ。老いのない道が剣の道でなければならぬ」

「……………」

「たとえば、伊藤弥五郎先生。今はもう、生きて在おわすや否や、その御消息だにないが、小金ヶ原でわしが善鬼を斬った折、即座に、一刀流の印いんじゆ授をこの身にゆるし給い、入道して、そのまま山へはいられてしまわれた。そしてなお、劍、禪、生、死、の道を探つて、大悟の峰に、分け登ろうと遊ばすお口吻くちぶりが見えた。——それにひきかえて、この治郎右衛門忠明は、早くも、老いの兆きざしを現し、きょうのような敗れをとったこと、師弥五郎先生に對しても、なんの顔かんばんせがあるうか。……きょうまでのわしが生活くらしなどは、思わざるも甚だしいものであつた」

堪らなくなつたように、

「せ、先生つ」

根来八九郎が、床ゆかからいった。

「敗れたと仰つしやいますが、あのような若年者じゃくねんものに、敗れる先生ではないことを、われわれは日頃から信じております。今日のごことは、なにか、ご事情でもあつたのではござりませぬか」

「事情? ……」

一笑の下もとに、かぶりを振つて、

「かりそめにも、真劍と真劍との立合、その間に、なんで、微塵の情実など許そう。——若年者といわれたが、その若年者なるがために、わしは彼に負けたとは思わない、移っている時代に負けたと思うのだ」

「と、とは申せ」

「まあ待て」

静かに、根来のことばを抑え、また、大勢の同じ顔いろを見直して、

「手早く話そう。あちらには、佐々木殿もお待ちせしてある。——そこで各へ、改めて、申し渡す儀と、わしの希望を聞いてもらいたい」

## 七

——自分はきよう限り、道場から身を退こうと思う。世間からも身を隠す。隠居ではない。山中へ行つて、弥五郎入道一刀齋先生の分け入った道の後をたずねる心で、なお、晩成の大悟を期したい。

「これが一つの希望」

と、治郎右衛門忠明は、弟子一同へ告げるのだった。

——弟子の中の伊藤孫兵衛は甥おいにあたる者ゆえ、一子忠世ただなりの後見をたのむ。幕府へは、その由を願ひ出で、自分のことは、出家遁世しゅっけとんせいと届けておいてもらいたい。

「これが二つの頼みである」

といった。

次に、この機会に、いい渡しておくこととして、

「わしは、若輩の佐々木殿に負けたということ、そう恨みには思わぬ。しかし、彼の如き新進が他から出ているのに、まだ小野の道場から一名の駿しゅんそく足も出ておらぬということとは、ふかく恥じる。——これというのも、わが門下には、御譜代ごふだいの幕士が多く、ややもすると、御威勢について思い上がり、いささかの修行をもつて、すぐ無敵一刀流などと誇称して、よい気になっているせいと思う」

「あいや、先生。お言葉中にはござりますが、決して、われわれとても、そのような驕きょう慢まん怠惰たいだにのみ目を暮しているわけでは——」

と、亀井兵助かめいひょうすけが、その時、声ふるわせて、弟子の座からいうと、

「だまれ」

と、忠明は、彼の顔を睨まえて師の座から一言にあつ圧して、

「弟子の怠りは、師の怠りである。わしはわし自身をざんき慚愧して、自ら裁いておるのだ。――

――お身らすべての者が、きょうだ驕惰だとは申さぬ。だが、この中には、そうした者もおると見た。その悪風を一掃して、小野の道場は、正しい、若々しい、時代のなえどこ苗床とならねばならぬ。――そうせねば、忠明が身を退ひいて、改革いたす意味もないことになるう」

沈痛な彼の誠意は、ようやく弟子たちの肺腑はいふへ沁しみ透とおつてきた。

弟子の座に居ならぶ者は、みな頭かしらを垂れて、師の言葉を噛みしめながら、自分たちも反省した。

「浜田」

忠明が、やがていった。

浜田寅之助は、ふいに、名を指されて、

「はっ」

と、師の顔を見た。

忠明の眼は、彼をきつと睨ねめすえていた。

寅之助は、その眼に、さし俯うつむ向むいてしまった。

「立て！」

「はい」

「立て」

「は……」

「寅之助、立たんかつ」

と、忠明は、声を励ました。

三列に坐つてゐる弟子たちの中から、寅之助だけ直立した。彼の友達や後輩たちは、忠明の心を測りかねて、しんとしていた。

「寅之助、おぬしを、今日限り、破門する。——将来、心を改め、修行を励み、兵法の旨にかなう人間となつた時は、また、師弟として会う日もあろう。——去れつ」

「せ、先生つ。理由を仰つしやつてください。拙者には、破門される覚えはございませぬが」

「兵法の道を穿きちがえているゆえに、覚えがないと思うのであろう。——他日よく、胸に手を当てて考えてみれば分つてくる」

「仰つしやつて下さい！ 仰つしやつて下さい！ 仰せなくば、寅之助、この席を去るわ

けには参りません」

昂たかぶつた顔に、青すじを太らせて、彼はまたいい猛たけつた。

## 八

「——然らば、いおう」

と、忠明は、やむなく、寅之助に破門をいい渡した理由を、その寅之助を立たせておいたまま、一同へも、釈明した。

「卑怯ひきょう——は武士の最も蔑さげすむ行為である。また、兵法の上でも固く誠いましめておる。卑怯の振舞ある時は破門に処す、というのはこの道場の鉄則であった。——然るに、浜田寅之助は、兄を討たれながらいたずらに日を過ごし、しかも当の佐々木小次郎には、雪辱をなそうともせず、又八とやらいう西瓜売り風情の男を仇とつけ廻し、その者の老母を人質に取つて来て、この邸内に押しこめておくなどとは——いやしくも武士のすることといえようか」

「いや、それも、小次郎をこれへ誘おびき寄せる手段でいたしたのです」



寅之助が、躍起となつて、抗弁しかけると、

「さ。それが卑怯と申すものじや。小次郎を討たんとするなら、なぜ自身、小次郎の住居すまいへゆくなり、果し状をつけて、堂々と、名乗りかけんか」

「……そ、それも、考えぬではござりませんでしたか」

「考える？ 何をその期ごに、猶予などを！ ——衆を恃たのんで、佐々木どのをこれへ誘おびき寄せ、打たんとした卑劣は、お身の今いったことばで白白しておるではないか。——それにひきかえ、佐々木小次郎なる者の態度、見上げたものだど、わしは思う」

「……………」

「——单身わしの前へ来て、卑劣な弟子など、相手に取るに足らぬ。弟子の非行は師の非行、立ち合えとばかり、挑いどみかかった」

弟子の座の人々は皆、さては、最前のいきさつは、そうした動機から起つたことかと——  
——うなず頷うなずいた気色けしきだった。

忠明は言葉をつづけ、

「しかも、ああして、真剣と真剣とで、立ち向つてみた結果は、この治郎右衛門自身の中にも明らかに、恥はずべき非が見出された。わしはその非に対して慎まんで降まいつたといつた」

「……………」

「寅之助、これでもそちは、自身を省かえりみて、恥なき兵法者と思うか」

「……恐れ入りました」

「去れ——」

「去ります」

寅之助は、俯うつむ向むいたまま、道場の床を、十歩ほど退さがって、両手をつかえて坐り直した。

「先生にも、御健勝に」

「うむ……」

「御一同にも」

と、さすがに、声が暗くなつて、後はかすかに、別れの挨拶をした。そして、悄すじすじ々、

どこへか立ち去つた。

「——わしも、世間を去る」

と、忠明も立つた。弟子の座の中に嗚咽おえつがきこえた。男泣きに泣きだした者もあるのである。

愁然と、うなだれ合っている弟子達の頭を、ながめて、

「励めよ、皆」

忠明は、最後の——師の言として——師愛をこめていった。

「なにを憂い悲しむのか。おまえ達は、おまえ達の時代を、この道場へ、澆刺はつらつと迎え取らねばならぬ。明日からは謙虚になつて、一層、精を出して磨き合えよ」

## 九

やがて——道場の方から住居すまいへ戻つて、その客間へ姿を見せた忠明は、

「失礼いたしました」

と、最前から控えている小次郎へ向つて、こう中座を詫わびながら静かに坐つた。

その顔いろには、なんの動揺も読まれなかつた。平常と變つた点はなかつた。

「さて——」

と、忠明は口を切つて、

「門人の浜田寅之助は、ただ今あちらで、破門をいい渡し、向後こうご、心を改めて修行いたすよう、よく訓誡くんがいしておきました。——で、寅之助が人質に隠しおいた老婆の身も、当然、

お帰しする考えであるが、其許そこもとがすぐお連れ下さるか、それとも改めて、当方からお送り申そうか」

いうと、小次郎は、

「満足でござる。拙者がすぐ連れて戻ります」

今にもと、立ちかけた。

「そうきまれば——何もかも水に流して、一献こんお酌くみ交わして戴きたい。——光みつつ、光みつつ」と、手をたたいて、

「酒の支度を」

と、姪めいへいいつけた。

さっきの真剣の立合で、小次郎はありつただけの精神を消耗してしまったような気がしていた。その後、独りでぼつねんとここに待たされていた時間も長かったので、すぐ帰りがかったが、臆おそんでいるように思われてもと、腰をすえて、

「では、おもてなしに甘えようか」

と、杯を取った。

そして小次郎は飽くまで、忠明を眼下に見た。心で眼下に見ながら、口では、——自分

も今日まで随分、達人にも出会ったが、まだ貴公のごとき剣に對したことはない。さすがに、一刀流の小野と音に響いただけのものはある——などと褒めて、おのれの優越感を、その上へもつと高めた。

若い、強い、覇氣満々だ。酒を飲んでみても、敵わないことを、忠明は体に感じてくる。けれど、大人の忠明から彼を見ると、自分には敵わないとは思いつつ、いかにも危ない強さ、若さであると思つた。

(この素質を、よく磨けば、天下の風はこの人に靡こう。——だが、悪くすれば、善鬼になる惧れがある)

そう惜しんで、忠明は、

(弟子ならば)

と、その忠言を喉まで出しかけたが、遂に、何もいわなかつた。

そして小次郎の言葉には、なんでも、謙虚に笑つて答えた。

雑談のうちに、武蔵のうわさなども出た。

——近頃、忠明が聞いたこととして、北条安房守や僧沢庵の推薦で、また新たに、宮本武蔵という無名の一劍士が、抜擢されて師範の席に加わるかも知れない——という話など

も、彼が洩らした。

「……ほ？」

小次郎は、そういったきりだったが、心の安からぬ顔いろをした。

西陽にしびを見て、彼が、

「帰る」

と、いい出したので、忠明は、姪のお光にいいつけ、

「お老婆としよりの手をひいて、坂の下までお送りして行け」

と、いった。

恬淡てんたんで、真直まっすぐで、柳生のように、政客との交わりなどもなく、素朴な武士かたぎ気質の人

で通つて来た治郎右衛門忠明の姿が、江戸から見えなくなつたのは、それから間もなくであつた。

(将軍家にも、直々じきじき、近づける身なのに——)

(うまく勤め上げれば、いくらでも出世の先があつたものを)

と、彼の遁世とんせいを怪訝いぶかしがつた世人は、やがて佐々木小次郎に彼が負けたということ誇大に取つて、

(小野治郎右衛門忠明は、発狂したのだそうだと、いい伝えた。

## もののあわれ

### 一

恐かった。ゆうべの風は。

——あんな暴風雨<sup>あらし</sup>つて、生れて初めてだと、武蔵<sup>むさし</sup>さえいった。

二十十日、二十二十日。

そういうものの恐<sup>こわ</sup>さに善処<sup>ぜんじょ</sup>することは、武蔵よりも細心<sup>さいしん</sup>で、よく知っている伊織は、ゆうべの暴<sup>あ</sup>れが襲<sup>や</sup>つて来る前に、屋根へ登<sup>のぼ</sup>つて、竹の押しぶちを結びつけたり、石を乗せたりしておいたが、その屋根なども、夜半<sup>よなか</sup>に吹き飛ばされてしまつて、今朝見ても、どこへ行<sup>い</sup>つたか、屋根の行方がわからない。

「アアもう書<sup>ほん</sup>も読めなくなつちやつた」

崖の肌やら、草叢くさむらやら、あちこちに、ベトベトになって散らばっている書の残骸ほんをながめて、伊織は、何より未練つぶやそうに呟つぶやいた。

だが、被害は、書ほんどころではない。彼と武蔵の住む家さえ、跡形もなく潰ひしがれて、手のつけようもない有様。

それを他よそに、武蔵はどこへ行ったやら、

(火を焚たいておけ)

と、いつて出たまま、まだ戻つて来なかつた。

「——暢気のんきだなあ。稲田の出水でみずを見物に行くなんて」

伊織は、火を焚たき始めていた。その薪まきは、わが家の床ゆかや板壁である。

「今夜、寝る家だった」

と、考えると、煙が眼に沁みてくる。火は出来た。

武蔵は戻らない。

ふと見ると、そこらに、まだ割れていない栗くりの実みだの、風に叩たたきつけられて死んでいる小鳥の死骸しかいなどが眼についた。

朝飯に、伊織は、そんな物を火あぶに焙あぶつて喰くべていた。



午頃、武蔵は帰って来た。それから半刻ほどして、また後から、蓑笠を着た村の人々がそろって来た。そして、お蔭で早く出水が退いたとか、病人が喜んでいたりとか、かわるがわる礼をのべ出した。——いつも後始末では自分自分のことにばかり懸って、争いになるのだが、今度は仰つしやる通り、村人が一致して、誰の田だの、彼の家だのという分け隔てなく、力を協せてやることにしたので、案外早く被害の取返しもつきそうである——などとも、中の老百姓が、礼を繰返していった。

「あ。そんな指図をしに行ったのか」

と、伊織は、やつと、武蔵が夜明けに出て行った用事が分った。

伊織は、武蔵のためにも、死んだ小鳥の毛をむしって焙っておいたが、

「食い物は、わしらがとくに、幾らでもあるで」

と、甘い物、辛い物、何くれとなく運んで来る。

伊織の好きな餅もあった。

死んだ鳥の肉は不味かった。自分だけの身を考えて、あわててそんな死肉で腹を膨らましてしまった伊織は後悔した。——自分を捨てて、大勢のために考えれば、食物はひとりで、誰かが与えてくれるのだということを感じた。

「家も、こんどは、潰れぬように、わしらの手で建ってあげますでの、今夜は、わしが所へ来て寝さつしやい」

と、年老った百姓は、いつてくれる。

その老百姓の家は、この近村ではいちばん旧かった。ゆうべずぶ濡れになった、肌着や着物を乾かしてもらい、武蔵と伊織は、その晩、老百姓の家のお客になって寝た。

「……おや？」

寝てからのことである。

伊織は、隣に眠っている、武蔵の方へ、寝返りを打って、小声でいった。

「先生」

「……ウむ？」

「遠くの方で、神楽囃子が聞えませんか——遠くの方で」

「聞えるようでもあり、聞えないようでもあるが」

「変だな。こんな大暴風雨の後に、神楽の音が聞えるなんて？」

「……………」

寝息はするが、武蔵の返辞はしないので、伊織もいつか、眠ってしまった。

## 二一

朝になつて、

「先生。秩父の三峰神社つて、そう遠くないんだつてね」

「ここからでは、幾らもあるまいな」

「連れて行つておくんさい。——お詣りに」

なにを思い出したのか、今朝、急に伊織がいい出したのである。

わけを訊いてみると、彼は、ゆうべの神樂の音が気になつて、起きるとすぐ、此家の老百姓に聞いてみたところ、ここから近い阿佐ヶ谷村には、遠い昔から、阿佐ヶ谷神樂といつて、古い神樂師の家があり、毎月、三峰神社の月祭りには、その家で調べを奏せて、秩父へ出張つてゆくので、それが聞えて来たのだらうという説明だつた。

音楽と舞踊との、壮大なものといえば、伊織は、神樂よりしか知らないのである。しかも三峰神社のそれは、日本三大神樂の一つといわれるほど、古典なものであると聞かされたので、彼は、矢も楯もなく、秩父へ行つてみたくなつた。

「よう、よう、先生」

と、伊織は甘えて、

「どうせ、まだ草庵は、五日や六日じゃ出来ないし……」

と、強請<sup>せが</sup>んだ。

伊織にこう甘えられると、武蔵はふと、別れている城太郎を思い出した。

城太郎を従<sup>つ</sup>れていると、城太郎はよく甘える。ねだったり、だだをこねたり、わがままをいつて手古<sup>てこ</sup>ずらせたり——

だが、伊織には、滅多にそんなことがない。——時にはふと武蔵の方で、そのよそよそしさが淋しくなるほど、伊織にはその子供ッぽさがない。

城太郎とは、生<sup>お</sup>い立ちや、性格の相違もあるうが、多くは、それは武蔵が躰<sup>しっ</sup>けたものであった。弟子と師とのけじめを、伊織には、厳然とつけてきたからである。——放<sup>ほ</sup>つたらかしたただ連れていた城太郎の結果に鑑<sup>かん</sup>みて、伊織には意識的に、師であろうとしているためだった。

その伊織が、めずらしく、甘えてねだると、武蔵は、

「……ウム」

生返辞して、考えてはいたが、

「よし、連れて行つてつかわそう」

伊織は雀躍こいわじりして、

「天気もいいし」

と、もうおとといの晩の空への怨みも忘れ果てて、俄かに、この家の老百姓やに告げて、  
弁当を乞い草鞋わらじをもらい、

「さあ、参りましょう」

と、武蔵うながを促す。

老百姓は、お帰りの頃までに、草庵を建て直しておきます——といつて送り出すし、野の分の後の水たまりは、まだ所々小さい湖水を作っているが、おとといの暴れあは嘘のように、  
鴟もずは低く飛び、空の碧あおさは、高く澄みきっている。

三峰の例祭は、三日間とある。こう決まって出て来ればもう、伊織とてそう急ぎもしない。間に合わぬ心配はないからである。

田無たなしの宿しゆくの草旅籠くさはたごに、その日は早く泊り、翌日あしたの道も、まだ武蔵野の原だった。  
入間川いるまがわの水は三倍にもなっていた。平常の土橋は川の中に取残され、何の用もなさな

くなっている。附近の住民達は、田舟を出したり、杭を打ち込んだりして、両岸から橋を継ぎ足していた。

その通れるようになるのを待っている間に、伊織は、

「あらあら、鏝やじりがたくさん落ちていら。兜かぶとの鉢金もあるし。——先生、この辺は、戦場いくさばの跡ですね、屹度きつと」

出水に洗われた川砂を掘りちらして、伊織は、鑄さびがたな刀の折れだの、性の分らぬ古金ふるがねなど拾って興がっていたが、そのうちに、

「あ……？ 人間の骨」

と、手をすくめた。

### 三

武蔵は、それを見て、

「伊織。その白骨を、ここへ持って来い」

いちど、知らずに手には触れたが、伊織は、もう手を出す気になれない顔して、

「先生、どうするんです」

「人の踏まない所へ埋けてあげるのだ」

「だって、一つや二つじゃありませんよ」

「橋の修繕つくろいが出来る間の仕事にはちょうどよい。あるだけ拾い集めて――」

と、河原の背を見まわし、

「あの龍胆りんどうの花のあたりへ埋けておきなさい」

「鍬くわがないのに」

「その折れ刀で掘れ」

「はい」

伊織はまず穴を掘った。

そして、拾い集めた鍬やじりかぶとも兜かぶとの古金も、白骨と一緒に、みな埋いけ終おって、

「これでようございませうか」

「ム。石をのせておけ。それでよい。――よい供養いづころになった」

「先生、この辺に合戦いづころのあったのは、何日頃いつころのことなんでしょう」

「忘れたか。おまえは書ほんで読んでいるはずだがな」

「忘れました」

「太平記の中にある、元弘三年と正平七年の両度の合戦——新田義貞、義宗、義興などの一族と、足利尊氏あしかがたかうじの大軍とが、しのぎを削り合うた小手指ヶ原こてさしというのは、この辺りだ」

「あ、小手指ヶ原の合戦のあった所か、そんなら何度も、先生の話を聞いているから知っています」

「では」

と、日頃の伊織の勉学力を試すように、武蔵は、

「その折、宗良親王むねながが。——東あずまの方に久しく侍りて、ひたすら武士もののふの道にたずさわりつつ、征東將軍の宣旨せんじなど下されしも、思いのほかなるよう<sup>に</sup>覚えて詠み侍りし——と仰せられて、お詠みになった歌、伊織は憶おぼえておるかな」

「います」

伊織はすぐいって、空の碧さに、一羽の鳥影が、漂ただよってゆくのを仰ぎながら、

「——思いきや、手も触れざりしあずさ弓、起き臥ふし我が身馴れむものとは」

武蔵は、ニコとして、



「そうだ、では。——同じ頃、武蔵の国に打ち越えて、小手指ヶ原という所に——という  
詞書ことばがきの条にある、同じ親王のお歌は？」

「……？」

「忘れたな」

伊織は負けん気に、

「待つて、待つて」

と、首を振った。

そして思い出すと、こんどはひとり勝手かってなふしをつけて朗詠した。

君のため

世のため

なにか惜しからむ

すててかひある

いのちなりせば

「……でしよう。先生」

「意味は」

「わかつてます」

「どう？ わかつてるか」

「いわなくなつて、このお歌がわからなかつたら、武士もののぶでも日本人でもないでしょ」

「ウム。……だが伊織。それならお前はなぜ、白骨を持ったその手を、さも汚いように、先刻いしとから忌いしとつているのか」

「だつて白骨は、先生だつていい気持じやないでしょ」

「この古戦場の白骨は皆、宗むねなが良親王のお歌に泣いて、親王のお歌どおりに奮戦して死んだ人々だつた。——そうした武士たちの——土中の白骨が、眼には見えぬが、今もなお、礎いしずえとなつていればこそ、この国はこんなにも平和に、何千年の豊秋とよあきが護られているのではないか」

「ア、そうですね」

「たまたまの戦乱があつても、それはおとといの暴風雨あらしのようなもので、国土そのものにはびくとも変化がない。それには、今生きている人々の力も大いにあるが、土中の白骨たちの恩も忘れては済むまいぞ」

## 四

武蔵の一語一語に、伊織は、何度もこつくりした。

「わかりました。じゃあ、今埋いけた白骨あに、お花を供あげて、お辞儀して来ましようか」  
武蔵は、笑って、

「何も、お辞儀はせんでもよい。心のうちに、今申したことさえ刻きざんでおれば」

「……だけど」

伊織はやはり気が済まなくなつたらしい。秋草の花を折り集めて石の前に捧あげた。そして掌てを合せかけたが、ふと振り顧かつて、

「先生」

と呼び、何か、ためらい顔にいい出した。

「——この土の中の白骨が、ほんとに、先生が今いったような、忠臣ならいいけれど、もし足利尊たかうじ氏うぢの方の兵だつたら、つまらないなあ。掌てなんか合あせてやるのは癪しやくにさわる——」

この返辞には、武蔵も窮きつした。伊織は、武蔵の明答がない限りは、滅多に掌てをあわせな

い様子を示して、彼の顔をながめながら、その答えを待っていた。

——ふと、きりぎりすの声が耳につく。仰ぐと昼間の薄い月が目にとまった。しかし、伊織に与える返辞はなかなか見つからない。

やがて、武蔵はいった。

「十悪五逆の徒にも、仏の道では救いがある。即心即菩提——菩提に眼をひらけば、悪逆の徒も仏もこれを許し給うとある。——まして白骨となつてしまえばもう」

「じゃあ、忠臣も逆賊も、死ねば同じものになるんですか」

「ちがう」

と、厳しく、そこに句点を打って、

「そう早合点してはならぬ。武士は名を尊ぶ。名を汚した武士には、末世末代、救いはない」

「そんならなぜ仏様は、悪人も忠臣も、同じみたいなのをいうんですか」

「人間の本性そのものは皆、もともと、同じ物なのだ。けれど、名利や慾望に眼がくらんで、逆徒となり、乱賊となるもある。——それも憎まず、仏が即心即仏をすすめ、菩提の眼をひらけよかすと、千万の経をもつて説かれているが、それもこれも、生きているうち

のこと。——死んでは救いの手にすがれぬ。死してはすべて空くうしかない」

「ああそうか」

分つたような顔して、伊織は、急に声に弾はずみを出していった。

「——だけど、武士さむらいは、そうじゃないでしょ。死んでも、空くうではないでしょう」

「どうして」

「名が残るもの」

「うむ！」

「悪い名を残せば悪い名が、——いい名を残せばいい名が」

「むむ」

「白骨になってもね」

「……けれど」

と武蔵は、彼の純真な知識慾が、一途に呑みこんでしまうことを懼おそれて、それにまたいい足した。

「だが、その武士さむらいにはまた、もののあわれというものがある。もののあわれを知らぬ武士は、月も花もない荒野に似ている。ただ強いのみでは、おとといの晩の暴風雨あらしも同じだ。

——劍、劍、劍、と明け暮れそれを道とする身はなおさらのこと、もののあわれ——慈悲の心がなくてはならぬ」

伊織はもう黙っている。

黙って——土中の白骨に花を供え、素直に掌をあわせていた。

撥はち

一

秩父ちちぶの麓ふもとから、蟻ありのように絶えまなく、山道を登って行く小さい人影は、いちど、山を繞る密雲の中へ皆、隠れてしまう。

その人々はやがて、山頂の三峰みつみね権現ごんげんへ出て来た。そしてそこから空を仰ぐと、空には一朶だの雲もなかった。

ここは坂東四箇国またに跨がって、雲取くもとり、白石、妙法ヶ岳の三山に通う天上の町だった。神社仏閣の堂塔門もんおく屋の一郭につづいて、その別当だの社家だの、土産物屋だの、参詣茶

屋だの、門前町があるし——まばらに散ってはいるが、神領百姓の家数いえかずも七十戸からあるという。

「ア。大太鼓おおだいこが鳴った」

ゆうべから、武蔵と共に、別当の観音院かんのんいんに泊っていた伊織は——食べかけていた赤飯こわめをあわてて掻っ込んで、

「先生、もう始まりましたよ」

と、捨てるように箸を置く。

「神樂かぐらか」

「見に行きましょう」

「ゆうべ見たから、わしはもういい。一人で行って来い」

「だって、ゆうべは、二座しかやらなかったでしょ」

「まあ、急がんでもいい。今夜は夜徹よとおしあるというから」

なるほど、武蔵の木皿には、まだ赤飯こわめしが食べ残っていた。それがなくなったら行くというに違いない。伊織は、そう思い直して神妙に、

「今夜も、星が出ますよ」

「そうか」

「このお山の上に、何千人という人がきのうから登ってるから、雨が降っちゃあ可哀そうだ」

武蔵は、可憐いじろしくなつて、

「じゃ、行つて見るかな」

「ええ、行きましょう」

飛び上がつて、伊織は先に玄関へ駈け出し、その藁草履わらぞうりを借りて、揃えておく。

別当所の前も、山門の両わきにも、大篝火おおかがりをどかどかと焚たいていた。門前町の家ごとには、門かどかど々に松たいまつ明をつけて、何千尺の山の上も、昼をあざむくばかりだった。

湖水のように深い色をした夜空には、銀河がキラキラ煙っていた。その麗うるわしい星明りと火光に煙つてうごく群衆は、神楽殿かぐらでんを繞めぐつて、この山上の寒さを知らぬ人いきれにしていた。

「……あら？」

伊織は、その人混みに揉もまれながら、きよろきよろして、

「先生はどこへ行つちまつたんだらう。たつた今、いたのに」



笛や太鼓が、山風こたまに笛ふえを呼んで人足ひとあしもいよいよここへ流れ集まっては来るが、神楽殿にはまだ、静かに、灯影とほりと帳とばりが揺れているのみで舞人ぶじんはあらわれていなかった。

「先生——」

伊織は、人のあいだを潜くぐり歩いた。そしてやっと、武蔵の姿を見出した。

武蔵は、そこから少し先の御堂みどうの棟むねに打ち並べてある、沢山な寄進札ふだを仰いでいたのである。伊織が駈け寄つて、

「先生」

と、袖を引いても、黙つたまま、仰向あやむきいて、見つめていた。

無数の寄進者からかけ離れて、金額かねだかも大きく、札も一倍と大きな板いたにこう書いてあったのが、彼の眼をはたと引きつけたものだった。

武州芝浦村

奈良井屋大蔵

「……?」

奈良井の大蔵といえ、かつて数年前、木曾から諏訪すわのあたりへかけて、どれほど尋ねたずねたか知れない名である。

その大蔵が、迷れた城太郎を伴れて、他国へ旅立ったというのを聞いて――。

「武州の芝浦といえば？」

所もつい先頃まで、自分もいた江戸ではないか。ゆくりなくも今、大蔵の名を見出して、武蔵は茫然――別れた者たちを、思い出しているのだった。

二

常でも、忘れていくわけではないが。

伊織が、日に日に、成長してゆくにつけても、何かにつけ、思い出されていたのだが――

「もう、夢のように、三年余りになる」

武蔵は、城太郎の年を、心のなかで数えてみた。

神楽殿の大鼓おおかわが、その時、急に高く鳴り出した。武蔵が、われにかえると、

「ア。もう舞やってる」

と、伊織は、心をもうそこへ飛ばして、

「先生、何を見てるんです」

「べつに、さしたることではないが——伊織、おまえは一人で神楽を見ておれ、ちと、用事を思い出したゆえ、わしは後から行く」

そういつて、彼を追い遣り、武蔵はひとり、社家の方へ歩いて行った。

「寄進者のことについて、ちとお伺いいたしたいが」

と、いうと、

「ここでは、扱いませんが、別当総役所へ、ご案内いたしましょう」

と、少し耳の遠い老禰宜ろうねぎが、先に立つて、導いてゆく。

総別当高雲寺平等坊こううんじびやうどうぼうという大きな文字が入口にいかめ厳しい。宝蔵らしい白壁も奥に見える。神仏混淆こんこうで、一切ここを総務所としているらしかった。

老禰宜が、玄関で長々と何か告げている。

程なく非常に鄭重に、

「どうぞ」

と、役僧が、奥へ案内した。

茶が出る。見事な菓子ちびが運ばれてくる。やがて、二の膳であつた。また、美しい稚児ちびが

銚子ちようしを持つて来て、給仕についた。

しばらくすると、権僧正ごんそうじようの某なにがしというのが現れて、

「ようこそご登山下されました。山菜のみで、なにもお構いできませんが、どうぞお寛くつろぎあつて——」

と、いんぎんにいう。

はてな？

武蔵は少し、勝手のちがう氣持だった。

で、杯も手に取らず、

「実は、寄進者のことについて、ちとお調べ願わしく、参った者でござるが」

と、いい直すと、五十恰好かっこうふと肥り肉じしなその権僧正は、

「え？」

と、眼あたらを革めて、

「調べとは」

と、さも怪訝けげんらしく、急に眼めいろまで無遠慮むえんりょにして、じろじろ武蔵のすがたを見廻した。

武蔵が、寄進札の中にある武州芝浦村の奈良井の大蔵おほぞらというのは何日いっここへ登山したの

か、また、たびたび来る者か、その折は一名か、供を連れていればどんな者を連れてくるか？ ——などと次々に訊ね出すと、僧正どのは怖ろしく不きげんになって、

「では、なんじやな。其許そこもとが寄進をなさろうというのではなく、寄進者の身元を洗い立てにござったのか」

老禰ろうねぎ宜が聞き違えたのか、この僧正どのが早のみ込みしたのか——これはしたり、といわんばかりな顔をしてみせる。

「お聞き違えでござりましょう。拙者が寄進したいと申すのではなく、奈良井の大蔵という仁じんのことについて」

いいかけると、

「それならそれと、玄関ではつきりいわつしやればよいに。——見れば、御牢人らしいが、素姓もよう知れぬ者に、寄進者のお身元など、滅多にいうて、ご迷惑がかかつては困る」

「決して、左様なことは」

「まあ、役僧がどういうか、聞いてみなされ」

何か損でもしたように、僧正どのは、袖を払って、立ってしまった。

寄進者の台帳なるものを役僧が引つ張り出して、おぎなりに調べてはくれたが、

「べつに、こちらにも、詳しいことは何も書いてない。お山には、度々参籠さんろうしてござるようじゃ。供の者が、幾歳いくつぐらいか、そんなことまで分らんよ」

と、膠にべもない。

それでも武蔵は、

「お手数をかけました」

と礼をのべて外へ出た。そして神楽殿かぐらでんの前へ来て、伊織の姿を探すと、伊織は群衆の後ろにいた。背が低いので、樹の上へのぼり、梢こずえに腰をかけて、神楽を見ているのだった。彼は、武蔵がその樹の下へ来たことも知らない。全く安心して、神楽殿の舞まいに見惚みとれている。

黒い檜ひのきの舞台に、五色の帳とじはりが垂れていた。棟の四方に、張り繞めぐらしてある注連しめに、山風がそよとうごいて、庭燎にわびの火の粉がチラチラ燃えつきそうに時折掠かすめる。

「……………」

武蔵もいつか、伊織と共に、舞台へ眼を向けていた。

彼にも、伊織とおなじ日があつた。故郷ふるさとの讚甘神社さぬもの夜祭が、此処のような気がしてくる。群衆のいきれの中には、お通つうの白い顔があつたり、又八が何か喰つていたり、権叔父ごんしやうが歩いていたり——そして自分の帰りの遅いのを案じて、子を探す母の姿が彷徨さまよつていたり——など、その頃の幼い幻影に、さながら、今、身をつつまれているのだった。

舞まい台ゆかに坐つて、笛を構え、撥ばちを把とつている、古雅な近衛舍人このえとねりたちの風俗を写した山神やまかみ樂師がくしの、怪しげな衣裳も、金欄きんらんのつづれも、庭燎にわびの光は、それを遠い神代の物に見せるのである。

ゆるい大鼓おおかわの撥音ばちおとが、あたりの杉木立にたかく飮こする。それに纏もつれて、笛や太鼓の前拍子まえびようしがながれ、舞台まいゆかには今、神樂司かぐらつかきの人長ひとおさが、神代人かみよびとの仮面めんつけて——頬ほや顎あごの塗りの剥はげているその貌かおを、おおらかに舞まいうごかして——「神あそび」の歌詞うたことばを謡うたつていた。

神がきの、みむろの山の

さか木葉は

神のみまえに、しげりあいになり

しげりあいに行けり

人長ひとおさが、一つの詞ことばを謡うたい終ると舎人とねりらは、段拍子だんびょうしを入れ、畳み拍子たたと、樂器がくきをあわせて、舞まいと樂と歌とが、ようやく一つの早い旋律せんりつを描き出して、

すめ神の、みやまの杖と、

やま人の、ちとせを祈り

きれるみ杖ぞ

きれるみつえぞ

また――

この銚ほしは、いずこの銚ぞ

天あめにます

豊とよおか姫の、宮の銚なり

みやのほこなり

神樂歌の幾つかは、武蔵も幼い頃には覚えていたものである。自分が仮面めんをつけて、故郷さぬもの讚甘神社のの神樂堂で、舞つたりしたことなども、思い出された。

よもやまの



人のまもりにする太刀を

神の御前みまえに祝いつるかな

いわいつるかな

その歌うたことば詞を耳に聞いていた時である、武蔵の眼は、太鼓の座に、太鼓をたたいてい  
る舎人とねりの手をじつと見ていたが、

「あつ、あれだ！ ……二刀は」

と、突然、辺りをわすれて大きく呻うめいた。

#### 四

樹の股またの上から、

「おや、先生、いたんですか」

伊織は、武蔵の呻いた声に、びつくりして覗のぞき下ろした。

「……………」

武蔵は、彼を、見上げもしなかった。神楽殿の床ゆかを見ているのであるが、周まわりの人々の

ように舞楽に陶醉している眼ではない。むしろ怖いといえばいえもする眼ざしなのだ。

「……ウウム、二刀、二刀、あれも二刀も同じ理だ、撥ばちは二つ、音ねはひとつ」

擬ぎようぜん然として腕拱うでくみを解かないのである。しかし彼の眉には、年来、胸にわだかまっていたものが解けていた。

それは、二刀の工夫であった。

生れながら、人間には、二つの手がある。けれど剣をとる場合には、人間はそれを一にしか使っていない。

敵がそうだし、衆が皆、それを習性としているからいいが、もし、二つの手を、完全に二つの剣として働かして来た場合は一つの者はどうなるか。

事例はすでに武蔵の体験の中にある。それは一乗寺下り松の鬪いに、吉岡方の大勢に対して、身一つで当って行った時である。あの時、戦いが終わってから気づいてみると、自分は両手に剣を持っていた。——右に大剣と、左の手に小刀を。

それは、本能がしたのである。無自覚のうちに二本の手が、各 あるだけの力を出して身を護まもつたのである。生死の境さかいが、必然に教えたのだ。

大軍と大軍との合戦でも、両翼の兵を完全に駆使しないで、敵に当たるといふ兵法はあり

得ない。まして一箇の体にはなおのことである。

日常生活の習性は、しらすしらす不自然を自然に思わせて、不思議ともしなくなるものである。

(二刀がほんた。むしろ、二刀が自然なのだ)

武蔵は、あの時以来、そう信じていた。

けれど、日常生活は日常の所作であり、生死の境は、生涯にそう何度もあるものではない。——しかも剣の極意は、その生死の要意を日常化するにある。

無意識でなく、意識あつての働き——

しかも、その意識が、無意識のように自由な働き——

二刀は、そうしたものでなければならぬ。武蔵は常にその工夫を胸に抱いだいていた。彼は自己の信念に、理念を加えて、動かない二刀の原理をつかもうとしていた。

それを、彼は今、はつと受け取つたのである。神楽殿の上で、太鼓をたたいている舎人とねりの二本の撥ばちの手——二刀の真理をその音に聞いたのだった。

太鼓を打つ二つの撥は、二つであるが発する音は一つである。そして左と右——右と左——意識があつて、意識がない。いわゆる無礙むげ自由の境である。武蔵は、胸の開けた心地

がした。

五座の神樂は、人長の歌詞から始まって、いつのまにか舞人も入れ代っている。大まかな岩戸神樂もすすみ、荒尊の鈴の舞につれて、早拍子の笛がさげび、鈴がりんりんと振り鳴らされた。

「伊織、まだ見ておるか」

武蔵が、梢を仰いでいうと、

「ええ、まだ」

と、伊織は、返辞もうわの空だった。神樂舞に魂を飛ばして、自分も舞い人になったような心地でいた。

「明日はまた、奥の院まで、大岳を登らねばなるまいが、余り晩くならぬうちに戻って眠れよ」

いい置いて、武蔵は、別当の観音院の方へ、ひとりで歩き出した。

——すると彼の後ろから、大きな黒犬に手綱をつけて、のそのそ尾いて行く男があった。武蔵が、観音院の内へ入ると黒犬を連れたその男は後ろを見て、

「おい。おい」

と小声に、闇へ手招きした。

魔の眷属

一

犬は、三峰みつみねのお使いであるというので、山では、権現様の御眷属ごけんぞくとよんでいる。

山犬のお札ふだだの、山犬の木彫だの、山犬の陶器すえものだの——を参籠者が下山の折、買ってゆくのもそのためである。

また、ほんもののお犬もこの山には沢山いた。

人に飼われ、崇めあがられてもいるが、この山中にいたので、自然生物を喰い、まだ山犬の本質が脱けきれていないような、鋭い牙きばを持った犬ばかりである。

それらの眷属けんぞくの祖先は、千余年前、大集団で、海の彼方かなたから武蔵野へ移住して来た高麗民族の家族と共に、移って来たものと、それより以前から、秩父ちちぶの山にいた純坂東じゅんばんとう種の山犬と、そう二種類の結合された血をもっている猛犬だということであった。

それはとにかく。

——武蔵の姿を別当の観音院の前まで尾行てきた男の手にも、一匹の犬が麻縄で曳か  
れている。今、男が闇へ手招きすると、犢のような黒犬も共に、闇の方を見てくんと  
鼻を鳴らし始めた。

彼が常に嗅ぎ馴れている人間のおいが、近づいて来たせいであろう。

「しっ」

と、飼主は、手綱をちぢめて、尾を振る尻を一つ打った。

その飼主の顔も、狛犬に劣らない獯猛な容貌をそなえていた。顔に、皺の彫りが深  
く、五十歳がらみに見えるが、骨太な体は、もつと若い、いや若い者にもめずらしいほど  
精悍である。背は五尺そこそこだが、四肢の節々には、何処となく、当り難い弾力と闘  
志がこもっている——いわば、この飼主も、連れてくる犬と同じように、まだ山犬の性が  
多分に脱化しきれない——野獣から家畜への過渡期にあるのと同様な——山侍の一人だっ  
た。

だが、寺に勤めている身なので、服装はきちんとしていた。胴服ともみえ、袴ともみえ、  
羽織ともみえる物の上に、腰締をむすび、麻袴をはき、足には、祭礼穿きの、新し

い紙緒かみおのわら草履わらぢをはいている。

「梅軒さま」

そつと、闇の中から寄つて来た女はいった。

犬は、その裾すそへ、じやれかかろうとするし——女は、そのために、或る距離しか近づきかねていた。

「こいつ」

梅軒は、繩なわの端で、こんどはやや強く、犬の頭を打って、

「お甲。……よく見つけたな」

「やはり、あいつでしよう」

「うむ。武蔵だ」

「……………」

「……………」

二人は、それきり口を噤つぶむ。雲の断きれ目の星を見ている。神楽殿の早拍子はやびょうしが、黒い杉木立の奥に今、旺さかんだつた。

「どうします」

「どうかせねば」

「折角、山へ上つて来たのに」

「そうだ、無事に帰しては、勿体ない」

お甲はしきりに眼をもつて梅軒の決心をけしかける。梅軒はだが容易に肚がきまらないらしい。ひとみ眸の奥でぎらぎらと何か思慮を焦やいている。

こわ怖い眼である。

しばらくして、

「藤次はいるか」

「え。祭の酒に酔つて、宵から店で寝ておりますが」

「じゃあ、起しておけ」

「あなたは」

「何せい、おれは勤務つとめのある体だ。——御宝蔵の見廻りや用事を済まして、後から行くでしょう」

「じゃあ、宅の方へ」

「む。おぬしの店へ」



赤い庭燎にわびのゆらぐ闇へ、二人の影はまた、別れ別れに消えて行った。

## 二

山門を出ると、お甲の足は、小走りになった。

門前町は二、三十戸ある。

多くは、土産物屋と、休み茶屋であった。

たまたま、煮物や酒のおいの中に人声の賑やかな小屋もある。

彼女のはいった家も、そうしたふうの一軒で、土間には腰掛が並べてあり、軒先には  
「御おんやすみどころ休やすみ処ところ」としてある。

「うちの人は」

帰るとすぐ、彼女は、床しょうぎ几ぎに居眠っていた雇やといにん人の小女へ訊いた。

「寝てるのかい」

叱られたと思つて、小女はあわてて、何度もかぶりを振った。

「おまえじゃないよ。うちの人のことを訊くのだよ」

「あ。お旦那なら、眠ってござらっしゃいます」

「それ、ごらんな」

舌打ちして、

「祭だつていうのに、こんな薄ぼんやりしているのは、うちだけだよ、ほんとに」

お甲は、そういうながら、暗い土間を見まわした。

表口で、雇い男と老婆としよりが、明日あしたの赤飯こわめしを泥竈へつついにかけて蒸むしていた。そこから赤い

薪まきの火がゆらいで来る。

「もし、おまえさん」

お甲は、一つの床几の上に、長々と寝こんでいる姿を見かけて、側へ寄った。

「ちよつと、眼を醒ましておくれよ。——もしおまえさんたら」

軽く肩を持つて、揺すぶると、

「なに」

むくりと、寝ていた男は、起き上がった。

お甲は、

「おや……?..?」

と、退いて、男の顔を見もつた。

それは、彼女の亭主の藤次ではなかつた。丸っこい顔に、大きな眼をもつた在郷ざいこうの若者である。ふいに、見知らぬ女にゆり起されたので、きよろツと、その丸い眼でお甲を見つめた。

「ホ、ホ、ホ」

彼女は、自分のそそっかしさを笑いに紛まぎらして、

「お客様でしたか。どうも、相すみませんでした」

在郷の若者は、床几の下にすべり落ちてゐる菰こもを拾つて、それを顔にかぶると、だまつてまた、眠つてしまつた。

木枕の前に、何か食べかけた盆と、茶碗がおいてある。菰の裾からにゆツと出ている二本の足には、土だらけな草鞋わらじが結いつけてあり、壁へ寄せて、この若者の持物らしい旅包みと、笠と、一本の丸杖とが、置いてあつた。

「お客かえ、あの若い衆は」

小女に訊くと、

「はい。一眠りしたら、奥の院へ登りに行くだから、眠らせてくれといいなさるで、木枕

を貸してあげましただ」

と、いう。

「そうならそうとなぜいわないのさ。うちの人と間違えてしまったじゃないか。一体、うちの人はどこに——」

といいかけると、かたわらの破れ障子の内から、片脚を土間におろして、体は<sup>むしろゆか</sup> 筵床へ横たえていた藤次が、

「べら棒な。ここにいる俺がわからねえのか。——てめえこそ、店を<sup>あ</sup>空けて、どこをうろついているのだ」

と、寝起きの悪い声をして、起き上がった。

勿論この男は、かつての祇園<sup>ぎわん</sup>藤次。彼も変り果てたものだが、まだ悪縁も切れずに連れ添っているお甲のほうも、さすがに、元の色香はなかった。男のような女になっていた。

藤次が怠け者なので、自然、女がそうならなければ、生活してゆかれないせいでもある。和田峠に<sup>くすり</sup>薬草採りの小屋を懸けて、<sup>なかせんどう</sup>中山道を往来する旅の者を<sup>あや</sup>殺めては、慾を満たしていた頃はまだよかったが——

その山小屋の巢も焼き払われてしまったので、手足にしていた手下も散ってしまい、今

では、藤次は冬場だけ狩りようを稼かせぎ、彼女は、お犬茶屋の内儀かみさんだった。

## 三

寝起きのせいもあるうが、藤次の眼は、まだ赤く濁にごっていた。

その眼が土間の水瓶みずがめを見ると、立って行って、柄杓ひしやくからがぶがぶと、酔醒よいざめめを飲のんでいる。

お甲は、床几しょうぎへ、片手をついて、体を斜しやにして振向きながら、

「いくら祭だつて、お酒も程々にしたがいい。——生命いのちが危あやないのも知らず、よく外で、刃物につまずかなかつたね」

「何」

「油断をおしでないということさ」

「何かあつたのか」

「武蔵が、この祭に来ているのを、おまえ、知つておいでかえ」

「え。武蔵が」

「ああ」

「武蔵とは、あの宮本武蔵か」

「そうさ。きのうから、別当の観音院へ来て泊っているんだよ」

「ほ、ほんとか？」

水瓶いっぱいの水を酔醒めに浴びたよりも、武蔵の二字は、藤次の顔をいちどに醒まし  
ていた。

「そいつあ大変だ。お甲、てめえも店へ出ていないがいいぞ。野郎が、山を下りるまでは」

「じゃあおまえは、武蔵と聞いて、隠れている気かえ」

「また、和田峠の二の舞を、やるまでもねえだろう」

「卑怯だね」

お甲は、せせら笑って、

「和田峠でもそうだが、武蔵とおまえは、京都で、吉岡とのいきさつ以来、恨みのかさな  
つている相手じゃないか。女のわたしでさえ、あいつのために、後ろ手に縛られて、住み  
馴れた小屋を焼き払われた時の口惜しさは、忘れてはいないよ」

「だが……あの時は、手下も大勢いたが」

藤次は、自分を知っていた。彼は、一乗寺下り松の人数のうちには加わらなかつたが、その後、武蔵の手なみは、吉岡の残党の者からも聞いてもいたし——和田峠では、直接、体験もしていたし——到底、彼に対して、勝目は考えられなかつた。

「だからさ」

お甲は、摺<sup>す</sup>り寄つた。

「——おまえ一人では無理だろうが、この山には、武蔵にふかい遺恨のある人が、もう一人いるだろうじゃないか」

「……?」

そういわれて、藤次も思い出したのである。彼女のいうその人というのは、山の総務所、高雲寺<sup>びようどうぼう</sup>平等坊の寺侍——総務所の宝蔵番を勤めている穴戸<sup>ししどばいけん</sup>梅軒のことをいつたものに違いない。

ここに、茶店を持たせてもらったのも、その梅軒の世話からであつた。

和田峠を追われて、旅へ出た末、この秩父<sup>ちちぶ</sup>で、梅軒と知り合つたのが縁であつた。

後になってだんだん話しあつてみると、その梅軒は、以前、伊勢鈴鹿山の安濃郷<sup>あのがう</sup>に住んでいて、ひところは多くの野武士を配下にもち、戦国のみだれに乗じて野稼ぎを働いてい

たが、その戦いくさもなくなつたので、伊賀の山奥で、鎌鍛冶かまかじとなつたり、百姓に化けたりしていたが、領主の藤堂家の藩政が統一されてくるにつれ、そういう存在もゆるされなくなつたので、遂に時代の遺物たる野武士の集団を解散して、ひとり江戸へと志して来たが——その江戸にもない真向きな口があるが——と三峰に縁故のある者の紹介で、数年前から、総務所の宝蔵番に雇われたものだった。

ここよりもつと奥の武甲の深山には、まだまだ、野武士以上、殺伐さつぱつで未開な人間が、武器をもつて棲息しているというので——要するに彼は、毒をもつて毒を制するため——宝蔵番には真向きな人物として、抱えられたのである。

#### 四

宝蔵には、社寺の宝物ばかりでなく、寄附者の浄財が、現金である。

この山中、それは常に、山の者の襲撃に、脅おびやかされていた。

その宝蔵の番犬として、穴戸梅軒は、実に打つてつけない人物に違いなかった。

野武士、山の者などの、習性とか、襲撃法とか、そういうことにも通じているし、もつ



と重大な資格としては、彼は、ししどやえがきりゆう 宍戸八重垣流のくさりがま 鎖鎌の工夫者であり、鎖鎌を使わせ  
ては、天下無敵の達人といわれている。

前身が前身でなかつたら、しかるべき主君もとれる人間だった。けれど、彼の血統は余  
りにどす黒い。彼の血をわけた兄も、辻風典馬といって、伊吹山から野洲川地方へわたつ  
て、生涯、血なまぐさい中にちようりよう 跳梁した野盗の頭目であった。

その辻風典馬の死は、もう十年も以前になるが、武蔵がまだ「たけぞう」といつていた  
頃——ちようど関ヶ原の乱後——伊吹山の裾野で、武蔵の木剣のために血へどを吐いて終  
つたものであった。

宍戸梅軒は、自分たちの没落の原因が、時代の推移と考えるよりも、その兄の死が、ケ  
チのつき初めと考えていた。

で、たけぞう 武蔵の名を、彼は、恨みの胸へ、彫りつけていた。

その後。

梅軒と武蔵とは、伊勢路の旅の途中、あの 安濃の山家で計らずも出会った。彼は、武蔵を必  
殺のわな 罠にかけたつもりで、寝首を狙った。

だが、武蔵は、死地をのがれて、姿をくら 晦ましてしまった。——それ以来、梅軒は、武蔵

の姿を、見る時がなかったのである。

——お甲は、彼から幾度となくその話を聞いていた。同時に、自分たちの身の上も彼に洩らした。そうして梅軒との親密を濃くするために、武蔵への怨みを、よけいに強く語った。そんな時、

(今に。——永い生涯のうちには、きつと)

と梅軒は、あの眼を、皺しわのなかに凄く潜ひそめて、呟つぶやくのが常だった。

そうした人間のいるこの山。——武蔵にとつては、恐らく、これ以上、危ない地上はない呪咀じゆその山へ、きのう伊織を連れて、上つて来たのであった。

お甲は、店の中から、その姿をチラと見て、おやと見送ったが、祭の雑沓に見失ってしまった。

で、藤次に計ろうとしたが、藤次は飲んで歩いてばかりいる。けれど、気懸りでならないので、宵の手すきに、別当の玄関うかがを窺うかがっていると、ちようど、武蔵と伊織が、神楽殿の方へ出て行った。

いよいよ、武蔵にちがいない。

彼女は、総務所へ行つて、梅軒を呼び出した。——梅軒は、犬を引っ張つて出て来た。

そして、武蔵が、観音院へ帰って行くまで、背後うしろに尾ついて見届けていたわけであった。

「……ムム。そうか」

藤次は、それを聞いて、ようやく力を得た心地がした。梅軒がぶつかかる気なら——と、やや勝目が考えられて来た。三峰の奉納試合に、梅軒が八重垣流の鎖くさり鎌がまの秘を尽して坂東の剣術者をほとんど総薙そうなぎぎに葬ほうむつたおとしの記憶などを思いうかべていた。

「……そうか。じゃあ、梅軒さまの耳へそのことは入れてあるのだな」

「後で、御用がすんだら、ここへ来るといつていました」

「諜しめし合せにか」

「元よりでしょうね」

「だが、相手が武蔵だ。こんどこそ、よほど巧くやらねえと……」

胸むねぶるいと共に、思わず大きな声が出たのである。お甲は、気がついて、薄ぐらい土間いびきの片隅かすみを振り顧かえつた。その床しょうぎ几こもには菰こもをかぶつた在郷の若者が、さつきから軒いびきをかいよく眠ねっていた。

「叱しつ……」

お甲に、いわれて、

「ア。誰かいたのか……？」

藤次は、自分の口を抑えた。

## 五

「……誰だ？」

「お客だとさ」

お甲は、気になかなかつた。

だが、藤次は、顔をしかめて、

「起して、出しちまえ。——それにもう、穴戸様が来る頃だろう」

と、いった。

それに越したことはない。お甲は小女にいいふくめた。

小女は、隅の床几へ行つて、若者の躰いびきをゆり起した。そして、もう店を閉めるのだから

出て行つてくれと、無愛想にいった。

「わあ、よく眠った！」

伸びをして、若者は土間に立った。旅ごしらえや、訛なまりから見て、近郷の百姓とは思われない。何しろ、起きるなり、独りでにこにこして、丸っこい眼をしばたたき、はち切れそうな若い肉体をくるくる動かす、またたくまに、菰こもを着、笠を持ち、杖をかかえ、旅ぶろしきを首に巻いて、

「どうも、お邪魔さん」

と、お辞儀して、外へ飛び出して行った。

「お茶代は置いて行ったのかい。変なやつだね」

お甲は、小女を振向いて、

「床几を、畳んでおしまい」

と、いいつけた。

そして彼女も、藤次も、葭よし簀すを巻いたり、店の物を片づけ始めた。

そこへ、のっそりと、犢こやしのような黒犬がはいつて来た。梅軒の姿は、その後からであった。

「お、お越しで」

「どうぞ、奥へ」

梅軒は黙つて、草履を脱ぐ。

黒犬は、そこらに落ちてゐる喰い物を、漁り歩くのに忙しない。

荒壁の破れ廂だが、板縁を架けて、離れてゐる。その一間に燈火がつく。梅軒は坐るとすぐ、

「……先ほど、神楽堂の前で、武蔵が連れの子供に洩らした言葉に依れば、明日は、奥の院へ登るつもりらしい。それから先に、慥かめておこうと、そつと観音院へ寄つて探つて来たので遅くなつた」

と、いった。

「じゃあ、武蔵はあしたの朝、奥の院へ……」

とお甲も藤次も息をのんで、廂ごしに、大岳の黒い影を、星空に見た。

尋常一様なことで、武蔵を打てないことは、藤次以上、梅軒は弁えていた。

宝蔵番のうちには、彼のほかに屈強な番僧が二人いる。同じく、吉岡の残党で、この神領に小さな道場を建て、部落の若い者に稽古などをつけてゐる男もある。なお糾合すれば、伊賀から隨身して来た野武士で、今は転業してゐる者など、十名以上はすぐ狩りあつめられよう。

藤次は、手馴れの鉄砲を持つがよいし、自分は、いつもの鎖鎌くさりがまを用意して来ている。——ほか二人の番僧は槍を持つてもう先へ出たはずである。なお、出来るだけ味方を狩りあつめ、夜明け前に、大岳へゆく途中の小猿沢こざるさわの谷川橋で——われわれを待ち合す手筈になつてゐるから、万々、これで遺漏いろうはあるまいと、穴戸梅軒ししどばいけんはいうのだった。

藤次は、驚いて、

「へえ、もうそんな手廻しがついてるので？」

と、疑わしい眼をした。

梅軒は、苦笑した。

梅軒をただの寺僧と見馴れているから意外とするのであろうが、前身の辻風典馬の弟黄平としてみれば、これくらいな早仕事は、眠りをさました野猪のじしが、山萩ひとむらの一叢に、風を起したほどにも足りないことだった。

やえがきもみじ  
八重垣紅葉

まだ、霧が深い――。

小さい残月も、谷から高く離れている。

大岳は眠っていた。

涼々、どうどう、ただ躁さわがしいのは、小猿沢の底を行く水である。

その谷川橋に、黒々と、霧につつまれた人影がかたまっていた。

「藤次」

と、低声こしえに呼ぶ。

梅軒の声である。

同じ低声で、群れの中から、藤次が答える。

「火繩ひなわを濡らすな」

と、いう注意を梅軒がする。

法衣ころもをからげた山法師そのまま僧が、手槍を持って二人もこの殺伐な群れの中に交じっている。

あとは地侍や、ならず者の徒であろう。服装は雑多だが、足あしこしら拵しらえは、どれを見ても、



軽捷けいしやうに馴れた装いである。

「これだけか」

「そうです」

「何名？」

お互いに、頭数を読み合う。誰が数えても、自分を加えて、十三名と読む。

「よしつ……」

梅軒はいつて、行動する手筈をもういちどそこで銘々めいめいに、繰返した。銘々は、黙って頷うなずいた。——そして、では行けとばかり、谷川橋から一筋道の辺りを指して、雲の中へ、掻き消えてしまった。

是ヨリ三十一町

奥之院道

谷川橋の断崖きりぎしの際きわにある道しるべ石の文字が、白い残月に、微かに読まれて、その後  
はただ、溪たにの水音と風だった。

人が去ると、その間、潜ひそんでいたものが、やがて樹々の梢こずえを渡わたって躁さわぎだした。  
これから奥の院まで、無数に見かける猿の群れだった。

猿は、崖の上から、小石を転がし、蔓ぐさに縋り、道まで出て来た。

橋を駈けまわる。橋の裏へかくれ込む。谷間へ飛ぶ。

霧は、その影を、追いつくように、猿と戯れた。——もしここに一人の神仙が降りて、彼らに、仙語をもつて、

(汝ら、生をうけて、何ぞこの狭隘の山谷に、雲と児戯するや。雲すでに起つ、雲に駕せよ。行くこと西方三千里、廬山に臥し峨眉峰を指さし、足を長江に濯ぎ、気を大世界に吸う。生命真に伸ぶべし。われらと共に来らずや)

とでも呼びかけたら、雲はみな猿となり、猿はみな雲と化つて、漠々、昇天し去つて行くかもしれない。

——そんな幻想さえ催すほど、猿は、遊んでいた。残月の光に、その猿の形は霧へ映つて、二つずつに見えた。

わんツ！

わん、わん、わんツ！

突——犬の声だった。

犬の声は、飮して、谷へ遠くひびいた。

とたんに、さながら秋の末の黄櫨はぜの葉が風に見舞われたように、猿は、一瞬に影をひそめてしまった。——そしてそこへ、かなり高い登音をひびかせて、宝蔵番のために梅軒が飼っている黒犬が縄を切つて素すつ飛んで来た。

「くろっ、くろ奴め！」

後から追つて来たのは、お甲であつた。

梅軒たちが、大岳おおだけへ行つたのでそれを知つて、縄を噛み切つたものとみえる。

## 二

彼女はやつと、黒犬くろの引きずつて行く縄の端をつかまえた。黒犬くろはつかまると、彼女に巨おおきな体を押しつけて絡からみついた。

「畜生」

彼女は、犬が好きでない。振り退のけながら、縄で打つた。

そして、

「お帰り！」

と、元来た方へ曳き戻そうとすると、黒犬はまた、耳まで口を裂いて、

——うわんツ

と、吠え始めた。

縄はつかまえたが、彼女の力では動かなかった。無理に引つ張れば、狼のような甲高い声を発して、吠えつづける。

「なぜこんな物を、連れて来たんだろう。宝蔵の犬小屋へ繋いでおけばいいにと、彼女も癪が起つた。」

こんなことをしている間に、もし別当の観音院を今朝立つ筈の——武蔵が早くも来かかったら、不審に思われるにちがいない。この犬が、この道に、うろうろしているだけでも、機敏な彼に氣遣われる懼れは十分にある。

「ちいッ、しようがないね」

お甲は、持て余した。

黒犬は吠えやまないのである。

「仕方がない——お出で。その代り、奥の院へ行ったら、吠えるんじゃないよ」

やむなく彼女は犬を曳いて、いや犬に曳かれて——先へ登った人々の道を後から喘いで

行つた。

それきり黒犬くろの吠えるこだま聲はして来なかつた。黒犬くろは嬉々と、飼主の匂いを追つて行つたのだから。

一夜中、うごきやまずに動いていた霧が、谷間へ、厚ぼつたい雪のように落着いて、武甲の山々や、妙法や、白石や、雲取の相すがたが澄んで来ると、奥の院道も白み渡つて、チチ、チチ、チチ……と小鳥の聲が耳を洗う。

「先生、どうしてだろ？」

「何が」

「明るくなつたのに、お日様が見えないもの」

「おまえの見ている方角は、西ではないか」

「あ、そうか」

伊織は、その代りに、月を見つけた。峰の彼方かなたに落ちかけている淡いうす月を。

「伊織」

「はい」

「この山には、おまえの親友がたくさんいるな」

「どこにですか」

「それ。あそこにも——」

武蔵が、指さした谷間の樹をのぞくと、親猿を真ん中にして、子猿が、かたまっていた。

「いたろう。はははは」

「何だあ……。だけど先生……。猿は羨ましいなあ」

「なぜ」

「親がいるもの」

「……………」

道は胸突である。武蔵は黙って先へ攀じ登って行く。——少し登るとまたやや平地になつて来た。

「あの、いつか、先生に預けといた、革の中着——お父っさんのお遺物の——あれを先生はまだ持っていてくれますか」

「落しはせぬ」

「中を、見て下さいましたか」

「見ない」

「あの中に、お神札まもりの他に、書いた物もはいつているんですから、こん度、見てください」

「ウむ」

「あれを持つていた時分は、私にはまだ、難しい字は読めなかったけれど、今ならもう読めるかもしれません」

「何かの時、おまえ自身で、開けてみるとよい」

一歩一歩に夜は白んで来る。

武蔵は、道の草を見ながら踏んだ。自分の踏んで行く先に何者の足痕あしあとか、その草露はおびただしく汚れていた。

三

蜿々うねうねと、道は山を旋り巡めぐつて、やがて、東を望む平地へかかって来た。

とたんに、伊織は、

「あつ、日の出！」

指さして武蔵を振り顧つた。

「才才」

武蔵の顔も、紅くれないに染まつた。

見る限りが、雲の海である。坂東の平野も、甲州、上州の山々も雲の怒濤どとうの中にかぶ蓬菜ほうらいの島々であつた。

「……………」

伊織は、口をむすんで、姿勢を正して凝ぎようぜん然と日輪を見ていた。

余りに大きな感動は、少年を唾おしにさせてしまふ。伊織は、何と云つていいのかわからなかつた。

自分の体じゆうを旋めぐつてゐる血液と、その太陽の赤いものが、ひとつみみたいな気がして来た。

だから伊織は、

(太陽の子だ)

と、自分を思ったが、それではまだ、彼の感動と、人間精神とが、ぴったりしなかつた。で、彼はなお黙つて、恍惚こうこつとしていたが、突然、大きな声でどなつた。



「あまてらすおおみかみ  
天照皇大神さまだ！」

振向いて、武蔵へ、

「ね、先生。そうでしょう」

「そうだ」

伊織は、両手を高く翳<sup>かざ</sup>して、十本の指を透かしてみた。そして、またどなった。

「お日様の血も、おれの血も、同じ色だ」

その手で、伊織は、拍手<sup>かしわで</sup>を打った。そして俯<sup>ふ</sup>し拝みながら、心のなかで、じつと、

——猿には親がある。

——おれにはない

——猿には大神祖<sup>おおみおや</sup>がない

——おれにはある！

と、思つて、歓びに盈<sup>み</sup>ちあふれて来た。涙がながれかけて来た。

その涙の疼<sup>うず</sup>きが、唐突に、伊織の手や足を動かし始めた。伊織の耳には、ゆうべの岩戸神楽<sup>かぐら</sup>が、雲の彼方<sup>むこう</sup>で聞えているのである。

「——タラン、タン、タン、タン。——どどん、どん……」

箆さきを拾つて、舞い出した。

神楽拍子かぐらびょうしに足を踏み、手を流し、そして、きのう覚えたばかりの神楽歌うたを謡つた。

あずさ弓

はる来るごとに

すめ神の

豊とよのあそびに

あわんとぞおもう

あわんとぞ思う——

気がつくとき、武蔵はもう彼方あなたを歩いている。伊織は、あわてて駆け出した。

道はまた、樹林のあいだへはいつて行く、——もう参道が近いのではあるまいか。樹々の姿におのずから統一がある。

巨おおきな樹はみな、厚ぼつたい苔こけをかぶっていた。苔には、白い花がたかっている。五百年も千年も生きて来たかと思うと、伊織は、樹にもお辞儀をしたくなつた。

足許もとはだんだん熊笹くまざさに狭められて来る。真つ赤な蔦つたもみじが、眸を吸いつけた。樹の深い中はまだ暁闇であつた。仰向いても、朝の光は、少ししか見られなかつた。

——と、ふいに二人の踏んでいる大地が揺れたような気がした。そう思った瞬間、ずどんッ！ 烈しい音響だった。

「あつ」

伊織は、耳を抑えて、熊笹の中へ俯うづツ伏した。とたんに、うすい弾たまけむり煙のながれた樹陰で、ぎゃッ——と、生き物が断末を告げる刹那の——あの不気味なさげび声が聞えた。

#### 四

「伊織。立つな」

熊笹の中へ首を突つ込んでいる伊織へ、武蔵は、杉の樹陰から、そういった。

「——踏まれても、立つではないぞ」

「……………」

伊織は、返事もしなかった。

煙えんしょう 硝しょう

くさい煙は、うすい霧のように、伊織の背を越えて行った。——その彼方の樹、武蔵の横にある樹、また、道の行くて、道の後方うしろ——すべての物の陰には、槍の穂か、刃

かが、ひそ潜んでいた。

「……………」

物陰から窺うかがっている者たちから見ると、瞬間に、武蔵のすがたが、何処へ行ったかと、戸惑いを覚えているらしかった。——そして、鉄砲の効果をも、確かめているのであろう。ガサともさせず、しばらく窺うかがい合っていた。

今——ぎヤツといった凄いうめき声が、武蔵に与えた手応てうたえかとも思ったが、その武蔵のいた辺りに、武蔵の姿は仆れていないし、それも彼らの出足をためらわせていたに違いない。

鉄砲の音と共に、熊笹の中に、熊の子みたいに、尻だけ出してじっとしている伊織の姿は、誰の眼にも見えた。——伊織はちょうど、八方の眼と、刃やいばとの、真ん中に置かれていた。

「……………」

起つでないぞ——と何処からかいわれたような気がしたが、毛の根に迫ってくるような恐さと、鼓膜こまくがガンとした後の一瞬の、余りにもひそとした静かさに、つい、そうつと首を擡もたげてみると、すぐ側そばの巨おおきな杉の樹陰に、大蛇おろちにも似た太刀が、ギラと見えた。

われを忘れて、

「セツ、先生つ。——たれかそこに、隠れてるぞ！」

と、伊織は絶叫してしまった。

そして、跳ね起きるなり、ぱつと無性に駈け出そうとすると、

「この餓鬼つ」

と、彼の見た刃が、その陰から躍つて来て、悪鬼のように伊織の上へ、振りかぶつた。その横顔へ、ぐさつと、一本の小柄こづかが突き立った。武蔵が、身を運んで救うに違いとまがなく、投げたものであることはいうまでもない。

「——うつ、く、くそつ」

槍を繰り出した法師である。武蔵はその槍を一方の手に引つつかんでいた。しかし、右の片手はなお、今小柄を放つただけで、完全に空けて、次に備えていた。

およそどれ程の敵の数か、亭々たる木の幹こゝろに遮さへぎられて、その明瞭でないのが、彼をして、軽々しく動かせない原因だった。

——するとまたも、どこかで、

「ぐわつ」

と、石でも頬張つたような呻うめきがした。

同時に思いがけない方で、武蔵とは関係なく、相手の中から裏切でも起つたのか、凄まじい格闘が始まった様子なのである。

「はて？」

武蔵が、それへ眸そを反らした咄嗟とつさ、狙い澄ましていたもう一名の法師は、槍もろとも勢いよく彼へ向つて、驀ばくしん進して来た。

「——おつ」

武蔵は、両脇へ槍をつかんだ。互たがい交ちがいに、槍と槍をもって、彼の体を挟んだ二人の法師は、喚わめき合つて、味方へ、

「かかれッ」

「何してる！」

と、叱咤した。

その呶号より高く、

「何者だつ。何者がこの武蔵を討たんとはするのか。名乗れ。——名乗らずば、皆、敵と見るぞつ。この神域、血に汚けがすは畏おそれあるが、屍かばねを積むぞ」

と、いった。

つかんでいた二本の槍を振り廻すと、法師は二人とも跳ね飛ばされた。武蔵は飛びかかつて、抜き打ちにその一人を斬り伏せ、身を翻ひるがえして、さらに、抜きつれてくる三名の白刃を迎えた。

## 五

道はせまい。

武蔵は、その道をいつぱいに、じりじり押した。

白刃をならべた三名に、横からまた二名ほど加わって、相手は、肩をすぼめ合いながら、踵かかとす摺りに後へ後へと退さがって行つた。

心もとないことには、伊織の姿が見えない。武蔵は、当面の敵へは単に、備えておくに止とどめて、

「伊織っ……」

と、呼んでみた。

ふと見ると、杉林の中に、追ひ廻されている者がある。それが伊織だった。今討ち洩らした一名の法師が、槍を拾つて、伊織を追ひ駈け廻しているのだった。

「ア、おのれ」

彼の救いに——その方へ武蔵が身を外そらそうとすると、

「やるなツ」

どつと、前の五名は、刃やいばをつらねて、間近へ斬り込んで来た。

疾風を起して、武蔵は、対むかつて来た刃へ、自身からも対むかつて行つた。怒濤どとうへ怒濤をぶつけたのである。飛沫しぶきとなつて血は匆はね飛んだ。武蔵の体は、敵よりも低目に、そして彼の背はまるで渦に見えた。

血の音、肉の音、骨の音までがした。ふた声三声、つづけざまに絶鳴がその中に交まじつた。右へ左へ、朽木仆れに斃たおれた者のすべてが、胴から下を薙なぎられていた——そして武蔵の手には、右に大剣と、左に小剣が握られていた。

「——わつ」

二人ほどが、のめるように、逃げ出した。追いかげざま、

「何処へ」



ひとりの後頭部へ、左剣を浴びせた。

びゅっ——と黒い返り血が、武蔵自身の眼へ<sup>は</sup>匆ねた。

武蔵は、左剣の手を顔へ——思わず眼へ当てた。とたんに、異様な金属の音が、後ろから、風を裂いて、その顔へ飛んできた。

——あつ、と無意識のまに彼の右剣が、それを払った。

いや、払ったと意識したのは、単なる意識でしかない。鏢<sup>つば</sup>のあたりへぶんと噛みついた分銅に、彼が、

(しまった！)

と、心にさげんだ時はすでに、ガリガリガリツと、刀身と細い鎖<sup>くさり</sup>とは、縄を<sup>な</sup>縋うように、縋<sup>よ</sup>られていたのである。

「武蔵っ」

鎌を、手元にとって、分銅鎖<sup>くさり</sup>に相手の刀を巻きつけた穴戸梅軒<sup>ししどばいけん</sup>は、その鎖を張りながらいった。

「——忘れたか、おれを」

「おおっ？」

武蔵は、くわつと見て、

「——鈴鹿山の梅軒だな」

「辻風典馬の弟よ」

「あ。さては」

「知らずに登ったのがためえの運のつきだ。針の山、地獄の谷、亡兄あにの典馬が呼んでるか  
ら早く行け」

絡からみついた分銅鎖は、武蔵の刀から離れなかった。

梅軒は、徐々に、その鎖を手元に手繰り溜ためた。——それは手元にある鋭い利鎌とがまを、次  
に抛ほうってくる用意であることはいうまでもない。

その鎌に対しては、武蔵は、左の小剣を持つて備えていたが、今にして思えば、もし、  
右の大刀のみだったら、すでに身を防ぐ何物もなかったのである。

「ええいッ！」

梅軒の喉のどは膨ふくれて、顔と同じくらいな太さになった。こう満身から一声しぼり出したと  
思うと、鎖は、武蔵の右剣を——体ぐるみ、だツと前へ引き寄せた。

同時に、梅軒の体も、一手繰り鎖ひとたぐを寄せて、踏みこんで来た。

## 六

はからずも、武蔵は今日という今日、一代の不覚を取ったものではあるまいか。鎖鎌という特殊な武器。それに対する予備知識がないではないのに。

かつて。

この穴戸梅軒ししどばいけんの妻が、安濃あのの鍛冶小屋で、その実物を持って、穴戸八重垣流の形をして、武蔵に見せたこともある。

その折、武蔵は、

（——ああ見事）

と、見み恍とれたものである。

妻ですらこのくらいにつかうとしたら良人の梅軒の技わざはどれ程か、と思つたものである。同時に、この滅多に出合わない——天下に使い手も少ない、特殊な武器の性能の怖るべきものだということも、十分に、弁わえきたはずであつた。

鎖鎌についての知識は、自分でも今日まで、知り得たものとしていた。

だが、知識というものが、いかに生死の大事などにぶつかつた咄嗟とつさには、役立たないものか。——そう気づいた時すでに武蔵は、鎖鎌の持つ恐るべき性能に、完全に囚とらわれていた。

しかも、梅軒だけに、彼は全力を向けていられなかった。——背後うしろからも、這い寄る敵を感じていた。

梅軒は、誇つた。

鎖をしぼりながら、にゆつと歯で笑つたようだった。武蔵は、その鎖に絡からまれている自分の大刀を離すことは知っていたが、機を計っていた。

二度目の、えおほッ、と喚わめいた声が梅軒の口から走つた。彼の左の手にあつた鎌は、それと共に武蔵の顔へ飛んで来た。

「オツ！」

武蔵は、右手めでの剣を離した。

鎌は、彼の頭上をかすめ、鎌が消えると、分銅が飛んできた。——分銅そが外れると、鎌が飛んできた。

鎌か、分銅か。

そのどつちに対しても、身を交わすことは甚だしい危険だった。なぜならば、鎌を交わした位置へ、ちようど、分銅の速度が間にあうようになるからだった。

体ぐるみ、武蔵は、絶えまなく位置を移した。それも、目にとまらないほどな迅さをもつてしなければならぬ。——また、後ろへ後ろへと、狙<sup>つ</sup>け廻<sup>つ</sup>っている他<sup>ほか</sup>の敵<sup>ほか</sup>に対しても、身構えを必要とする。

(われ、遂に、敗れるか)

彼の五体は、漸<sup>ぜんじ</sup>次硬<sup>じ</sup>ばってくる。意識ではない、それは生理的<sup>せいりてき</sup>にである。あぶら汗も流れないほど皮膚と筋肉とは、本能的に死闘するのだ。そして髪の毛も総身の毛穴も、そそけ立つのだった。

鎌と分銅に対して何よりの戦法は、樹を楯<sup>たて</sup>とすることだったが、その樹へ近づ<sup>い</sup>く違<sup>ちが</sup>がなかった。——また、その樹の陰には、敵がいた。

——すると何処かで、きやつ、と澄んだ悲鳴がながれた。

「あ。伊織？」

武蔵は、振り向けなかった。肚の底で、葬<sup>とむら</sup>った。——その間にも、眸の前に、鎌が光り、分銅はおどつて跳ぶ。

「くたばれ！」

梅軒の喚わめきではない。

武蔵がいったのでも勿論ない。——武蔵のうしろで何者かが、こう呶鳴ったのであった。  
「武蔵どの、武蔵どの。何でそれしきの敵に、手間どりなさる。——後うしろ巻まきは某それがしが引受けました」

そしてまた、同じ声で、

「くたばれつ、獣けだもの」

地ひびき——絶叫——熊笹を蹴荒す躰音——。何者か、先刻さつきから彼方かなたにかけ離れて、武蔵に助太刀していた者が、ようやく、隔てる相手を踏み破って、武蔵のうしろへその働きを移して来たらしいのであった。

## 七

（——誰か？）

と、疑った。思わざる後ろの味方であった。だが慥たしかめている違いとまなど元よりない。

武蔵は、背を、安心した。

梅軒へ向つて、一方に、心をあつめることができた。

だが、彼の手には、すでに小刀一本しかなかつた。大剣は、梅軒の鎖に、噛み奪られていた。

迫ろうとすれば、梅軒は、すぐ感じて、後ろへ跳ぶ。

梅軒にとつて、何よりも大切なのは、敵と自己との距離だつた。鎌と分銅と、二分された鎖の長さが、彼の武器の長さである。

武蔵にすれば、その距離より一尺遠くてもよい。或は、一尺近くはいつでもよいのである。——だが、梅軒はそうさせない。

武蔵は、彼の秘術に、まったく舌を巻いた。難攻不落の城に当つて、攻めあぐねたような疲れを感じるのである。——だが、武蔵は彼の秘妙な技が、何に依つて起るかを、戦いのあいだに観破つた。それは二刀流の原理と同じだからであつた。

鎖は一本であるが、分銅は右剣であり、鎌は左剣である。そしてその二つの物を、彼は一如に使いこなしているのだつた。

「観た！ 八重垣流つ」

武蔵は、そう叫んだ。その声はもう、自分の勝利を信念していた。——飛んで来た分銅から五尺も後ろへ跳び退さがりながら、右手に持ちかえていた小剣を、敵へ抛ほうりつけたのである。

梅軒の体は、彼を追つて、前へ躍つて来る姿勢にあつた。——飛んで来た小剣に対して、梅軒はそれを払う何物もなかつた。

思わず——あつと、身を捻ひねじたのである。

小剣は、反それて彼方の木の根に突き立つた。——しかし、梅軒の分銅鎖は、彼が、急角度に身を捻ひねじかわしたため、彼自身の体に、ぶんと一卷からき絡みついた。

「ちっ」

悲壮なさげびが、梅軒の口から洩れたか否かの咄とっさ嗟に、武蔵は、

「おうっ」

と、鉄球のように、梅軒の体に向つて、自分の五体をぶつけていた。

梅軒の手は、刀のつかをつかみかけたが、武蔵の手が、その小手を撲なぐつた。彼が離れた刀のつかはもう武蔵の手に握られていた。

（——惜しいっ）



心のうちにそう念じながら、武蔵は、梅軒の大刀をもつて、梅軒を真二つに斬り下げていた。鏢つばから七、八分どころから引き気味に深く割りつけたので、生木を裂く雷らいのように、刀の刃はは脳から肋骨あばらの何枚かまで徹とおつて行つた。

「……ああ」

誰か後ろで、武蔵のその呼吸を、うけ継ぐように嘆声でいった者がある。

「からたけ割り。——初めて見ました」

「……？」

武蔵は、振り顧つた。

四尺ほどの丸棒の杖について、一人の若い田舎いなかもの者が立っている。むっくり肥こえた肩を張り、丸々とした顔に、上気した汗をたたえ、白い歯を見せながら笑っているのである。

「やつ……？」

「わたくしです。——しばらくでござりました」

「木曾むそごんのすけの、夢想権之助むそうごんのすけどのではないか」

「意外でございましょう」

「意外だ」

「三峰権現のおひきあわせだと私は思います。また、わたくしに導母どうぼの杖じょうを授けてくれた  
亡き母の導きもあるでしょう」

「……では、母御は」

「亡くなりました」

茫然たるまま、とりとめもなく、語りかけたが、

「そうだ。伊織が？」

と、武蔵の眼はすぐ、彼の姿を探した。すると、権之助は、

「お案じなさいますな。てまえが救つて、あそこへ登らせておきました」

と、空を指さした。

伊織は、樹の上から、不審そうに二人をじつと見まもっていたが、その時、杉林の奥で、  
ワン、ワン！ と猛犬の吠えたけびが、こだま 嚙して来たので、

「おや？」

と、眼を反そらした。

手をかぎして、伊織が、樹の上から、猛犬の吠えている方角をさがすと、ずっと奥の——杉林の断れ目から沢へかかる途中に、わずかな平地があつて、そこに一匹の黒犬の影が眼にとまる。

黒犬は、樹に繋がれていた。

そして側にいる、女の袂に噛みついていてる。

女は必死で、逃げようとしているが黒犬が離さない。

しかし、袂を断つて、女は転ぶように草原を駆け出した。

梅軒の加勢に来て、さつき伊織を杉林の中で追い廻した法師が、頭から血を出して、槍を杖に、よろめきながら、女の先に歩いてしたが、女は忽ち、傷負坊主を追いこして、麓の方へ、駆け下りて行つた。

——わ、わ、わんツ

先刻から血腥い風が、黒犬を発狂に近い昂ぶりにさせたのかもしれない。餌が声をよび、声が餌をよび、陰々と、その吠えたけびは、止まなかつた。

——と思ううち、遂に、猛犬はその縄を切つて、黒い鞠みたいに、女の逃げた方へ素ツ

飛んで行つたが、その途中に、よろめきよろめき歩いていた傷負ておい法師は、自分へ噛みついて来たと思つたか、いきなり槍を振りあげて、犬の顔をぶん撲つた。

穂先で撲られたので、黒犬の顔が少し切れた。

——きやんツ！

犬は横へ反れて杉林へ駈けこんだ。それきり、吠える声もせず、影も見えなくなつてしまつた。

「先生」

伊織は、上から告げた。

「女が逃げてつたよ。——女が」

「降りて来い、伊織」

「杉林の向うを、まだもう一人、傷負ておいの坊主が逃げて行く。追いかけていけないでもいいんですか」

「もうよい」

——伊織がそこを降りて行つた頃には、武蔵は、夢想権之助の口から、あらましの次第を聞いていた。

「女が逃げて行つたといひますから——きつと今申した、お甲にちがいありません」  
権之助はゆうべ、彼女の茶店の腰掛に眠つており、天佑てんゆうといおうか、端はしなくも、彼らのきよたくの企しごとみ事を、すっかり聞いてしまつたので、すぐ、そう察したのであつた。

武蔵は深く謝して、

「——では、最初に物陰から鉄砲を撃つた者を、打ち殺したのも、其そこ許もとでござつたか」  
「いや、私ではありません。——この杖じょうです」

権之助は、諧かい諧ぎやくを交じえて、笑いながら、

「彼らが討とうと計つても、余人ならぬ貴方あなたのこと、たいがいのことは拝見しておるところですが、鉄砲を持ち出す者があつたので、夜明け前に、ここへ先廻りしていて、鉄砲を持った男の後ろにひそみ、狙いすましたところを後ろから、この杖で打ち殺しました」

——それから二人して、一応そこらの死骸あらたを検めてみると、杖で打ち殺されている者が七名、武蔵が斬つた者が五名、杖のほうが多かつた。

「非は、こちらにないにせよ、ここは神域、不問ではすまされまい。神領の代官へ、自訴いたそうと思う。——その後のことも問いたし、こちらのことも語りたし、ではあるが、落着いた上として、一先ず観音院まで戻ろう」

だが。——その観音院まで戻らぬうちに、神領代官の役人たちが、谷川橋に屯たむろしていたので、武蔵一人、それへ自訴した。役人たちは多少、意外な体ていだったが、即座に、

「縄を打て」

と部下へ命じた。

（——縄を？）

武蔵は、予期しなかったことに驚いた。自訴した者に、無法だと思ふ。神妙な仕方を、暴むくで酬むくわれた気がした。

「歩けッ」

すでに、囚人の扱いである。武蔵は怒いかつたが、間に合わなかった。役人たちの身支度からして物々しかったが、行くほどに途々みちみちむろ屯たむろしていた捕手の夥おびただしさに驚いた。

門前町まで来るうちに、百人以上にもなつて、縄付きの武蔵ひとりとえはたえを十重二十重とえはたえに警固して行くのだった。

## 下り荷駄

「泣くな、泣くな」

権之助は、その泣き声を、抑えつけるように、伊織の顔を、懐中へ抱きしめた。

「泣かいでもいい。——男じゃないか、男のくせに」

なだめ賺すと、

「男だから……男だから、泣くんない。……先生が捕まって行った。——先生が縛られて行った」

と、権之助の懐中を抜け、なお大きな口をあいて、空へ向って泣いた。

「捕まったのじゃない。武蔵どのから、自訴なされたのだ」

と、いつてみたが、権之助も心のうちでは不安だった。

谷川橋まで出向いていた役人の群れが、なにしろ、物々しく殺気立っていたし、その他、十名、二十名ずつの捕手が、幾組屯していたろうか。

(神妙に、自訴して出た者を、あんなにしないでも)

と、思うしました、疑われもする。

「さ、行こう」

伊織の手を引つ張ると、

「嫌っ」

伊織は、首を振つて、まだ泣いていたように、谷川橋から動かないのである。

「はやく来い」

「嫌だ。嫌だ。——先生を、呼んで来てくれなければいやだ」

「武蔵どのは、すぐお帰りになるにきまつている。——来なければ、置いて行ってしまうぞ」

——でもなお、伊織は動かなかつたが、その時、先刻見た猛犬の黒犬が、あの杉林のあたりの生血を啜り飽いたような顔して、勢いよくそこを駈け抜けて行つたので、

「あつ、おじさん！」

と、権之助のそばへ飛んで行つた。

権之助は、この小がらな少年が、かつては、曠野の一軒屋にただ独りで住み、父の死骸を葬るのに、ひとりで持てないため、その亡骸を自分で刀を研いで二つに斬ろうとしたくらい、不敵なたましいの持主とは知らないのです、



「くたびれたのだろ」

と、慰めた。

そして、

「怖こわかつたろう。むりもない。——負こぶつてやろうか」

と、背中を向けた。

伊織は、泣きやんで、

「ああ」

と、甘えながら、彼の背中へ抱きついた。

祭は、ゆうべで仕舞だった。あれほどな人出が、木の葉を掃いたように下山して、三峰権現の境内も、門前町のあたりも、ひっそりしていた。

群衆の残して行った竹の皮や紙屑が、ただ小さい旋風つむじに吹かれていた。権之助は、ゆうべ床しょうぎ几を借りて寝た犬茶屋の土間の中を、そつと覗のぞきながら通った。

すると、背中せなかの伊織が、

「おじさん。——さつき山にいた女のひとが、この家にいたぜ」

「いる筈だ」

権之助は、立ちどまって、

「武蔵どのが縛られるくらいなら、あの女が先に捕ま<sup>つか</sup>って行かなければ嘘だ」

といった。

たつた今、家へ逃げ帰って来たお甲は、帰るとすぐ、有合う金や持物を身につけ、旅へ走る身<sup>みこしら</sup>拵<sup>あわ</sup>えに慌<sup>あわ</sup>ただしかつたが、ふと、門<sup>かど</sup>に立った権之助の影に、

「畜生」

と、家の中から振り向いてつぶやいた。

## 二

伊織を負ぶつたまま、軒下に立った権之助は、お甲の憎怨にみちた眼へ、

「逃げ支度かね」

と、笑い返した。

奥にいたお甲は、憤<sup>む</sup>つと、立って来て、

「大きなお世話というものだよ。——それよりも、おい、若<sup>わかぞう</sup>蔵」

「ホ。何だ」

「よくも今朝は、わたし達の裏を搔いて、武蔵へよけいな助太刀をおしだね。そして、わたしの亭主の藤次を打ち殺したね」

「自業自得。しかたがないというものだろう」

「覚えておいで」

「どうする」

権之助が、いうと、背中から伊織までが、

「悪者っ」

と、ののし罵った。

「……………」

お甲はついと奥へはいつてしまつて、そこからせせら笑つた。

「わたしが悪者なら、おまえたちは、びようどうぼう平等坊の宝蔵破りをしたおおぬす大盗ツ人とじゃないか。

いえ、その大盗ツ人の手下じゃないか」

「何」

背中の伊織を下ろして、権之助は土間へはいつて来た。

「盗賊だと」

「白々しい」

「もう一度、申してみろ」

「わかるよ、今に」

「いえっ」

むずと彼女の腕をつかむと、お甲はいきなり隠していたあいくちヒ首を抜いて、権之助へ突きかけて来た。

例の杖じょうは左に持っていたが、それも使うに及ばず、ヒ首をも腕ぎ取って、お甲を軒先へつきとばした。

「山の衆つ、来てくださいいっ。宝蔵破りの仲間がつ——」

何で先刻からそういうのか、とにかくそう叫びながら、お甲は往来へまろ転び出した。

権之助は、くわつとして、も腕ぎ取ったヒ首を、その背へ向って、投げつけた。——ヒ首は彼女の肺を貫いた。きやツと、あけ朱になつて、前へ仆れた。

——すると、何処にもぐ潜っていたのか、猛犬の黒は、一声、大きく吠えながら、彼女の体へとびかかった。そして傷口から流れる血をすすつては、陰々と、雲に向って吠えた。

「あつ、あの犬の眼」

伊織はおどろいた。それは、発狂の相をあらわしていたからである。

だが、犬の眼どころではない。この山上の人間は、今朝から皆、それに近い眼いろをもつて、何事か、騒いでいたのである。

夜も昼も、人と燈と神楽ばやしに熱鬧していた祭の混雑に乗じて、ゆうべの深夜から今朝までの間に、総務所の平等坊の宝蔵が、何者かのために、破られていたというのである。

勿論、外部の仕業であることは明瞭で、宝蔵のうちの古刀とか鏡とかには異状はなかったが、多年蓄えられてあつた砂金だの海鼠形なまこの物だの、貨幣となっているものだのを合せておよそ何貫目というかねが一度に失われてしまったのだという。

単なる噂ではないらしい。この山上に、さつきも、あれ程な役人や捕吏が来合せていたということも、思い合せば、原因はその方にあつたかもしれないのである。

いや、もつと顛然けんぜんたる証拠には、お甲が、往来で揚げたわずか一声で、もうわらわらと駈け寄つた附近の住民が、

「ここだ。この中だ」

「宝蔵破りの徒党が逃げこんでいる」

と、遠巻きにして、得物を持つたり、石を拾って、家のうちへ投げこんだりし始めた。それを見ても、山上の住民の興奮が、ただならぬものであることがわかる。

### 三

山づたいに二人はようやく逃げのびて来たのであった。そこは秩父ちちぶから入間川の方へ降くだる正丸峠の上だった。ここまで来るとやっと、自分たちを、

(宝蔵破りの盗賊の分類)

と、竹槍や猪鉄砲ししでつぽうで追う住民も後に見えなくなった。

権之助と伊織とは、そうして自分らの安全は得たが、武蔵の安否はわからなかった。いや、よけい不安が濃くなった。今になって考えると、武蔵は、宝蔵破りの巨魁きよかいと間違われて、縄をかけられたものである。そして彼が、べつなことで、自首した行為をも穿はきちがえられて、秩父の獄へ曳かれて行ったに相違ないと思われた。

「おじさん、武蔵野が遠くに見えて来たよ。だけど、先生はどうしたろうな。まだ役人に

捕まっているかしらう？」

「ウむ……。秩父の獄舎ごくしやに送られて、今頃はさぞ難儀な目に遭っておいでだろう」

「権之助さん。先生を助けてあげることができないの」

「できるとも。むじつの罪だ」

「どうか、先生を助けてあげてください。この通りおねがいます」

「この権之助にとつても、武蔵様は、師と同様なお方。頼まれなくても、きっとお助けする考えでいるが——伊織さん」

「え」

「小さいおまえがいては足手まといだ、もうここまで来れば、武蔵野の草庵とやらへ、一人でも帰れるだろう」

「あ。帰れることは帰れるけれど……」

「じゃあ。一人で先に戻っておれ」

「権之助さんは？」

「おれは秩父の町へもどつて、武蔵様のご様子をさぐり、もし、役人どもが理不尽にいつまでも先生を獄につないだまま、むじつの罪に墜おとし入れようとするならば、獄を破つても、

お救いして来なければならぬ」

素晴らしいながら、権之助が抱いていた例の杖を、大地について見せると、伊織は疾くからその杖の威力を知っているのです、一も二もなくうなずいて、ここから別れて一人武蔵野の草庵へ帰っていることを承知した。

「賢い、賢い」

と、権之助は賞めて、

「無事に先生を救い出して、一緒に帰る日まで、おとなしく、草庵に留守をして待つてい  
るのだ」

そう諭すと、彼は、杖を小脇に持ち直し、再び秩父の方角へ向って行ったのであった。  
で、伊織は、独りぼっちになった。けれど寂しいなどは思わない。元々、曠野で育つた自然児である。それに三峰へ来る時と同じ道に戻って行くのであるから、道に迷う心配もなかった。

ただ、彼はやたらに眠かった。三峰から山づたいに逃げ廻って来るあいだ、ゆうべは一睡もしていなかった。栗だの菌だの小鳥の肉だの、喰べ物は喰べているが、峠の上へ出るまでは、まったく眠りをわすれていたのである。



秋の陽をほかほか浴びて、黙って歩いてゆくうちに、彼は慾も得もなく眠くなつてしまひ、ついに、坂本まで来ると、道わきへはいつて、草の中へごろんと横になつてしまった。伊織の体は、何か、仏様の彫つてある石の陰にかくれていた。やがてその石の面おもてに西陽にしびのうすれて来る頃、石の前で、誰かひそひそ話している声が聞えた。伊織は、その気配にふと目をさしましたが、ふいに飛び出すとその人が驚くにちがいないと思つて、寝たふりをつづけていた。

#### 四

一人は石に、一人は木の切株に腰かけて、しばし休んでいる体ていなのである。

そのふたりの乗用とみえ、少し離れたところの樹に、二頭の荷駄が繋つないであつた。鞍には、二箇うるしおけの漆桶うるしおけが両脇うらに積んであつて、一方の桶には、

西丸御普請御用

野州御漆方

と、札ふだに書いてある。

その打札から考えをすすめれば、兩名の侍は、江戸城の改築に關係のある棟梁とうりょうの組下か、漆奉行うるしぶぎょうの手の者かと思われる。

だが、伊織が草の陰からそつと覗のぞいてみたところでは、その二人とも険けわしい眼相を備えていて、なかなか悠長な役人面づらなどとは、骨こつがらもちがう。

一方はもう五十を越えている老武士で、これは体つきも肉づきも、壮わかいものをしのぐばかり頑健ひもしたなのだ。菅すげの一文字笠すげに夕陽がつよく反射しているため、その紐下ひもしたの顔は、暗くてよく見えない。

また、それに向いあっている侍の方は、十七、八歳の瘦せぎすな青年で、前髪立ちのよく似あう顔に、蘇芳染すおうぞめの手拭すけを頬かぶりにして顎あごで結び、何か、うなずいては、にこにこ笑つて見せているのである。

「どうです、おやじ様、漆桶うるしおけの考えは、うまく行つたでございませうが」

その前髪がいうと、おやじ様とよばれた一文字笠は、

「いや、貴さまもだいぶ、巧者こころしやになつたな。さすがの大蔵も、漆桶までは気がつかかなかつた」

「だんだんのお仕込みでございますから」

「こいつ、皮肉なことをいう。もう四、五年も経ったら、今にこの大蔵のほうが、お前に顎あごで使われるようになるかもしれない」

「それは当然そうなりませうな。若い者は抑えても伸び、老いゆく者は、焦心あせつても焦心つても老いてゆくばかりで」

「焦心つっているとみえるかの。貴さまの眼から見ても」

「お気のどくですが、老先おいさきを知って、やろうとなさっているお気もちが、傷いたましく見え  
まする」

「わしの心を観み抜ぬ抜くほど、貴さまもいつの間にか、いい若い者になったものよな」

「どれ、参りませうか」

「そうだ、足もとの暮れぬうちに」

「縁起でもない。足もとはまだ十分に明るうございます」

「はははは、貴さまは血気に似あわず、よく御幣ごへいをかつぐの」

「そこはまだ、この道に日が浅いので、十分、舞台度胸ぶたいどくちょうがついていないせいでしょう。風の音にも、何となく、そわそわされてなりません」

「自分の行為を、ただの盗賊と同じように考えるからだ。天下のためと思えば、怯ひるむ気きな

どは起らぬものじゃ」

「いつもいわれるお言葉なので、そう思つてみますものの、やはり盗みは盗みに相違ございません。どこやら後ろめたいものに襲われまする」

「何の、意気地のない」

年老としとつた方の一文字笠は、多少自分の心にも、そうした怯おびえがあるらしく、忌々いまいましげに、自分へいうとも連れの者へいうともなくつぶやいて、漆うるし桶おけのくくり付けてある鞆へ乗り移つた。

頬かぶりの前髪も、身がるく鞆へとび乗つた。そして、先に出ようとする馬の前を追い越し、

「露はらいは、先に出生しよう。何か見えたら、すぐ合図いたしますから、ご油断なく」と、後の荷駄いましを警めた。

道は、武蔵野の方へ向つて、南へと、降くだるばかりで、馬の頭かしらも、笠も頬かぶりも、夕陽の陰へ、沈んで行つた。

うるしおけ  
漆桶

石のうしろに寝ていた伊織は、はからずも二人の話をそのまま聞いていたのであるが、ただ怪しげなと不審を起しただけで、話の内容を解くことはできなかつた。

だが、荷駄に乗った二人がそこを立つと、伊織もすぐ後から歩き出した。

「……？」

一、二度、怪しむように、先の二人は馬の背から彼を振向いたが、年齢や姿を見極めて、警戒するに足る程な者でないと考えたか、それから後には、少しも意に介していない様子であつた。

それと間もなく夜になって、後あとも前さきも見えなくなつて来た。そして道は、武蔵野の一端に出るまでは、ほとんど、降くだりどおしであつた。

「才、おやし様。あれに、扇あふぎ町屋の灯が見えはじめて来ましたぞ」

と一方の、若い頬かぶりをした前髪の影が、鞍の上から指さした頃——ようやく道もやや平坦へいたんになり、行く先の平野には、入間川の水が、闇の中に解といた帯のように蜿うねつてい

た。

先へ行く二人には何の警戒心もなかったようだが、後からついてゆく伊織は、子ども心にも、細心な気をくぼって、二人に怪しまれないように注意していた。

（あの二人は泥棒にちがいない）

と——それだけは彼にも分っていたからである。

盗賊というものが、どんなに怖いか——これは彼の生れた法典村が一年おきに匪賊ひぞくに襲われて、その後は一箇の鶏の卵も、一升の小豆あずきもなくなってしまう惨状なので、よく知りつくしていたし、また、平気で人間を殺すものだというような漠ぼくとした観念が幼少から沁しみついていたので、見つかったら殺されるような気がするのであった。

それほど怖いものならば、なぜ伊織は、はやく横道へでも曲がってしまわないか——と疑われるが、その彼は、却かえって反対に、二つの荷駄の影にくつついて、何処までも尾ついてゆくのであった。その理由はごく簡単であつて、

（三峰の権現さまの宝蔵くらをやぶって、たくさんなおかねを盗み出した盗賊は、きつとこの二人にちがいない）

と、心のうちで、決めてしまっているからである。

さつき石の後ろで、怪しいと思つたとたんに、伊織の頭にひらめいたのはそういう考えであつた。少年の直感には、それをまた、反覆してみたり他を顧みたりしている迷いが無い。てつきりこいつだと思ひこんだらもう一途に、この二人こそ、三峰の怪盗でなければならなかつたのである。

やがて彼も、荷駄の影も、扇町屋の宿場の中を歩いて来た。後ろの荷駄に乗っている一文字笠は、先へゆく頬かぶりの前髪男へ手をあげて、

「城太、城太。この辺で腹を拵えて行こうではないか。馬にも飼糧をくれねばならぬし、わしも、一ぷく煙草がつけたい」

と、鞍の上でいった。

うす暗い燈のもれてゐる飯屋の外に、荷駄を繋いで、二人は中へはいった。若い方の前髪男は、入口の端に腰かけて、飯をたべながらも、たえず荷駄の背を見張つてゐるようであつた。そして、自分が喰べ終るとすぐ外へ出て来て、こんどは二頭の馬に、干糧を飼つていた。

その間、伊織もよそで買喰いをしていた。そして荷駄の二人がまた、宿場の先へ進んで行くのを見ると、口をうごかしながら、後ろから追いかけて行つた。

道はまた、暗くなつた。しかし武蔵野の草から草の平地である。

鞍の上から、鞍の上を顧み合つて、荷駄のふたりは、時々話しかけてゆく。

「城太」

「はい」

「木曾の方へ、前ぶれの飛脚は出しておいたろうな」

「手筈しておきました」

「では、首塚の松へ、木曾の衆が来て、こよい待ち合せているわけだの」

「そうです」

「時刻は」

「夜半よみかといつておきましたから、これから参れば、ちようどよい頃になりましよう」

老いたるほうは連れの者を城太とよび、若い方は一方を、おやじ様とよんでいる。

(この盗賊は親子だろうか)



伊織はそう考えて、なおさら怖ろしく思った。そしてもとより、自分の力では到底捕まえることはむずかしいが、二人の帰ってゆく住家すみかをつきとめて、後から官へ訴えて出れば、自然、武蔵のむじつの罪もはれて、牢から解かれて来るにちがいない——と信じるのであった。

彼の考えているように、そううまく行くかどうかは疑問だが、三峰の怪盗と直感した彼の童心のひらめきは、そう見当違いなものでもないらしい。

あたりに人もなしと思つて、大声で語り合つてゆく話しぶりといい、また、あれからのこの兩名の行動といい、いよいよ怪しい節ばかりなのである。

川越の町はもう沼みたいにしんど眠りに落ちていた。灯のない屋なみを横に見て、二頭の荷駄は首塚の丘へのぼつて行つた。登り口の道ばたに、

### 首塚の松

このうえ

と、標しるした石があつた。伊織はその辺から崖の中へ紛れ込んだ。

丘の上には、巨おおきな一本松がみえる。その松に一頭の馬が繫つないであつた。そして松の根かたに三人の男が——旅支度をした牢人ていの者どもが——膝を抱えて待ちあぐねていた

が、ふと立ち上がって、

「おう、大蔵様だ」

と、登つて来た二頭の荷駄を迎えて、凡ただならぬ親しみで久きゆう闊かつの情を叙のべたり、無事を歎なげひ合つたりしているのであった。

やがて、夜の明けぬうちにと、何事かいそぎ始めて、大蔵のさしずのもとに、一本松の下の巨おお石いしをとりけると、一人は鋏くわをもつてそこを掘り始めた。

埋うづめておいた金銀が、土と共に掘り出された。盗むたびに、ここへ隠いんとく匿とくしておいたものとみえ、それは夥おびただしい額であった。

前髪に頬かぶりの——城太とよばれた若者もまた——ここまで乗つて来た荷駄の背から、漆うるし桶おけをみな降ろし、蓋ふたを破つて、土のうえに中の物をぶちまけた。

漆桶の中から出たものは漆ではなかった。三峰権現の宝蔵から影を隠した砂金やなまこである。穴の中から掘り出したものと、それとを合せば何万両という額にのぼる金銀がそこに積まれたのであった。

さて、それをまた、幾つものかますに分けて詰あな込なむと、三頭の馬の背に縛くしつけて、空からになった漆うるし桶おけや、不用の物を、すべて坑あなの中へ蹴あ込み、きれいに土をかぶせてしまつ

た。

「これでよし、これでよし。——まだ夜明けにはだいぶ間がある。まあ、一ぶくつけようか」

大蔵は、そういつて、松の根かたに坐りこみ、ほかの四名も、土を払って車座になった。

三

信心の遍へんれき歴にといつて、木曾のお百草問屋の大蔵が、奈良井の本家を出かけてから、ことしで足かけ四年目になる。

彼の足跡そくせきは関東にあまねく、神社仏閣のある所で、奈良井の大蔵の寄進札を見かけない霊場はないくらいだが、この奇特人きせきじんが、その金をどこから運んできているかは、誰も詮議せんぎをしてみた者はない。

のみならず、去年あたりからは江戸城下の芝あたりに居宅をもち、質店を構え、町の五人組衆の一人にまでなりすまして、町内の信望もあつい彼である。

その大蔵が、先には、本位田又八を芝浦の沖へ誘つて、新將軍の秀忠を狙撃しないかと、

金で惑わして喚いたり、今はまた、三峰権現の祭に乗じて、宝蔵の金銀を盗み出し、首塚の松の根に埋けておいた数年間の稼ぎをも併せて、かますに詰めこんで三頭の馬の背へぎつしり背負い込ませているのである。

世の中はおそろしい。およそ分らぬものは人間の表裏である。とはいえ、すべてをそう疑ぐつていたら限りもなくなって、遂には、自分というものまで懷疑しなければならなくなってしまう。

そこで、聡明であろうと、誰も心がけるが、たまたま、その聡明を欠いている又八などが、敢なくも大蔵の巧言にのせられて、金のために、おそろしい冒険へみずから向って行ってしまった。

恐らく、又八は今頃は、もう江戸城の中にいるだろう。そして大蔵と約束したとおり、槐の木の下に埋けてある鉄砲を持ちだして、秀忠將軍を一発の下に撃つ日を待っているにちがいない。

それが自己の破滅の日とも知らずに。

何にしても、大蔵は怪人物である。又八の如きが他愛なく囷になったのは当然でさえある。朱実も今は、彼に奉じる特殊な側女となつてい——もつと驚くべきことには、武

蔵が、手しおにかけて数年も愛育して来た少年城太郎までが、いつのまにか、年ばえも十八の前髪振りのいい青年になって、しかも大蔵のことを、

——おやし様

と、敬称するような境遇になり果てている事実である。

いかにはいえ、盗賊の彼につかえて、おやし様と呼ぶほどな人間になったと——その城太郎の変りようを知ったら、武蔵よりは、あのお通つうがどんなに嘆くことだろうか。

それはとにかく。

くるま座になった五名は、半刻近くもそこでいろいろな評議をこらしていた。その結果、奈良井の大蔵はもうこの辺で木曾へ姿をかくし、江戸へは戻らぬほうが安全だろうということになった。

しかし芝の質店の方には、家財などはともかく、焼いて捨ててしまわなければならない書類あけみなどもあるし、朱実あけみも残して来たことだから、誰かその始末に一人はやらなければならぬがというと、

「城太がよい。それには、城太をやるがいちばんです」

と、異口同音に決まってしまったのである。

で、やがて。

かますを積んだ三頭の馬に、大蔵を加えた四名の木曾の衆は、まだ夜明け前の暗いうちに、そこから甲州路のほうへ反それて立ち去つてしまい、城太郎はただひとり、江戸のほうへ向つて行つたのであつた。

丘のうえには暁あけの明みょう星じょうが、まだはつきり光つていた。すべての人影が去つた後で、そこへ飛び出した伊織は、

「さあ、どっちへ尾ついて行つたらいいだろ？」

と迷つた目をして、まだまだどっちを眺めても真暗な、漆うるし桶おけの中みたいな天地を見廻まわしていた。

兄弟きょうだい弟子でし

一

きょうも秋の空は澄みきつている。つよい陽ひが皮膚の下まで沁みこむように思える。夜

盗などの仲間の者は、およそこうした清澄な白日の下では、大手を振って歩けるものではないが、城太郎には、そんな暗い陰がすこしもない。

彼はあだかも、これからの時代に、大いに意志を展べようとする理想にみちた青年のごとく、武蔵野の昼をわがもの顔して歩いて行くのだった。

ただ時々、城太郎の目が、何か気にするように後ろをふり向いた。それとて、決して、うしろ暗い自分の陰に脅えている目ではなく、妙な少年が、今朝、川越を出た時から、のべつ自分の後からちよこちよこ尾いて来るからで、

(迷子かしら)

と考えたが、なかなか迷子になるような薄ぼんやりな顔つきではないし、

(何か用でもあるのか)

と待っていれば、どこかに影を潜めてしまつて、後から近づいて来る様子がない。

そこで城太郎も、これは油断がならないと思ひだし、わざと道のない尾花の叢へかくれて、少年の挙動を窺っていると、ふいに先の姿を見失つた伊織は、

「……おやつ？」

と、そこへ来るなり狼狽の眼をせわしくうごかし、頻りと、城太郎の影をさがしてい

る様子なのである。

城太郎はきのうのように、例の蘇芳染すおうぞめの手拭を頬かむりに顎あごでしばっていたが、尾花の中からその時すつくと立つて、

「小僧」

と、ふいに呼びかけた。

小僧小僧とよく呼ばれたのは、つい四、五年前までの城太郎自身であつたが、今は、ひとをそう呼ぶような背丈に彼もなつていた。

「……あつ」

伊織はおどろいて、無意識に逃げかけたが、所詮、逃にげ了おせないことを知つたとみえて、

「なんだい？」

平気な顔して——わぎと先の方へとことこ歩き出して行つた。

「おいおい、何処まで行くんだ。おいチビ、待たないか」

「何か用？」

「用は、そつちにあるんじゃないか。かくしてもだめだ。川越つげからおれを尾行つげて来たのだ



ろう」

「ううん」

——首を振って、

「おら、十二社じゅうにそうの中野村まで帰るんだよ」

「いいや、そうじゃない。たしかにおれを尾行つっけて来たに違いない。いったい、誰に頼まれたかいえ」

「知らないよ」

逃げツ尻ちりになるのを、城太郎は手をのばして、その襟えりもとをつかみよせ、

「いわないか」

「だって……だっておら……何も知らないんだもの」

「こいつめ」

と、すこし締めて、

「おのれは、役所の手先か誰かに頼まれたに違いあるまい、密偵いぬだろう、いや密偵の子だろう」

「じゃあ……おらが密偵の子に見えるなら……おまえは盗ぬすツ人とかい？」

「何」

ぎよつとして、城太郎が、その顔を睨めつけると、伊織は、彼の手を外して、首と体を地へすくめたかと思うと、ぱつと風を起して、彼方へ逃げ出して行った。

「——あつ、こいつ」

城太郎もすぐそれを追う。

草の彼方に、土蜂の巣をならべたような藁屋根が幾つか見える。野火止の部落であつた。

## 二

この部落には、鍛鍛冶が住んでいるとみえて、どこかで鎚の音が、かあーん、てえーん、長閑に聞える。赤い秋草の根には、土龍の掘りちらした土が乾き、民家の軒に干してある洗濯物のしずくがほとほと落ちていた。

「泥棒つ、泥棒つ」

道ばたにふいに、呶鳴っている子があつた。

干柿の吊るしてある軒下だの、暗い馬小屋の横からだの、わらわらと人が駈けて出た。

伊織はその人々へ、手をふり廻して、

「彼方むこうから今、おらを追いかけて来る頬かぶりの男は、秩父ちちぶで権現様の宝蔵破りをした泥棒のひとりだから、みんなして捕まえてください。——あら、あら、来たよ来たよこつちへ」

と、大きな声して告げた。

部落の人たちは、余りに唐突な彼のわめきに、最初はあつけ気にとられていたが、伊織の指さす方を見ると、なるほど、蘇芳染すおうぞめの手拭を顎あごで結んだ若い侍が、此方こなたへ向つて宙を飛んでくる。

けれども百姓達は、依然として、その近づいてくるのをただ見ているだけの様子なので、伊織はまた、

「宝蔵破り、宝蔵破り。嘘じゃない。ほんとにあれば、秩父の大泥棒の片割れだよ。はやく捕まえないと逃げちまう！」

と、さげんだ。

そうして伊織は、勇気のない兵を指揮する将みために、声をからしたが、部落の穏やかな空気はなかなか震動しない。暢のんびりした顔をならべた百姓たちは、ただ彼の叫びに、

うろたえの眼と、怖々した挙動をすこし見せたばかりで、手を拱こまねいているのだった。

そのうちにもう城太郎のすがたは、すぐ眼の前へ来てしまったので、伊織はいかんともする術すべがなく、栗鼠りすのようにすばやくどこかへ隠れこんでしまったらしかつた。——それを城太郎は知っていたか知らないか分らないが、じろりと、道の両わきに居並ぶ部落の者を眺めながら、ここでは足もゆるやかに、

(手出しをする者があるなら出て来い——)

と、いわんばかりに落着きすまして、悠々と通り抜けて行ったのである。

その間、部落の者は、息もしないで、彼の姿を見送っていた。宝蔵破りの泥棒とどなった声を聞いているので、どんな兇猛な野武士かと思っていたらしいが、案に相違して、まだ十七、八の目鼻だちもよく、凜りり々しい青年なので、何かのこれは間違いにちがいないと、先にどなった少年の悪戯わるさをむしろ憎んだほどであった。

一方の伊織は、あんなに声をからしても、誰も、泥棒に向おうとする正義の人がいないので、大人の卑劣さに愛想をつかしたが、さりとて、自分の力ではどうにもならないことも知っているの、これは早く中野村の草庵に帰ってあの近所の懇意な人々にも告げ、官へも訴えて、捕まえてやろうと考えた。

で、野火止のびどめの部落の裏から、しばらくは畑や道のない草むらを急いだ。そして程なく、覚えのある杉ばやしを彼方に見、もう十町も行けば、いつぞやの暴風雨あらしにこわれた草庵の跡——と、心をおどらして駈け出したのである。

すると彼の前に、横手をひろげた者がある。横道からふいに出て来た城太郎であつた。伊織はとたんに、頭から水を浴びたような気がしたが、ここまで来ればもう自分の国のように気が強かつたし、逃げてもだめだと思つたので、跳び退のきながら、腰に帯びている野の差刀ざしを抜きはらい、

「ア、畜生」

と、獸けものが出て来たように、空くうを切つて、罵ののしつた。

### 三

刃物を抜いたにしろ、多寡たかの知れたチビと見くびつて、城太郎は無手でいきなり跳びかかった。

襟がみをつかんでしまつつもりであつたが、伊織は、

「——ちイ！」

と、さけびながら、城太郎の小手をすりぬけて、横へ十尺も跳びのいてしまった。

「いぬの子！」

城太郎は、いまいま忌々しい顔をして、迫って行ったが、ふと、自分の右手の指先から、たらと温いものが垂れるので、何気なくひじ肱を上げてみると、二の腕あたりに二寸ばかりの太刀傷をいつのまにか受けていたのであった。

「ヤ。やったな」

城太郎は伊織を睨む目を新たにした。伊織は、いつも武蔵から教えられた通りにとう刀を構えた。

眼。

眼。

眼。

いつも師からやかましくいわれている力が、伊織のひとみへ無意識にぐつと上がった。顔じゆうを眼にしたような伊織の顔だった。

「生かしておけない」

睨み負けしたように城太郎が呟つぶやいて、かなり長い腰の刀ものを抜いて見せた時である。まさかと、そうなつてもまだ、幾分多寡たかをくくつていた伊織が、最初に敵の小手を切ったことに、すっかり自信をもつたらしく、ぱつと野差刀のざしを振りかぶつて、斬りつけて来た。

その跳びつき方も、常々、武蔵へかかつてゆく仕方と同様であるから、それは受けはしたものの城太郎には、意外な圧倒感を、腕にも精神的にも、受けたことに間違いない。

「生意気なつ」

もう城太郎も全力だった。殊にどうしてか、宝蔵破りの件を知っているこのチビは、自分たち一類のためにも生かしておけないと思つた。

躍起になつて、斬りつけてくる伊織の攻勢を無視して、城太郎は、まっ向に一太刀あびせてやろうと押して行つた。けれど、伊織の敏びんしやう捷とは、はるかに城太郎に勝るものがある。

「蚤のみみたいいな小僧だ」

と、城太郎は思つた。

そのうちに、伊織はふいに駄け出した。逃げるのかと思うと、踏み止とどまってまたかかってくる。こんどは城太郎が意気ごむと、巧みに外はずして、また逃げるのだった。

賢さかしくも伊織はそうして、徐々に敵を村のほうへ誘つて行こうとするらしいのである。そして遂に、草庵の跡に近い雑木林の中へまで連れこんだ。

西陽はとうに薄れかけていたので、林の中はもうじつとりと夕闇がこめていた。先へ走りこんだ伊織を追つて、城太郎はするどい血相をもつて追いかけて来たが、彼のすがたが見当たらないので、一息つきながら、

「チビめ、どこへ潜もぐつたか」と、見まわしていた。

すると、側の大きな樹のこずえから、樹皮の塵ちりがはらはらとこぼれて、彼の襟えりくびさわに触つた。

「そこだな」

と、城太郎は、宙を見あげてどなった。こずえの空はこんもりと暗く、白い星が一つ二つ見えるだけだった。

#### 四

梢こずえの上からは何の答えもない。雪しゆくが降つて来るだけだった。城太郎は思案しあんしていたが、



伊織が逃げ上がっていることは確かと見極めたらしく、おお巨きな幹へ抱きついたと思うと、注意ぶかく攀よじ登って行った。

果たして、がさつと樹の空で何か動いた。

追い上げられた伊織は梢の頂いただきへ向いて猿みたいに這ったが、もうそれから先は、伝つてゆく枝もなかった。

「小僧つ」

「……………」

「翼がなければもう逃げられぬぞ。生命いのちを助けてくれといえ。そしたら、助けてやらぬこともない」

「……………」

梢またの股に、伊織の影は、小猿みたいに縮まっていた。

そろ、そろ、と下から城太郎は登り詰めて行った。だが、飽くまで伊織が黙っているの  
で、その足のあたりへ手を伸ばし、踵かかとをつかもうとしたのである。

「……………」

伊織はなお、黙ったまま、もう一つ上の枝へ足を移した。で、城太郎は、彼が足を退のけ

た枝へ両手をかけ、

「うぬ」

と、身を伸ばしかけると、伊織は待つていたように、右手に隠していた刀で、その横枝の股を発矢はつしと上から撲った。

生木の枝は、刃やいばを当てられると共に、城太郎の重量めかたを加えて、めりツと大きな響きを発し、あツと彼の影が、木の葉の中でよろめいたと思うと、幹を離れた枝と城太郎の体は、一つになつてどきツと大地へ落ちて行つた。

「どうだ、泥棒」

伊織は、宙からいった。

傘をひらいて落ちたように、木の枝が、木の枝に障さえぎられつつ墜ちて行つたので、城太郎はどこも大地に打ちはしなかつたが、

「やったな、よくも！」

と、ふたたび宙を睨むと、今度は豹ひょうが木を攀よじてゆくような勢いで、伊織の足の下に迫つた。

伊織は、刀を下へ向けて、滅茶滅茶に枝の間をふり廻していた。双手もろてが使えないだけに、

城太郎も無碍むげにはそれへ近づけなかった。

体は小さいが、伊織には智がある。年齢としが上だけに、城太郎は相手を呑んでいる。といつて、こんな樹の上では、いつまで埒らちはつかかなかつた。いや、体の小さい伊織のほうが、位置からいつてもかえつて利があつた。

そうしているうちに、この林の杉木立の彼方で、尺八をふく人間があつた。もちろんその人間が見えるわけでもないし、何処いすこと定かにも分らないが、とにかくその音ねが二人の耳にとどく距離のうちで、その夜、尺八をふいている者があることに間違いはなかつた。

伊織も城太郎も、その音を聞くと一瞬、争いいをやめて、真つ暗な木の葉の宇宙で、毛穴から呼吸いきをし合つていた。

「……チビ」

城太郎は、沈黙から回かえると、ふたたび伊織の影へ向つて、こんどは少し諭さとすようにいつた。

「見かけによらない強情なところは、感心なものだといつておこう。誰にたのまれて、おれの後を尾行つげたのか、それさえ白状したら生命いのちは助けてやるがどうだ」

「あかといえ」

「何」

「こう見えても、宮本武蔵の一の弟子、三沢伊織みさわとはおいらの名だ。泥棒に生命いのち乞いなどしたら、先生の名をよごすじやないか。あかといえ。ばか」

## 五

城太郎はびつくりした。その大木から大地へ抛ほうり出されたさつきよりも驚いた。余り意外だったので、自分の耳を疑ったくらいだった。

「な、なんだって。もう一ぺんいつてみる、もう一ぺん」

そう訊き直す彼の言葉が、度を外はずしてふるえていたので、伊織は、自分の名乗なおりに誇りすら持って、

「よく聞け、宮本武蔵の一の弟子三沢伊織といったのだ。おどろいたか」

「おどろいた」

城太郎は、神妙かぶとに兜をぬいだ。そして、なかば疑いと親しみとを持って、

「おいっ、お師匠さまは、ご丈夫か。そして今は、どこにいらっしやるのだ」

「なんだと」

こんどは伊織が気味わるがつて、じりじりと寄つて来る彼を、避けながら、

「——お師匠さまだと。武蔵さまは、泥棒の弟子など持つていやしないぞ」

「泥棒とは人聞きが悪い。この城太郎は、そんな悪心は持つていない」

「エ。城太郎」

「ほんとに、おまえが武蔵様の弟子なら、何かの折、噂に出たこともあるだろう。おれがまだ、おまえみたいに小さい頃、何年もおれは武蔵さまの側に侍かしずっていたのだ」

「嘘つ、嘘をいえ」

「いや、ほんとだ」

「そんなてにのるものか」

「ほんとだというのに」

師の武蔵に抱いだいている日頃の情熱をそのまま示して、城太郎はいきなり伊織の側へ寄り、伊織の肩を抱きよせようとした。

伊織には、信じられない。城太郎が自分の体へ手を廻して、おまえとおれとは兄弟弟子でしであるといったことばを、すぐ智恵に訴えた伊織は、わるく受け取ってしまったて、まだ鞆さや

に納めずにいた刀で、城太郎のわき腹を一突きに突いてしまおうとした。

「あつ、待てつたらー！」

城太郎は、窮屈な梢こすえのあいだで、危うくその手元をつかんだが、とたんに、樹から手を離して、体の全部で伊織がかかつて来たため、伊織の襟くびにしがみついたまま、梢に踏んばって起ちあがってしまった。

当然、ふたつの体は、双もろだお仆れになって、宙から無数の木の葉と梢とを折りちらして、大地へどさツと墜ちて来た。

この場合は、先に城太郎が墜ちた時と違って、ひどく重量と速度をかけて墜落したため、二羽の若鳥は、うーむと、胸を反りあつたまま、ふたりとも其処そこにいつまでも気を失っていた。

ここの雑木林は杉林につづいている。その杉林の断れ目きに、いつぞやの暴風雨あらしで壊れたままの、武蔵の草庵こわはあつた。

だが、武蔵が秩父ちちぶへ立つ朝、村人が言葉をつがえたとおり、その日から、壊れた草庵は、大勢して建て直しにかかっていた。

——で、もう屋根と柱だけは新しくなっていた。

武蔵はまだ帰らないのに、その壁も戸もない屋根の下に、今夜は燈火ともしびがついている。きのう江戸表から水見舞だといって来た沢庵たくあんが、武蔵の帰るまで待とうといって、独り泊っているのである。

独りということとはしかしこの世の中ではあり得ないこととみえる。沢庵がここにぼつねんと灯ひを点ともしていると、ゆうべはまったく独りで過ぎたが、こよいはもうその灯影ほかげを見かけて、一名の旅の薦僧こもそうが、夕飯を食べますので、湯をいただかせてくれといって立ち寄った。

さつき雑木林のほうまで聞えた尺八は、この老いたる薦僧が沢庵へ聞かせたものである。時刻もちょうど、彼が柏かしわの葉につつんだ弁当の飯粒を嘗なめ終った頃であつたから。

## 大事

眼病なのか、老眼で衰えきつていいのか、薦僧こもそうは、何をするにも手さぐりであった。べつに沢庵から望んだわけでもないのに、一曲ふきましようといって吹いた尺八も、素人の手すさびのように下手へただった。

けれど沢庵は、こういうことをその間に感じた。彼の吹いている尺八には、非詩人の詩のように、無技巧な真情がある。平ひょう 仄そくには合っていないが、どういう気もちで吹いているか、その心のほどは十分に汲みとれるのであった。

ではこの老い朽ちたる世捨人の薦僧こもそうは、いったいどういふものをその破れ竹やから訴えようとしているのかというと、それはただ懺悔ざんげの二字に尽きるものであった。序の歌口から吹き終るまで、ほとんど、懺悔して泣いてばかりいるかのような竹の音なのである。

じつと、沢庵は、それを聞いているうちに、この薦僧の通つて来た生涯がどんなものであったかが分るような心地がした。偉い人間といっても凡人といっても、人間の内的な生涯などというものはそう変りのあるものではない。偉人と凡物の相違は、その等しい人間的な内容や煩惱ぼんのうを超えて現れた表示のすがたであつて、この薦僧こもそうと沢庵たくあんとでも、一管かんの竹をとおして、形なく心と心を触れてみれば、いずれも過去は同じように、煩惱に皮をかぶせた人間でしかなかったのである。



「はてな、どこかでお見かけしたようだが……」

その後で沢庵が呟いたのである。すると薦僧も、眼をしばたたいて、

「そう仰せられますなら、わたくしも申しますが、最前からてまえも何だか、聞いたようなお声に思われてなりませんのです。もしやあなたは、但馬たしまの宗しゅう彭ほう沢庵どのではありませんせぬか。美作みまさかの吉野郷きちのこうでは七宝寺に長らく逗留してお在いでた……」

といいかける言葉の途中から、沢庵もはつと思ひ出したらしく、隅にあつたほの暗い灯皿しんの芯をかきたてて、じつと、薦僧のまばらに光る白い髯ひげや、削そげた頬を見つめていたが、  
「あ。……青木丹左衛門どのじゃないか」

「おう、ではやはり、沢庵どのでございましたか。おお穴でもあればはいりたや。変り果てたこの身のすがた。宗彭どの、むかしの青木丹左と思つて見てくださるな」

「意外や、ここでお目にかかろうとは。——もう十年の前になるのう、あの七宝寺の頃からは」

「それをいわれると、氷雨ひこめを浴びるように辛うござる。もう野末の白骨にひとしい丹左なれど、ただ子を思う闇にさまようて、生きながらえておりまする」

「子ゆえにと？ その子とは、そも何処どこにいて、どう暮しておるのか」

「うわさに聞けば、そのむかしこの青木丹左が、讚甘さぬもの山に狩り立てた上、千年杉の梢に縛くし上げて苦しめた——当時のたけぞう——その後宮本武蔵とよぶ人の弟子となって、この関東へ来ておるといふことなので」

「なに、武蔵の弟子」

「されば——そう聞いた時の慚愧ざんき——面目なさ——。どの面つらさげてその人の前にと、一時はもう子も忘れ、武蔵にもこの姿を見せまいと、深く怖おじ恐れておりましたが、やはり会いとうて会いとうて……もう指折りかぞえれば城太郎もことし十八。その成人ぶりさえ一目見れば、死んでも心残りはないと、恥も意地も打ち捨てて、先頃あずましからこの東路あずましをさがし歩いてゐるわけでございます」

二

「では、城太郎というあの童弟子わらべでしは、お許もとの子でおぎったか」

このことは、沢庵にはまったく初耳であった。どうしてか、あんな知合いでないながら、ついぞお通からも武蔵からも、その生立おいたちについては、何も聞いていなかった。

薦僧こもそうの青木丹左は、黙つてうなずいた。その枯渴こかつしたすがたには、往年のどじょう髭ひげを生はやした侍大将の威風も旺盛な欲望の影も思い出せないほどだった。沢庵は、ただ慥然ぶぜんとして見るほか、慰める言葉もなかつた。すでに人間の脂あぶらぎつた殻から脱けて、蕭条しょうじょうの野へかかつている晩鐘の人生に、お座なりな慰めはいえるものではないからである。

——といって、過去の懺悔ざんげにのみ心を傷いためて、これから先の道はないように、骨と皮の身を持ち扱すがたつている相も、見ていられない心地がする。この人間は、自己の社会的な地位から転落して、すべてに滅失めつしつした時に、仏陀ぶつだの救いとか、法悦の境というものがあることまで、見失つてしまつたに違ちがひない。勢いのよい時、羽振に乗のつて、人いちばい権けんをふるつたり意慾いよくを恣ほしにいまましたけれど、こういう人間ほど、半面には、頑かたくななくらいな道德的良心をもっているのです、失脚すると共に自己の良心で、自己の余生を全く自身で縊しめ殺ころしているような心理になつてしまつたものらしいのである。

だから悪くすれば、彼は今、生涯の望みとしている——武蔵に会つて一言の詫わづらびをいうことと、わが子の成人ぶりを見て、その将来に安心を抱くことをしてしまえば——すぐそこらの雑木林へ行つて、明日あしたの朝は、首を縊くつて死んでいたというようなことにならないとも限らない。

沢庵は、そう思った。この男には、子に会わせるよりも先にまず、仏陀ぶつだに会わせてやらなければいけない。十悪の徒、五逆の悪人でも、救いを求めれば救うてくれる慈悲光の弥陀だ尊だ仏だにだ対だ面ださだせてから後、城太郎に会わせてやっておそ晩おそくはおそない。武蔵との邂逅かいこうは、なおさらそのうえである方が、この男にもよいし、武蔵にとつても心地がよからう。

こう考えたので沢庵は、とりあえず丹左に向つて、御府内の一禅寺を教えてやった。わしの名をつけてそこに幾日でも逗留しておるがよいというのである。そのうち自分が暇の時に出向いてゆるゆる話もしようし聞きもしよう。子息の城太郎については、心当りがないでもないから、他日必ずわしが尽力して会わせてやる。余りくよくよせず、五十歳、六十歳から先でも、長命を考える楽土もあれば、する仕事のある人生もある。わしが行くまで禅寺でちとそんなことでも和尚から聞いておかれるがよろしかろう。

——こんなふうさうに論ろんして、沢庵は態わざとわざすげなく青木丹左をそこからほどなく立たせてやったのであった。その気もちが丹左の心にも映つたとみえ、丹左は何度も礼をこものべ、薦こもと尺八を背に負つて不自由らしい眼を竹杖に頼りながら、壁のない家の廂ひさしを離れて行つた。

そこは丘なので、下へ降りる道の、迂すべりすべりやすいことをおそ懼おそれ、丹左は林のほうへはいつて行つた。杉林の細道から、雑木林の細道へ、足は自然に導かれて行つた。

「……？」

そのうちにふと、丹左の杖の先になにかつかえたものがあつた。まったくの盲人ではないので、丹左は身を屈めて見まわした。しばらくは何も見えなかつたが、そのうちに樹の間を洩れる青い星の光に、二つの人間の体が、露にぬれたまま大地に横たわっているのが、薄つすらと分つた。

三

どう思つたのか、丹左は、道をもどり出した。そして、元の草庵の燈をのぞいて、

「沢庵どの。……今お暇した丹左でござるが、この先の林の中に、若い者がふたり、樹から落ちて気を失つたまま仆れておりますが」

——こう告げると、沢庵は、燈影から身を起して来て外へ顔を出した。丹左は言葉を續けて、

「生憎、葉は持たず、この通り眼も不自由なため、水を与えることもできません。近くの郷士の息子どもか、野遊びに來た武家衆の兄弟かとも思われる少年達です。憚りですが

一つお救いに行つて戴きとうござりますが」

といった。

沢庵は承知して、すぐ草履を穿いた。そして、丘の下に見える茅屋根へ向つて、大きな声で誰か呼んだ。

屋根の下から人影が出て、丘の草庵を仰いでいる。そこに住んでいる百姓のおやじであった。沢庵はその影へ向つて松明と竹筒の水を用意してすぐ来いと吩咐けた。

その松明の光がここへ上つてくる頃、丹左は、沢庵から道を教えられて——今度は丘の道を下へ降りて行つた。で、降りて行く丹左と、上つて来る松明とは、坂の途中ですれ交いになった。

もし丹左が、最初に迷つて行つた道のとおり歩いて行けば、松明の下にわが子の城太郎を見出すことができたに違いなかつたのに、江戸へ出る道を訊き直したために、かえつて薄縁から薄縁の闇へわれから辿つて行つてしまった。

だが、それが不幸か僥倖かは、後になつてのみ分ることで、人生の事々はすべて、回顧される時にならなければ、ほんとの薄縁とも不幸ともいわれないものであろう。

竹筒の水と松明とを持って早速やつて来た百姓は、きのうも今日も、この草庵の修繕に

手伝った村の者の一人で、何事があつたのかと不審り顔に、沢庵の後について、林の中へはいって行つた。

やがてすぐ、その松明の赤い明りは、先に薦僧の丹左が見出したものを同じ所に見出した。——けれどつい先刻と今とは、その状態においては少し相違があつて、丹左が発見した時は、城太郎も伊織も、打重なつて仆れていたが、今見ると、城太郎は蘇生してそこに呆然と坐つており、そして側に仆れている伊織を手当てして訊きたいことを訊いたものか、このまま逃亡してしまつたほうがよからうか——と、迷つてでもいたらしく伊織の体へ片手をかけながら、じつと考えこんでいたのであつた。

——そこへ松明の光と人の蹠音を感じたので、城太郎は忽ち夜の獣のような鋭くて迅い姿勢のもとに、いつでもぱつと起てるような身構えをしかけた。

「……おや?」

沢庵の立つた側から、ぷすぷすと燃える松明を、百姓のおやじが突き出していた。城太郎は咄嗟に、相手がさして警戒するほどな者でないと思つて安心したらしく、身を落着けて、ただ、その人影を見上げた。

——おや? と沢庵がいつたのは、気を失っているはずの者が、そこに坐つていたので

であつたが、双方からじつと姿を眺め合っているうちに、その「おや？」という一語は、そのまま重大な愕おどろきを両方に持つ言葉となつていた。

沢庵から見た城太郎は、余りに体も大きくなつていたし、顔も姿もちがつていたからややしばらくは分らなかつたが、城太郎から見た沢庵は一目で沢庵とすぐ知れた筈であつた。

#### 四

「城太郎ではないか」

沢庵はやがて、眼をみはつていった。

自分を仰いだと思つと、その城太郎が、はつと、手をつかえてしまつた容ようす子に、沢庵も眼を注そそいで、初めてそれと気づいたのであつた。

「はい。……はい、さようでございます」

沢庵の姿を仰ぐと、以前の洩はみ垂れ小僧に返つて、彼はただ恐れ入るばかりな容ようす子だつた。「ふうむ、そちがあつた城太郎か。いつの間にやら大人びて、たいそう鋭い若者になつたものよの」



彼の成人ぶりに愕おどろいて、沢庵は眺め入っていたが、何はともあれ、伊織を手当てしてやらなければならぬ。

抱いてみると体温はたしかである。竹筒の水を与えると、すぐ意識はよび戻した。伊織はあたりを見て、きよろきよろしていたが、突然大声を出して泣き出した。

「痛いのか。どこか、痛いのか」

沢庵がたずねると、伊織はかぶりを振って、どこも痛くはないが先生がいない、先生が秩父ちちぶの牢屋に連れて行かれてしまった。それが恐ろしいと、なお泣きじやくって訴えるのだった。

彼の泣き方も訴え方も、余りに唐突であったから、沢庵も容易にその意味を汲むことができなかったが、だんだんと仔細を聞いて、なるほどそれは容易ならぬことが起つたものと、ようやく伊織と同じ憂いを抱くことができた。

するとそれを傍らで聞いていた城太郎は、身の毛をよだてたように、卒然と、愕おどろきを顔にみなぎらして、

「沢庵さま。申しあげたいことがあります。どこか人のいない所で……」  
と、少し声をふるわせていい出した。

伊織は、泣きやんで、疑いの眼を光らしながら、沢庵へ寄り添うと、

「そいつは、泥棒の一類だよ。そいつのいうことは、嘘に決まってる。油断しちやだめだよ、沢庵さん」

と指をさした。

城太郎が睨むと、伊織はなお、いつでもまた、戦つてやるぞという眼をもつて、それに酬むくいた。

「ふたりとも、喧嘩するな。おまえ達は、元々、兄弟弟子でしではないか。わしの裁きにまかせて尾ついて来い」

道を引つ返して来ると、沢庵はふたりに命じて、草庵の前に焚火たきびを焚かせた。百姓のおやじは、用がすむと下の藁屋根へもどつて行つた。沢庵は火のそばに腰かけて、お前たちも仲よく焚火をかこめといったが、伊織はなかなかそこへ寄らないのである。泥棒の城太郎と兄弟弟子となることを敢て拒否するような顔つきなのだ。

だが沢庵と城太郎とが、睦むつまじく以前の話などしているのを見ると、伊織は軽いそねみを覚え、いつのまにか彼もまた、焚火のそばへ来てあたっていた。

そして沢庵と城太郎とが低声こゝえになつて話しているのを黙つて聞いていると、城太郎は、

弥陀みだの前で懺悔する女人にょにんのように、睫毛まつげに涙さえ見せて、聞かれない先まで、素直にすらすと自白しているのであつた。

「……ええそうです。お師匠さまの側を離れてから足掛け四年にもなります。その間わたくしは、奈良井の大蔵という者の手に育てられ、その人の教えをうけ、またその人の大きな望みや世の中の行くてを常に聞くにつけ、この人のためなら生命を投げ出しても惜しくないという気持になりました。それから今日まで、大蔵どのの仕事を手伝って参りましたが——でも泥棒呼ばわりなどは心外の極みです。わたくしも武蔵先生の弟子、おそばを離れてからでも、お師匠さまの精神とは、一日も別れてはいないつもりですから」

## 五

城太郎は、いいつづけた。

「——大蔵どのと私とは、天地の神祇しんぎに誓つて、自分らの目的は、他人にもらすまいと約していただきますので、それが何かは、たとえ沢庵様であろうと、語るわけに参りませんが、お師匠さまの武蔵様が、宝蔵破りの冤罪えんざいをきて、秩父の牢へお曳かれになったとあつては、

知らぬ顔はしておられません。明日にでもすぐ秩父へ行つて、下手人はこの身であると、自首いたして、お師匠さまを獄舎ひとやから解いておもどし致します」

彼の語るのを、沢庵はだまつたまま、ただ領うなずき領うなずき聞いていたが、その時ふと顔を上げ、「では、宝蔵破りの仕事は、おまえと大蔵の仕業しわざには相違ないのじやな」

「はい」

城太郎のその答えは俯ふぎよう仰あう天地に恥じないといったような語気を持っていた。

ぎらつと、沢庵は、その眼を見つめた。城太郎は、前の言葉に似ず、つい眼を伏せてしまった。

「じゃあ、やはり泥棒じやないか」

「いえ。……いえ、決して、ただの盗賊ではありません」

「泥棒にふたいろも三いろもあるかの」

「でも、われわれは、私慾を持ちませぬ。公民のために、ただ公財を動かすだけです」

「わからんな」

沢庵は、ぼいと抛ほうるようにいつて、

「然らば、おまえのやっている盗みの種類は、義賊というようなものなのか。支那の小説

などによくあるな。劍けんぎよう 侠くさとか、俠盜とかいう怪物が。つまりあれの亜流だろう」

「その弁解をいたしますと、自然大蔵どのの秘密を喋しゃべ舌しやべつてしまうことになりますから、何といわれても、今は隠いんにん忍にんしております」

「はははは。かまにはかからんというわけだな」

「ともあれ、お師匠さまを救うために、私は自首いたします。どうぞ、後で武蔵様へも、御坊からよろしくお取とり做なしをねがいます」

「そんな取做しは沢庵にはできぬ。武蔵どのの身は元より冤罪むじつ わざわの禍わざわい、おぬしが行かいでも、解かれるにきまつておる。——それよりも、おぬしはもつと仏陀ぶつだに直参じきさんして、倅せい、この沢庵をお取次に、真心の底を御みほとけ 仏ぶつに自首してみる心にはなれぬか」

「仏に？」

と、彼は考えてもみないことをいわれたように問い返した。

「さればよ」

と、沢庵は当然なことを諭さとすように、

「おぬしの口吻くちぶりを聞いておれば、世のためとか、人のためとか、偉ゐそうじゃが、さし当あつて、他人事ひとごとよりはわが事じやろ、おぬしの周まわりに、誰も不倅ふせせな者は残のこっておらぬかの」

「自己の一身など考えていては天下の大事はできませぬ」

「青二才」

沢庵は、一喝して、城太郎の頬をぐわんと撲った。城太郎はふいを打たれて、頬をかかえたが、気をのまれたように為すことを知らなかつた。

「自己が基礎ではないか。いかなる業も自己の発顕じゃ。自己すら考えぬなどという人間が、他のために何ができる」

「いや、わたくしは、自己の欲望などは考えないといったのです」

「だまれ、おまえはおまえ自身が、人間としてまだ酔っぱい未熟者だということを弁えんか。世の中の端ものぞかぬやつが、世の中を分つた顔して大それた大望などにうつつを抜かしているほど怖ろしいものはない。城太郎、おまえや大蔵のやっている仕事はたいがい読めた。もう訊かいてもいい——。阿呆な餓鬼じゃ、なりばかり大きくなっても心の育ちはさらに見えん。何を泣く、何がくやしい、涙でもちんとかむがよい」

寝ろといわれたのである。寝るしかなくなつて、城太郎はそこらにある<sup>むしろ</sup>庭などかぶつて横になつた。

沢庵も寝た。伊織も眠つた。

だが城太郎は寝つかれなかつた、獄窓にある師の武蔵のことが夜もすがら考えられて、すみません——と胸の上に掌<sup>て</sup>をあわせて詫びた。

仰向<sup>まなじり</sup>していると、眈<sup>まなじり</sup>からつたう涙が耳の穴へながれこむ。横に寝返つてまた思う。お通さんはどうしたろうか。お通さんがいたらよけい合せる顔がない。沢庵の拳<sup>こぶし</sup>は痛かつたが、お通さんであつたら打たない代りに、自分の胸ぐらを持つて泣いて責めるにちがいない。さはいえ、人には洩<sup>せ</sup>らさぬと、大蔵と誓つた秘密は誰にも明かしようはない。夜が明けたらまた、沢庵から折檻<sup>せつかん</sup>されるかもしれない。そうだ今のうちに抜け出そう。

「……………」

城太郎はそう考えてそつと身を起した。壁も天井もない草庵は抜けるには都合がよい。彼はすぐ戸外<sup>そと</sup>へ出た。星を仰ぐ。急がないともう朝は近いらしい。

「——こら。待て」

歩みかけた城太郎は、後ろの声にぎよつとした。自分の影みたいに沢庵が立っているの

だ。沢庵はそばへ来て、城太郎の肩へ手をかけた。

「どうしても、自首して出る気かの」

「……………」

城太郎はだまつて領うなずいた。沢庵はあわれむようにいった。

「そんなに、犬死がしたいか。浅慮なやつだ」

「犬死」

「そうだ、おまえは、自分という下手人さえ名乗って出たら、武蔵どのを免ゆるしてもらえろと考えているじやろうが、世の中はそんなに甘くはない。おまえがわしにいわなかったことも、役所へ出れば残らず泥を吐かねば役人は納得せぬ。武蔵は武蔵として、獄舎ごくやに置いたまま、おまえの身は一年でも二年でも、生かしておいて拷問ごうもんにかける。——きまつていることだ！」

「……………」

「それでも、犬死でないとと思うか。真に、師の冤罪えんざいを雪そそごうと思うならば、まずおまえ自身から身を雪そそいで見せねばなるまい。——それを役所で拷問ごうもんにかけられてしたがよいか、それとも、この沢庵に向つてしたがよいか」



「……………」

「沢庵は仏陀ぶつだの一弟子、わしが訊いたとて、わしが裁くわけでも何でもない。弥陀みだのお胸に問うてみる、取次ぎをして進ぜるのみだ」

「……………」

「それも嫌ならもう一つ方法がある。計らずもわしはゆうべ、おまえの父、青木丹左衛門にここで出会うたのじや。いかなる仏縁やら、すぐその後で子のおぬしにまた会おうとは。……丹左の行く先はわしが知辺しるべの江戸の寺、どうせ死ぬならその父に一目会ってから行くがよからう。そしてわしの言葉の是か非かも、父に訊ねてみたがよい」

「……………」

「城太郎。おまえの前に、三つの道がある。わしが今いうた三つの方法じや。そのどれなと選ぶがよい」

沢庵はいいすてて元の疍ねぐらへはいりかけた。きのう伊織と樹の上で鬨っていた時、遠く聞えた尺八の音を城太郎は耳に呼び返していた。それが父だったと聞いただけで、彼は父がその後どんな姿で、どんな気持で世の中を彷徨さまよっていたか、訊かなくても胸がこみあげてくるほど分っていた。

「お、まつて下さい。……沢庵さん、いいます！ いいます！ 人にはいわぬと大蔵様とは誓ったことですが、御仏に……ほとけ様に一切を」

ふいにそう叫ぶと、彼は、沢庵の袂たもとを持って、林の中へ引きもどしていた。

## 七

城太郎は自白した。暗闇の中で長い独りごとをいいつづけているように、一切を声にして、胸の奥から吐いてしまった。

沢庵はそれを、最初から終りまで、一口も挟まず聞いていた。

「もういうことは何もありません——」

と、城太郎が沈黙すると、初めて、

「それだけか」

と、いった。

「はい、これ限りきです」

「よし」

沢庵もそれでまた黙ってしまった。半刻も黙っていた。杉林の上が水色に暁あけてきた。鴉からすの群れが噪さわがしい。四辺あたりは白々と露ツぼく見えて来た。沢庵はと見ると、くたびれたかの如く杉の根に腰かけている。城太郎は彼の折檻せつかんでも待つもののように、半身木もたに凭もたれてうつむいていた。

「……えらい者の仲間に引きこまれたものじやな。この大きな天下の歩みが、どう動いてゆくかも見えぬとは、不愜ふびんな者の集まりよの。だが、事を起さぬ前でまだよかった」

そう呟いた時の沢庵は、もうなにも屈託くつたくした顔つきではなかった。彼はそんな物はありそうもない懐中から二枚の黄金を取り出した。そして城太郎にここからすぐ旅路へ立てというのである。

「一刻もはやくせぬと、そちの身ばかりか、親にも師にも、災難をかけることに相成ろうぞ。遠国へ奔はしれ、思いきって遠国へ。——それも甲州路から木曾路は避よけて行くことじや。なぜならば、きょうの午下ひるがりから先は、もうどの関所も厳きびしゆうなる」

「お師匠様のお身はどうなりませうか。わたくしのためにああなつたと思うと、このま  
ま他国へも」

「その段は、沢庵がひきうけておく。二年なり三年なり余燼ほとぼりのさめた頃に、改めて、武

蔵どのを訪ね、お詫びいたしたがよからう。沢庵もその時にはとりなして進ぜる」

「……では」

「待て」

「はい」

「立ちがけに江戸に廻れ。麻布村あさぶの正受庵しょうじゅあんという禪刹ぜんざに行けば、そちの父青木丹左が、ゆうべ先に行き着いておる」

「はい」

「これに大徳寺衆の印可がある。正受庵で笠や袈裟けさをもらいうけ、一時、そちも丹左も、僧体そうたいになって共に道中をいそぐがよい」

「どうして、僧体そうたいにならなければいけませんか」

「あきれたやつ。自身犯おしている罪をすら知らぬのか。徳川家の新將軍を狙撃さし、その噪さわぎに乗じて、大御所おの在おわす駿府にも火を放ち、一挙にこの関東を混乱おとに墜おし入れて、事を為なそうという浅慮あさはかもの者のお前は手先のひとりではないか。大きくいえば治安を乱むほんす謀ま叛人にんのひとり。捕とらまれば縛しばり首くびは当りまえじゃろが」

「……………」

「行け、陽の高くならないうちに」

「沢庵さま。もう一言ひとことうかがいます。徳川家を仆そうとする者はどうして謀叛人でしょうか。豊臣家を仆して天下を横奪よこどりする者は、なぜ謀叛人ではないでしょうか」

「……知らん」

沢庵は怖い眼で彼の理窟をただ睨みつけた。その説明は誰にもできないのである。城太郎を承服させるぐらいな理論を立てることは、沢庵にできないはずはなかったが、彼自身の得心できる理由がまず確然とつかめていないのだ。しかし一日一日と、徳川家に弓をひく者を謀叛人と呼んでもふしぎでない社会に変わりつつあることは見遁みのがせない。そしてその大きな推移に逆らう者は、必ず汚名と悲運を被こうむつて、時代の外へ影を没して亡んでしまうことも顕然けんぜんとした事実であった。

石榴ざくろの傷いたみ

その日、沢庵は伊織をしりに従っていた。赤城坂あかぎざかの北条安房守あわのかみの門へはいって行く。玄関かえでわきの楓かえでがいつぞやとは見まごうほど紅葉している。

「お在わすか」

小僧へ問うと、

「は。お待ちを」と、奥へ駈かけこむ。

出て来たのは子息の新蔵だった。父は登城して不在ですがまずお上がり下さいと招じるのであった。

「御城中とな。ちようどよい」

沢庵はそういつて、すぐ自分もこれから御城内へ参るが、この伊織を、当分ここに留めておいてくれまいかと頼んだ。

「お易やすいこと」

と、新蔵はちらと見てわらう。伊織とは知らない仲でもないからである。——そして御坊は御登城とあるならば、駕籠かごを命じましようかごと気をくばる。

「頼たのみたいの」

駕籠の用意のできるあいだ、沢庵は紅葉もみじの下に立って、梢こすえを仰いでいたが、思い出した

ように、

「そう、江戸の奉行職は、何といわれたの」

「町のですか」

「されば、町奉行という職制が、新たに設けられておるが」

「堀式部少輔様でした」

駕籠が来る。輿こしに似た塗ぬりかごであった。いたずらをするなよと、伊織へいつて、沢庵は

それへ身をまかせる。ゆらゆらと紅葉もみじの陰を、それはのどかに門外へ出て行つた。

伊織はもうそこにいない。厩うまやをのぞき込んでいる。厩は二棟あつた。栗毛、白眉はくび、月毛、

いい馬がたくさんいてどれもよく肥えている。伊織は、田へ出して働かせもしない馬を、

どうしてこんなに多く飼つておくのかと、武士さむらいの家の経済がふしぎに思われた。

「そうだ、戦いくさの時、使うんだな」

ようやくひとり解釈して、よくよく馬の顔を見ていると、馬の顔でも、武家の飼馬かうまと

野放しの野馬とは顔が違つていた。

馬は小さい時からの友だちだった。伊織は馬が好きだった。見ていても飽きないのである。

——すると玄関の方で、新蔵の大きな声がした。伊織は、自分が叱られたのかと思つてふり顧かえつたが、見ると玄関の前に、今門からはいつて来たらしい細っこい老婆が、杖をたてて、きかない顔を、じつと、式台に立ちはだかつている北条新蔵へ向け合っているのだつた。

「居留守をつかうとは何事をほざくか。そちのような見知らぬ老いぼれに、父が居留守をつかう要はない。いないからいないというたのだ」

老婆の態度が新蔵をむつとさせたらしかった。その語氣にまた、老婆は年がいもない怒りを駆りたてて、

「お気に障さわつたか。安房どのを父といわれたところを見れば、おぬしが当家の御子息じゃろが、先頃からこのぼぼが、いったい何度この門をくぐっておるかご存じかの。——五度や六度ではおざらぬぞよ。そのたびごとに留守じゃ。居留守と思うもむりではあるまいが」

「何度、訪ねたかしらぬが、父はひとに会うのを好まぬほうだ。会わぬというのに、無理に来るほうがわるい」

「ひとに会うのは好まぬと。片腹いたい仰せ言じゃの。ではなぜ、おぬしの父は人中に住んでおざるのじゃ」



お杉ばばはまた、いつもの歯を剥むきはじめて、きょうこそは会わぬうちは帰りそうもない顔つきなのであった。

## 二

てもこでも動かないという俗言がある。ばばの面構つらえはそれであつた。

老としより婆と思つて見くびる——という共通のひがみが、お杉にもある。いや人いちばい強いほうだ。それゆえに、見くびられまいとする緊張が、てもこでも動かない顔を拵こしらへてしまふのである。

若い新蔵には、およそ苦手な応対であつた。ヘタをいえば揚あげ足あしを取る。一喝かつや二喝にかつではおどろかない。時々、皮肉な歯を見せてせせらわらう。

無礼者むれいしやつ。

と、柄つかの音おとでも聞かせてやりたくなるが、短気は負けだと思ふし、またそんなことをしても効果があるかどうか、このばばには疑わしいと思われた。

「——父は留守だが、まあ、それへ腰かけてはどうだな。わしで分る話なら、わしが聞い

ておこうではないか」

虫を抑えていってみると、これは新蔵が予期していた以上、効き目があつて、

「大川の畔ほとりから、牛込まで歩いて来るのも、容易ではないがの。実は足もくたびれているところ、おことばに甘えて掛けようか」

すぐ式台の端へ腰をおろして、脚をさすり出したが、舌の根はくたびれる気色もなく、「これ、お息子よ。——今のように、物柔らかかにいわれると、このばばも、つい大声したことが、面目のうなるが、それでは用向きを話すほどに、安房どのがお帰りなされたら、よう伝えてたもれよ」

「承知した。して、父の耳へ入れたいとか、注意したいとかいうた用件とは」

「ほかでもない。作州牢人の宮本武蔵がことじや」

「ム。武蔵がどうしたか」

「あれは十七歳の折、関ヶ原の戦いくさに出て、徳川家に弓を引いた人間じや。しかも郷里には、数々の悪業をのこし、村では一人として、武蔵をよういう者はない。それに幾多の人を殺して、このばばにも仇あだと狙われて、諸国を逃げ廻っている悪い素姓すじようの浮浪人」

「ま、待て、婆ばば」

「いいえいの、まあ、聞いて賜たまも。そればかりではない。わしが伴せがれの許いいなすけ嫁のお通、それをまあ手なずけたりしての、友だちの女房ともきまった女子おなごをば誘かどわか拐わして……」

「ちよつと、ちよつと」

新蔵は、手で抑えて、

「いったい、ばばの目的は何じや。武蔵の悪口をそうしていい歩くことか」

「あほらしい。天下のお為を思うてじや」

「武蔵を讒ざんそ訴そすることが、なんで天下のお為になるか」

「ならいでか」

ばばは開き直つて、

「——聞けば、当家の北条安房どのと、沢庵坊の推拳で、どうあの口巧い武蔵が取入つたやら、近いうちに、將軍家の御指南役のひとりに加えられるという噂じやが」

「誰に聞いたか、まだ御内定のことを」

「小野の道場へ行つた者から、確かに洩れ聞いておる」

「だから、どうだと申すのか」

「——武蔵という人間は、今もいうた通りな札つき者、そのような侍を、將軍家のお側へ

出すさえいまわしいのに、御指南役などとは、もつてのほかとこの婆は申すのじや。將軍家の師範といえ、天下の師。おおまあ、武蔵などとは思うてもけがらわしい。身ぶるいが出ますわいの。……この身は、それを安房どのへ、お諫いめに来たわけじや。分つたかのお息子どの」

## 三

新蔵は信じている。武蔵をである。父や沢庵が將軍の師範へ推薦したことも、もちろんいい事をなされたように欣こんでいる。

で——ばばのいいぐさを、虫をこらえて聞いていても、おのずから顔いろが変つていた筈であるが、口ばたに唾つばをこしらえて喋しゃべりだすと、お杉は相手の顔いろなどは眼に入らず、

「じやに依つて、安房どのに、お諫いめしてお沙汰止みを計るのは、天下の為だと思ひます。そなた様もの、くれぐれ武蔵の巧い口にはのせられぬがようござるぞよ」  
と、なお饒じょうぜつ舌ぜつのとめどがない。

新蔵は、もう聞いているのが、不快になって、うるさいつ、と大喝してやろうと思ったが、それではまた、かえつて粘り出すかも知れないと懼れて、

「わかつた」

と、不快な唾をのみころして追いたてた。

「話の趣、よく分つた。父へもその由、伝えておくであろう」

「くれぐれもの」

と、念を押して、ばばはようやく目的を達したように、藁草履のしりを摺って、ひたひたと門の外へ出て行きかけた。

すると、どこかで、

「くそばば」

と、いった者がある。

足を止めて、

「なんじやと」

ねめ廻して、そこらを探すと、樹陰に見えた伊織の顔が、ヒーンと、馬の真似して歯を剥いて見せながら、

「これでも喰らえ」

と、固い物を抛りつけた。

「ア痛」

ばばは、胸を抑えながら、地に落ちた物を見た。そこらに幾つも落ちてゐる柘榴ざくろの實の  
一つが砕けていた。

「こいつ」

ばばは、べつに実を一つ拾つて、手をふり上げた。伊織は、悪たれをたたきながら逃げ  
こんだ。厩うまやのある角まで、ばばは追いかけて行つたが、そこから横をのぞいたとたん  
に、  
今度はやわらかい物が顔へいっぱいに打ぶつかつてつぶれた。

馬の糞ふんだつた。ばばは、ベツベツと唾つばをした。顔についているものを指で搔き落すと、  
ぼろぼろと涙が共にながれて来た。かかる憂き目にあうというのも、旅の空なればこそ、  
わが子のためなればこそ。——そう思うと老いの身をふるわせて口惜しく思うのであつた。

「……………」

伊織は、遠くに逃げて、物陰から顔を出していた。悄しやうぜん然ぜんとばばが泣いてゐる姿を見  
ると、彼も急にしよんぼりして、大きな罪を犯したように恐くなった。

ばばの前へ行つて、謝りあやまりたくなつた。けれど伊織の胸には、師の武蔵の悪口あつこうをさんざんいわれた憤りいきどおがまだそれくらいで消えていなかつた。けれどやはり老婆としよりの泣いている姿は彼に悲しかつた。伊織は、複雑な気もちに囚とらわれて、指の爪を噛んでいた。

高い崖のうえの部屋で、新蔵が呼んでいる。伊織は救われたように、崖づたいに駈けて行つた。

「おい、夕方の赤い富士山が見えるから来てみい」

「あ。富士山」

それで何もかも伊織は忘れてしまつた。新蔵もまた、忘れ果てた顔していた。元よりきょうのことを父の耳へ伝えようなどとは、聞いているうちから思いもしないことではあつた。

夢む土ど

秀忠將軍はまだ三十をすこし出たばかりであった。父の大御所は一代の覇業をまず九分どおりまでは仕上げたというすがたで今は老いを駿府城に養っている。ここまでは父がした、後はおまえがやるのだと、將軍の職を秀忠は三十そこそこで父から任せられたのである。

父の業績は一代を通じての戦争であった。学問も修養も家庭生活も婚姻も、戦争の中になかったことはない。その戦争はさらに乾<sup>けんこん</sup>坤<sup>てんき</sup>一擲<sup>てき</sup>な次の大戦争を大坂方とのあいだに孕<sup>はら</sup>んではいるが、しかしそれはもう長い戦争の終局的なもので、その一戦で長い長い日本の春秋時代も、ほんとの平和に回<sup>かえ</sup>るだろうと、一般の人心は観<sup>み</sup>ているのである。

応仁の乱以後の長期な戦乱つづきである。世人は平和の招来に渴<sup>かわ</sup>きぬいている。武家とはにかく庶民百姓は、豊臣でも徳川でもよい、ほんとの平和が建設されるものならば、というのが偽らない多くの気持であったにちがいない。

家康は秀忠に職をゆずる時、

(そちのなすことは何か)

と、諮問<sup>しもん</sup>したそうである。

秀忠はすぐ、



(建設にあると思います)

と、答えたので、家康は大いに安んじたということが側近から伝えられていた。

秀忠の信条は、そのまま今の江戸にあらわれている。大御所の認めていることでもあるし、彼の江戸建設は思いきって大規模で急速だった。

それに反して、太閤の遺孤秀頼を擁する大坂城では、戦争に次ぐ戦争の再軍備にせわしかった。将星はみな謀議の黒幕にひそみ、教書は密使の手から諸州に奔り、際限もなく人や游将を抱え入れて、硝弾を積み槍をみがき、濠を深めて備えに怠りないのであった。

(今にも、また、合戦が)

と、恟々たるものは、大坂城を中心とする五畿内の住民を通じての空気であり、また、(これからは、ほっとできよう)

と、というのが江戸城を繞る一般市民の心理であつた。

必然――

庶民のながれは続々と、不安な上方から建設の江戸へ移り出した。

それはまた一般が、豊臣中心を見すて、徳川の治下を慕ってくるような人気のように

にも見えた。

事実、乱国につかれた庶民は、豊臣方が勝って、なお戦乱がつづくよりも、ここで徳川家が終局を収めてくれたほうがよいと祈るようにもなっていた。

そういう世相は、関東上方のいずれに子孫を託すかと今、去就の半ばにある各藩の大名やその臣下の眼にも移って、日一日と、江戸城を中心とする町割まちわりや河川の土木や城普しろふし請んには、新しい時代の力が味方した。

きようも秀忠は、野支度で、旧城の本丸から新城の工事場のほうへ吹上ふきあげの丘づたいに出て、作事場を一巡し、眼に耳に胸にひびいて高鳴る建設の騒音の中で時をわすれていた。侍側じそくには、土井、本多ほんだ、酒井などの閣臣や近習きんじゅうしゅう衆をはじめ、僧侶などの姿も見え、秀忠はやや小高い所に床しょうぎ几ぎを呼び、そこに一休みしていた。

すると大工たちの働いていた紅葉山もみじやま下したのあたりで、

「野郎っ」

「野郎っ」

「野郎っ、待てっ」

と、迅はやい登音がみだれた。逃げ廻るひとりの井戸掘り人足を追って、七、八人の大工た

ちが、喧騒の中を喧騒して突き抜けて行った。

二

脱兎のように、一人の井戸掘り人足が逃げ廻って行く。材木の間にかくれ左官小屋の裏へ走り、またそこから飛び出して、土塀足場の丸太へ攀よじ付いて、外側へ跳ね飛ばうとした。

「ふてえ奴」

追い詰めて来た土工のうちの二、三名はすぐ、丸太の上の人間の足をつかまえた。井戸掘り人足男は、手斧ちようなくず屑の中へもんどり打ってころげ落ちた。

「こいつめ」

「胸くそのわるい」

「叩きのめせ」

胸いたを踏みつける。顔を蹴とばす。襟えりがみをつかんで引き摺り出す。ふくろ叩きなのである。

「……………」

井戸掘りは、痛いとも何ともいわなかった。ただ大地が唯一の頼みのように、地面にへばりついていて、蹴転がされても、襟がみをつかまれても、すぐへばりついて必死に地を抱きしめた。

「どうしたのだ」

すぐ頭とうりよう梁りやうの侍が来た。職方しよくか目付めつけも駈けつけて来た。そして、

「しずまれ」

と、押し分けた。

大工のひとりには、昂たかぶったことばで、職方目付に訴えた。

「曲まがり尺がねを踏みつけやがったんです。曲尺はわつしどものたましいだ。お侍の腰こしの刀ものと

同じでさ。そいつをこの野郎が」

「ま。しずかに申せ」

「これが、静かにできるものか。お武家が刀を土足でふまれたら、何となさいますえ」

「わかった。——じゃが、將軍様には今し方さくし作事場しばを一巡遊さくしばして、あれなるお休み所の

丘かみに、只今床しょうぎ几ぎをおすえ遊ばしておられるところだ。お目障めざわりだ、ひかえろ」

「……へい」

一度は鳴りをしずめたが、

「じゃあ、この野郎を、彼方へしよッ引いて行こう。こいつに水垢離みずじりとらせて、踏まれたまがりがね曲尺まがりがねに手をつかせて謝らせなくっちゃならねえ」

「成敗せいばいは、此方このほうらがする。おまえ達は、持場へ行つて仕事にかかれ」

「ひとの曲尺を踏みつけておきながら、気をつけろといえ、謝りもせず、口答えをしやがったんです。このままじゃ、仕事にかかれません」

「分つた、分つた。きつと処分いたしてくれ」

と職方目付は、俯うつつ伏している井戸掘り人足の襟えりがみをつかんで、

「顔をあげい」

「……はい」

「や。そちは、井戸掘りの者じゃなにか」

「……へ。そうです」

「紅葉山下の作事場では、お書物蔵ぐらの工事と、西裏御門の壁塗りとで、左官、植木職、土工、大工などはいっておるが、井戸掘りは一名もいないはずだぞ」

「そうでさ」

と、大工たちは、職方目付の不審に、いい足して、

「この井戸掘りめ、他人ひとの仕事場へ、きのうも今日もうるつきに来やがって、あげくの果て、大事な曲まがり尺がねを泥足で踏んづけたりなどしやがったから、いきなり頬げたを一つくらわしてやっただんです。すると、小生意気な口答えをしやがったので、仲間の者が、叩きのめせと、騒ぎ出したんで」

「そんなことはどうでもよいが。……これ、井戸掘り、何の用があつて、そちは用もない西丸裏御門のお作事場などをうるついでおったのか」

職方目付は、井戸掘りのまっ蒼な顔を見つめた。井戸掘りにしては男ぶりのよい又八の容貌かおだちや、総じて蒲柳ほりゆうな体つきも、そう気をつけて見られると、彼に不審を抱かせた。

### 三

侍側しそくの士や閣臣たちや、僧侶や茶道衆や、秀忠の床しょうぎ几ぎのまわりには勿論多くの警固がついているが、さらにその小高い場所を中心に、遠巻きに要かなめ々かなめには、見張りの警

戒が二重にそこを隔てている。

その見張役の者は、作事場の中の些細な事故にも、すぐ眼をひからせているので、何事かと、又八がふくろ叩きになった現場へ駈けて来た。

そして職方目付の者から説明を訊きとると、

「上様のお目ざわりになるから、お目に触れぬ方へ立ち去られたがよかろう」

と、注意した。

尤もな言葉であるから、職方目付は、大工頭梁の侍に計って一同をめいめいの仕事の持場へ追い遣り、

「この井戸掘り人足の男は、ほかにちと調べることもあるから」

と、又八の身は、目付方で処置を取ることとして拉して行った。

御作事奉行配下職方目付詰所というのは、工事場に幾つもある。現場監督の役人たちが休んだり交替で起居をしているほんの仮小屋だった。土間炉に大薬罐を掛けて、手すきの役人たちが、湯をのみに来たり、わらじを穿き代えにもどって来たりしている。

又八はその小屋の裏にくっ付いている、薪小屋の内へ抛りこまれた。薪ばかりでなく物置として沢庵樽だの漬物樽だの、炭俵だのが、積んである。そこへ出這入りするのは、

炊事をする小者だった。その小者たちは、小屋仲間こやちゆうげんと称よばれていた。

「この井戸掘り人足は、不審のかががある者だから、取調べのすむまで押込めて注意しておれよ」

小屋仲間は、又八の監視をいつつけられたが、そう嚴重に縄目などはかけなかった。罪人と決まっている者ならば、すぐその方の手へ渡すだろうし、またこの工事場そのものが、すでに江戸城の嚴重な濠ほりや城門のうちにあるので、その必要を感じないからであった。

職方目付はその間に、井戸掘り親方やまたその方の監督者に交渉して、又八の身元とか平常の素行など洗ってみるつもりだったが、それも彼の容貌が根からの井戸掘り人足らしくないというだけの不審で、べつにどういふことをしたというわけでもないから、小屋に抛ほうりこまれた又八に対しては、そのまま幾日も調べがなかった。

——がしかし、又八自身は、その一刻一刻が死へ歩み寄っているような恐怖だった。

彼は、彼ひとりで、

「あのことが、露頭ろけんしたに違いない」

と、決めていた。

あのことは、いうまでもなく、彼が奈良井の大蔵に使噺しそされて機をうかがっていた



「新將軍狙撃」の企み事であつた。

大蔵にその決行を迫られて、井戸掘り親方の運平らの口入れで城内へはいつたからには、すでに又八の胸にはいちかばちかの覚悟がついている筈であるが、又八はあれから今日に至るまで、幾度も、秀忠將軍の工事場御巡視の機会には出会つていながら、槐えんじゆの木の下に埋けてあるという鉄砲を掘り出して、將軍を狙撃するなどという大それたことは、彼には出来なかつたのである。

大蔵に脅迫された時は、いやといえば即座に、殺されそうだったのと、金も欲しかつたので、

(やる)

と、誓つてしまつたが、江戸城の中へはいつてみると、たとえこのまま一生涯、井戸掘り人足で終ろうとも、將軍家を狙うなどという怖ろしいことは、自分にはできないと思ひ直して、大蔵との約束も努めて忘れるように、土まみれになつて、他の人足たちの間に働いていたのである。

——ところが彼にとつて、そうしていられない椿事ちんじがわき上がつて来たのだった。

## 四

それというのは、西裏御門の内にある大きな槐えんじゆの木が、紅葉山御文庫の書庫を建てる都合で、ほかへ移し植えられることになったことである。

井戸掘り人足のたくさんはいつている吹ふきあげ上の作事場とそことは、だいぶ離れているが、槐の木の下には、かねて奈良井の大蔵が手をまわして、鉄砲を地下に埋いけてあるということとを又八は承知していたので、始終、そこには、人知れず注意を払っていたのだった。

で——彼は、飯めしやす休みの暇とか、朝晩の仕事の暇には、西裏御門のそばへ来て、槐の木がまだ掘り返されていないのを見ると、ほっとしていた。

そして、いつか人目のない隙に、その木の下を掘って、鉄砲を他へ捨ててしまおうと考え、ひとり苦慮していたのである。

だから彼が、そこで過あやまって大工の曲まがり尺がねを踏んづけ、大工らの怒りに会って追いまわされた時も、ふくろ叩きよりは、事の発覚がすぐ恐ろしかった。

その恐怖は、その後も去らず、暗い小屋の中で毎日つづいた。

槐の木はもう移し植えられたかもしれない。根を掘れば地下から鉄砲が発見される。当

然、取調べが始まる——

(こんど曳き出される時には生命いのちがない)

又八は毎晩、夢うつつに、あぶら汗をかいた。冥途めいどの夢を幾度も見た。冥途には、槐えんじゆの木ばかり生えていた。

或る夜、彼はまた、母親の夢をありありみた。おばばは、今の自分の境遇をあわれともいつてくれず、飼蚕かいこぎ策をぶつけて何か怒りわめいている。策の中にいっぱいあつた白い繭まゆを頭から浴びて、又八は逃げまわった。するとその繭のお化けのように白い髪をさかだてたおばばが、どこまでもどこまでも追いかけてくる。夢の中の又八はびっしり汗をかいて崖から飛びおりたが——体はいつまでも下へつかないで奈落ならくの闇にふわふわしていた。

——ごめんなさいっ。

——おつ母さん。

子どものような悲鳴をあげたと思うと、彼は眼をさましていたのである。眼がさめるとまた、かえつて夢よりも切実に恐こわい現身うつしみに回かえって、惻そく々と責せめ虐さいまれた。

(そうだ……)

又八はこの恐怖から自分を救うために、ひとつの冒険へ奮ふるつて起たつた。それは、槐えんじゆの木

がまだ無事でいるか、移植されたか、見届けてくることだった。

江戸城の要害は、小屋そのものにもあるわけではない。江戸城の外へ出ることはとてもできないが、この小屋から槐の木の間まで行ってみることは、さして困難ではあるまいと思いついたのだ。

もちろん小屋にも鍵かぎはかかっていた。けれど不寝番ねずのばんが付きつきりであるわけではない。彼は漬物樽つけものだるを踏み台にして、明り窓を破つて外へ出た。

材木置場だの、石置場だの、掘り返してある土の山陰などを這って、又八は、西裏御門の辺りまで来た。そして、見まわすと、巨おおきな槐の木は、まだ元の所に、そのまま立っていた。

「……ああ」

又八は、ほっと胸をなでた。まだこの木が根移しされていなかったために、自分の生命もつながつていたのだと思った。

「今だ……」

彼は、どこかへ行つて、やがて鋏くわを拾つて来た。そして槐の木の下を掘り始めた。自分の生命がそこから拾い出せるように。

「……………」

一鍬掘つては、その音のひびきに胸を騒がせて、鋭い眼が四辺あたりを見まわすのだった。いいあんばいに見廻りも来ない。鍬は次第に大胆に振りつづけられた。そして穴のまわりに新しい土の山ができた。

## 五

土を掻く犬のように、彼は夢中でその辺りを掘り起した。だが、いくら掘つても、土中からは土と石しか出なかつた。

(誰か先に掘り出してしまったのではあるまいか)

又八は懸念しだした。

そしてよけい、徒勞の鍬を揮ふるうことを、止められなかつた。

顔も腕も、汗にぬれて、その汗に土が匆はねかかつて、泥水を浴びたように、全身はくわつくわつと喘あえぎぬいている。

戛かつ——

夏――

つかれた鍬と、つかれた呼吸いきとが、次第に纏もつれ合つて、眩めまいがしそうになつて来ても、又八の手は止まらなかつた。

そのうちに、何か、どすつと鍬の刃にぶつかつた。細長い物が穴の底に横たわっている。彼は鍬を抛なげうつて、

「あつた」

と、坑あなへ手を突つこんだ。

だが、鉄砲ならば、鑄さびぬように、油紙につつまこんで置くとか、箱に密閉してありそうなものだが、指先に触さわつた物は、ちと変な感じのするものだった。

でも、幾分の期待をかけて、牛蒡ごぼうを抜くように引っぱり出してみると、それは人間の脛すねか腕らしい一本の白骨だった。

「……………」

又八は、もう鍬を拾う気力もなかつた。何かまた、夢をみているのではないかと自分を疑つた。

槐えんじゆの木を仰ぐと、夜露と星が燦きらめいている。夢ではない。槐の一葉一葉だつて数えられ

る意識がある。——確かにあの奈良井の大蔵は、この木の下に鉄砲を埋けておくといった。それを以て秀忠を撃てといった。嘘であろう筈はない。そんな嘘をいったって彼に何の得もないことだから。——しかし、鉄砲はおろか古鉄ふるがねのかけらも出て来ないというのはどうしたわけだろうか。

「……………」

なければないで、又八の不安は去らない。掘りちらした槐のまわりを歩きだした。そして足で土を蹴ちらしてまだ探していた。

——すると誰か、彼のうしろへ歩き寄つて来た者がある。今来た様子でなく、意地わるくさつきから物陰で彼のなすことを眺めていたらしかった。又八の背をふいに打って、

「あるものか」

と耳元で笑った。

軽く打たれたのではあるが、又八は背中から五体がしびれて、自分の掘った坑あなの中へのめりそうになつた。

「……………」

振向いて、じつと、しばらく空虚うつろな眼をすえていたが——あつ、とそれから初めて常態

の神経に回<sup>かえ</sup>つて、愕<sup>おどろ</sup>きを口から洩らした。

「——お出<sup>い</sup>で」

沢庵<sup>たくあん</sup>は、彼の手を引いた。

「……………」

又八の体は硬直したまま動かなかつた。沢庵の手をすら、冷たい爪の先で腕<sup>も</sup>ぎ去ろうとするのである。そして踵<sup>かかと</sup>からぶるぶる顫<sup>ふる</sup>えを走らせていた。

「来ないか」

「……………」

「お出<sup>い</sup>でというに？」

きつと沢庵が眼をもつて叱るようにいうと、又八は唾<sup>おし</sup>のように、

「そ、そこを。……そこの、後を……」

と、纏<sup>もつ</sup>れた舌でいいながら足の先で土を坑<sup>あな</sup>へ落とし、自分の行為を埋め隠してしまおうとするらしかった。

沢庵は、あわれむように、

「よせ。むだのことを。人間が地上に描<sup>か</sup>いた諸行は、善業悪業ともに、白紙へ墨を落した



ように、千載せんざいまでも消えはしない。——今したことも足の先で、土をかければすぐ消え  
ると——そんな考え方だから、おまえはぞんさいな人生をするのじやろ。——さ！ 来い  
つ。おまえは大それた罪を犯そうとした大罪人。沢庵が鋸のこぎり引きにして血の池へ蹴こん  
でくれる」

動かないので、彼は又八の耳たぶを持つて引つ立てて行つた。

## 六

彼が脱出ぬけだして来た小屋を沢庵は知っていた。又八の耳たぶを持ちながら、沢庵は小者た  
ちの寝ている所を覗のぞき、

「起きんか。誰か起きんか」

と、戸をたたいた。

小屋仲ちゆうげん間は起き出して来て、不審いぶかしげに沢庵のすがたを見ていたが、いつも秀忠將軍  
の側について、將軍家とも閣老とも、臆面なくことばを交わしている坊さんかと、やがて  
腑ふに落ちた顔つきで、

「へい、何か」

「何かじゃないよ」

「へ……？」

「味噌小屋か漬物小屋かしらないが、そこをお開け<sup>あ</sup>」

「その小屋には今、御不審の井戸掘りを押込めてございますが、何ぞお出しになる物でも」  
「寝ぼけていてはいけない。その押し込め人は、窓を破つて脱出しているではないか。わしが捕まえて来てあげたのだ。虫籠へきりぎりすを入れるような訳には参らぬから、戸をお開けというのだよ」

「あ。そいつが」

小屋 仲 間<sup>ちゆうげん おどろ</sup>は愕<sup>おどろ</sup>いて、泊り番の職方目付を起しに行った。

目付の侍はあわてて出て来て、怠慢のかどを謝<sup>あやま</sup>りぬいた。閣老などのお耳に入らぬようにと、それも、沢庵へ繰返して頼むのだった。

沢庵はただ頷<sup>うなず</sup>いてみせ、開けられた小屋の中へ又八を突きとばした。そして自分も共にはいり、中から戸を閉めてしまったので、目付も小屋仲間も、  
(どうしたものか?)

と顔を見あわせ、去りも出来ず、外に佇たたずんでいた。

すると沢庵がまた、戸の間から顔だけ出して、

「おぬしらのつかう剃かみそり刀があるじやろう。すまんがよく磨といで、剃刀を一挺ちよう、ここへ貸しておくれんか」

と、いう。

何にするのかと疑つたが、この坊さんにそんなことを訊ねていいものか悪いものかの判断もつきかねるのである。ともあれ剃刀を磨といで持つて来て渡すと、

「よしよし」

と、それを受取つて、沢庵は中から、もう用事はないから寝やすめという。命じるような言葉であるから、それに反そむいてはよくあるまいと、目付も小屋仲ちゆうげん間も、めいめいの寝小屋へ引ひき退さがった。

中は暗い。

だが、破れた窓から星明りはかすかに射さす。沢庵は、薪まきの束たばに腰をおろし、又八は蕙むしろのうえに首を垂れている。いつまでも無言であった。剃かみそり刀は、沢庵の手にあるのか、そこらの上に置いてあるのか、気になりながらも、又八の目には見あたらない。

「又八」

「……………」

「槐えんじゆの下を掘ったら何が出たか？」

「……………」

「わしなら掘り出してみせる所じやがのう。だが鉄砲ではないぞ。無むから有うをだ。空くうなる夢むど土から世の中の実相をだ」

「……………」

「はい、というたところで、おぬしにはその実相も何も分っておるまいが。——まだ夢ごここに違ちがいがない。どうせおぬしは嬰あかご児ごのようなお人よし。噛かんでふくめるように教えてやるほかはあるまいなあ。……………これ、おぬしは今年幾いくつ歳さいになる」

「二十八になりました」

「武蔵と同年じやなあ」

そういわれると又八は、両手を顔にやって、しゆくしゆくなと哭なき出した。

泣きたいだけ泣かしておけといわぬばかりに、沢庵は黙ってしまった。そして又八の嗚咽えつがようやくやくしずまるとまた口を開いた。

「怖ろしいとは思わぬか。槐の木はおろか者の墓標になるところじやった。おぬしは自分で自分の墓穴を掘っていた。もう首まで突っ込んでいたのだぞよ」

「——たつ、たすけて下さい。沢庵さまっ」

又八は、いきなり沢庵の脛すねに、しがみついて叫んだ。

「眼、眼が……やつと醒めました。わたしは、奈良井の大蔵に騙だまされたんです」

「いや、まだほんとに、眼がさめてはおるまい。奈良井の大蔵は、おぬしを騙したわけではない。慾張りで、お人よしで、気が小さくて、そのくせ並の者ではできぬ大胆なこともしかねない、天下一の愚か者を見つけたので、上手にそれを使おうとしたのだ」

「わ、わかりました。自分の馬鹿が」

「いったいおぬしは、あの奈良井の大蔵を、何者と思うて頼まれたか」

「分りません。それは今になっても、分らない謎なぞです」

「あれも関ヶ原の敗北者の一人、石田治部じぶとは刎頸ふんけいの友だった大谷刑部ぎょうぶの家中で、溝み

ぞぐちしなの  
口信濃という人間じゃ」

「げつ、では、お尋ね者の残党でしたか」

「さもなくて、秀忠將軍の御寿命を窺<sup>うかが</sup>うわけはあるまいが。今さら、驚くおぬしの頭脳<sup>あたま</sup>がわしには分らんとう」

「いえ、わたしにいったのは、ただ徳川家に怨みがある。徳川家の世になるより、豊臣の世になったほうが、万民のためになる。だから自分の怨みばかりでなく、世上のためだとうような話で……」

「そういう折、なぜおぬしは、その人間の底の底まで、じっと考えてみないのか。漠<sup>ばく</sup>と聞いて、漠とのみこんでしまう。そして自分の墓穴でも掘る勇気をふるい出す。怖いのおぬしの勇氣は」

「ああ、どうしよう」

「どうしようとは」

「沢庵さま」

「離せ。——いくらわしにしがみついてももう間にあわぬ」

「で、でも、まだ將軍様へ、鉄砲を向けたわけではありませんからどうか、助けてください」

い。生れ變つて、きつと、きつと……」

「いいや、鉄砲を埋いけに来る者に途中で故障が起つたため、間に合わなかつたというまでのことだ。大蔵の手にまるめられ、彼奴きやつの怖ろしい策をうけて、あの城太郎が、秩父から無事に江戸へもどつていたら、その夜のうちに槐の木の下に、鉄砲が埋いけ込まれてあつたかも知れぬのだ」

「え？ 城太郎というのは。……もしや」

「いいや、そんなことは、どうでもよい。ともあれおぬしが抱いだいた大逆の罪科とがは、法は勿論、神仏もゆるし給わぬところだ。助かろうなどとは考えるなよ」

「では、では、どうしても」

「あたりまえだ」

「お慈悲ですツ」

しがみついて泣き吠える又八を、沢庵は立ち上がりざま蹴放して、

「ばかつ」

と小屋の屋根も吹き飛ぶような大喝だいかつを吐いて睨ねめつけた。

縫すがれない仏。慚愧ざんきしても救いの手を出してくれない恐こわい仏。

うらめしげに又八はその眼を見ていたが、がくと、観念の首を垂れて、さらにさめざめと死を恐れて泣いた。

沢庵は、薪のうえの剃刀を手に取って、その頭へそつと触れた。

「又八……。どうせ死ぬなら、容相だけでも、釈尊の御弟子になって逝け。せめてもの誼み、引導だけは授けて進ぜる。眼をふさいで、静かに膝をくむがよい。死も生も、その瞼一皮、そう泣くほど恐いものではない筈じゃ。——善童子、善童子。嘆くまい。死にしようにわしがしてやる」

## 花ちり・花開く

### 一

閤老部屋はひとつの密室でもある。ここの政議が洩れないために、幾側にも隔ての間や縁が繞っている。

先頃から、沢庵と北条安房守とは、度々、その席へ加わって、終日、何事か議を凝



らしていることが多かった。秀忠の裁可を得るために一同が秀忠の前に出たり、また、奥とその間を、じょうぼこ状じょうぼこの通う数も頻りであった。

「木曾からの使者がもどりました」

と、その日、表から閣老部屋へ報告がはいった。

閣老たちは、

「直じかに訊きこう」

と、待ちかねていた気けぶりでその使者を、べつな部屋に通した。

使者は信州の松本藩の家来なのである。数日前に閣老部屋から早打が立って、木曾奈良井じゆく宿の百草問屋で大蔵というものを召捕れという命が飛んでいた。——で、すぐ手を廻してみたところ、奈良井の大蔵一家は、とうに宿場の老舗しにせをたたんで、上方の方へ引移り、その行き先は知る者がない。

家宅搜索をした結果、町家にあるまじき武器弾薬や、大坂方ととり交かわした書状などの始末し残った物が多少あったので、それは後から証拠品として小荷駄に積み、やがて御城中もたらへ齎もたらすことになっているが、取りあえず右のお報しらせまでを早馬をもってお答こたえに参りました——というのであった。

「遅かったか」

閣老たちは、舌打ちした。打った大綱に雑魚ざこもかからなかった時の感じとひとつである。次の日。

これは閣老の中の酒井侯へ、酒井家の臣が、川越から来ての報告である。

「おいいつけに依りまして、即日宮本武蔵なる牢人の身は、秩父ちちぶの牢舎ろうしやより放ちました。折から、迎えに見えた夢想むそう権之助なる者に、懇ろねんろに、誤解の由を申して、引渡しましてござります」

このことはすぐ、酒井忠勝から、沢庵の耳に伝えられた。

沢庵は、

「御念ごねん入りに」

と、かろく謝した。

自分の領地内のまちがい事なので、忠勝はかえつて、

「武蔵とやらにも、悪あしゆう思わぬように」

と、詫び返した。

沢庵が胸に持って来たことは、こうして江戸城とうりゆう逗留と中に、一つ一つ片がついて行っ

た。極く手近な、芝口の質屋——大蔵が住んでいた奈良井屋の跡にはもちろん町奉行がすぐ行って、家財秘密書類など残らず没収し、何も知らずに留守居をしていた朱実あけみの身は奉行所の手に今、保護されている。

一夜、沢庵は、秀忠の室へ近づいて、秀忠に、

「こうなりました」

と、一切の始末を告げた。

そして、

「天下にはまだ無数の奈良井の大蔵がいることを、夢おわすれあつてはなりません」

といった。

秀忠は、うむ、と強くうなずいた。この人にはものが分ると思うので沢庵はなお言葉を  
ついで、

「その無数のものを、いちいち捕えて詮議せんぎだ立ていたら、詮議に暮れて、大御所の  
跡目をうけて二代將軍たるの御事業は遂になすいとまもございませぬぞ」

秀忠は、そう小心ではない。沢庵の一言は百言に噛みくだいて、自己の反省としている  
ので、

「手輕に、処置しておけ。この度は、御坊の進言に依ること、御坊の処置にまかすであらう」

と、いった。

二

沢庵は、それについて、親しく礼の旨を述べた。

その後で、

「野僧も、思わず月余を、御府内に逗留いたしましたが、近いうちにしやくめぐ錫を巡らし、大和やまとの柳生へ立ち寄つて、石舟斎どのを病床に見まい、泉南から大徳寺へもどるつもりにござります」

と、併せて、別れの辞ことばも、いつておいた。

秀忠は、ふと、石舟斎と聞いて、思い出を呼んだらしく、

「柳生の爺じいは、その後、どんな容態かの」

と、訊ねた。

「このたびは、但馬どのも、おわかれぞと、覚悟のていに伺いました」

「では、むずかしいのか」

秀忠は、幼い頃、相国寺の陣中で、父の家康のそばに坐つて謁見した、石舟斎宗むねよし嚴のすがたと、自分の幼時とを、思いう泛かべていた。

「次に」

と、その沈黙の裡うちから、沢庵がもう一言いった。

「かねて閣老衆にも計り、おゆるしも得ている儀にござりませんが、安房どのからも野僧からも、御推挙申し上げておきました宮本武蔵、御師範へお取立てのことも伏してお願ひ申しておきまする」

「うむ。そのことも聴きおいてある。かねて、細川家でもしよくもく囑目いたしていた人物とやら、柳生、小野もあるが、もう一家ぐらいは取立ておいてもよからう」

これで何もかも、沢庵は用事がすんだ心地だった。間もなく彼は秀忠の前を退さがった。秀忠からは、いろいろな心入れの賜物たまものがあった。しかし沢庵は、その全部を城下の禅寺へ寄託して、いつもの一杖一笠じょうりゆうのすがたで帰った。

けれど、それでもとかく、人の口はさがらないものであった。沢庵は政治にくちばし嘴を入れるか

ら、あれは野心を抱いているとか、或は、徳川家に籠絡ろうらくされて、大坂方の情報を時折齋もたらす黒衣の隠密であるとか、いろいろな沙汰が陰ではあった。けれど沢庵自身には、土に働いている庶民の幸不幸はいつも心にあつたが、一江戸城や一大坂城の盛衰などは、眼前の花が、開いたり散つたりするほどにしか、観じられていないのである。

ところで、將軍家にまた自分の別辞を述べ、江戸城から出て来る前に、沢庵は、ひとりの男を、弟子として連れて来た。

彼は、秀忠から任せられた権限で、退出する間際の足を、工事場の職方目付の小屋へ向けたのであつた。そして、その裏手の小屋を開けさせた。

闇の中に、きれいに頭を丸めた若い坊さんが、ぽつねんと俯向うつむいて坐っていた。その法衣ころもはこの間、沢庵がここを訪れた翌日、人に持たして来て与えた物である。

「……あ」

若い今道いまどうしん心は、戸口の光に射られると、眩まぶしげに顔をあげた。それは、本位田又八なのである。

「おいで」

沢庵は、外から手招きした。

「……………」

今道心は、立ち上がったが、脚が腐りかけてしまったように踟<sup>よろ</sup>めいた。

沢庵は、その手を、掻い抱いてやった。

「……………」

いよいよ刑罰に処される日が来た——と又八は観念しきった眼をふさいでいた。脚の節<sup>ふし</sup>はがくがく顫<sup>ふる</sup>えた。断刀の莖<sup>むしろ</sup>が目のさきにちらついていた。削<sup>そ</sup>げた青い頬に、ほろほろと涙がながれた。

「歩けるか」

「……………」

何かいったつもりだが、声は出なかった。沢庵に支えられている腕の上で、又八は力なく頷<sup>うなず</sup>いたのみであった。

### 三

中門を出る、多門を通る、平河門<sup>ひらかわ</sup>をくぐる。幾つかの門や濠<sup>ほり</sup>の橋を又八道心はうつつ

で越えた。

沢庵の後に尾ついてしお梢々と歩く彼の足つきは、屠所との羊ひつじという形容をそのまま思わせる姿だった。

——なむあみだぶつ

——なむあみだ、なむあみだ

——なんまいだぶ……

又八道心は、一步一步が、死の刑場へ近づいているのだと思って口のうちに唱となえていた。それを唱えていると、死の恐こわさが少し忘れられて来るからだった。

愈 《いよいよ》、外濠へ出た。

山の手の屋敷町が見える。日比谷村ひびやあたりの畑や河すじの船が見える。下町の人通りが見える。

(ああ、この世だ)

又八は、改めて、そう観くじずにいられなかった。そしていちど、あの浮世の中へ漂ただよつてみたいと思う執しゅう着ちやくに、涙がぼろぼろながれて来た。

——なんまいだ



——なんまいだ

彼は眼をふさいだ。唱しょうみょう名の声がだんだん唇くちを破つて大きくなつて来た。果ては夢中だつた。

沢庵はふり顧かえつて、

「これ、はやく歩け」

濠ほりにそつて、沢庵は大手のほうへ繞めぐつて行つた。そして、原を斜めに横ぎつて歩いた。又八は、千里もある心地がしていた。このまま道は地獄に続いているように、昼間も真つ暗な心地がした。

「ここで、待つておれ」

沢庵にいわれて、彼は原の中に佇たたずんだ。原のそばには常盤橋御門とぎわばしからつづいている掘割の水が土の色を溶とかして流れていた。

「はい」

「逃げてもだめだぞ」

「……………」

もう半分死んでいるような顔を悲しげに顰しかめて、又八道心は、うなずいた。

沢庵は原を出て、往来の向うへ渡って行った。すぐ前に、まだ職人が白土を塗りかけている土塀があった。土塀につづいて高い柵さくがあり、柵のうちには、凡ただの町家や屋敷構えとちがう黒い建物の棟が重なっていた。

「……あ。ここは」

又八道心は慄然りつぜんとした。新しく建った江戸町奉行所の牢獄と役宅である。沢庵はそのどっちか分らないが一つの門の中へはいつて行った。

「……？」

また、急にがくがく慄ふるえ出して来た脚は、彼のからだすら支ささえられなくなって、ぺたんとそれへ坐まってしまった。

どこかで、鶉うずらが啼ないている。ホロホロと昼の草むらに啼く鶉の声までが、もう冥途あのよみちの道の辺べのもののように聞えた。

「……今のうちに」

と、彼は逃げようかと考えてみた。自分の身体には、縄も手錠もかけてはない。逃げれば逃げられないこともない気がする。

いや、いや、もうだめだ。この原の鶉ひそのように潜ひそんだところで、將軍家の威令で捜され

たら隠れる草の根もあるわけではない。それに頭つむりも剃そり、法衣ころもも着せられて、この姿ではどうしようもない。

——お老母おぼつ。

彼は、胸のうちで、絶叫した。今さらながら、母の懐ふところ中がなつかしい。母の手から離れさえしなかつたら、こんな所で、首を刎はねられる落ち目にはならなかつたであろうとひしと思う。

お甲あけみ、朱実あけみ、お通、誰、誰、誰と彼が青春の相手に、想おもつたり狎なれ遊あそんだりした女子おなごの数々も、今、死を前にして、思わぬではなかつたが、胸のそこから呼んでいる名は、ただひとつだった。

「お老母おぼつ、お老母おぼつ……」

#### 四

もう一度生きのびられるものだったら、今度こそはお老母おぼにも叛そむくまい、どんな孝行でもしてみせる。

又八道心は、誓つてそう思ったが、それもよしない後悔にすぎない。

今にも、飛ぶ首——

襟えりの寒さに又八道心は雲を見あげた。時雨しぐれもようの陽であつた。雁がんが二、三羽、翼の裏を見せてそこらの近い洲すへ下りた。

(雁うらやが羨ましい！)

逃げたい気もちがうずうずと体を衝ついて来た。そうだ、また捕まつても元々だと思ふ。彼はすごい眼で往来の向うの門を見た。沢庵はまだ出て来ない——

「今だ」

起ち上がった。

そして、駈け出した。

すると、どこかで、

「ころっ！」

と、呶鳴つた者がある。

それだけで又八道心はもう必死の気を折られてしまった。思いがけない所に、棒を持つて立っていた男がある。奉行所の刑吏だつた。飛んで来るなりいきなり又八道心の肩さき

を打ちすえて、

「どこへ逃げる！」

と、棒の先で、蛙かえるの背なかを抑えるように突き立てた。

そこへ沢庵が見えた。沢庵のほかに、奉行所の刑吏が——頭立かしらだったのから小者までぞろぞろ出て来たのである。

その一かたまりが又八の側へ寄つて来た頃、さらにまたもう一名の縄付を曳いて四、五名の牢舎ろうや臭い人々が現れた。

頭立しおきった役人は、処刑の場所を選定して、そこに二枚の荒あら蕨むしろを敷かせ、

「では、お立会いを」

と、沢庵うながを促した。

刑の執行人たちは、ぞろぞろと蕨むしろのまわりに立ち囲む。主な役人と沢庵には床几しょうぎが与えられた。

棒の先に抑えつけられていた又八道心は、

「起てっ」

と、どなられて体を擡もたげた。だが、歩く力はもうなかった。それを焦じれたがって刑吏

は、彼の法衣ころもの襟がみをつかんでずるずる蕙の上まで引き摺って来た。

新しい素蕙すむしろのうえに、又八道心は寒々した首を垂れた。もう鶉うずこの啼き声も耳になかった。ただまわりの人々ががやがやいつているのを、壁を隔てて聞くように、遠い気持で意識するだけだった。

「……あ。又八さん？」

その時、誰か側でいった。又八はぎよろりと横を見た。——見ると自分と並んで荒あらむし蕙ろの上にひき据えられている女の囚人がある。

「ヤツ。……ああ朱実あけみじゃないか」

いった途端に、

「口をきいてはならん」

と、二人の刑吏が間にはいつて長い麵棒めんぼうみたいな檜かしの棒で、男女ふたりを隔てた。

沢庵のそばにいた頭立った役人は、その時、床几しょうぎから立って、何かおごそ厳かな口調で、ふたりの罪状をいい渡した。

朱実は泣いていなかったが、又八は人前もなく涙をこぼした。で役人からいい渡された罪状もよく耳には通らないのであった。

「打てっ」

床几へつくと、すぐその役人は厳きびしい声でいった。すると、先刻さつきから割竹を持つて後ろに屈かがんでいた二人の小者が、躍り出して、

「一ひいつ、二ふウ……。三みイ！」

数えながら又八と朱実の背を撲り出した。又八は、悲鳴をあげた。朱実はまっ蒼な顔を俯伏うつぶせたまま、齒の根で怵こらえている容子ようすだった。

「七ななア！ 八やア！ 九こツ！」

割竹は割れて、竹の先から煙が立つように見えた。

## 五

原の外の往来に、ぼつぼつ人が立ち止まって、遠くから眺めていた。

「なんでしよう」

「お処刑しおきさ」

「ア。百叩きですか」

「痛いだろうな」

「痛いでしょうね」

「まだ百には、半分もあるよ」

「勘定していたんですか」

「……ア。もう悲鳴も揚げなくなってしまった」

棒をかかえて、刑吏がやって来た。その棒で草を叩いて、

「立つちやいかんつ」

往來の者は、歩き出した。振顧つてみると、百叩きも終わったらしく、撲り役なぐの小者は、ささらのようになつた割竹ほうを抛りだして、肱ひじで汗をこすつていた。

「ご苦労でござつた」

「御大儀で」

沢庵と、主なる役人とは、正しく礼儀を交わし合つて、立ち別れた。

役人小者たちは、どやどやと奉行所の門内にはいり、沢庵はなおしばらく、男ふたり女の俯伏うつぶしている筈むしろのそばたたずに佇んでいたが、默然と——何もいわずに、原をよぎつて、彼方かなたへ行つてしまつた。



「……………」

「……………」

時雨雲しぐれぐもの裂け目から、うすい陽が草にこぼれた。

人が去ると、鶉うずらがまた啼く。

「……………」

「……………」

朱実も、又八道心も、いつまでもじつとうごかなかった。けれどまったく気絶してしまつたわけではない。体じゆうは火みたいに痛んでいるし、また、天地に恥かしくて顔が上がないのであつた。

「……オ。水が」

朱実が先に呟つぶやいた。

自分たちの蕙むしろの前に、小さい手桶たけびしやくに竹柄杓たけびしやくが添えてある。この手桶は、笞むちで打ちすえる奉行所にも、一掬きくの情けはあるのだぞというように、無言の相すがたを持ってそこにあつた。がぶっ……

かぶりつくように朱実は先にそれをのんだ。又八へすすめたのはその後からであつた。

「……飲みませんか」

又八道心は、やっと手を伸ばした。ごくごくと水が喉のどを通ってゆく——。役人もいない、沢庵もいない、彼はまだわれに返りきらない面持おももちだった。

「又八さん……おまえ坊さんになったのかえ」

「……いいのかしら？」

「何が」

「お処刑しわざはこれでいいんだろうか。わたしたちはまだ斬られていない」

「首なんか斬られてたまるものかね。床しょうぎ几ぎに掛けたお役人が、ふたりへ言い渡したじゃないか」

「何といつて？」

「江戸表から追放を申しつけると。冥途あのよへ追放でなくってよかったね」

「あつ。……じゃあ生命いのちは」

頓狂な声を出した。よほど欣うれしかったにちがいない。又八道心は起って歩き出した。朱実のほうを見もしなかった。

朱実は、手を髪へやって、乱れ毛を掻きあげていた。襟を直し、帯をしめ直した。そう

している間に、又八道心の姿はもう草の彼方に小さくなっていた。

「……意気地なし」

彼女は唇を曲げてつぶやいた。割竹の傷みが疼くたびに、彼女はよけい世の中に強くなるうとした。その底には、数奇な運命にねじけて来た性格が、ようやく年を経て、妖治な花をもちかけていた。

## 逃げ水の記

### 一

もうこの屋敷へ預けられてから数日。

伊織は、悪戯に飽きた。

「沢庵さんはどうしたのだから？」

そう訊ねる彼のことばの裏には、沢庵の帰りよりは、師の武蔵を案じる憂いがこもっていた。

北条新蔵は、その気持を、いじらしく思つて、

「父上もまだお退城さがりにならぬから、ずっと、御城内にお泊りとみえる。——そのうちにお帰りはきまつておるから、また、厩うまやの馬とでも遊んでいるがよい」

「じゃあ、あの馬、借りてもいい？」

「いいとも」

伊織は、厩へ飛んで行つた。彼は、良い馬を選んで引っぱり出す。きのうも、おととも、その馬には乗つていたが、新蔵には黙つて乗つて行つたのである。——けれど今日は許されたので大威張りであつた。

馬に跨またがると、伊織は疾風はやてみたいに裏門から駈け出した。きのうもおととも、彼の行く先はきまつていた。

屋敷町——畑道——丘——田や野や森や、晩秋の風物が見るまに駒のうしろになつて行く。——そしてやがて、銀いろに光る武蔵野すすきの薄うすの海が眼の前に展ひろがってくる。

伊織は駒を立てて、

「あの山の彼方むこうに——」

と、師のすがたを思う。

秩父ちちぶの連峰が、野の果てに横たわっていた。牢舎ろうやの中に囚とらわれている師の身を思うと、伊織の頬は濡れてくる。

涙の頬を、野の風が冷たく撫でる。秋の更けたことは、あたりの草陰に真からつ赤すうな烏からすう瓜りだの草紅葉くさもみじをみても知れる——。やがて、山の彼方むこうは、霜にもなるうに——と考えられたりする。

「そうだ！ 会つて来よう」

伊織は、思うとすぐ、馬のしりへ鞭むちを加えた。

駒は、尾花の波を跳んで、またたくまに半里はんみちも駈けた。

「いや、待てよ。ひよつとしたら草庵にお帰りになつてるかもしれないぞ」

その日に限つて、何となくそんな気がしたのである。伊織は、草庵へ行つてみた。屋根も壁も、壊れた所はみな繕なおつていた。けれど中に住む人はなかった。

「おいらの先生を知らないかあつ……」

刈入れかりいをしている田の人影へどなつてみた。附近の百姓たちは皆、彼のすがたを見ると、悲しげに首を振った。

「馬なら一日で行けるだろう」

どうしても彼は、秩父までの遠乗りを決心しなければならなかった。行きさえすれば、武蔵に会えると思ひ、一途いちずにまた、野を駈け飛ばした。

いっぞや城太郎に追いつめられて覚えのある野火止のびどめの立場たてばまで来た。ところが部落の入口には、乗馬や荷駄や、長持や駕籠かごでいっばいだった。道を塞ふさいで四、五十名の侍が、昼食をしている様子なのである。

「ア。通れないや」

往来止めではないが、通るには鞍から下りて、駒を曳かなければならぬのである。伊織は、面倒と思つて道を引つ返した。道に不便はない武蔵野の原であるし――

すると、飯を喰べかけていた仲ちゆうげん間どもが、彼の駒を追いかけて来て、

「オイ、どん栗坊主。待て」

と、呼んだ。

三、四名つづいて駈け寄つて来るのであつた。伊織は、駒の首をめぐらして、

「なんだと？」

と、怒つてみせた。

なりは小粒であるが、乗っている駒も鞍も、堂々たるものだった。

## 二

「降りろ」

仲間ちゆうげん

どもは、鞍の両側へ寄つて来て、伊織を見あげた。

伊織は、何のわけか分らなかつたが、仲間どもの小面こづらが癩しやくにさわって、

「何さ。何も、降りなくなつていいだろう。——後へ戻るとこだもの」

「何でもいいから降りろ。つべこべいわずと」

「嫌だつ」

「いやだと」

いうより早く、ひとりの仲間が、彼の足を抄すくいあげた。鎧あぶみに足の届いていない伊織の体

は、苦もなく、馬の向う側へ転げ落ちた。

「御用のあるお方があちらで待っているのだ。ベソを搔かずに、早う来いっ」

襟がみをつかまれて、立場の方へずるずる引戻されて行つた。——と、彼方かなたから杖を立て

てて歩いて来た老婆がある。手をあげて、仲間どもを制しながら、

「ホホホホ。捕まったの」  
と快げこころよに笑った。

「あ」

伊織は、真向きに、老婆のまえに立った。いつぞや北条家の邸内へ来た時、柘榴ざくろの実みをぶつけてやったおぼばではないか。見たところ、その折とは違って、旅装たびよそおいも改まっているのだ。こんな沢山な侍たちの中に交ひまじつて、一体どこへ行く所なのだろうか。

いや、そんなことは、伊織に考えている違ちがいはない。彼はただ、ぎよつとして、ばばが自分をどうする気かと恐れていた。

「童わっばよ。おぬし、伊織とかいうたの。——いつぞやはこの婆に、ようも酷きびしいまねをしやつたな」

「……………」

「これ」

杖の先で、ばばは、彼の肩をとんと突いた。伊織は戦鬪的に身を直したが、部落の中にはいっばいな侍がいる。それが皆このばばの味方になったら敵かなうはずはないと思つて、眼に涙をたたえて慄こらえていた。



「武蔵は、よい弟子ばかり持つことわいな。おぬしも、その一人かよ。ホホホホホ」

「な、なんだと……」

「よいわ。武蔵のことは、このあいだ北条どのの息子にも、口の酔すくなるほどいうたあげくじゃ」

「お、おいらは、おまえなんかには用はないや。帰るんだ。帰るんだっ」

「いいや、まだ用はすまぬ。——いったい今日は、誰の言い附つけでわし達の後を尾行つけて来やつたか」

「だが、てめえなどの、後に尾ついてくるものか」

「口ぎたない餓鬼よ、汝われの師匠は、そういう行儀を教わえてか」

「よけいなお世話だい」

「その口から、泣きほざかぬがよいぞ、さあ来やい」

「ど、どこへさ」

「どこへでもよい」

「帰るんだ、おらあ、帰るっ」

「誰が——」

と、ばばの杖は咄嗟とつさ、風を呼んでいきなり伊織の脛すねを蹴った。

伊織は思わず、

「痛いっ」

と、いつて坐った。

ばばの眼くばせのもとに、仲間ちゅうげんたちは、ふたたび伊織の襟がみを持って、部落の入

口の粉挽小屋こなひきごやの横へ連れこんだ。

そこにいたのは、正しくどこかの藩士に違いない。野袴のばかまを穿はいて、見事な大小をさし、

乗換馬のりかえうまを傍らの木につないで、今、弁当を食べ終えたらしく、小者の汲んで来た白湯さゆを

木陰こかげで飲んでいた。

三

捕まって来た伊織を見ると、その侍はにやりと笑った。気味のわるい人である。伊織は竦すくんで眼をみはった。——佐々木小次郎であったからである。

その小次郎へ、おばばは、得意そうに、

「見なされ、やはり伊織めであつたがな。武蔵奴めが、なんぞ肚に一物あつて、わしらが後  
を尾つけさせたに違いはない」

と、顎あごつき出して告げた。

「……ウむ」

小次郎も、そう考えているように、頷うなずき合つた。そして、周まわりにいる仲ちゆうげん間かんたちを、  
ようやく退けた。

「逃げるといかぬ。逃げぬように、小次郎どの、縛くつておきなされ」

小次郎はまた、薄笑いをうかべて、顔を横に振つた。——その笑い顔の前では、逃げる  
ことはおろか、起つこともできないと、伊織はあきらめていた。

「小僧」

小次郎は、当りまえな言葉で話しかけた。

「——今、ばば殿が、ああいうたが、その通りか。それに違いないか」

「ううん、ち、ちがう」

「どう違う？」

「おらはただ、馬に乗つて、野の駆がけに来たんだ。——後なんか尾つけに来たんじやないや」

「そうだろう」

と、小次郎は一応、得心して見せたが、

「武蔵も武士の端くれならば、よもそのような卑劣はすまい。……だが、突然わしとばば殿とが、打揃うて、細川家の家士のうちまに交じり、旅立つのを知ったとしたら、さだめし、何事かと武蔵も不審を起して……解けぬ疑いから……後を尾つけさせてみとうなるのも人情だ。むりはない」

と、独りぎめして、伊織のいいわけなど、耳に入れない。

伊織もまた、そういわれてから初めて、彼やおばばの境遇に、改めて不審を持った。二人の身に、何か最近、変わったことが起つたに違いない。

なぜならば、小次郎の特徴であった髪や服装みなりも、前とは、人違いするほど変つていて、あの前髪も刈り込み、これ見よがしな派手な伊達羽織だても、地味な蝙蝠羽織こうもりばおりと野袴のばかまとに変つていたのである。

ただ、変らないのは、愛刀物干竿ものほしざおだけで、これは太刀作りを、ふつうの拵たてばえに直して横たばさに手挟んでいた。

ばばも旅支度だし、小次郎も旅拵たびごしらえなのだ。そしてこの野火止のびどめの立場たてばには、細川家

の重臣岩間角兵衛以下、十名ぐらいな藩士とその家来や荷駄の者が今、昼食の休息を取っているのである。そういう道中の群れのうちに小次郎が、やはり一箇の藩士として居るところを見ると、彼が前から志していた仕官の宿望が遂にかなって——望みの千石とはゆかないまでも——四百石とか五百石とか相応のところまで折れ合い、推挙した岩間角兵衛の顔も立てて、細川家に召抱えられたものと推定しても過りはないであろう。

そう考えてくると、細川忠利ただとしもまた、近く豊前ぶぜんの小倉に帰国の噂がある。三齋公が老年なので、忠利の帰国願いは、かなり前から幕府へ提出されていた。その許しが出たことは、いいかえれば、幕府が細川家を二心なきものと見極めた信頼の証拠であるとも、一般から思われていた。

岩間角兵衛だの、新参の小次郎だのの一行は、その先発として、本国豊前ぶぜんの小倉へ向う途中であった。

#### 四

同時にまた、おぼばの身にも、どうしても一度、郷里に帰らなければならぬ事情が起

つていた。

跡取りの又八は家出し、大黒柱ともいふべき彼女は、ここ幾年も帰つたことはなく、親類中でも頼りとする河原の権叔父までが、旅先で落命しているので、郷里にある本位田家にも、その間、いろいろな問題が溜たまっているには違ひないのである。

で、おばばは、なお武蔵にもお通にも依然として他日の報復は期しているが、小次郎が豊前小倉まで下るのをよい道みちづ連れと頼んで、途中、大坂表に預けてある権叔父の遺骨を受け取り、郷里の宿題をひと片づけつけて、かたがた、年久しく怠たつていた祖先の年忌やら、権叔父忌も一度やって、ふたたび目的の旅へ出直そうと決めたわけであつた。

——だが、このおばばのことであるから、武蔵に対しては、一時でもただ見みの遁のがしては去らなかつた。

小野家から小次郎に洩れ、小次郎から彼女の耳へはいつた噂によると、武蔵は近く、北条安房や沢庵の推挙によつて、柳生、小野の二家に加わつて、將軍家師範の一員となるということだつた。

それを小次郎から聞かされた時の、おばばの不快そうな顔色といつたらなかつた。そうなのは将来、手出しのし難にくいものになるしまた、彼女の信念を訴えても、これを阻はむはむのは

將軍家のためであり、そういう人間の出世を覆してやるのは、世道の見せしめであると思つた。

で、彼女は、沢庵にだけは会えなかつたが、北条安房守の玄関に立ったり、柳生家へわざわざ出向いたりして、極力、武蔵が取立てられることの非を鳴らした。推薦者の二家ばかりでなく、手蔓のある限り、閹老たちの屋敷へも行つた。そして武蔵の讒訴をあの調子で撒いて歩いたのである。

もちろん小次郎は、それを止めもしないしまた、煽動もしなかつた。——けれど、おばばが一たんそういう目的に躍起を賭けると、貫かねば熄まなかつた。町奉行や評定所へも、年来の武蔵の生立ちや行状など悪しざまに書いて、それを投げ文にして抛りこんだらである。小次郎すら、余りいい気持がしないほど、その妨害運動は徹底していた。

（——わしが小倉へ参つても、いつか一度は、武蔵とまみえる日がきつと来る。また、いろいろな関係が、宿命的にもそうなっている気がする。ここはしばらくほっておいて彼が出世の階を踏み外した後——どう落ちて来るか、見ていたがよいだろう）

小次郎からも、今度の小倉下向に、行を共にするようにすすめた訳であつた。ばばの心にはまだ又八への未練もあつたが、

(あれも、今に眼がさめて、後を追うて来るじやろう)

と、武蔵野の秋も暮れるこの頃を——ひとま先ずすべての迷妄から離れて、ここまで旅立つて来たところだった。

だが。

そういう二人の一身上の変化などは、もとより伊織の知るところでもなし、いくら考えても、分ることはなかった。

逃げるにも逃げられないし、涙など見せては、師の恥になると思つて彼は、恐ろしい中にも、じつと我慢して、小次郎の面おもてを見つめていた。

小次郎も意識的に、その眼をにらみつけた。だが伊織は眼をそ反らさないのである。いつか、草庵で独り留守していた折、むささびと睨めくらをしたように、鼻腔でかすかな息をしながら、飽あくまで小次郎の面おもてを正視していた。

## 五

どんな目に遭わされるかと思つていろいろらしい伊織の戦慄は、子ども心の憂いに過ぎな



った。

小次郎には、おぼばのように、子どもと対等になる気など毛頭ない、まして今日の彼には地位もできていた。

「ばば殿」

と、ふと呼ぶ。

「おいの。なんじゃ」

「矢立をお持ちか」

「矢立はあるが、墨つぼが乾いておる。なんぞ筆が要用いりようかの」

「武蔵へ、手紙を認めしたたようと思つて」

「武蔵へと」

「されば。辻々へ札ふだを立てても、いつかと姿を見せぬし、また、住居すまいもとんと知れぬ武蔵へ——折からこの伊織は、打つてつけない使いではあるまいか。江戸を去るにあたって、一書、彼の手に届けておくのだ」

「何と書きなさる？」

「文飾などはいらぬ。また、わしが豊前へ下ることも、人伝ひとづてに聞きおろう。要は、腕を

みがいて汝も豊前へ下れというまでのことだ。生涯でもこちらは待つ。自信を得た日に来れ、というだけで意志は届こう」

「そのような……」

と、ばばは手を振って、

「——気の永いことは困る。作州の家へ帰っても、わしはまたすぐ旅に出るつもりじゃ。そしてこの兩三年がうちには、きつと武蔵を討たねばならぬ」

「わしにまかせておけ。おばばの望みも、わしと武蔵との事の序ついでに仕果して進ぜるからそれだよかろう」

「じゃが、なんせい、老る年齢ととしじゃ。生きているうちに、間に合わねば……」

「養生をなされ。長生きをして、わしが畢生ひっせいの剣を持って、武蔵に誅ちゆうを加える日を見るように」

受取った矢立を持って、小次郎は近くの流れに手を浸ひたし、指のしずくを墨つぽにたらしめていた。

佇たったまま、懐紙にさらさらと筆を走らせる。彼の文字は流達で、文辞には才気があつた。

「これに飯粒が」

と、ぼぼは弁当殻がらのそれを木の葉この上に付けて出した。小次郎は封をして、表に宛名、裏に、

細川家家中佐々木巖流

と、書いた。

「小僧」

「……………」

「恐がらないでもよい。これを持って帰れ。そして中には大事な用向きが書いてあるから、きつと、師の武蔵へ手渡すのだぞ」

「…………？」

伊織は、持つて行ったものか、きつぱり断ったほうがいいものか、考えているふうだったが、

「…………うん」

頷うなずいて、小次郎の手から、それを引ひッ奪たくつた。

そして、屹きつと、立ち上がって、

「こん中に、何と書いてあるんだい、おじさん」

「今、おばばへ話したような意味だ」

「見てもいいかい」

「封を切つてはならん」

「でも、もしか先生に無礼なことでも書いてある手紙なら、おいらは、持って行かないぜ」  
「安心せい。無礼なことばなどは書いてない。かつての約束は忘れておるまいな」とこ  
とと、たとえ豊前に下るとも、必ず再会の日を期しておるということが書いてあるだけだ」

「再会というのは、おじさんと先生と、会うことかい」

「そうだ、生死の境に」

と、うなずく小次郎の頬に、薄つすらと血が冴えた。

## 六

「きつと届けるよ」

伊織は、手紙を、懐ふところ中へしまいこんだ。

そしてすばやく、

「あばよ！」

おぼぼと小次郎の間から六、七間も跳び離れて、

「ばかつ」

と、いい放った。

「な、なんじゃと」

ばばは、追おうとした。

だが、小次郎が手を抑えて離さなかったのである。小次郎は苦笑して、

「いわしておけ。子どものことだ……」

伊織は、もつと何か、胸につかえていたものをいおうとして、踏み止まったのであるが、眼は口惜<sup>くや</sup>し涙にかすんで、急に唇<sup>くち</sup>もうごかないのであった。

「なんだ小僧。——ばかといつたようだが、それきりか」

「そ、それきりだいッ」

「あはははは。おかしな奴だ。はやく行け」

「大きなお世話だよ。見ていろ、きつと、この手紙は、先生に渡してやるから」

「おお届けなのだ」

「後で後悔するんだろ。おまえたちが、齒ぎしりしたって、先生が、負けるものか」

「武蔵に似て、負けない口をきく小僧弟子だ。だが、涙をためて、師の肩持ちをするところはおかしい。武蔵が死んだら、わしを頼つて来い、庭掃きにつかつてやる」

椰揄からかつたのである。しかし伊織は骨の髄ずいまで恥辱を覚えた。いきなり足もとの石を拾つて、投げつけようとしたのである。その手を、無自覚に振りあげたせつな、

「餓鬼っ」

小次郎の眼が、はつたと、自分のほうを見た。見たというよりは、眼の球がとびかかって来たような衝動だった。いつかの晩のむささびの眼などまだまだ弱いくらいだった。

「……………」

敢あえなく石を横へ捨てて、伊織は無むし性に逃げ出していた。いくら逃げても逃げても恐さが振り捨てられなかった。

「……………」

武蔵野のまん中に、彼は息をきつて坐りこんでいた。

二刻もそうしていた。

そのあいだに、伊織はおぼろげながら、わが師と頼む人の境遇を、初めて考えてみたのだった。敵の多い人だということが子供ごころにも分った。

(おいらも偉くなろう)

いつまで、師の身を無事に、そして永く師を奉じるためには、自分も一緒に偉くなって、師を護る力をはやく持たなければならぬと思つた。

「……偉くなれるかしら、おいらなんか」

正直に、彼は、自分を考えてみる。さっきの小次郎の眼光が思い出されてまた、ぞつと身の毛がよだつたのである。

ひよつとしたら、自分の先生でも、あの人には敵かなわないのじやないかしら？ ——そんな不安さえ抱きはじめた。そして、もっと自分の先生も勉強しなければ——と彼らしい取越し苦労を持つた。

「……………」

草の中に、膝をかかえているまに、野火止のびどめの宿も、秩父ちちぶの連峰も、白い夕霧につつまれている。

そうだ。新蔵様は心配するかも知れないが、秩父まで行ってしまおう。牢舎ろうやにいる先生

にこの手紙を届けよう。陽は暮れても、あの正丸峠を越えさえすれば――。

伊織は立って、野を見まわした。俄にわかに、捨てた馬を思い出したのである。

「どこへ行つたろ？ おいらの馬は？」

## 七

北条家の厩うまやから曳き出して来た駒である。螺鈿らでんの鞍がついている。野盜が見つけたら見逃いぢもつしつこない逸物いぢもつなのだ。――伊織は捜しあぐねた果て、口笛をふきならして、しばらく草枯れの野末を見まわしていた。

水か霧か、うすい煙のようなものが、草の間を、低くうごいてゆく。――そこらに、駒の聲音がするような気がして駈けて行けば、駒の影もなく、水の流れもない。

「おや？ 彼方むこうに」

と、何やら黒いものの動くのを見て、また駈けてゆくと、それは餌えを拾っていた野猪のじしだった。

野猪は、伊織のそばをかすめて、萩むらの中へ、旋風つむじみたいに逃げ去った。――振向く



と、猪ししの通つた後には、幻術師の杖が線を引いたように、漠ばくとして一すじの夜霧が白く地を這っている――

「……………」

だが、霧かと眺めているうちに、霧はせんかんと水音を立て、やがて、小川のせせらぎの上に鮮やかな月の影を浮かべてくる。

「……………」

伊織は怖くなつて来た。彼は幼時からいろいろな野の神秘を知っている。胡麻粒ごまつぶほどな天道虫にでも、神の意志があると信じている。うごく枯葉も、呼ぶ水も、追う風も、伊織の眼には、無心なものである物は一つもなかった。そうして有情の天地に触れると、彼の幼い心も、行く秋ゆの草や虫や水と共に蕭しやう々しやうとら寂さびしい顫ふるえを鳴り立ててくる。

彼はふいに、大きく声をしやくつて、泣きはじめた。

馬が見つからないので、泣きたくなつたわけでもない、急に父母のない身が悲しくなつたとも見えない。肱ひじを曲げて顔に当て、その顔と肩をしやくつては、歩き歩き泣いて行くのである。

こういう時、少年の涙は、彼自身にも甘かった。

人間以外の、星か、野の精が、もし彼に向つて、

——何で泣くか。

と訊ねたら、彼は泣きやみもせずいうにちがいない。

——わからないや。分ることなら泣きなんかしないや。

それをもつと宥めすかして問いつめれば、彼は遂にこういふだろう。

——おいらは、曠い野に出るとふいに泣きたくなるのがよくあるんだ。そしていつも法典ヶ原の一軒家がそこらにあるような気がしてならないんだよ。

独り泣く病のある少年には、独り泣くたましいの楽しみが同時にあつた。泣いて泣いて泣きぬいていると、天地があわれと労り慰めてくれるのである。そして涙が乾きかけてくると、雲の中を出たように心が晴々と冴え返ってくる。

「伊織。伊織ではないか」

「おお、伊織だ」

彼のうしろで突然そういう人声があった。伊織は泣き腫らした眼のまま道を振り向いた。ふたりの人影が夜空に濃く見えた。ひとりには馬の上なので、連れの者よりずっと姿が高く見えた。

## 八

「——ア。先生」

伊織は馬上の人の足元まで、のめるように駈け転まろんで行き、そしてもう一度、

「先生つ。先……先生」

あぶみへ、しがみつきながら叫んだのであった。——だがふと、夢ではないかと疑うような眼をして、武蔵の顔を見上げ——また、馬のわきに杖じょうをついて立っている夢想権之助の姿を見まわした。

「どうした？」

と、馬上から見おろしている武蔵の顔は、月のせいか、いたく窶やつれて見える。だがその声は、彼がこの日頃、心に渴かわきぬいていた師のやさしい声に間違まちがいなかっただ。

「——こんな所を、どうして独りで歩いていたのだい」

それは次にいった権之助のことばである。権之助の手は、すぐ伊織の頭の上へ来て、自分の胸へかかえ寄せた。

もし前に泣いていなくなったら、伊織はここで泣いたかも知れなかったが、彼の頬は月に  
てらてら乾いていた。

「先生のいる秩父ちちぶへ行こうと思つて……」

いいかけてふと、伊織は、武蔵の乗っている駒の鞍や毛並を見つめ、

「オヤ。この馬は……おいらの乗つて来た馬だ」

権之助は、笑つて、

「おまえのか」

「ああ」

「誰のかわらぬが、入間川いるまがわの近くに、うろついていたので、お体のつかれている武蔵様  
へ、天の与えと、拾つておすすめ申したのだ」

「アア、野の神さまが、先生の迎えに、わざとそっちへ逃がしたんだね」

「だが、おまえの馬というのもおかしいではないか。この鞍は、千石以上の侍のものだが」

「北条様の厩うまやの馬だもの」

武蔵は降りて、

「伊織、ではそちは今日まで、安房あわどのおやしきにお世話になっていたのか」

「はい。沢庵さまに連れられて——沢庵さまがいろといったんです」

「草庵はどうなっている」

「村の人たちがすっかり繕なおしてくれました」

「では、これから戻つても、雨露あめつゆだけはしのげるな」

「……先生」

「うむ。なんじゃな」

「瘠やせた……どうしてそんなに瘠やせたんですか」

「牢舎ろうやの中で、坐禅をしていたからの」

「その牢舎を、どうして出て来たんですか」

「後で、権之助から、ゆるゆる聞くがよい。ひと口にいえば、天の御加護があつたか、遽にわかにきのう無罪をいい渡されて、秩父ちちぶの獄舎ごくやから放されたのじゃ」

権之助が、すぐいい足した。

「伊織、もう心配すな。きのう川越の酒井家から、急使が来て、平あやまりに謝り、むじつのお疑いが晴れたわけだ」

「じゃあきつと、沢庵さまが、將軍様に頼んだのかも知れないよ。沢庵さまはお城へ上が

つたきり、まだ北条様のおやしきへ帰らないから」

伊織は遽にわかにお喋しゃべ舌りになった。

それから、城太郎と出会ったことや、その城太郎が、実の父おやの薦こもそう僧と落ちて行つたことや、また、北条家の玄関さきへ、度々お杉ばばが訪れて、悪たいを並べたことなどを――歩き歩き話しつづけていたが、そのおばばで思い出したらしく、

「あ。それからね、先生、まだたいへんなことがあるよ」

と、懐ふところ中を掻い探つて、佐々木小次郎の手紙を取り出した。

## 九

「なに、小次郎からの書状？……」

仇あだと呼び合う者とはいえ、絶えたる者はなつかしい。まして、互いに砥石といしとなつて研みがき合っている仇である。

武蔵はむしろ、心待ちしていた消息でも手にしたように、

「どこで会つたか」

と、その宛名書あてながきを見ながら伊織に訊ねた。

「野火止のびどめの宿しゆくで」

と、伊織は答え、

「——あの、恐いおばばも、一緒にいましたよ」

「おばばとは、本位田家のあの年よりか」

「豊前ぶぜんへ行くんだって」

「ほ……？」

「細川家のお侍たちと一緒にでね……詳しいことはその中に書いてあるでしょう。——先生も、油断しちやだめですよ。しつかりして下さい」

武蔵は書面ふしごころを懐中に仕舞う。そして伊織に黙うなずって頷いてやる。だが、伊織はそれに安んぜず、

「小次郎って人も、強いでしょ。先生は何か怨みをうけているの？ ……」

と、それからそれへと問わず語りに、きょうの始末を、喋舌しゃべりつづけた。

やがて何十日ぶりで、草庵にたどり着いた。早速に欲しいのが、火と食物。——夜は更けていたが、権之助たきぎが薪や水をあつめる間に、伊織は、村の百姓家へ走ってゆく。

火ができる。炉を囲む。

あかあかと燃える一炉をかこんで、久しぶりに互いの無事を見合う楽しさは、波瀾に揉まれてみなければ汲めない人生の悦楽だった。

「あら？」

伊織は、袖口にかくれている師の腕だの、襟元などに、まだ傷口の割れている痣が幾つもあるのを見つけて、

「先生、どうしたんです。身体じゆうに……そんなに」

傷々しげに、眉をしかめて、武蔵の肌の奥を覗こうとすると、

「何でもない」

武蔵は、話を反らして、

「馬にも、何かやったか」

「ええ、飼糧をやりました」

「あの駒を、明日は北条どののお邸へ、かえして来なければいけないぞ」

「はい。夜が明けたら、行って参ります」



伊織は寝坊しなかった。赤城下の邸で、新蔵が心配しているに違いないと、翌る朝は、真つ先に起きて戸外へとおもてび出した。

そして、朝飯前に一鞭と——駒の背にまたがるなり駈け出すと、ちようど武蔵野の真東から、のつと大きな日輪が草の海を離れかけていた。

「ああ！」

伊織は、駒を止めて、驚きの眼をすえていたが、急に駒を返して、草庵の外から、

「先生、先生。早く起きてごらんなさい。いつかみたいな——秩父の峰から拝んだ時みたいな——それは大きなお陽さまが、きようは、草の中から、地面を転がって来るように昇っていますよ。権之助さんも、起きて来て拝んだがいいよ」

「おう」

と、武蔵がどこかという。武蔵はもう起きて、小鳥の声の中をあるいていた。行って来ます、と元氣よく駈けてゆく馬蹄の音に、武蔵が森から出て、眩しい草の海を見送っていると、伊織の影は、一羽の鴉が、太陽の火焰の真つただ中へ翔け入って行くように、またたく間に、小さくなり、黒い点になり、やがて燃えきって溶けてしまった。

## 栄達の門

## 一

一夜ごとに落葉がたまる。邸内を掃き、門を開け、落葉の山に火をつけて、門番が朝飯を食べているころ、北条新蔵は、朝の素読と、家臣相手の撃剣の稽古をおえ、汗の体を井戸端で拭いて、ついでに厩の馬たちの機嫌を覗きに来る。

「仲間」

「へい」

「栗毛はゆうべ帰らなかつたな」

「馬よりは、あの子はいつたい、何処へ行つちまつたんでしよう」

「伊織か」

「いくら子供は風の子だって、まさか夜どおし、駆け歩いているわけでもないでしょうに」  
「心配はない。あれは、風の子というよりは、野の子だからな。ときどき、野原へ出てみ  
たくなるに違いない」

門番の爺じいがそこへ走つて来て、彼に告げた。

「若旦那さま。お友達の方が大勢して、あれへお越しなさいましたが」

「友達が」

新蔵は歩き出して、玄関前にかたまっている五、六名の青年たちへ声をかけた。

「やあ」

すると、青年たちも、

「ようつ」

と朝寒顔あさざむがおを揃えて、彼の方へ近づいて来ながら、

「しばらく」

「お揃いで」

「ご健勝か」

「この通りだ」

「お怪我をなされたとうわさに聞いていたが」

「何。さしたるほどではない。——早朝から諸兄おそろいで、何事か御用でも」

「む、ちと」

五、六名は顔を見合わせた。この青年たちは皆、旗本の子弟とか、儒官じゆかんの子息とか、それぞれ然るべき家の子であった。

また先頃までは、小幡勘兵衛おはたかんべえの軍学所の生徒でもあったから、その教頭だった新蔵からすれば軍学のおとうと弟子でしにあたる者達である。

「あれへ行こうか」

新蔵は、平庭の一隅に燃えている落葉の山を指さした。その焚火たきびを囲み合つて、

「寒くなると、まだここの傷口が痛んでな……」

と頸首えりもとへ手を当てた。

新蔵のその刀傷を、青年たちはこもごも覗いて、

「相手はやはり、佐々木小次郎と聞きましたか」

「そうだ」

新蔵は、目にいぶる煙に、顔を反そむ向けて、沈黙していた。

「きょうご相談に参つたのは、その佐々木小次郎についてでござるが……。亡師勘兵衛先生の御息、余五郎どのを討つたのも、小次郎の仕業しわざと、やっと昨日、知れましたぞ」

「多分……とは思っていたが、何か、証拠があがりましたか」

「余五郎どのの死骸が発見されたのは、例の芝伊皿子いざらじの寺の裏山でした。あれから吾々が、手を分けて詮議せんぎしてみると、伊皿子坂の上には、細川家の重臣で岩間角兵衛という者が住まっております、その角兵衛の宅の離室はなれに、佐々木小次郎が起居していたことが知れたのです」

「……ム。では余五郎どののは、単身でその小次郎の所へ」

「返り討ちにおなりなされたのです。死骸として、裏山の崖から発見された前日の夕方、花屋のおやじが、それらしいお姿を、附近で見かけたということ……かたがた、小次郎が手にかけて、崖へ死骸を蹴込んでおいたことは、もはや疑う余地もございません」

「……………」

話はそこで断きれて、幾人もの若い眸は、断絶した師家の怨みを、落葉の煙の中に悲痛に見つめ合っていた。

## 二

「で？ ……」

新蔵は火にほてった顔を上げ、

「それがしに相談とは」

青年の一人が、

「師家の今後です。それと、小次郎に対するわれわれの覚悟のほどを」

他の者ほかがまた、

「あなたを中心に決めておきたいというわけで」

と、いい足した。

新蔵は考えこんでしまう。——青年たちは、なお口をきわめて、

「お聞き及びかも知れぬが、佐々木小次郎は、折も折、細川忠利公ただとしに抱えられ、すでに

藩地へ向け旅立ったということだ。——遂に、吾々の師は憤死せられ、御子息は返り討ち

にあい、しかも同門の多数も彼に蹂躪じゅうりんされたまま、彼が栄達の晴れの退府を、空しく

見ていなければならないのか……」

「新蔵どの、残念ではないか。小幡門下として、このままでは」

誰かが、煙に咽むせる。落葉の火から白い灰が舞う。

新蔵は依然、黙りこくっていたが——果てしない同門たちの悲憤の遣り取りやとに、

「何せい拙者は、小次郎から受けた刀の傷痕きずあとが、この寒さに、まだしんしんと痛んでお

る身。いわば恥多き敗者の一名だ。……さし当って、策もないが、各々としては一体、どうなさろうというお考えか」

「細川家へ談じ込もうと思うのです」

「何と」

「逐ちくいち一、経いきざつ緯を述べて、小次郎の身がらを吾々の手に渡してもらいたいと」

「受け取つて、どう召さる」

「亡師と御子息の墓前に、彼奴きやつの首こうべを手向たむけます」

「縄付で下さればよいが、細川家でもそうはいたすまい。われわれの手で討てる相手なら、今日こんにちまでも疾とうに討てている。——また、細川家としても、武芸に長たけたところを買つて召抱えた佐々木小次郎。各々から渡せといつても、かえつて小次郎の武技に箔はくを付けるようなもので、そういう勇者なればなおさら、渡せぬと出るに違いない。いちど家臣とした以上、たとえ新規召抱えであろうと、おいそれと渡すような大名は、細川家ならずとも、何処の藩でもないと思うが」

「さすれば、やむを得ぬ。最後の手段をとるばかりだ」

「まだほかに手段があるのですか」

「岩間角兵衛や小次郎の一行が立ったのはつい昨日のこと。追いかければ道中で行き着く。貴公を先頭にして、ここにいる六名、そのほか小幡門下の義心ある者を糾きゆうこう合ごうして……」

「旅先で討つといわれるのか」

「そうです。新蔵どの、あなたも起たつてください」

「わしは嫌だ」

「嫌だと」

「嫌だ」

「な、なぜです。聞けば貴公は、小幡家の名みょうせき跡せきをついで、亡師の家名を再興すると、伝えられておる身なのに」

「自分の敵とする人間のことは、誰しも、自分より優れていると思いたくないものだが、公平に、われと彼とを較べれば、剣に依つては、所詮しよせんわれわれの手に仆たおせる敵ではない。たとえ同門を糾合して、何十人で襲おうとも、いよいよ恥の上塗りをするばかり」

「では、指を啜くわえて」

「いやこの新蔵にせよ、無念は一つだ。ただわしは、時期を待とうと思う」

「気の永い」



一人が舌打ちすると、

「逃げ口上だ」

と罵る者もあつて、もう相談は無用と、落葉の灰と新蔵をそこにのこして、血気な早朝の客は、わらわら帰ってしまった。

入れ違いに、門前で鞍から下りた伊織は、馬の口輪を引ツぱつて、かつかつ夏々と、邸内へ入つて来た。

三

うまや厩に駒を繋いで、

「新蔵おじさん。こんな所にいたの」

焚火のそばへ、伊織は駈けて来た。

「おお帰つたか」

「何を考えているの。え、喧嘩したのかい、おじさん」

「なぜ」

「だって今、おいらが帰って来ると、若い侍たちが、ぶんぶん怒って出て行ったもの。見<sup>み</sup>損<sup>そと</sup>なつたの、腰抜けだのつて、門を振り願<sup>かえ</sup>つて、悪口を叩いて行ったよ」

「はははは。そのことか」

新蔵は笑い消して、

「それよりは、まあ焚火にでもあたれ」

「焚火なんかにあたれるものか。武蔵野から一息に飛ばして来たので、おいらの体は、この通り湯気が立っているよ」

「元氣だな。ゆうべは何処に寝たか」

「ア。新蔵おじさん。——武蔵さまが戻つて来たよ」

「そうだそうだな」

「なんだ。知ってるの」

「沢庵<sup>たくあん</sup>どのがいわれた。多分もう秩父<sup>ちちぶ</sup>から放されて、戻っている頃だろうと」

「沢庵さんは？」

「奥に」

と、眼でさして、

「伊織」

「え」

「聞いたか」

「なにを」

「おまえの先生が出世なさる吉事だ。途方もない歓び事だ。まだ知るまいが」

「何。何。教えてよ。先生が出世するつて、どんなことさ」

「將軍家御師範役の列に加わつて一方の劍宗けんそうと仰がれる日が来たのだ」

「えつ、ほんと」

「欣うれしいか」

「うれしいとも。じゃあもう一ぺん、馬を貸してくれないか」

「どうするのだ」

「先生の所へ報しらせに行つて来る」

「それには及ばぬ。今日のうち正式に、閣老から武蔵先生へお召状がさがるはず。それを持って明日は、辰たつの口のお控え所まで参り、登城のおゆるしが出れば、即日、將軍家に拝は謁いえつすることになろう。——だから、老中のお使いが見え次第に、わしがお迎えに行かね

ばならぬ」

「じゃあ、先生が、こっちへ来るの」

「うむ」

うなずいて、新蔵は、そこを離れて歩き出しながら、

「朝飯は食べたか」

「ううん」

「まだか。はやく食べて来い！」

彼と話しているうちに、新蔵はいくらか憂悶ゆうもんが軽くなつた。憤怒して去つた友達の行く先に、まだ幾分かの気懸りは残していたが。

それから一刻ほど後、閣老からの使いが見えた。沢庵へ宛てた書簡と共に、明日、辰の口伝奏でんそうやしき屋敷の控え所まで、武蔵を召連れて、出頭あるようにという達しであつた。

新蔵は、その旨をうけて、騎馬となり、べつに一頭の美々しい乗換馬を仲間ちゆうげんに曳かせて、武蔵の草庵へ使者として出向いた。

「お迎えに」

と、訪れると、武蔵はちようど、権之助を相手に、陽なたで小猫を膝にのせて、何か話

していた折だったが、

「いやこちらから、お礼に出るつもりでいたところ」

と、そのまま、すぐ迎えの駒に乗った。

#### 四

獄から解かれた武蔵にはまた、將軍家師範という栄達が待っていた。

だが武蔵は、それよりも沢庵という友、安房守あわのかみという知己、新蔵という好ましい青年などが、自分のような、一介の旅人に、席を温めて待つてくれる志のほうに、遙かなありがたさと、人間の世の限りなき隣の恩を思わせられた。

翌る日。

すでに北条父子は、彼のためにひとかさね一襲の衣服と、扇子せんす、懐紙などまで整えて、

「めでたい日、おこころ爽やかに行って参られい」

と、朝の膳は、赤い御飯、魚頭かしらつき、あだかもわが家の元服でも祝うかの如き心入れであつた。

この温情に對して、また、沢庵の好意を酌んでも、武蔵は、自分の望みばかり固持していられたかつた。

秩父ちちぶの獄中でも、ふかく考えてみたことである。

法典ヶ原の開墾に従事して、およそ二カ年足らずのあいだ、土に親しみ、農田の人々と一緒に働いてみて、自己の兵法を、大きな治国や経綸けいりんの政治に活かしてみたいという野心はかつて本気で抱いてみたことであるが——江戸の実情と、天下の風潮、まだまだ決して、彼が理想するような所までには、實際において来ていない。

豊臣と徳川と、これは宿命的にも、大きな戦争をまだ敢てやるだろう。思想も人心も、為に、なお混沌たる暴風期を衝き抜けなければならない。そして関東か、上方か、いずれかに統一を見るまでは、聖賢の道も、治国の兵法も、いうべくして行われるわけではない。明日にも、そうした大乱があるとすると——その場合に、自分はいずれの軍へつくべきだろうか。

関東に加担するか。上方に走って味方するべきか。

それとも、世をよそに、山へ分け入って、天下の鎮まるのを、草を喰って待っているべきだろうか。

(いずれにせよ、今、將軍の一師範になって、それを以て、甘んじてしまつたら、自分の道業もまずは知れたものといえよう)

朝の陽のかがやく道を、彼は式服を着、見事な鞍の駒にまたがり、栄達の門へと、そうして一步一步近づいておりながら、なお、心のどこかでは、満足しきれないものがあるのだった。

「下馬」

と、高札が見える。

伝奏屋敷の門だった。

玉砂利をしきつめた門前に、駒つなぎがある。武蔵がそこで降りていると、すぐ一名の役人と、馬預りの小者が飛んでくる。

「昨日、御老中よりの御飛札により、お召しを承つて罷りこした宮本武蔵と申すものでござる。控え所詰づめお役人方までお申し入れ願わしゅうございます」

この日、武蔵はもとよりただ一名であった。しばらく待つ間に、此方こなたへとべつな案内が先に立つ。

「お沙汰あるまでこれにお控えください」

蘭の間までもいうか、絵襖えぶすまいちめんに春蘭と小禽こどりが描いてある。長さ二十畳の広い部屋である。

茶菓が出る。

人の顔を見たのはそれだけで、後はおよそ小半日も待たされた。

襖の小禽は啼かず、描いた蘭は香においもせぬ。武蔵は、欠伸あくびを催して来た。

## 五

やがて、闇老の一名であろう、緒しやがん顔白髪の見るからに凡庸でない老武士が、

「武蔵どので在おわすか。長々お待たせして、無礼おゆるしを」

と、あっさりそれへ出て来て坐つた。ふと仰ぐと、川越の城主である酒井忠勝であつた。けれどここでは江戸城の一吏りじ事に過ぎないので、侍者一名を側につれただけで、至極格式とらに囚とらわれていないふうである。

「お召しに依つて」

と、武蔵が——これは先方が威儀作ろうと否とにかかわらず——長者に対するいんぎん



な礼を執つて、ひたと、平伏しながら、

「作州牢人、新免しんめんし氏の族、宮本無二齋がせがれ武蔵と申しまする者、將軍家御内意の趣に、御城門先までまかり出でましてござります」

忠勝は、肥えたふたえ顎あごを、小さく何度も領うなずかせて、

「大儀、大儀でおぎつた」

と、受けた。

そしてややいい洩つた面持に、氣の毒そうな眼を持ちながら、

「時に——かねて沢庵和尚や安房あわ殿などから、御推挙あつた其許そこもとの仕官の儀……。昨夜に至つて、いかなる御都合変りにや、遽にわかにお見合せというお沙汰じや。——われらにもちと解げしかねるので、御事情のほど、また御再考もあらばと——実は今の今まで、御前において再評議もあつたのじや。しかし折角のことではあつたが、この度の儀は、やはり御縁のないこととなり終つた」

といつて、忠勝は慰めることばもないように——また、

「毀誉褒貶きよほうはん——浮世のありふれ事、前途のお氣にさえられなよ。人事すべて、眼前を觀ただけでは、何が幸不幸とも申されぬで」

——武蔵は、平伏のまま、

「……はっ」

と、なおひれ伏していた。

忠勝の言葉は、むしろ耳に温く聞えた。同時に胸の底から、わき出ずる感激が身をひたした。

反省はあつても、彼とて人間である。もし無事に任命があつたら、このまま幕府の一吏事となつて、かえつて大<sup>たい</sup>禄<sup>ろく</sup>や榮衣が、劍の道業を、若木で枯らしてしまふかもしれない。「お沙汰の趣、相分りました。ありがたく存じまする」

自然そういつたのである。不面目などという気は毛頭なかった。皮肉もない。彼としては、將軍以上のものから、一師範役以上のもつと大きな任を——その時、神のことばをもつて、胸に授けられていた。

神妙な——と忠勝はその<sup>てい</sup>体をながめ入つて、

「余事であるが、聞けば、其<sup>その</sup>許<sup>もと</sup>には武辺に似あわぬ風雅のたしなみもあるそうな。何ぞ、將軍家へお目にかけていたいと思う。……俗人どもの中傷や陰口には、答える要もないが、かかる折、毀<sup>きよ</sup>誉<sup>ほう</sup>褒<sup>う</sup>貶<sup>へん</sup>を超えて、たしなむ芸術に、己れの心操を無言に残しておくことは、少

しも差しつかえなからうし、高士の答えとわしは思うが」

「……………」

武蔵が、彼のことばを心に解いているうちに、忠勝は、

「後刻までに」

と、席を立った。

忠勝の言葉のうちには、毀誉褒貶とか、俗人たちの中傷とか陰口とかいうことが、幾度か、意味ありげに繰返されていた。——それに答える要はないが、潔白な武士の心操は示しておけ！ 暗にそういったように武蔵には解かれた。

「そうだ、自分の面目は、泥に委そうと、自分を推挙し給わった人たちの面目をけがしては…………」

武蔵は、広間の一隅にある純白な六曲屏風びようぶに眼をとめた。やがてこの伝奏屋敷の溜りの小侍を呼び、酒井どのの仰せにまかせて一筆余技をのこして参りたいゆえ、もつとも佳よい墨と、古い朱と、少量の青い顔料えのぐとをお貸し下げねがいたいといった。

## 六

子どもの頃は誰でも画を描く。画を描くのは、歌をうたうも同じだ。それが大人になるときまってみな描けなくなる。生半可な智恵や目が邪げるからである。

武蔵も、幼少の時は、よく画を描いた。環境の淋しかった彼は、特に画が好きだった。だがその画も、十三、四から二十歳過ぎまでの間は、ほとんど忘れていた。——その後、諸国を修行中、多くは宿泊する寺院で、或る時は貴顕の邸宅で——しばしば、床の間の軸や壁画に接する機会が多くなり、描かないまでも、また、興味を持つようになった。

いつだったか。

本阿弥光悦の家で見た梁楷の栗鼠に落栗の図を觀——その粗朴なうちに持つ王者の気品と、墨の深さを、いつまでも忘れなかつたりしたこともある。

多分、あの頃からであつたらう。彼がふたたび画に眼をひらき出したのは。

北宋、南宋の稀品。また、東山殿あたりからの名匠の邦画。それから現代画として行われている山楽だの友松だの狩野家の人々の作品など、折あるごとに、武蔵は觀てきた。

自然、その中に彼の好き不好きがあつた。梁楷の豪健な筆触は、劍の眼から觀ても巨人の

力をうけるし、海かいほう北友松は根が武人であるだけに、晩年の節操も、画そのものも師とするに足ると思つた。

また、洛外の滝の本坊にいるという隠操の雅人、松しょう花堂かどう昭しょう乗じようの淡味な即興風のものにも心をひかれた。沢庵とも深い友達であると聞いて、さらに慕わしい気もちをその画に持っていた。——けれど自分の歩まんとする道とは——行く末は一個月を見る所に落ち合うまでも、遠いべつな世に住む人のような気がするのでもあつた。

で、時には。

人には示さぬものとして、密ひそかに自分でも描いてみたりした。だが彼も、いつの間にかやはり描けない大人になっていた。智が働いて、性しょうが働かないのだ。巧く描こうとばかりして、真の流りゅうろ露ろというものが現せない。

厭になつて、もう止した。——だがまたふと、何かに感興をよび起されて、人知れず描いてみる。

梁りようかい楷かいを模し、友松なすらを倣い、時には松花堂の風をまねたりして——。しかし、彫刻は二、三人にも示したが、画はまだかつて、人に見せた例ためしはない。

「……よし！」

それを今、彼は、描いてしまった。しかも六曲半双へ、一気に。

試合の後——ほっと息づくように胸をあげて、静かに、筆洗へ筆の先を沈めると、描きあげたわが画に一顧こもせず、伝奏屋敷の控えの広間から、さっさと退出してしまった。

「——門」

武蔵は、そのの豪壮な門を跨またいで、ふと振り顧った。

入るが栄達の門か。

出るが栄光の門かと。

人はなく、まだ濡れている屏風のみが残されてあった。

いちめんに武蔵野之図が描いてあった。大きな旭日だけを、わが丹心と誇示するように、それだけに朱が塗ってあって、後は墨一色の秋の野だった。

酒井忠勝は、その前に坐ったまま、默然と腕を拱くんでいることしばし、

「ああ、野に虎を逸うめした」

と、独り呻うめいた。

## 天音

一

武蔵は、何か思うところあったのか、その日、辰の口御門を去ると、牛込の北条家には戻らず、武蔵野の草庵へ帰ってしまった。

留守をしていた権之助は、

「才、お戻り」

と、すぐ駒の口輪を取りに外へ飛び出して来る。

いつになく糊目のりめのついた式服すがたの武蔵。美々しい螺鈿らでんの鞍など——さては今日のう

ち登城もすみ、首尾も上々に、就任の沙汰はきまったものと、権之助は早のみこみして、

「おめでとうござりました。……はや明日からでも、御出仕でござりますか」

武蔵が坐ると、藪いむしろ席のすそに彼も坐って手をつかえながら、欣びを述べるつもりで直ぐいった。

武蔵は笑って、

「いや、沙汰止みになった」

「えっ……？」

「よろこべ、権之助。今日になつて、遽にわかにお取消しという沙汰」

「はて。腑ふに落ちぬことで。一体どういふわけでございましょう」

「問うに及ばん。理由など糺ただして何にならう。むしろ天意に謝していい」

「でも」

「其方まで、わしの榮達が、江戸城の門にばかりあると思うか」

「……………」

「——とはいえ、自分も一時は野心を抱いた。しかしわしの野望は、地位や禄ではない。

烏澁おこがましいが、劍の心をもつて、政道はならぬものか、劍の悟りを以て、安民の策は立

たぬものか。——劍と人倫、劍と仏道、劍と芸術——あらゆるものを、一道と観じ来れば

——劍の真髓しんずいは、政まつりごと治ちの精神こころにも合致する。……それを信じた。それをやってみた

かつたゆえに、幕士となつてやろうと思つた」

「何者かの、讒訴ざんそがあつたのか、残念でござりまする」

「まだどうか。穿はきちがえてくれるな。一時は、そんな考えも抱いたことは確かだが、そ



の後になつて——殊に今日は、豁かつぜん然と、教えられた。わしの考えは、夢に近い」

「いえ、そんなことはござりませぬ。よい政治まつりごとは、高い剣の道と、その精神こころは一つとてまへも考えまする」

「それは誤りはないが、それは理論で、実際でない。学者の部屋の真理は、世俗の中の真理とは必ずしも同一でない」

「では、われわれが究めて行こうとする真理は、実際の世のためには役立ちませんか」

「ばかな」

と、武蔵は憤いるが如く、

「この国のあらん限り、世の相さまはどう変ろうと、剣の道——ますらおの精神こころの道が——無用な技事わざごとになり終ろうか」

「……は」

「だが深く思うと、政治まつりごとの道は武のみが本ではない。文武二道のだい大円明えんみょうの境こそ、無欠の政治があり、世を活いかす大道の剣の極致があつた。——だから、まだ乳くさいわたしなどの夢は夢に過ぎず、もつと自身を、文武二天へ謙讓に仕みえ研みぎをかけねばならぬ。

——世を政まつりごと治まつりごとする前に、もつともつと、世から教えられて来ねば……」

そういつた後で、武蔵はにやにやと笑った。抑えきれない自嘲を洩らすように。

「……そうだ。権之助。硯すずりはないか。硯がなくなれば、矢立を貸してくれい」

## 二

何か書面を認したためて、

「権之助。大儀ながら、使いに行つてもらいたいが」

「牛込の北条どののお邸へでございますか」

「そうだ。委細、武蔵のこころは書中にある。沢庵どの、安房どのへ、そちらも宜しゅうお伝え申しあげてくれい」

武蔵は、そう告げて、

「そうそう、ついでに伊織より預かりおる品、そちの手から彼へ、戻しておいてほしい」

取出して、書面と共に、権之助の前へさし出した物を見ると、それはいつか伊織から武蔵へ預けた——父の遺物かたみという古い巾きんちやく着やくであつた。

「先生」

権之助は、不審顔に、膝をすすめ——

「いかなる理わけでございますか。改まつて、伊織からお預かりの品までを、遽にわかにお返しあるとは」

「誰とも離れて、武蔵はまた、しばらく山へ分け入りたい」

「山ならば山へ、町ならば町の中へ、何処までも、弟子として、伊織も手前もお供いたす所存にござりますが」

「永くとはいわぬ、両三年が間、伊織の身は、そちの手に頼む」

「えっ。……ではまつたく、隠遁いんとんの御意思で」

「まさか——」

武蔵は笑いながら、膝を解いて、うしろに手をつかえ、

「乳臭いわしが、今から何で——。先にいった大望もある。あれやこれ、慾もこれから。迷いもこれから。——誰が歌か、こういうのがあつた」

なかなかに

人里近くなりにつけり

あまりに山の

奥をたづねて

武蔵が口誦くちすさむのを、権之助は頭こっぺを垂れて聞いたが、そのまま、使いの二品を懐中に、「ともあれ、夜にかかりますゆえ急いで参ります」

「ウム。拝借の駒、お厩うまやへお返し申しておいてくれい。衣服は、武蔵が垢あかをつけたものゆえ、このまま頂戴いたしおくとな」

「はい」

「本来、辰の口より今日すぐに、安房どのお邸の方へ戻るべきなれど、この度のこと、お取止めの御誼ごじょうあるからには、武蔵の身に、將軍家御不審あればこそである。將軍家に直仕じきし召さるる安房どのへ、これ以上の御昵懇ごじっこんは、おためにもならぬことと思うて——わざと草庵へ帰つて来た。……この儀は、書中には認したためてないから、其方の口上にて、悪しからず伝えておいてくれるよう」

「承知いたしました。……とにかく手前も、今宵のうちに、直ぐ戻つて参りますから」

もう赤々と野末に夕陽は沈みかけている。権之助は、駒の口輪を把とつて、道を急いだ。師のために貸し与えられた他家の鞍なので、返しにゆくには、勿論、その駒には乗らない。

——誰も見てはいないし、空いている駒だが、曳いて歩くのであった。

赤城下に行き着いたのは、夜も八刻頃やっであつた。

——どうしてまだ帰つて来ないのか？

と、北条家では案じていたところなので、権之助はすぐ奥へ通され、書面も沢庵の手で、即座に封を切られた。

### 三

使いとして、権之助がここに見える前に、この席の人々は、武蔵の就任取止めの沙汰を、或る方面から洩れ聞いていた。

或る方面というのは、やはり幕閣の一員で、その者がいうには、遽にわかに、武蔵の登用が中止になつた原因は、閣老のうちからも、また、奉行所方面からも、武蔵の素姓や行状について、種々いろいろ、おもしろくない材料が、將軍家へ提出されたためだとある。

不合格となつた、何よりもいけない点は、

——彼は仇持ちだ。

という風評が専らにあることだつた。しかも非は彼にあつて、彼を仇と狙つて永年辛苦

している者は、もう六十路をこえた老婆だと聞えたので——同情は翁然としてその年寄にあつまり、武蔵には反対なものが、御採用という機会に、一時に現れたものらしいとの話であつた。

どうして、そんな誤解が生じたのかについては北条新蔵が、

(いや、そのことなら、その策で、当家の玄関へ、執こくやつて参りましたよ)

と、留守中、本位田家のばばが、武蔵の悪たいを並べて立ち去つたことを、初めて、父と沢庵の耳に入れたのだつた。

それで分つた、原因が。

しかし、わからないのは、あんな婆の触れ言をそのまま信じる世間の輩であつた。それも居酒屋や井戸端の集合者なら知らぬこと、分別ぶつた相当な人間が——しかも為政者ともある連中が——と、きよう半日は、啞然としていた折なのである。

所へ、武蔵の使いとして、権之助が書面を齎したので、さては、不平の辞かと披いてみると、

委細、権之助よりお聞え上げ賜わるべし。さる人の歌に

なかなかに

人里ちかくなりにつけり

あまりに山の

奥をたづねて

近頃おもしろく覚え候うて、又いつもの持病かや、旅にさまよい出で候

左の一首は、又の旅出に即興の腰折れ、おわらい賜わるべく候

乾けんこん坤を

そのまま庭と

見るときは

われは浮世の

家の戸ざかひ

なお、権之助が口上で、

「辰の口から一応は御当家へ帰つて、委細、申しあげるのが順でございですが、すでに幕閣より、御不審の目をもつて見られたる身が、心易やすげに、御邸内に入りする儀はいかがかと——わざと差控えて草庵へ戻りました由。これも師武蔵からの伝言でござりました」  
 そう聞くと、一しお、北条新蔵も、安房守も、名残が惜しまれて遽にわかに、

「何のご遠慮ぶかい。——このままでは、こちらの心も何となくすまぬ。沢庵どの、呼び迎えても来ぬかも知れぬ。これより駒をつらねて、武蔵野まで訪れようか」

起ちかけると、

「あ。お待ちください。手前もお供仕りますが、伊織へ返せと、師から申しつかつて来た品があるので。——恐れ入りますが、伊織をこれへ、お呼びくださいませぬか」  
と、彼へ手渡す例の古びた革かわの巾きんちやく着を、懷中から出して、それへおいた。

#### 四

伊織はすぐ呼ばれて来て、

「はい。何ですか」

目ばやく、眼はもうそこに置いてある自分の革巾着を見つけている。

「これを、先生からお前にお返しになった。お前の父の遺物かたみだから、大事に持てと仰つしやつた」

権之助は、それと共に、師の武蔵がしばらくわれわれと別れて御修行の途に上るから、



おまえは今日以後、当分はわしと共に暮すことになるうということをもいい渡した。

伊織はすこし不服顔。

だが、沢庵がいるし、安房守もいるので、

「はい」

と不承不承うなずく。

沢庵は、その革巾着が、彼の父親の遺物と聞いて、伊織の素姓についていろいろ糺してみると、祖先は最上家の旧臣で代々三沢伊織と名乗る家柄だという。

何代前かに、主家の没落にあい、戦乱の中で一族は離散してしまい、その後は諸国を漂泊<sup>まよ</sup>つて、父の三右衛門の代になってやつと下総<sup>しもづま</sup>の法典ヶ原に畑をもち、農夫となって住みついていたのだとも——伊織は問いに答えていう。

「ただ、よく分んないのは、おらに姉さんがあるっていったけれど、お父<sup>とつ</sup>つあんも、詳しいことをいわないし、お母<sup>つか</sup>さんは、早く死んじまったから、何処の国にいるのか、生きているのか死んだのか、分んない」

率直な伊織の答えを聞きながら、沢庵はその由緒<sup>ゆいしよ</sup>ありげな革巾着を膝に取って、先刻<sup>さつき</sup>からその中の蝕<sup>むしば</sup>んだ書付や守り袋など、丹念に見ていたが、そのうちに、愕<sup>おどろ</sup>きの眼をみは

つて、一紙片の文字と、伊織の顔とを、まじまじ穴のあくほど見較べた末に、

「伊織。その姉なら、父三右衛門の筆らしいこの書付に書いてあるが」

「書いてあつても、何のことか、おらにも、徳願寺のお住持でも分らないんです」

「よく分つておる。この沢庵には……」

と、その一紙片を人々の眼の前に拵げて沢庵が読んだ。文章は数十行に亘るが前の方は略して、

——飢エ<sup>タオ</sup>休ル共、二君ヲ求ムル心無ク、夫婦シテ流転年久シク、賤<sup>イヤ</sup>シキ業<sup>ワザ</sup>シテ歩ク

ウチ、一年<sup>ヒトトセ</sup>中国ノ一寺ニ、一女ヲ捨テ、伝来ノ天音一管ヲ襤<sup>ムツキ</sup>褌ニ添エテ、慈悲ノ御

廂<sup>ヒサシ</sup>ニ、子ノ末ヲ祈願シ奉リテ又他国ニ漂<sup>サスラ</sup>泊ウ。

後、コノ下総原ニ一茅<sup>ボウ</sup>ノ屋<sup>オク</sup>ト田ヲ獲、年経ルママ思エドモ、山河ヲ隔テ、又消息ヲ

絶ツノ今、カエツテ子ノ幸<sup>サチ</sup>ニ如何アルベシナド思イ、イツシカ歲月ノ流レニマカセ了<sup>オワ</sup>

ンヌ。

浅マシキ哉、人ノ親。鎌倉右大臣モ歌イケル

ものいはぬ

よも<sup>けだもの</sup>の獣すらだにも  
四方の獣すらだにも

あはれなるかなや

親の子をおもふ

サアレニ君ニマミエ、私ヲ負イ名ヲ争ウテ、武門ノ果ヲ汚サンヨリハ祖先モアワレト見ソナワシ給ウベシ。ワガ子モ亦、コノ父ノ子ゾカシ。名ヲ惜ムトモ、サモシキ粟アワ食ベルナ。

「会うことができるぞ。この姉なら、わしも若年からよう知っておる。武蔵も存じておる。伊織、さあおまえも行け」

沢庵は、席を立った。

だが、その夜、武蔵野の草庵へ急いだ人々も、遂に武蔵とは会えなかった。夜の明けかけた野末の果てに、一朵だの白雲を見たのみである。



## 青空文庫情報

底本：「宮本武蔵（六）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年1月11日第1刷発行

2002（平成14）年12月5日第37刷発行

「宮本武蔵（七）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年1月11日第1刷発行

2002（平成14）年12月5日第37刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2012年12月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 宮本武蔵

## 二天の巻

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>